猪木、船木、狂気! 戦慄の青木問題を激語り!!

kamipro

紙のプロレス

今年は寅年、タイガーマスクの登場です!

MMA & PRO-WRESTLING MAG

enterbrain MOOK

2010
143
特別定価940yen



遺恨、トラブル、スキャンダル!
リング上で決着をつけろ!!

黄金の昭和プロレスに学ぶガオ!!

♪稲妻が闇を裂いて〜、俺を呼んでるぅ!

特集 俺たちのゴールデンプロレス

初代タイガーマスク
藤波辰爾×ユリオカ超特Q
A・T・ブッチャー×倉持隆夫
マサ斎藤×ザ・グレート・カブキ
獣神サンダー・ライガー×ウルティモ・ドラゴン

マット界騒然の大騒動!

激論! キラー青木とは何か?

アントニオ猪木
船木誠勝
廣田瑞人/谷川貞治
國保尊弘/夢枕獏
菊地成孔

椎名基樹

2010 No.143 CONTENTS

kamipro

表紙イラスト／©梶原一騎・宮田淳一・辻なおき／ 講談社・東映アニメーション



全42ページ、やってやるって!!
便乗特集 俺たちのゴールデンプロレス!

Shinya Aoki

大晦日総括特集 青木真也とその狂気

GOLDEN PRO-WRESTLING

kamipro Special

Columns

新春二大特集「青木真也とその狂気」と「俺たちのゴールデンプロレス」

黄金の〝昭和プロレスの法則〟にいまこそ学べ！

スキャンダルをビジネスに結びつけろ!!（byアントニオ猪木）

日本格闘競技連盟の意見書提出によって、なんだかややこしいことにな
ってしまった青木真也〝大晦日の変
！



日本格闘競技連盟の意見書提出によって、なんだかややこしいことになってしまった青木真也〝大晦日の変〟――!!
青木真也の試合後の挑発行為は確かに批判されるべき対象だが、その後の転がし方がなんとももったいない。問題が起きてしまった以上、我々がすべきことは、そして考えることは、この因縁をどう展開させるか。その一点につきるはずだ。
え!? 格闘技のイメージが失墜したって? 何をいまさら。芸能人をリングに上げたり、身体に意図的にクリームを塗ったり、ドーピングで筋肉を異常に発達させたり、公務執行妨害で捕まったり、ドラッグ疑惑で逮捕説がささやかれたり、不思議な判定が繰り返されたり、開催されるはずのイベントが消滅したり……、業界関係者が思っている以上に格闘技のイメージはサイテーですよ。断っておきますが、本誌はそのサイテーな行為や出来事を完全に否定はしません。
誤解を恐れずに言うと、だからこそ格闘技やプロレスというドラマはおもしろい!! とも考えます。そういった揉め事をおもしろくできる力がマット界にはあるはずだし、力道山の昔からプロレス・格闘技はそうやって生き抜いてきた。これからもずっとそうだ。
関係者にお願いしたいことは、頼むから〝ファンに関係のない争い〟は裏側でやってほしいということ。いや、表で見せてもいいけど、どうせ見せるなら〝おもしろい揉め事〟にしてほしい。遺恨、トラブル、スキャンダル。何をやってもいいから、リング上で決着をつけろ!
新春二大特集「青木真也とその狂気」と「俺たちのゴールデンプロレス」から、そのメッセージを読み取っていただけばと思います（中指を立てながら）。



一線を越えすぎた狂気のプロレスラー


猪鬼の品格



アントニオ猪木から見た
青木真也問題

「戦士とは、心の底から湧き上がる怒りを表現しないといけない」

聞き手／ジャン斉藤　撮影／菊池茂夫



聞き手／ジャン斉藤　撮影／菊池茂夫

——今日はよろしくお願いします！

猪木　はい、どうぞ！　……とは言っても、いまのオレはプロレスのことはよくわからないですけどね。

——ハハハハ。どういうところがわからないんでしょうか？

猪木　どういうところがって、まず全然観てないからね。たまたまチャンネルを回すと、「ああ、やってるな……」って感じで。なるだけ情報を取り入れないようにしてるから。

——あんまり情報を取り入れてしまうと、自分の思考や判断が鈍るということもあるんですか？

猪木　そういう計算はないんですよ。「ただ観たくない!!」っていうのが正直なところなのかもしれない。

——それは簡単に言ってしまうと、いまのプロレスに魅力を感じられなかったりするんですか？

猪木　魅力もないも何も、見るとやっぱり「なんだよ、こいつらは！」という感情が出てくるから。もういちいち批判するような歳でもないし。ただ、あえてこの道で生きてきた人間として、いろんなことを伝えられればいいと思ってるんでね。たとえば、いまの30代後半から40代後半ぐらいの、プロレスが一番熱かった時代のファンが社会で元気なんですよ、意外とね。事業が成功したりさ。昨晩もそんな連中と話をしてると、どうしてもプロレスの話になってしまうわけで。そうすると、自然に暮れの話になってしまうんです。オレは観てないんだけど。

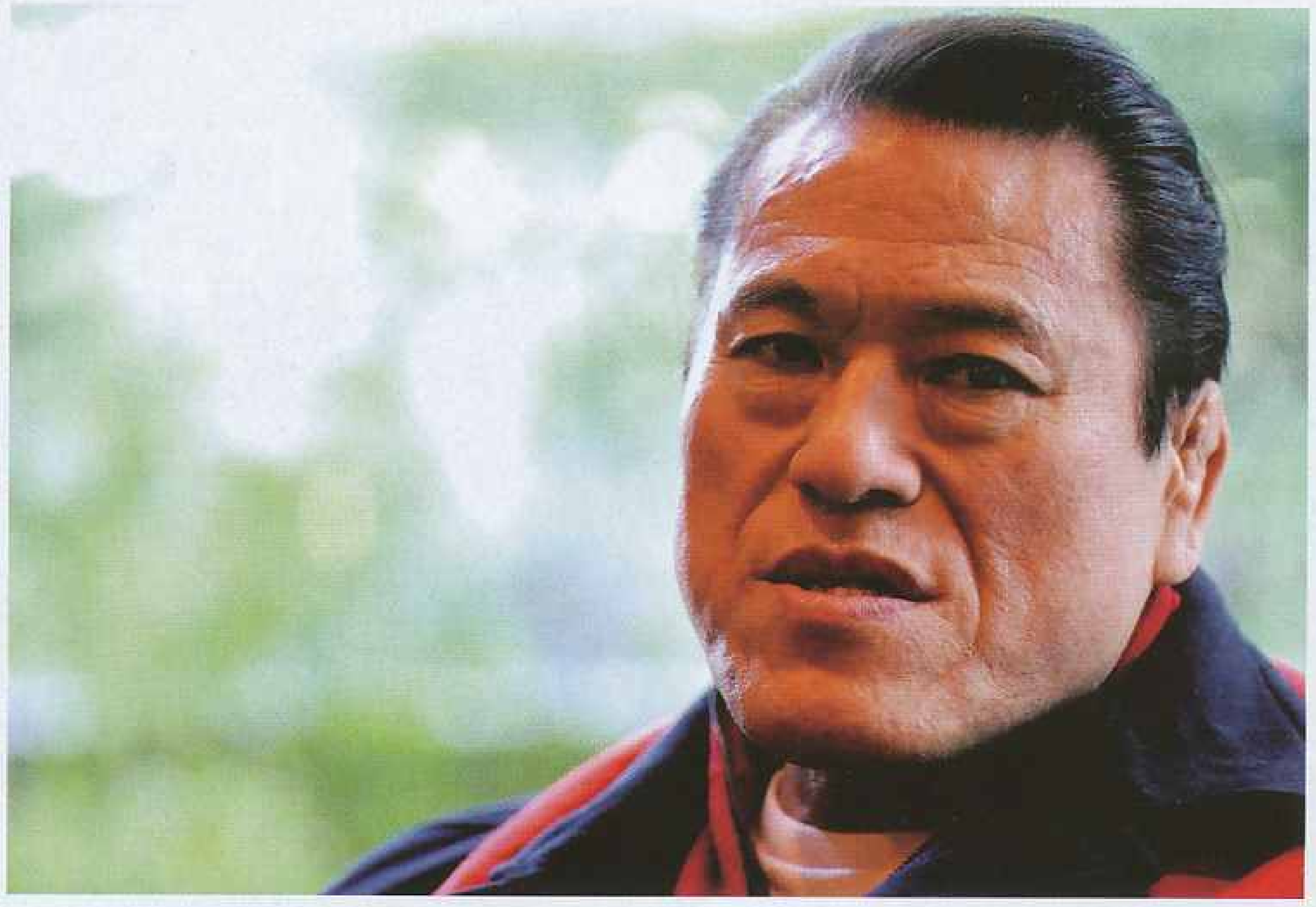
——それは『Dynamite!!』の話題ですね。

猪木　うん。オレは暮れにパラオに行ってましたんで。ただ、情報としていろいろと入ってくるから。

——柔道金メダリストの石井慧選手のデビュー戦は、猪木さんのもとにはどのように伝わってきてますか？

猪木　なんか「だらしない」とか「あれじゃダメだよ」とか。まあ逆に言えば、思い入れや肩入れがない人、率直なファンの目で観た感想なんですよね。まあ、彼の今後に関してはマッチメイクの問題も出てくるんでしょうけど、要するに場数を踏まないとしょうがないっていう。やっぱり柔道とはルールが違うわけだから。

——その同じイベントで、結果的に相手の腕を折ってしまった試合があったんです。で、折ったあげく倒れてる敗者に中指を立てるという行為を含めて、賛否両論を呼んでいるんですけど。



猪鬼の品格

やっぱり闘いには品格が必要なんです。そこはプライドという言葉でもいい。

猪木　中指？　そんなの、アメリカでやったら大問題ですよ！　それを言ってしまえば『ハッスル』のポーズなんかも、アメリカの公共のテレビで誰かが**「ファック、ファック!!」**とやってると同じことなんですけど。

——ハッスルポーズは全米で放送禁止ですか(笑)。

猪木　うん。中指を立てることがどういうことなのか、そういう社会常識をまったく知らない。やったのは日本人なの？

——日本人です。

猪木　バッカ野郎!!って。最近は音楽やってる若者も、平気で中指を立ててますけど、アメリカなら殺されてもしょうがないよ。**ホントてめえらバカじゃないか！**って。もうそれこそ最悪の行為だよ。殺されてもおかしくないぐらいのことなんですよ。なんせアメリカでは一番屈辱的なことですから。

——もう一つ騒ぎになってるのは、腕を折ってしまったことなんですね。

猪木　まあ、その試合を観てないからなんとも言えないけど、そりゃあレフェリーがどこで止めるかでしょうね。あとはそれがアクシデントなのか、どうか。やっぱりオレたちはプロですから、そこは**紙一重の闘い**をしなきゃいけないと思うんですよ。たとえば人を殺すっていう行為は、そこまでの憎しみがあるかないかっていう。だけど、スポーツという一つのジャンルの中で言えば、力を出しきって最後はお互いが認め合うっていうのがまあ一番美しいかたちでしょうね。

——その試合で折ってしまったのは、ある意味で憎しみが爆発したかたちでもあるんですね。

猪木　やっぱり闘いには**品格**っていう部分が必要なんですよ。そこは**プライド**という言葉でもいい。「ここまではやっていい。でも、ここまではやらないよ」っていう。技の凌ぎ合いっていうかね、**「おう、そこまでやるんならオレもここまでやろうか」「おまえがそこまでやるなら、もう一つ上へいこうか」**って。闘ってる者同士のキャッチボールがあるわけ。それがかつてのプロレスにはあったと思うよ。

——猪木さんも現役時代、ある意味で一線を越えてしまうような闘い、キャッチボールがない試合が多々あったわけですけど。たとえば、パキスタンのアクラム・ペールワン戦では、ギブアップしない相手の腕を折ってしまった。

アクラム・ペールワン戦。1976年12月12日、パキスタンのカラチ・ナショナルスタジアムで行なわれた伝説のシュートマッチ。試合開始30分前に、ペールワン陣営がノールールファイトを要求。猪木陣営は話し合いを求めたがペールワン陣営は一切応じず、結局猪木は「プロレスをするつもりでやってきている人間が、たった10分やそこらで気持ちを完全に切り替えて、命のやりとりに向かった」(新間寿・談／『完本 1976年のアントニオ猪木』(新潮社・柳澤健・著)。試合は3ラウンド中盤、猪木が腕絡みで

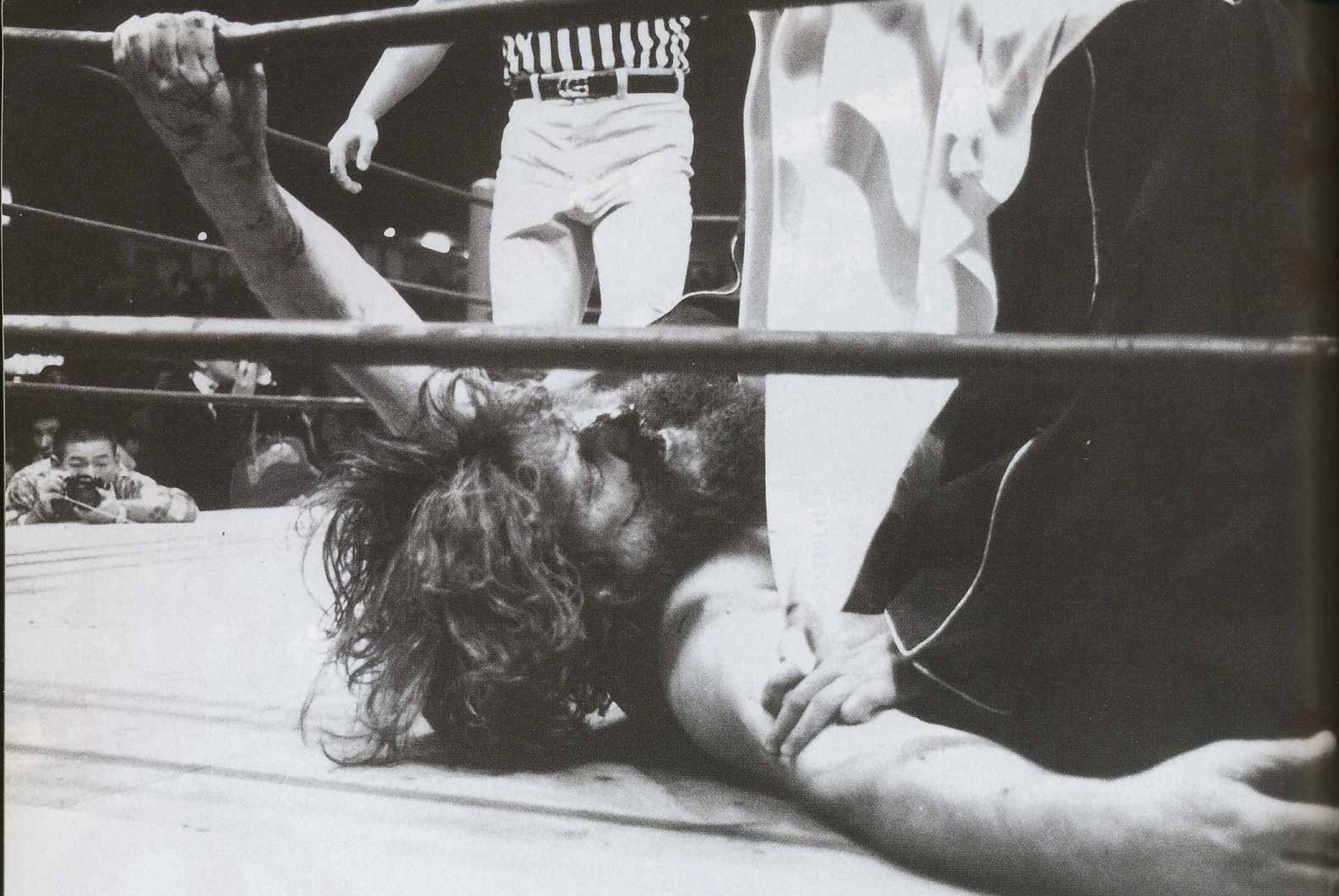
りますし、日本とは価値観が違う世界もあるからね。

猪木　うん、オレは暮れにパラオに行ってましたんで。ただ、情報としていろいろ

で、技ったあげく倒れてる敗者に中指を立てるという行為を含めて、賛否両論を呼ん

中で言えば、力を出しきって最後はお互い

談／『完本1976年のアントニオ猪木』



凄惨なリンチマッチとなったグレート・アントニオ戦。ここまで人は残虐になれるのか。それでもなお、戦士の品格を問う猪木さんの素晴らしき二面性に乾杯だ！

アクラム・ペールワン戦の腕折り？あれは外国の出来事ですから

柳澤健・著）。

試合は3ラウンド中盤、猪木が腕絡みでペールワンの左腕を捕らえる。完全に極まったがペールワンがギブアップしないため、さらに力を込めると鈍い音とともに左肩は脱臼。猪木は狂気の表情で「折ったぞぉ!!」と絶叫した。

「普通ならあそこまでやらなくてよかったと思うけど、相手も必死だし、腕がガクーッとなって、それでも参ったしないんで、二段打ちで絞り込んだからね。これはもうおそらく治らないでしょう。でも本当に皆さんのご期待に応えられて、よかったと思います」――異常が、いや、以上が試合後の〝猪鬼〟談話だ。

――そのときの猪木さんの精神状態はどういう心境だったんでしょうか。

猪木　**あれは外国の出来事ですからね。**

――なるほど！（笑）。あのとき猪木さんはバックマウントの状態からペールワンの目に指を……。

猪木　相手に噛まれたからね、腕を。

――すると、確信的な仕返しではあったんですか？

猪木　そこは試合中ですから**あんまり考えてない**ですよね。

――瞬間的なものですか。

猪木　まあ、言えることとは**日本という国内じゃないから。**要するにイスラムという世界は日本からすれば理解しがたいこともあるわけで。いまの自爆テロじゃないけど、そこまでの**命に対する誇り**もありますし、日本とは価値観が違う世界もあるからね。

――異国の地での闘い、つまりはアウェーじゃないですか。「やらなかったらやられる！」みたいなプレッシャーはあったんですか？

猪木　そりゃそうでしょう（キッパリ）。ズバリ言ってレフェリーとかそういった保障に頼って生き残れる世界じゃないというか。

――それは韓国でのパク・ソンナン戦も同じですか？

猪木　うん。あれも**異国のこと**ですから。

パク・ソンナン戦。1976年10月9日、韓国・大邱体育館。韓国の英雄を猪木が一方的に叩き潰した伝説のリンチマッチ。猪木はパクの目に指を入れ、唇は裂いて、脊椎にはヒジを入れる。パク陣営はそもそもシュートマッチを望んでおらず、地元の英雄に花を持たせたくない猪木の暴走であった。「私が耳元で『猪木さん落ち着いて下さい。ちょっとやりすぎですよ。これ以上やったら反則負けにしますよ』と言ったら、猪木さんは『おお、やれるもんだったらやってみろ。そんなことしたらてめえもやってやるぞ』と言った。まったく手が付けられなかった」（ミスター高橋・談／『完本1976年のアントニオ猪木』柳澤健・著）。

この試合の猪木さんは本当に狂ってる。詳細はぜひ『完本1976年のアントニオ猪木』を読んでほしい!!

猪鬼の品格

——大晦日の件で自分が思ったのは、事の是非はあるとはいえ、そういった凄みや殺気、そこから派生するスキャンダルな事象は、いまのプロレスではなかなか表現できないんじゃないかってことなんです。

猪木 いや、三沢（光晴）が死んでるじゃない。腕を折るよりもっと凄い。

——それこそアクシデントなところはありますよね。意図的なものは何も含まれてはいない。

猪木 まあ、簡単に言ってしまえば受け身を取り損ねたというかね。

——腕を折る、折らない話はそれこそアマチュアの試合でもよくあることですけど、これほどの大舞台で、ある意味で狂気を持ったうえで腕を折った選手は、猪木さんまでさかのぼるしかないという声があるんですけど。猪木さんの中には〝折る覚悟〟というのはやっぱりあるんですか？

猪木 折る覚悟というか、オレたちの頃は**常に闘いに対する覚悟が求められた**んですね。その根っこにはやっぱり人種差別がありますから。

——じ、人種差別ですか？

猪木 ええ。外国人選手が日本に来て、要するにギャラをもらって試合をするわけですけども、どこか日本人に対してバカにした目線があるわけです。「出稼ぎ根性で日本に来るんじゃねえ！」っていうさ、そんな試合いっぱいありますよ。そういうときは関節を極めて**ギギッ**ってね！

——ちょっと懲らしめてやる感じはあるんですね。

猪木 あるある、そんなのいっぱい。

——いっぱいありますか（笑）。逆に仕掛けてくるレスラーもいたんですかよね？

猪木 いますよ。やっぱり（外国人は）デカくて力強いですもん。まあそりゃあ**何をやったっていいんだけどさ、**やっぱり**「そうはいかないぜ！」**っていうプライドがこっちにもあんじゃん。

——でも、イヤですよね、そんな試合。

猪木 **しょうがないじゃん。**アメリカのときなんて会場に行くまでどんな選手が相手かわからないことがあんだもん。会場に着いて初めて「あ、こんなヤツとやんのか」なんてことしょっちゅうですよ。そういった連中の中には、田舎のヒーローでプライドだけが強いヤツもいたり。

——そうすると、ホントにお互いのプライドがルールの闘いになってしまう……。

猪木 うん。**「そこまでやるならコッチはここまでやるよ**」という勝負の世界。まあ、オレたちの頃のプロレスは、**そういう勝負**ですよね。

いまのプロレスラーには一線を越える瞬間はあまり必要ないと思うんですね

——それは精神的に強くなりますよね。知らない土地で、リング上で初めて顔を合わせた相手と〝プロレスの試合をする〟っていうのは。

猪木 ねぇ。まあ、いまのアメリカには、そんなこともうないかもしんないけどね。それにいまは情報化の時代だからね。ネット引きゃあ、すぐになんでもわかっちゃうから。昔はそういうものがなかったから。**その瞬間で相手を観察して、あらゆるものを見きわめなきゃいけない。**

——猪木さんがいままで対戦した中で一番ナメてるというか、怒りに火をつけた選手は誰ですか？

猪木 誰だろなあ……。

——グレート・アントニオはどうでした？

1977年12月8日、蔵前国技館。四つんばいの相手に顔面蹴り連発、わずか2分足らずで終了。ヴァンダレイ・シウバvs近藤有己の結末をもっと凄惨にした内容とでも言えばわかるだろうか。

猪木 あんなのナメてるよりも、**もうしょうがないな、と。**

——しょうがない（笑）。けっこう凄惨な試合でしたけど、どうして猪木さんはあそこまで怒っていたんですか？

猪木 **なんで？**

——いや、あんな無防備な相手の顔面を蹴り続けるのはちょっと異常ですよね。

猪木 べつに**普通**だよ。

——普通ですか。

猪木 **うん。**

——……猪木さんにとってはべつに取るに足らないことですか。

猪木 さっきも言ったように外人選手って要するに出稼ぎ感覚だから。たいして拳が当たってないのに「痛い！」って騒いだりさ、こちらを勝手に持ち上げといて帰るヤツらもいるからね。**「バッカ野郎、そんな甘かねえぜ！」**って。

——持ち上げてもらってるのに、ただでは帰しませんか（笑）。

猪木 馬場さんのプロレスはそれでよかったと思うんだよね。

——さっきの腕を折る、折らないの話でいうと、前田（日明）さんにもそういった狂気性があったと思うんです。かつて猪木さんは「プロレス道にもとる行為」として、前田さんの長州顔面蹴撃事件を非難したことがありましたけど。

猪木 まあ、何度も言うようにプロには品格が必要ですからね。ただまあ、**いまのプロレスラーは一線を越える瞬間はあまり必要がない**と思うんですね。かつてのプロレスはもっとタフだったんじゃないですか。肉体的にも技術的にも、それこそ精神的にもね。オレたちの頃はスキャンダルがあるとそれを受け止めて、表現していたところがあると思うんですけど。

——いまのプロレスはあまりそういうムードがないんですね。


猪木 だからこそ、世間が見向きもしないんじゃないの？ まあ、言ってしまえば、非常に優等生的であるというか、良い子でありたいっていう。誰しもが良い子でありたいっていう思いを持つのはいいけれど、結局、**良い子でありたいっていうことって自分らしさを失なってるんですね。**世間やファンを気にしすぎておもいきったことができない。**ズバリ、ファンなんて気にしなくていいんですよ！**こういうことを言うと、ファンに怒られるけど、ファンほど薄情なものはねえんだから。

——まあ、そうですよね（笑）。

猪木 ちょっと何かがあると、明日でもいなくなっちゃうんだから。それをこっちに向けさしていくためには**宗教的要素**が必要というか、「イヤなヤツは観るな！」っ



©Essei Hara



猪木

いますよ。やっぱり（外国人は）テ

――猪木さんがいままで対戦した中で一

ていうぐらいのパワーを持っとかないと。

——猪木さんは観客に対して、下手に出るっていう構えはいい意味でないですよね。

猪木　いまの政治も媚びてばっかじゃんか！「国民、国民、国民!!」と国民に媚びている。政治っつうのはそうじゃない。国民が見えない先をリーダーとして見なきゃダメなわけだから。それが「いや、国民の目線で」って言う。それは確かに国民向けに甘い言葉を送らなきゃいけないけど、そうじゃなくて、リーダーという存在はある意味では強引に引っぱっていくことが必要なんです。それは社会全体であり、我々の世界の問題でも同じというか。だからある意味でエンターテインメントっていうのは人気が大事ですけど、人気があるっていうのは、自分自身が努力したから生まれたんです。みんな言うじゃない、「ファンのおかげで今日は勝てました!!」って。**そんなのウソだってっ!!**

——ウソですか！（笑）。

猪木　自分が苦労してそのリングに上がったから勝ったんだよ。**ファンなんて負ければそっぽ向いちゃうんだから。**そこを言ってやらないと誰も気がつかない。そりゃあ確かにここ一番のときファンの声援によって力が出ることはありますよ。だけど、それは自分が努力したから。そこに**ファンが勝手にくっついてきただけじゃねえかよ、馬鹿野郎。**

——まあ、建て前としてそう言わなければならない部分もあるでしょうけど。

猪木　テレビ、マスコミ、みんなもうおかしくなってんですよ。「この言葉を言っていれば間違いない」っていうのがあるじゃん。たとえば平和を訴えて反対する人はいないわけだから。だろ？

——そうですね。

猪木　でも、平和なんてあったかよ、この何千年の歴史の中で！　ず～っと闘いの歴史じゃねえかよ。だからこそ平和を訴



猪木さんの試合はいつも“何か”が表現されていた。最近はプロレスも格闘技も「いい試合」を求めたがるが、「いい試合」なんて結局のところ誰も覚えちゃいない。心に焼きつくのは感情が表現された試合だ！

平和なんてあったかよ、人類の歴史で。闘いは人間の中から消えることはない

えるのが大事な要素になってくる。でも、**闘いという要素は絶対に人間の中から消えてなくなることはないんです。きれいごとで終わらせるなって！**

——でも、いまはきれいごとですませてないと、すぐにバッシングされますからね。

猪木　メディアによって潰されちゃう。亀田（大毅）のときもそうじゃないですか。一人前にもなってないガキがさ、必死になって悔しくてたまんなくてさ、それを表現したらさ、女のレポーターが「国民に謝るべきだ」とかさ。バーカ言ってんじゃねえよ！って。な～にを気どってんだよ、ボクシングなんて。オレらプロレスはいつもボクシングの連中の引き合いに出されていた。「プロレスはああだ、でもボクシングは違う」と。**馬鹿野郎！　そんな声や視線と、オレたちは闘ってきたんだよ。**

——そういう意味では、いまだにプロレス的な要素は色眼鏡で見られちゃう対象なのかもしれないですね。いまのファンは潔癖性なのか、そこを嫌がってやれ競技がどうのって言いだすんですけどね。

猪木　だからこそ**「プロレスはおもしれえ!!」**ってオレは言い続けてきたんですよ。**プロレスほど人間臭さを出せるものはないんですよ。**人間臭さっていうところのプロレスでいうと、オレはよく表現として怒りが足りないって言ってきたけど。**いまのレスラーがホントに怒ったことねえからだよ、**逆に言えば。だから自分で「ホントにぶち殺してやろう!!」と思うぐらいことは誰にでもあるんだよ。その怒りのコントロールというか、心底から湧き上がる怒りを闘いで表現しなきゃいけないんです。かといったって、そんな怒りっぱなしだったら、冷静さを欠いて勝てませんでけどね。

——たとえば、いまの小川（直也）さんの怒りの部分は本音というよりキャラクターっぽい気がするんですけど。

猪木　だろうね。『ハッスル』に出たのが失敗じゃん。いまは本人、気がついてるよ。それを追い討ちかける自分じゃないけど。やっぱり一番その可能性を持ってたわけだから。小川なんて橋本（真也）との試合がなかったら、どういうことになってんの？　って。

——いわゆる〝1・4事変〟ですね。

1999年1月4日、新日本プロレス・東京ドーム大会で行なわれた橋本真也vs小川直也戦のこと。簡単に説明すると、小川直也がシュートを仕掛け、橋本真也を戦闘不能に追い込み、いきりたった両陣営のセコンドも大乱闘に。その際に村上和成は顔面を踏みつけられ、一時昏睡状態に陥った。なお、小川に指令を下したとされるアントンは「1、2の三四郎」のお面を被って観戦。ガチンコの乱闘が始まると、どこかに姿を消してしまった——。こんな遺恨がその後ちゃんとプロレスに転換できるんだから、プロレスが相当にタフな時代だったのだ。

猪鬼の品格

猪木 あれがなかったら小川なんて見向きもされてないでしょ。当時の新日本はオレにメチャメチャ矛先向けてたと思うんだけどね、オレが仕掛けたわけでもない。**要するに闘いとはこういうことだっ**ていう。

——あの闘いは猪木さんの中で一線を超えてますか、越えてませんか？ 新日本サイドは越えていたからこそあそこまで怒ったんでしょうけど。

猪木 越えたも越えてないもない。**だってしょうがねえじゃん！**

——あ、しょうがない。

猪木 だからやった結果よかったじゃん。そのくせあいつら一番仲良くなってさ。**本当の闘いをすれば、わかり合えるんですよ。**

——小川直也と橋本真也があれだけ仲良くなったのは不思議ですね。

猪木 ホントだよ。あれだけ憎しみ合っていた者同士が。でも、そういうもんだよ、人間ってのは。

——猪木さんの中ではあれはあってしかるべき闘いだったっていう。新日本サイドはかなり怒ったと思うんですけど、その怒ったっていうのはルール違反、マナー違反の怒りもあったと思うんですね。そこはどう思われますか？

猪木 本人同士というより、当時の新日本にそういう感覚がなかったんじゃないかな。トップだった長州力のプロデューサー的感覚というのがなってないよね。あいうことに対して、どうあるべきかという感覚ができてない。いまの姿もあの当時のままだよ。

——新日本は変わってませんか。

猪木 というか、**いま同じことがあっても怒んないでしょうね。** 怒るだけのエネルギーがあったら凄いと思うんだよ。そこは愛社精神であるとか、あるいはプロレスのプライドだとかいろんなものがあるはずなんだけどね。

——怒んないっていうのも凄いな（笑）。

猪木 もう怒らないと思いますよ。要するに、闘いというものは美や芸術であると同時にマーシャルアーツの要素を持ってないといけない。まあ、いまはそれぞれキャラクターはあるかもしれないけど、練習して鍛えに鍛え上げた肉体じゃない。ただ鏡を見てバーベルを挙げただけの身体ですよ。

——キャラクターとしてのプロレスラーということですね。

猪木 だからちょっとでも、一人でもこういうことを真剣に受け止める選手が出てくるといいなあと思うけど、やっぱり厳しい道は歩みたくないっていう。二つの道があればね、平坦な道のほうがみんないいだろう。でも、その先はわからないよっていうね。**一山越えた向こうは平坦な道かもしれない。**

——小川さんと橋本さんがまさしくそうだった。

猪木 まあ、いまはレスラーと格闘家が分かれちゃったからね。昔は関係ないもんね。格闘もプロレスも全部一つのジャンルだったから。

——いまプロレスと格闘技が分かれちゃってるっていうところでプロレスの凄みがなくなってきているし、格闘技においても闘いの本質や表現が誤解されてきてるってところはありますか？

猪木 結局、いまの日本の経済みたいにこれから伸びていく希望の光っていうのが誰も見えないからね。だからこうやってインタビューするのでも、なんでオレのところに来るの？ オレはすでに現役でもねえし。だからそこに、あまりにも光がなさすぎるからオレのところに人が集まるのかなって。もっともっと怒ればいいいんですよ。

——選手はもっと怒ったほうがいいんですかね。

猪木 だからみんなも**政治に対して怒るべき**ですよ。

——せ、政治にですか⁉

猪木 小沢（一郎）さんにしたってなんにしたって、18億円もの金を知らねえわけねえじゃん！ **オレがいくら金銭オンチだってさ、** そんな金銭オンチのヤツに国を任せられるかい？ うん。それなのに誰も怒んない。「あの小沢の野郎、ぶち殺してやるぞ」っていうぐらいの人が出てこないとね‼ **まあ、そんな感じです。**

——よくわかりました！（笑）。

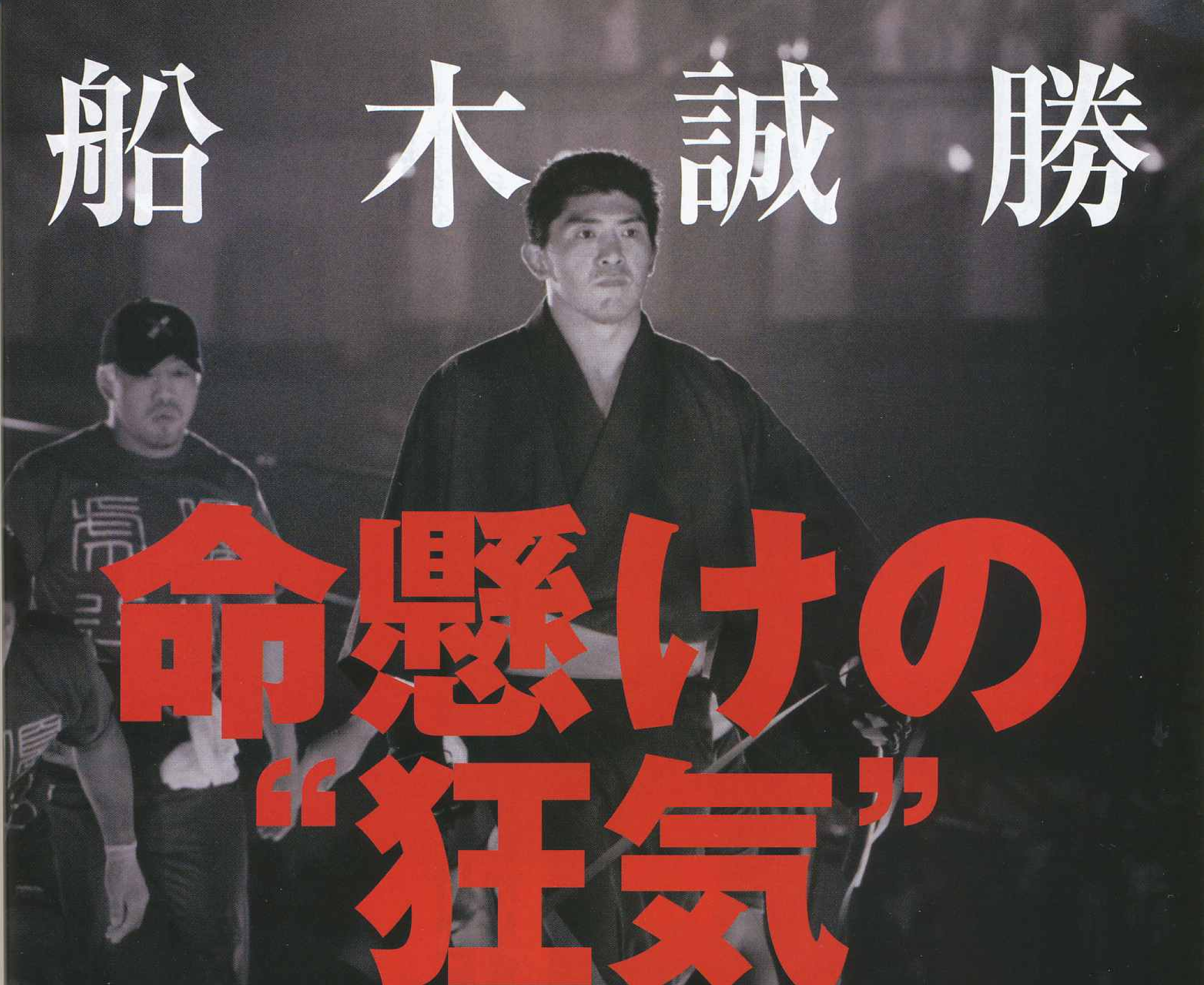
猪木 はい、どうも‼

【10年1月7日／都内・ホテルオークラにて収録】

憎しみ合った橋本と小川が一番仲良くなった。本当の闘いをすればわかり合えるんです

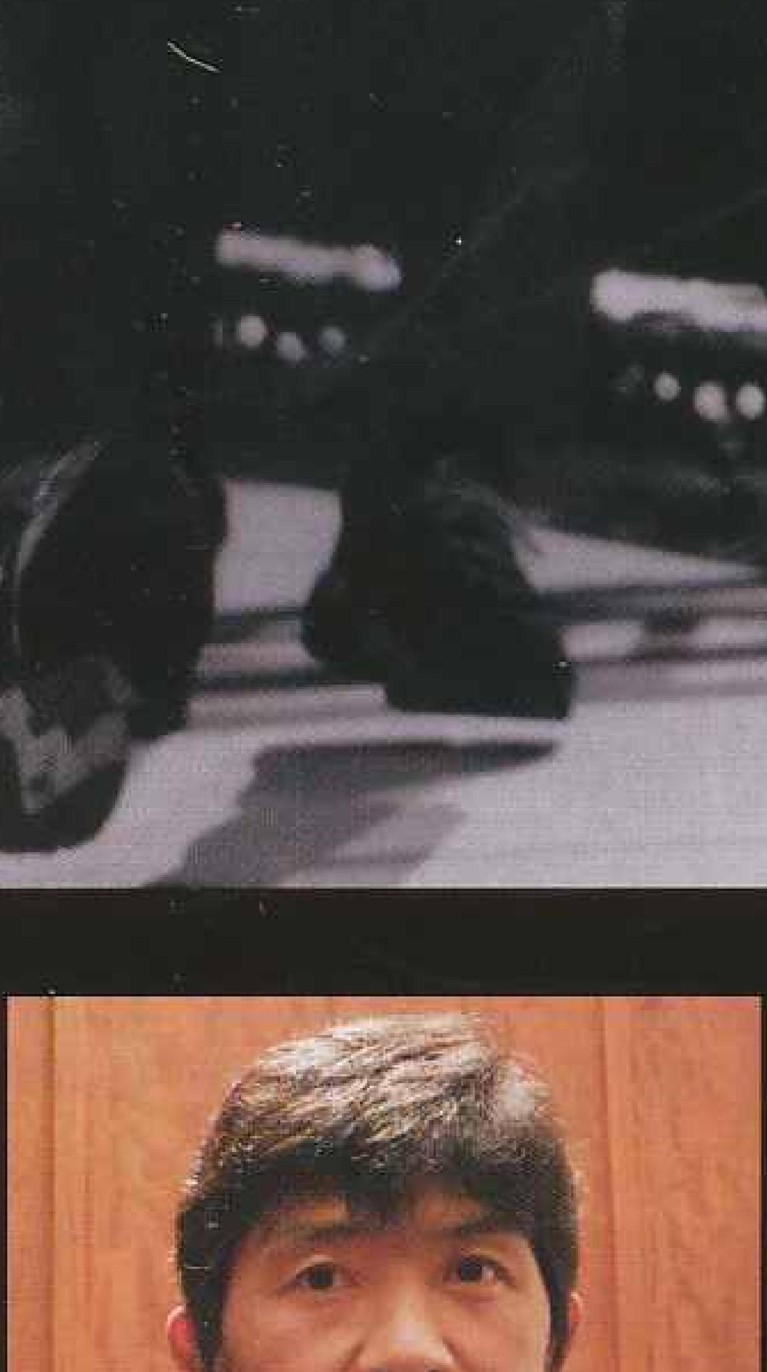


あんとにお・いのき■1943年2月20日、横浜市出身。少年時代に移民したブラジルにて力道山に見いだされプロレス界入り。新日本プロレス旗揚げ後は"過激なプロレス"を標榜し、強さを求めるストロング・スタイルで世間に名を轟かせた。モハメド・アリ戦などの格闘技路線は、現在のMMAカルチャーにも多大な影響を与えている。



船木誠勝

命懸けの“狂気”を語る



狂気はどこからやってきて、どのように解放されるのか？

プロレスラー・格闘家の船木誠勝を語るときによく使われる“狂気”というキーワード。
自らのブログのタイトルも“マッドネス”とつけていた（現ブログ『RED ZONE』http://ameblo.jp/masa-funaki/）
船木は、自分に内在する狂気に最も自覚的なファイターの一人だ。
そこで船木に『Dynamite!!～勇気のチカラ2009～』で行なわれた青木真也vs廣田瑞人の一戦を分析してもらった。
試合が決まってから試合が終わるまで、ファイターとはどのような心理状態ですごすものなのか？
自身の体験をまじえて語った狂気のメカニズムとは!?

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／乾晋也、平工幸雄

――今回は『Dynamite!!』で行なわれた青木真也vs廣田瑞人の一戦についてうかがいたいんですが。

船木　家でテレビを観てたんですけど、青木選手がうまく廣田選手の腕をつかんでやってるなっていうのがわかったんですけど、最初に観た瞬間はわからなくて、試合が終わって離れたら廣田選手の腕がダラーンってなってましたよね。「あれ?」と思いました。「え、もしかして外しちゃった?」って。で、そのまんま除夜の鐘をちょっと叩きに行ったんですよ。

――まあ、大晦日でしたからね（笑）。

船木　でも、「外しちゃったのかなあ?」って半信半疑で、ずっと考えたまま除夜の鐘を叩く行列に並んでましたね。

――青木vs廣田戦のことを考えながら除夜の鐘を叩いてましたか（笑）。

船木　でも、あの中指はどうですかね。昔はああいうのもけっこうあったような気がしますけど。いまはやっちゃいけないんですかね。結局、二つに一つですね、競技として成立させるのであれば、あれはよくないと思うんです。ああいう侮辱行為はしちゃいけないとか、そういうルールはあるんですか?

――「非人道的な行為は禁止」と明文化されてますね。

船木　ということはダメですね。ルールがあるんであれば。ただ、プロフェッショナルな見世物としては最高ですよね（笑）。

――プロフェッショナルな見世物（笑）。

船木　プロっていうのは、見世物ですから。ここ2年間でひさしぶりに出た目新しい光景でしたね。その前は、やっぱり秋山成勲選手と三崎和雄選手で顔面蹴りがあったじゃないですか。あのシチュエーションと、お客さんのボルテージも相当でしたけど、それに次ぐ新しい光景でした。

――試合で腕を折ったり、中指を立てるところまでいっちゃうのは、団体対抗戦ならではというか、大きな意味でのケンカだからだと思うんですが。

船木　そういう状況だと選手はあそこまでいっちゃうと思います。自分も試合中はやっぱり「壊れてもいいや」ぐらいの感じで関節をひねってました。自分の場合は足をひねることが多かったですけど、バリバリって音がしてましたから。廣田選手の腕も2~3回バリバリ鳴ってたと思うんですよ。それでもギブアップしない。青木選手にしても、手を放したら逆襲されてしまうかもしれない。「折らなきゃ負ける」「ギブアップしたくない」両方の気持ちはわかるんですよ。だからああいうふうになってしまったのは仕方がないんで、やっぱりあそこまでひどくなる手前で、セコンドのタオルかレフェリーのストップをしっかりやってればと思います。

――船木さんも、もしこういう、やるかやられるかみたいな試合、青木選手の立場で試合に出てたら、ああいうことになってましたか?

船木　中指はやらないです。折るとかギブアップしないとかはやってたと思います。闘ってるときは「もう捕まってもいいや」ぐらいの感覚はあると思うんですよ。とくに青木選手は26歳じゃないですか。バリバリの時期ですから。そういう感覚はあったと思うんですよね。

――命（タマ）取ってやるぐらいのテンションでしたか。

船木　でも、命を取ることの重さって、そのときにはわからないんですよ。で、自分が死ぬことの大変さもそのときはわからない。もう少し歳をとっていろんな経験しないと。

――船木さんってそういうテンションというか感情になった経験は?

船木　やっぱりヒクソン（・グレイシー）戦のときは、死ぬか生きるかっていうような感覚はありましたよね。実際、ギブアップもしなかったですから。そういう意地はありましたね。

――「負けるのは死ぬこと」という意識だったんですか?

船木　そうですね。でも、負けても生きるんですよね。試合なんで。試合後にだんだんアドレナリンも下がってくると、怖いシチュエーションだったなって思うんですけど。でも、そのときはやっぱり一生で一回の闘いでもあるし、お客さんも注目してるんで、全部飛んでしまうんですよね。

――そうなると理性は?

船木　ないです（キッパリ）。そのリング、その相手だけしか目に見えないというか。もの凄く怖い状況だと思います。それぐらいアドレナリンが出ますよね。腕もバーンッてやっちゃうと思うんですよ。ざまあみろぐらい思ってるかもしれない。

ヒクソンを斬っちゃおうかなという気になりました。試合不成立にしちゃおうと



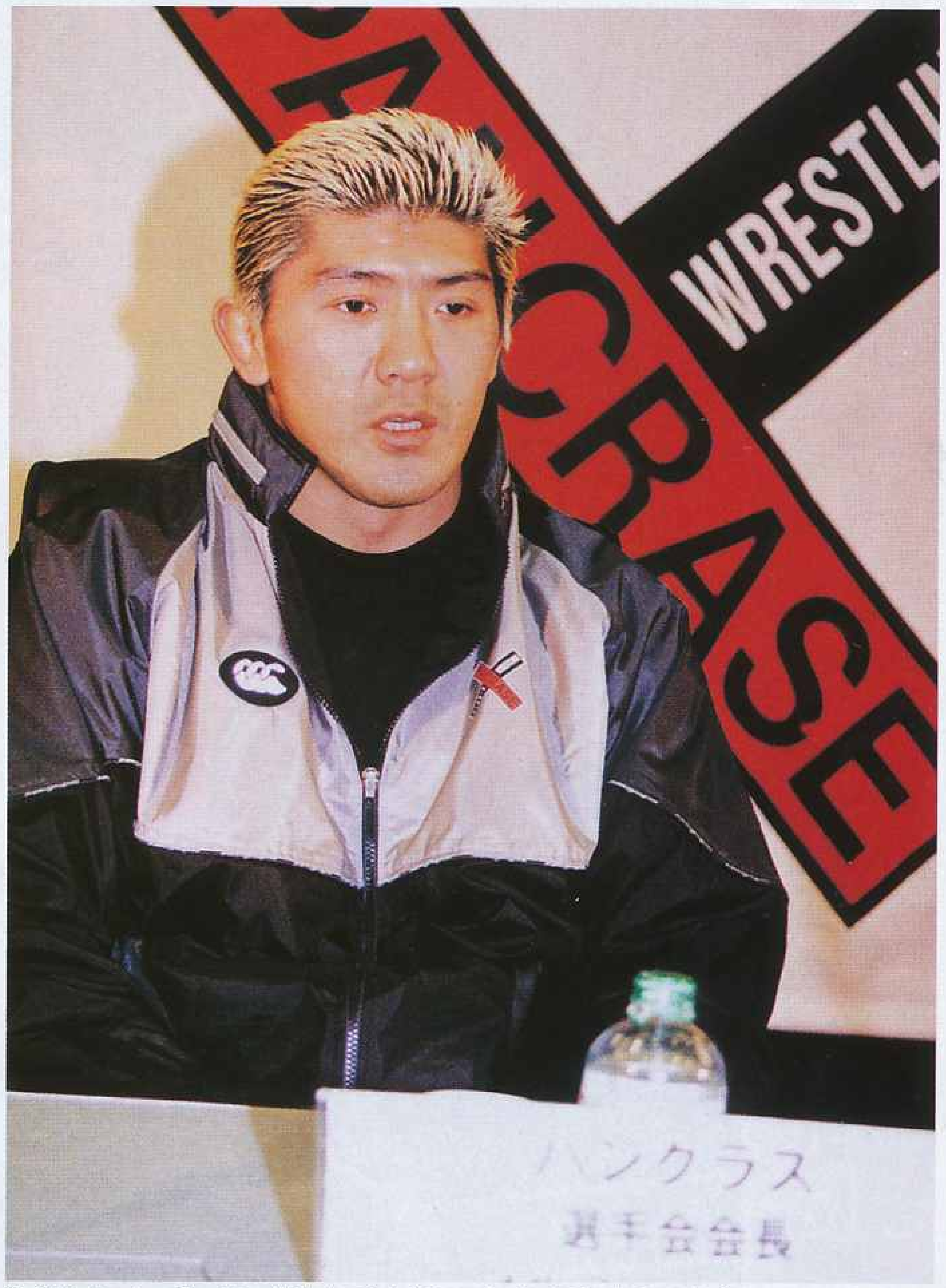
『Dynamite!!』青木真也vs廣田瑞人の衝撃は、いまだにネット上でもくすぶり続けている。腕折りと中指という強烈な"見世物"をどう考えればいいのか?　そのヒントを船木は自分の体験に基づいて語ってくれた。

命懸けの狂気!!

「おまえの負けだ!」って。
――もし、船木さんがヒクソンの腕が取れてたら?
船木 折りますね。
――「ざまあみろ」ぐらいは言ってますか。
船木 「ざまあみろ」は……、たぶん言わないと思います。お客さんに向かって「やったぞ!」っていう感じにはなったと思います。
――ヒクソン戦では着流し姿で入場してましたよね。あのときは出入りに行くような感覚でしたか?
船木 そうですね。日本刀を用意してくれるって言われたときは、入場しながらそのままヒクソンを斬っちゃおうかなっていう気にもなりましたよ。試合不成立にしちゃおうという。いま思えば、あれは恐怖心なんでしょう。負けたくないから試合を潰しちゃおうかな、殺人犯になってもかまわないや、ぐらいの気持ちでした。
――負けるぐらいだったら犯罪者だ、と(笑)。
船木 だけど、やっぱりそれをしちゃったら自分の負けだと思ったんで。そのためには日本刀は持っていきますけど、絶対に抜いちゃいけないと思いました。やっぱり対抗戦って凄く過酷なんですよ。自分しかいなくなっちゃうんです。もうセコンドも関係ないって感じになりますよね。やらないとやられてしまうっていうのが一番の恐怖ですよね。
――試合への恐怖から不安定な気持ちになってしまう瞬間って、けっこうありました?
船木 いろいろありましたね。記者の人にもそういう気持ちをぶつけようとした瞬間もあったし。凄く厄介な感じになってました。周りの人が「絶対勝つよ」って言っても、そんなのわからない。でも、みんなの勝ってほしいっていう気持ちだけは凄いプレッシャーになってのしかかってくるんで、どうしようって。そういうときって人間はけっこう弱いですからね。ホントに切羽詰まった状態で最後に勝った瞬間は、それまで制御されてたものが全部飛んじゃうと思うんですよ。そういう瞬間だったんじゃないですかね、青木選手は。
――自分で大黒柱って言ってるだけに、背負い込んでるものもハンパじゃないでしょうし。
船木 周りが考えている以上に凄いんじゃないかと思います。まして大晦日で全国中継じゃないですか。ここで勝ったら一気にスーパースターになるし、負けたら最悪の展開にもなると自分でもわかってたと思うんです。逆に、負けたら誰にも顔向けできない状況だったでしょうし。
――船木さん、ヒクソンに敗れたあとってどういう心境だったんですか?
船木 自分の場合、引退も発表しちゃったんで、なんかもうホントに全部終わったなって。それこそ15歳からデビューして、そういうのを含めて全部が終わったっていうことでサッパリしたという感覚でいました。でも、逆に周りは全然そうは見てくれないんです。だから、人とはちょっと会いづらかったですね。もちろん復帰とかも絶対しちゃいけないって思ってましたし。そういう意味では一回終わった。だけど、生きてるんですよ。生きてるんで、そこでホントに死んで終わったらいいなって思ったことは何回もありますよ。
――自分の中では死んでるみたいな感じですか?
船木 そうなんです。だけど生きてるんです。それはつらいですよね。
――ちょうど船木さんがパンクラスの顧問をやられてた頃にインタビューしたことがあるんですけど、「船木さん、復帰はされないんですか?」って聞いたんですよ。そしたら船木さんが「もし次、自分が復帰するとしたら……」。
船木 「殺し合いの試合」ですよね。
――はい、そういう試合じゃなきゃできないぐらいのことを言われてました。
船木 そうですよね。たぶんその頃もまだ苛立ってたんですよね。「なんでそんな質問するんだろう?」って。
――それは失礼しました(笑)。
船木 でも、それはずっと言われてましたね。会う人会う人みんなに。俳優をやってるときも「次はやらないんですか?」って。
――船木さんの中で本当の勝負っていうのを突き詰めると……。
船木 殺し合いですね。
――究極的には?
船木 そうですね。やってることがそうなんで。相手の首を絞めたりとか、ぶん殴って意識を飛ばしたりとか、あとは関節をひねって参ったをさせる。参ったをしなければ外すっていう、そういうことなんで。やっぱりスポーツにはしづらいことをやってたなって感覚はありますよ。だからホントにルールで制限しないと。総合格闘技の宿命かもしれないですね、ギリ

ったらマズいなと思って、勇気をふり絞って「やりたいのは、こんなことじゃない」

切羽詰まった状態で最後に勝った瞬間 制御されてたものが全部飛んでしまう



船木はヒクソン・グレイシー戦決定の記者会見に、なぜか金髪で登場して報道陣のみならず、パンクラスの当時の社長だった尾崎社長も驚かせた。当時の船木には死に場所を探しているようなイメージもまとっていた。





2000年5月26日、東京ドームで開催された『コロシアム2000』でヒクソン・グレイシーと闘った船木誠勝。この試合を最後に一度、現役を引退した。

カッとなったりメソメソしたり……精神的に危険な状態だったと思います

からホントにルールで制限しないと。総合格闘技の宿命かもしれないですね、ギリギリでスポーツになるかならないかという……難しいような気がします。

——もともとはスポーツじゃなくて命を奪い合う術ですもんね。それをあえていろいろルールを作ったりしてるわけで、そこにスポーツマンシップを植えつけたりして、スポーツの枠になんとか入れてますけど。

船木　打撃や寝技を細かく分けていろんな競技になってますけど、それをまたもう一回くっつけるっていうことは、殺し合いに近づけることなんです。ホントはやっちゃいけないことをやってるような気がします。でも、みんな観たいんですよ。自分もそうだったですね。これ全部くっつけて勝負したらどうなるんだろうって。そういう発想でパンクラスを作りましたんで。そこで自分なりの行き着いた答えがヒクソン戦でしたから。

——でも、パンクラス初期に船木さんは「潰し合いとか殺し合いは嫌だ」ってことを言ってたじゃないですか？

船木　そうです。なぜかというと興行ができなくなってしまうからです（笑）。

——そういう理由でしたか（笑）。

船木　興行ができないと生活ができない、そういう壁にぶち当たったんです。旗揚げして半年経った頃にギブアップしないでじん帯を痛めたりとか、骨折したりっていう選手がいっぱい出てきて。お客さんもこれをずっと求めるようになってしまったらマズいなと思って、勇気をふり絞って「やりたいのは、こんなことじゃない」と言いました。壊し合いで負けた選手がだんだん試合ができなくなって、最終的に二人、最後には一人ってことになってしまうなと思って。

——なるほど。「これから皆さんに殺し合いをしてもらいます」っていう映画『バトルロワイヤル』みたいなことになってしまう、と。

船木　まず日本人が壊し始めたんですよ。そしたらだんだん（ウェイン・）シャムロックが「あ、壊してもいいんだ」みたいな感じで、バリバリ壊し始めたんで、これはちょっとマズいな、と。みんながそういうふうに思っちゃうとマズいと思って、それでちょっとスポーツの方向性にと思ったんですよ。

——スポーツとしてパンクラスを確立させようと思ったのが、それが競技者としての自分は逆に……。

船木　そうですね、でも、アルティメット（UFC）というスポーツとは真逆のことが海外で起こってて、それとシャムロックがクロスし始めたんです。それに目をつむってはいられないなという気持ちがだんだん芽生えてきました。そして生き残るために、話題に乗り遅れないように、そっちのルールも徐々に入れてきたりとかしたんです。最終的にヒクソン戦の話が自分のほうに回ってきたんで、それはそれで別モノとして受けたいなっていうのがあって。それは、やらなきゃいけないんじ

命懸けの狂気!!

ゃないかっていう思いがありました。髙田（延彦）さんが二回負けてるし、次は俺しかいないんじゃないかなって。

――UWFの使命というか。

船木　そうですね、なんかへんな責任を感じましたね。

――そういうものを全部背負っていたから「負けは死を意味する」という思いも強くなったんですか？

船木　当時、そういう流れだったじゃないですか。もともと30歳までに結果を一つ出したかったので一番調子のいいときに最強と言われる人と闘えるっていうことはもの凄くいいことだと思ってたし、それでちょっと勝負をかけたいなと思いました。凄く孤独な勝負でしたよ。

――いざ心を決めてみたら、とんでもない重圧がかかってきた、と。

船木　そうですね。ホントにまったく楽しめないんです。楽しんでるフリはしてたんですけどね、金髪にしてみたりとか。

――あれも楽しんでるフリでしたか!!（笑）。

船木　いつもとちょっと違う自分を出して紛らわせたいというか。全部スベりましたよね。

――似合ってなかったです、確かに（笑）。

船木　まずヒクソンが引いてましたからね。じつはですね、薬局に行って青いヘアカラーを買ったんですよ。そしたらホントに真っ青になって「これはちょっとヤバいな」と思って、それですぐにドン・キホーテで妻にブリーチ剤を買ってきてもらって金髪にして。ヤバかったです。

――あれは自分で染めてたんですか（笑）。

船木　そうです。会見前夜の夜中にやっと完成したんです。

――自分でも自分が何をしでかすかわからないような精神状態だったんですね。

船木　ちょっと血迷ってましたよね。

――周りも心配したんじゃないですか？

船木　ええ、尾崎（允実）社長（当時）なんかホントにビックリしてました。弾けたいっていうか。そんな感じでしたね。

――それの究極が試合の入場時に「もう日本刀で斬るしかない」という精神状態だったわけですね。

船木　じつは、あの試合の1週間前、須藤元気とのスパーリングの最中に目の上を切られちゃったんですよ。それで「試合前にこんなにパックリいったら、もう絶対に負ける」と思っちゃって。これはヤバいな、どうしようって思って、もう試合を不成立させるしかないなって。

――そのときは凄くキレたっていう話ですけど。

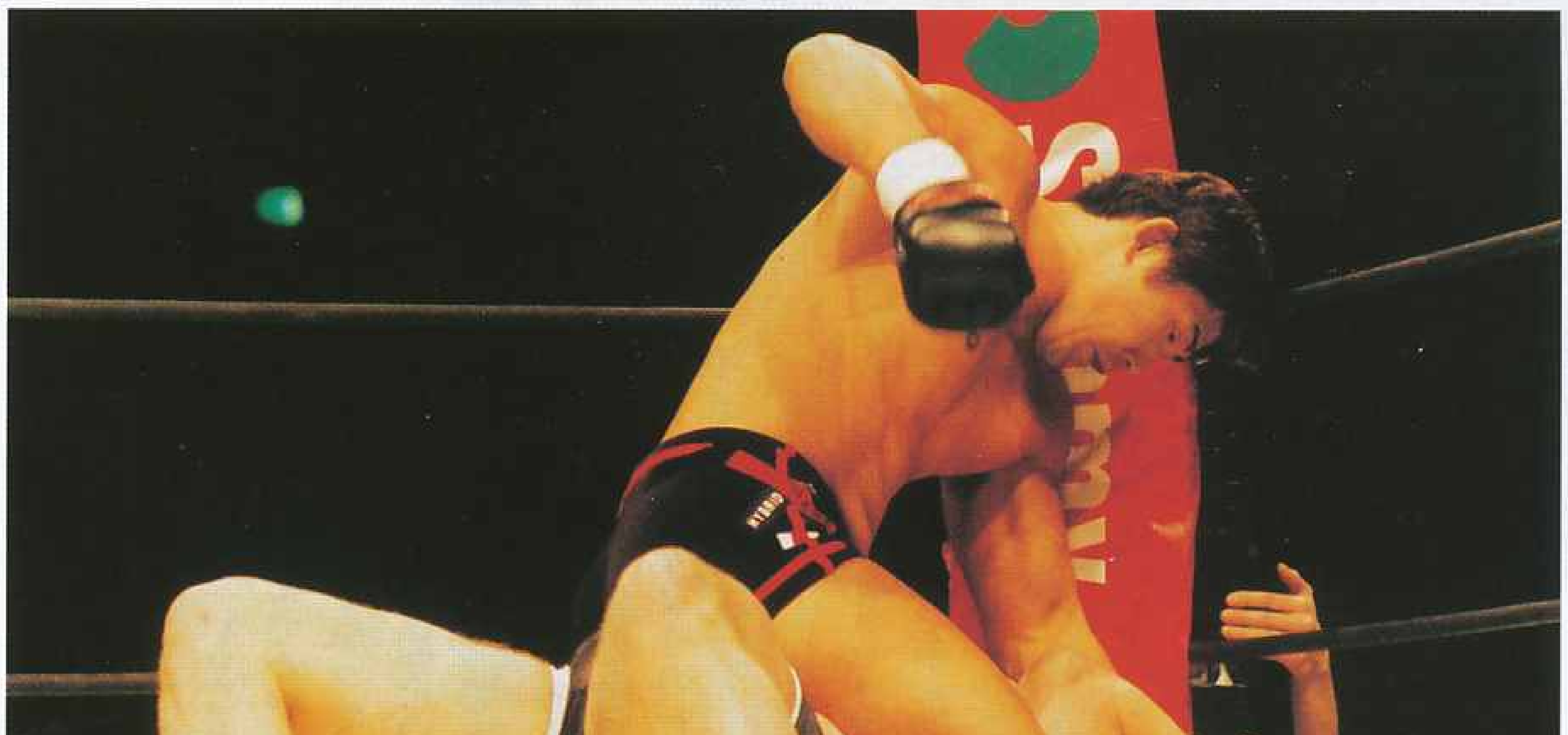
船木　やられた瞬間に血が目に入って「てめえ、この野郎！」ってなっちゃって。そしたら元気が「すいません、すいません」とか言いだしたんで、なんか練習じゃないような雰囲気になっちゃって。いきなりストンピングやって（笑）。

――ストンピング（笑）。

船木　ホントに悪いことしたなって思います。やっぱり張り詰めてたんでしょうね。

――まあ、気持ちは殺し合いモードに入ってるわけですからね。

船木　そうですね。練習だから仕方ないんですけども、なんかわけのわからないことを言ってました。「俺は命懸けてんのに、なんてことするんだ！」とか（笑）。元気もそういうつもりでやってたわけじゃないのに。2～3人に止められて。ふと気づいたら自分が情けなくなって大泣きしちゃいました。



船木誠勝、鈴木みのる、髙橋義生が中心となってプロレス界から完全実力主義へアプローチしたパンクラス。所属選手中心の興行形態でケガ人などが続出した。それでもパンクラスはUFCなどの流れに乗り、掌底からオープンフィンガーグローブでパウンド、踏みつけありのルールへ移行していった。狂気が野放しにならないようルール整備も船木は重視している。

日常生活の中で仕返しをするようなところまで発展しないことを願います

――今度は大泣きですか。

船木　「何やってんだ、俺は！」みたいな。それぐらい躁鬱病じゃないですけど、精神的に危険な状態だったと思います。カッとなったりメソメソしたりっていうのが凄く激しかったですよね。だからホントに身体によくないですよ、対抗戦というのは。度が過ぎちゃうと人間を一人潰しますよね。自分がパンクしちゃう。

――青木選手も今回は中指でしたけど、試合後には泣いたりとか、いろいろやってますもんね。あれもそういう心理状態なんですね。

船木　そうなんです。たぶん、麻薬をやってるような感じになっちゃうんです。自分の身体の中でいろんな物質が出てそういうふうになっちゃうんだと思うんですよ。まず寝られなくなりますね。

――覚せい剤やってるような感じになっちゃうんですか？

船木　そうです。だから睡眠薬を飲んでました。睡眠薬を飲まないと寝られなかったです、あの頃は。もう患者ですよね。

――そうですね。

船木　DREAMは舞台が凄く大きいですから、プレッシャーも大変だと思うんですよ。なんだかんだいって、自分の部屋までセコンドはついてこないですから。自宅に帰って寝るとき、一人になるとホント不安になるんです。そうすると、いろんなことを考えて寝られなくなるんです。そういうことの繰り返しで試合が決まってからの1ヵ月をすごした最後のピークですからね。廣田選手だって痛みに耐えて腕を折

られてしまうぐらいの精神状態になるし、青木選手が腕を折ってワーッとなるってあげちゃったんだと思うんですよ。「好きにしろ」っていう。

んですよね。廣田選手がもう一回やりたいって言うのであれば、そのときに同じ過

気がします。

――ちょっと話は逸れるんですが、船木さ

やってることが人殺しの手段ですから それを精神と結びつけるのが難しいです

られてしまうぐらいの精神状態になるし、青木選手が腕を折ってワーッとなるっていうのもわかりますね。選手も人間なんで普段とは違う状態になっていくんです。

――船木さんもヒクソン戦ではチョークスリーパーで絞められましたけど、あの場にレフェリーがいなかったら、おそらく死んでるわけですよね。

船木 死んでますよ。だけど、あのときはですね、テレビを観ると、まずヒクソンが絞めてる腕を外してるんです。そのあとにゴングが鳴って、そのあとにタオルが入ってるんですよね。全部遅いんです（笑）。ヒクソンが一番冷静でしたよね。だからヒクソンは凄いなと思います。

――昔、パンクラスとリングスが揉めたときに対抗戦やってたら、ドえらいことになってたんじゃないかと思いますね（笑）。

船木 そうですね、たぶんみんな失神、脱臼ですよね。とくに日本人同士というのは凄く感情が入りやすいというか。外国人選手相手だったらちょっと違うんですけど日本人同士だとお互い侍なんですよね。どっかで絶対退かないっていうのがあって。だからたぶん廣田選手も途中で腕をあげちゃったんだと思うんですよ。「好きにしろ」っていう。

――自分がギブアップするよりは腕一本あげるほうがマシという。

船木 そうですね、凄いことですよ。たぶん「殺さなければ俺は死なないよ」ってことだと思うんです。問題は、これをどうこれから収拾していくかってことだと思うんですよね。廣田選手がもう一回やりたいって言うのであれば、そのときに同じ過ちを犯しちゃいけないと思うんで、レフェリーとセコンドをしっかりとやって、どうにか決着をつけるような方法でやってほしいですね。人生は長いですから。ここでお互いがお互いを恨むような、そういう状況で終わらせるのはよくないと思います。日常生活の中で仕返しするようなところまで発展しないことを願います。あまりにもエスカレートしちゃうとリング外で忘れた頃にグサッとか……。


ふなき・まさかつ■1969年3月13日、青森県出身。15歳で新日本プロレスに入門するが、デビュー直後にUWFへ。UWF解散後は藤原組へ。完全実力主義を標榜するパンクラスを93年に旗揚げしてプロレス界に衝撃を与える。00年に引退するが、07年の『Dynamite!!』桜庭和志戦で復帰。09年には武藤敬司率いる全日本プロレスに参戦。10年1月3日には武藤と組んで鈴木みのる&太陽ケア組から世界タッグ王座を奪取した。182ccm、84kg。

――そういう気持ちになっちゃう可能性もあるわけですか。

船木 可能性はあると思いますよ。プライドの高い人であれば。それで孤独だったらやりかねないです。

――前田（日明）さんも一時期、危なかったですもんね。

船木 前田さんと安生（洋二）さんの一件も凄く大変でしたから。

――あれはリング上で勝負ができなくて、感情の行き場所がなかったからああいうことになったわけですもんね。

船木 そういうのは自分たちの時代にもありましたから。バックステージだとホントに何が起こるかわからないんです。その人本人がよくても周りが黙ってないとか、そういうのもあるんです。そういうことが日本にはありますね。日本人の独特なものだと思いますけど。今回の『Dynamite!!』は凄くいいきっかけでしょう。このままなんでもありを続けるのか、スポーツとしてしっかりまとめるのかっていう問題提起のような気がしますね。だから、どっちにしろDREAMと『戦極』で話し合いをして、あとはTBSも含めて方向性をしっかりと定める時期のような気がします。

――ちょっと話は逸れるんですが、船木さんはご自分のブログを『マッドネス』ってタイトルにしてましたけど、あれはなぜですか？

船木 ……してました？

――してますよ（笑）。

船木 ああ、あの頃ですね、そういう欲求不満があったってことだと思うんです。

――なるほど（笑）。欲求不満で自分の中を狂気が支配してたわけですか。


船木 そういうことだと思います（笑）。みんなそれはあると思います。ちょっと方向を間違うと、それこそ犯罪者になってしまうと思うんです。とくに格闘家はそういうタイプが多いと思います。人生をしっかり生きなければいけないんで、自分でそれをコントロールしていかないと難しいと思います。やってることが人殺しの手段ですから。それを精神と結びつけるっていうのは一番難しいんですよ。自分は一度引退したときにそれを凄く強く思いましたね。凄く嫌なこととかあっても、それを片づけられる手法を持ってるのに、使ってしまうと犯罪になってしまう。いままで十何年間も何をやってきたんだっていう。それがどれだけ苦しいことかって思いましたね、一般の世界で。だから単純にストレスを溜めて溜めてリングで爆発させるのは簡単なことなんですよ。

――腰に刀を差してるのに、どんなことがあっても抜いちゃいけない、と。

船木 そうです。だから凄く……矛盾してるんですけどね。精神修行とか言って闘ってるのは（笑）。使えるのにあえて使わない。最終的に忍耐だと思います。

――狂気を抑えるには、忍耐しかない、と。

【10年1月8日／都内・二子玉川にて収録】



戦慄の腕折り＆中指挑発！ 大晦日の惨劇 〝被害者〟の証言

「べつに青木選手は気にしなくてもいいと思いますよ」

——廣田さん、お疲れさまです！

廣田 ああ、どうも。お疲れさまです。

今年の夏以降になる」ってことでしたけど。

翼をもがれた戦極ライト級王者

廣田瑞人

狂気の大晦日を演じた“犯人”青木真也。川尻達也をして「悪魔の子」と言わしめたその行為は、業界内外でいまだに波紋を広げている。その青木の“餌食”となった傷負いの戦極ライト級王者はいま何を思っているのだろうか？ その入院先を訪ねた——。

聞き手&撮影／鈴木佑　試合写真／乾晋也



——廣田さん、お疲れさまです！

廣田 ああ、どうも。お疲れさまです。

——……（廣田をまじまじと見つめる）。

廣田 なんですか？ そんな突っ立ってないで座ってくださいよ。

——いや、なんか意外とお元気そうだなと思って。毎日、誰かしらお見舞いに来てる感じですか？

廣田 そうですね、友だちとか練習仲間とか。いろいろ差し入れを持ってきてくれるんで、そんなに退屈もしてないですし。

——マンガやらDVDやらいろいろありますね……あ！ さりげなく夏目ナナの引退記念DVDが置いてある（笑）。

廣田 ああ（笑）。それは俺が普段からお世話になってる別の病院の先生が持ってきてくれたんですよ。

——……でも、廣田さんって右利きですよね？

廣田 ハハハ。 まぁ、こういう状態のときはサウスポースタイルで。

——なるほど（笑）。ちなみに長崎のご家族は？

廣田 いや、来てないですよ。大晦日はテレビ観戦だったんで。

——今回もお父さんからアドバイスはもらったんですか？

廣田 「大丈夫だろうな？ わかってんだろうな？」みたいなことは言われましたね。でも、試合後はお互いに連絡とってないです。たぶん、俺が負けたんで親父は怒ってるんじゃないですかね。

——ケガの状態ですけど、なんでも6日に右上腕骨骨折の手術をしたとか？

廣田 はい。一応、成功だったみたいで。

——後遺症の心配は？

廣田 普通に「大丈夫だ」みたいな感じで言われてるんですけどね。けっこう最先端の技術を使った手術だったらしく、筋肉を切らないようにして骨をくっつけたって聞きました。 4時間くらいかかったんですけど。

——大がかりだったんですね。 術後の経過は問題なく？

廣田 そうですね。 まだちょっと痛みで寝るときのポジションがなかなか決まらないというか、夜に何度か起きちゃうことはありますけど。

——楽な体勢がとりづらい、と。

廣田 まぁ、でも飯とかも普通に外に連れてってもらったりしてるんで、とくに不自由は感じてないですね。

——『SRC』側の発表だと、「2月頃からジョギング程度、5月頃から軽めのスパーリングができる見込みで、復帰は早くても今年の夏以降になる」ってことでしたけど。

廣田 そうですね。まぁ、無理してもしょうがないんで、医者の言うことを聞いて夏の復帰を目指そうと思ってます。

——ちょっと長いブランクになりますね。

廣田 でも、前に拳を骨折したときに1年くらい休んでたことがあったんですよ。そのときは治ってないのに練習して、さらに復帰が延びちゃったんで、今回はおとなしくしてようかなって。

——では、そんなに焦りはない、と？

廣田 そうですね。まぁ、その頃に比べると歳も歳なんですけど。でも、ケガへのショックはそんな大きくないっていうか、今回は納得して折られた部分もあるので。

——へんな話、ああやって腕を折られたことで格闘技に対して恐怖心みたいなものは？

廣田 いやぁ、それはないですよ。俺の心は全然折れてないですから（ニヤリ）。

——それを聞いて安心しました（笑）。では、大晦日のことを振り返りたいんですが、いまの率直な心境というと？

廣田 いや、もう悔しいの一言ですよ。そうとしか言いようがないです。

——戦前にけっこう会見で青木さんと挑発し合ってましたけど、あれは盛り上げるという意識で？

廣田 それはありましたよ。プラス、本当にイライラしてた部分もあったし。その両方でしたね。

——DREAM側でやりたい相手として、青木選手をスカすように（エディ・）アルバレスの名前を出してましたよね。

廣田 あれは単純に青木選手とやるよりも、そのほうがおもしろい試合になると思ったんで。まぁ、でも今回の試合もおもし

ろかったんじゃないですか?(笑)。

——自虐的ですね(笑)。今回は当初予定されていた『SRC』から『Dynamite!!』という舞台に変更したわけですけど、何か違和感や影響はありました?

廣田 いや、気持ちはすぐに切り替えられましたよ。ただ、もう少し早くカードが決まってればなとは思いますけど。でも、個人的には横田さんとのタイトルマッチでも対抗戦でもどっちでもよかったって感じですね。まぁ、まさか「合同開催はねぇだろうな」って思ってたんで、そこはビックリしましたけど。

——舞台裏ではいろいろとあったみたいで。青木さんはそのゴタゴタで川尻さんとのタイトルマッチが流れたことが、今回のモチベーションにつながったそうです。

廣田 へー。俺はそういうのはなかったですね。大晦日に大きな試合をやるっていう心づもりはありましたけど。

——対抗戦は廣田さんの出番までで4勝4敗でしたけど、決着をつけるという意味で気合は入りましたか?

廣田 いや、もう4勝4敗とか関係なく、もともと大将戦で俺が負けたらSRC自体が負けだっていう気持ちだったんで。

——そのくらいの覚悟だった、と。実際に青木選手と対峙してどうでした?

廣田 思ったより力は感じなかったんですけど、うまさの部分でやられたって感じですね。コーナーに押し込まれてからは何もできなかったし。タックルの速さでいえば、北岡さんのほうが全然速かったんですけど、青木選手はなんだろ……とにかくうまい。

——いままでにないタイプ?

廣田 そうですね、なかなかいない体型だし。もう腕を取られた時点で負けでした





全国ネットで放送された問題のシーン。試合後の行為に対して視聴者はもちろん、同業者である格闘家のブログでも青木を非難する声が上がった。

あれを見て「絶対リベンジしてやる」って気持ちになりましたよ

よ。クラッチが強くて外れなかったし。俺、いままで一本負けしたことなかったんで、あんなにアッサリ負けるとは考えてなかったですね。

——結末は衝撃的だったんですけど、タップをするつもりはなかったんですか?

廣田 そうですね。もちろんいつもそうなんですけど、今回は特別そういう意識が強かったかもしれないです。

——ストライカーにとって命綱である腕を極められたということで、選手生命を考えたりは?

廣田 あぁ、そういうのはまったくなかったです。とにかくタップだけはしない、それだけで。まぁ、折れたことに関しては誰が悪いとかいう問題でもないと思いますよ。俺だってパンチを打つときは、相手を失神させるつもりでやってるわけだし。

——「タオルを投げなかったセコンドが悪い」っていう意見もありますが?

廣田 いや、みんな俺の気持ちを考えてくれた結果なんで。帯谷さんたちは謝ってきましたけど、俺は「全然いいです、気にしないでください」みたいな感じで。

——では、ストップしなかったレフェリーに対して思うところは?

廣田 べつにあれはあれでいいんじゃないですかね。ただ、俺には試合後に「タップしなきゃダメだよ!」って怒ってましたけど(笑)。こっちとしては「そう言われても」って感じですね。

——じつは試合前日に相当体調が悪かったらしいですね?

廣田 あ、それは書かないでほしいです。あんまり言いたくないですね。負けは負け、ただそれだけで。

——対抗戦は結果的に5勝4敗で接戦だったわけですが、ライト級だけで見るとトップ二人が負けたかたちになりました。

廣田 それはやっぱり申し訳ないっていうのがありますね。俺はライト級の王者なわけだし、これから防衛戦の期限とかそういう問題も出てくるだろうし、返上するかどうかも含めて考えたいと思ってます。

——さて、大きな物議を醸している試合後の青木さんの挑発行為なんですけど、あれは何をされてるか認識してました?

廣田 いや、もう意識もハッキリしてましたから。イラっとはきましたけど、こっちは負けてるし何もできないわけだから、「仕方ねえか」って感じでしたね。

——あのポーズが地上波で流れたこともあって、青木さんにいろんな批判が集中してることについてはどう思います?

廣田 俺は当事者としてただ悔しいだけなんで……どうなんですかね? 俺にはよくわからないですね。

——わからない?

廣田 まぁ、見る人が見たら気分悪かったってことでしょうけど、俺個人でいえば試合に負けてるから何をされようがしょうがないっていうか。それと同時にあれを見て「絶対リベンジしてやる」って気持ちにもなったし。

——試合後、青木さんはあの行為に対して謝罪をしてますけど。

廣田 うーん、どうなんですかねぇ……
まぁ、興奮してたんだろうし、やっちまっ

廣田 う〜ん、どうなんすかねぇ……。俺はなんとも言えないですね。気持ち的に

——最後こそ残念でしたけど、去年は相当濃い一年だったんじゃないですか?

廣田 まぁ、もっと声をかけられるためにも大晦日は獲りたかったんですけどね。

し。もう腕を取られた時点で負けでした

たらしいですね？

謝罪をしてますけど。



廣田　うーん、どうなんですかねぇ……。まぁ、興奮してたんだろうし、やっちまったもんはしょうがないっていうか（笑）。

――しょうがない（笑）。

廣田　さっき言ったように、俺はあれを見てよけいに「もう一回やろう」って火がつきましたから。べつになんともって言っちゃアレですけど、個人的には「気にすることねえよ」って感じなんですけどね。

――当の本人よりも周りが騒いでるというか。

廣田　そうですね。

――あと青木さんが言ってたのが、廣田さんが「グラップラーはつまらない」という発言をしてたことから、「そのつまらない寝技でわからしてやる」というのがあったみたいで。

廣田　なるほどね……でも、やっぱりお客さん目線で考えて、「打撃と寝技、どっちがおもしろい？」ってなったら、打撃のほうがおもしろく感じる人のほうが断然多いとは思いますけどね。だからこそ勝たなきゃいけなかったんですけど。

――そのへん、廣田さんはストライカーとしてのこだわりが相当強いですよね。

廣田　たとえば、いまは前よりも総合の人気が下がってますけど、全盛期のときって五味さんとかシウバとかミルコとか、ストライカーの時代だったと思うんですよね。そこにお客さんたちは熱狂してたっていうか。だから、いま人気が下がってる原因の一つは、青木選手や北岡選手みたいなグラップラーが目立ってきたからだっていうのが俺の中にはあるんですよ。まぁ、負けといてなんですけど。

――それと、『SRC』側が青木さんとその関係者に対して、処罰を求める意見書を出したことについても聞きたいんですが。

廣田　う〜ん、どうなんすかねぇ……。俺はなんとも言えないですね。気持ち的にはそんな大げさにしなくてもいいのにっていうのは正直ありますけど。まぁ、でもそれだけあの印象が悪かったっていうことなんでしょうね。俺もけっこう友だちから「俺が代わりにやりてえ」っていう連絡はもらったんで（笑）。観てた人はそれだけ気分よくなかったんだろうなって。

――「全国ネット放送という総合格闘技の地位を向上させる最高のチャンス」を台なしにしたのも、処罰の理由らしいです。

廣田　俺はその最高のチャンスでスカっと勝って、キャーキャー言われるようなスターになる計画だったんですけどね。見事に散りましたね、モテる計画が（笑）。



ひろた・みずと■1981年5月5日、長崎県出身。05年2月プロデビュー。同年6月に修斗ウェルター級新人王となる。08年4月、ケージフォースライト級王座を獲得。08年6月より『戦極』に参戦、同年8月には戦極ライト級王座を獲得した。171cm、70kg。

廣田瑞人

――最後こそ残念でしたけど、去年は相当濃い一年だったんじゃないですか？

廣田　いやぁ、もう激動すぎる一年でしたね……（しみじみと）。

――そもそも5月に修斗でやった石田光洋戦が対抗戦の始まりというか。

廣田　あぁ、言われてみるとそうですね。まさかあのときは全面対抗戦になるとは思ってなかったですけど。

――あのときの廣田さんは負けたら引退するぐらいの意気込みだったんですよね。

廣田　いや、その前の2月にやったケージフォースのタイトルマッチのときからそのくらいの気持ちだったんですよ。やっぱり『戦極』のライト級GPで結果を出せなくて、このまま格闘技を続けるべきかどうかって悩んでた時期なんで。

――でも見事に吹っ切って、8月には北岡さんとのタイトルマッチでベルトを獲得して。

廣田　そう考えると去年は全部が大きい試合でしたね。周りの環境や反応も変わりましたし……まぁ、それでも街歩いてて声かけてくるのは野郎が多いんですけど（笑）。あ、そうそう、『kamipro』に抗議があるんですよ！

――え、な、なんでしょう？

廣田　なんか光岡選手のインタビューで、俺が光岡選手の女友だちをナンパしたって書いてあったじゃないですか？

――あぁ、戦極ライト級王者になった直後ですね。

廣田　あれ、俺が声かけたんじゃないですよ。細かくは覚えてないですけど、たしかこっちが声をかけられたんですよ。そこは訂正してほしいです（笑）。

――失礼しました、謹んで訂正させていただきます（笑）。

廣田　まぁ、もっと声をかけられるためにも大晦日は獲りたかったんですけどね。とりあえずは仕切り直しです。

――その仕切り直しの舞台となる『SRC』ですが、國保さんの取締役解任に伴なって、吉田秀彦さんをはじめとするJ－ROCK勢が撤退するっていう流れになってるんですよね、大晦日のドタバタを引き継ぐ感じというか。『SRC』の顔役の一人として、廣田さんはこういう状況をどう思いますか？

廣田　う〜ん（熟考）。個人的なことを言えば、俺は『戦極』に育ててもらった部分が大きいので、これからも盛り上げるために頑張んなきゃいけないなとは思いますけどね。

――なるほど。

廣田　でも俺がいま一番やりたい相手は青木選手ですから、それが実現するならとくにリングにはこだわらないって部分もありますよ。でも、『SRC』がそうやって大晦日の試合について抗議してくれることには恩義も感じますし、それを返していかないとっていう気持ちもあるし。まぁ、なんにしろまずは復帰することが目標なんで。

――そのあとのビジョンは考えてます？

廣田　青木選手とやりたいけどいきなりは無理だろうから、復帰して一戦一戦こなして、また大晦日みたいな大きい舞台で顔を合わせられたらベストだなとは思いますね。

――今年はリベンジに向けた年になる、と。

廣田　俺、このままじゃ終わらないですよ。そんなにヤワにできてないんで（ニヤリ）。

【10年1月9日／都内・廣田の入院先の病室にて収録】

まったくもう、何がなんだかわからな
、状況である。"青木問題"が、少々やや

するプロ野球コミッショナーの声明を巨
人軍の球団社長が発表するようなもの

う～ん……。
結局、この意見書は青木問題をさらに

騒動は少なくなるから、関係者や「試合
だけを純粋に競技として楽しみたい」と

青木真也がもし日本からいなくなったら



まったくもう、何がなんだかわからない状況である。〝青木問題〟が、妙にややこしいことになっているのだ。

1月7日、SRC(『戦極』)の会見において、試合後の青木の行動に対する意見書が読み上げられた。内容は、青木と「彼をその影響下におき、煽り立て、結果としてかかる振る舞いに至らしめたと推測される関係者」に対して「然るべき処罰を強く求めます」というもの。

確かに、SRCサイドが、所属選手である廣田に対して中指を突き立てた青木に怒りを感じるのは当然のことだ。スポーツマンシップに反した行為であるのは間違いない。だから、笹原EPによる「厳重注意」以上の処分を求めたってかまわないと思う。

だが、ややこしいのは、この意見書が日本格闘競技連盟の福田富昭会長名義になっていることだ。SRCはこの連盟の傘下団体なのだが、FEGやDREAMは加盟していない。ということは、この意見書は実効性が薄いものなのだ。ましてこの意見書、FEGやDREAMには送付されないという。

日本格闘競技連盟は、日本の格闘技界全体の発展を目指しているんだろうから、傘下団体以外に〝意見〟を表明しても間違いではない。「そんな筋合いじゃない」とは僕も言わない。ただ、この意見書が発表されたのがSRCの会見においてだったのには疑問がある。

SRCは、〝青木問題〟が発生した対抗戦の一方の当事者なのである。そのSRCの会見で意見書が発表されたら、第三者的な説得力が著しく欠けてしまう。これは『kamipro』携帯サイトの連載コラムでも書いたことだが、高野連に対するプロ野球コミッショナーの声明を巨人軍の球団社長が発表するようなものだ。〝利害〟とか〝裏事情〟を勘ぐられてしまいがちだろう。つまり、こういうかたちで意見書が発表されたことは、SRCや日本格闘競技連盟にとっても〝損〟じゃないかと思うのである。もったいない、ホントに。

意見書の内容も「形式的に謝罪の弁は述べておりますが、青木選手から反省の


ズバリ、出場停止処分の決着ほどむなしいものはない。リング上で禊げ！

気持ちを感じ取ることはできません」など妙に主観的だったりする。

また、「彼をその影響下におき、煽り立て、結果としてかかる振る舞いに至らしめたと推測される関係者」が誰なのかは、ワールドビクトリーロードの稲村角雄営業統括本部長によれば「いるのかいないのかは、これはもう我々はわかりませんので。ここは関係者のほうに判断をしていただきたく思っております」とのこと。

日本における“対世界”という価値観は 青木が一人で背負ってきた

う〜ん……。

結局、この意見書は青木問題をさらにややこしくしてしまったわけである。一方でDREAMも意見書に対しての見解や対応を発表していないので、問題は宙吊りになった状態だ。ファンは完全に置き去り。なんだか偉い人たちがゴチャゴチャやってんなぁという印象だけが残ってしまう。

そういう状況なので勝手に想像するしかないんだが、この青木問題はどういうかたちで着地するんだろうか。意見書を見てみると、こういう一文がある。

「当連盟傘下団体の主催する試合において、同じ陣営の選手が今回の青木選手と同様の行為を取るならば、選手資格の取り消しをも含む厳罰な処分が下されることは言うまでもありません」

ということは、日本格闘競技連盟が求める「然るべき処罰」とは、究極的には青木の選手資格取り消しということになるんだろう。

ただ、選手資格取り消しといっても、この世界にはジャンルを統括するコミッションがない。日本格闘競技連盟参加団体とDREAMが青木の選手資格を取り消したとしても、アメリカでなら試合ができるということになる。つまり〝日本からの追放〟であり、それは同時に〝海外流出〟だ。

そうなると、日本の格闘技界はかなり静かなものになるだろう。なにしろ青木は、本誌の読者投票で2年連続MVPに選出され、なおかつ昨年はワーストMVPにもなっているような選手で、とにかく話題性にはこと欠かないわけだ。

で、その常に話題性を生み出す選手が日本からいなくなる。物議を醸すような騒動は少なくなるから、関係者や「試合だけを純粋に競技として楽しみたい」というファンは安心できるかもしれない。しかし世界トップクラスの闘いを日本で観る機会は激減することになる。ここ2年ほど、日本における〝対世界〟という価値観は青木がほとんど一人で背負ってきたわけだから。

逆にアメリカは青木の登場で大盛り上がりだろう。とくにUFCに参戦なんかした日にゃぁ大騒ぎだ。青木vsグレイ・メイナード、青木vsケンフロことケニー・フロリアン、そして究極は青木vsBJペン！ いや、その前にUFCでの日本人対決が実現するかもしれない。青木vs宇野薫のリマッチだったり、さらには……青木vs五味隆典inオクタゴン!!

こうなると、日本のファンもいままで以上にUFCに注目することになるだろう。野茂やイチローのメジャーリーグ入りと同じ状況だ。〝世界への窓〟が、より開けるわけである。

あるいはサッカーファンのように、JリーグはJリーグで楽しみ、日本代表を応援し、かつスカパー！でチャンピオンズリーグに熱中するみたいなスタイルが格闘技ファンにも定着する感じか。

というわけで、今回の問題によって、青木vs五味がUFCで実現する可能性も出てきたってことである。日本のファンの格闘技の楽しみ方が変わってくるということでもある。

いや、もちろんこれはなんの裏づけもない、単なる妄想である。ただ厄介なのは、この妄想が現実になったらなったで楽しそうだってことだ。ややこしいな、まったく。

（橋本宗洋）

——山田さん！　今日はですね……
山田　また事件だからってオレんとこに

「こんないい言葉が書いてあるのに、あん
なのが映ったら日本の格闘技にはよくな

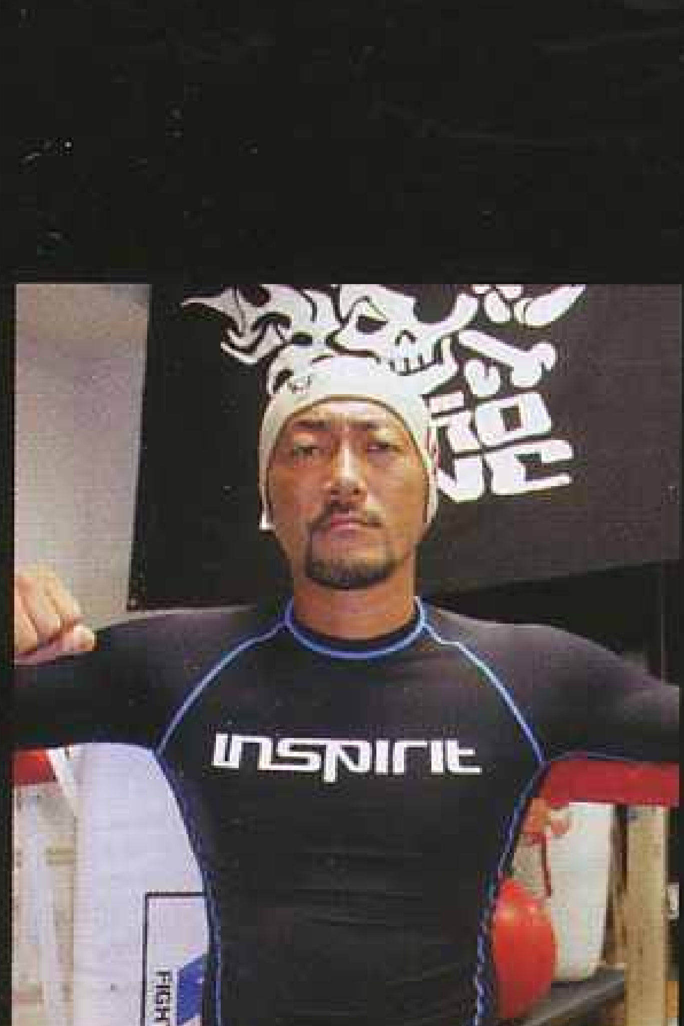
言わないじゃないですか。それで青木く
んもいろんな思いがあって、チャンピオン

じてるわけでもない。そこで上のほう同
士のグチャグチャしたものを全部背負っ



マット界の名伯楽が“狂気の大晦日”を激語り！

あれは青木くん一人のせいなの？ じゃあ誰か“MMAの品格”を教えてるの？



チーム黒船船長 山田武士

川尻達也や高谷裕之などのトレーナーを務めている山田氏。
至近距離からMMAを見続けている業界屈指の司令塔は、
あの日の青木真也の一部始終をどのように考えているのか？
MMAファイターのよき兄貴分が狂気の大晦日を振り返る！

聞き手／高崎計三　構成／鈴木佑　試合写真／乾晋也

凄いファイターがリングを下りたら礼儀正しい人間とはかぎらない

——山田さん！　今日はですね……。

山田　また事件だからってオレんとこに来たの!?

——そのとおりでございます（笑）。何かと大騒ぎになってる、大晦日の青木選手の一件なんですけど。

山田　そんな騒ぎになってるの？

——そうですね、今回もとくにネットを中心に。

山田　そうなんだ。オレ、ネットは見ないからわかんないけどさ。それで、またオレにしゃべらせようってことでしょ？（笑）

——率直なところを存分にお願いします（笑）。それに、セコンド、トレーナーという立場で感じることもうかがおうと思いまして。あの試合のときは、山田さん自身はどういう状況でした？

山田　控室でみんなで観てたの。モニターでね。田村（彰敏）、岡見（勇信）、高谷（裕之）のセコンド、もちろん川尻くん、マッハさんとか、みんないたね。高谷本人はもう病院に行っちゃってたからいなかったけど。

——ああ、いち早くブログで痛烈批判していた田村選手も一緒だったんですね。

山田　いたいた。すっげぇ怒ってたね。気持ち悪い、こんな気分悪くなったことはないって言って。

——その場にいた人はみんな怒ってた感じですか？

山田　岡見もね、当日のパンフの最初のページに「勝者の前に、勇者でありたい」って書いてあったでしょ。でっかく一面に。「こんないい言葉が書いてあるのに、あんなのが映ったら日本の格闘技にはよくない」って怒ってたね。「青木くんもこのままじゃスターにはなれないでしょう」って。

——なるほど。その中で、山田さん自身はどう思ったんですか？

山田　やっぱ興奮してただろうし、いろんないきさつがあってああいう行為になっちゃったわけでしょう？　そりゃ、やったことはよくないですよ。素晴らしいことだなんてまったく思わないけど、「じゃあ全部青木くんのせいなの？」っていう。どれだけの気持ちで廣田戦をやらなくちゃいけなかったのか、川尻もどれだけの気持ちで横田戦を闘わなくちゃいけなかったのか……っていうのは、世間的には誰も言わないじゃないですか。それで青木くんもいろんな思いがあって、チャンピオン対決、大将戦でしょ？

——まして対抗戦も4勝4敗のイーブンで、まさに決着戦でしたからね。

山田　だからDREAMを背負ってたわけだよね。ま、背負っててアレやったからまた批判が出るんだろうけど、そういう気持ちでリングに上がって、躊躇なく折るわけじゃないですか。凄いテンションだったと思うんだよ。

——そうですよね。

山田　人の腕を折るなんてことは普通の気持ちじゃできないでしょ、たぶん。それをバスッとやって、その直後にノーサイドで、「よかったよかった」っていうふうには、できないんじゃない？　オレは折ったことないからわからないけど。

——その気持ちがわかる人は少ないでしょうからね（笑）。

山田　それでみんなに止められて、モニターには映ってたけど、1～2分後には廣田くんのセコンドに挨拶に行ってるじゃないですか。たぶん、あそこで素に戻ったんじゃないですかね。でさあ、極論で言うと、相手をKOしてコーナーに上るじゃないですか。あれもよくないってことでしょ？　相手を侮辱してるわけなんだけど、それがルールにあるのかってことじゃないですか。誰が、MMAにおける品格とかを教えてるのかっていう。

——……。

山田　誰も教えてないわけでしょ？　リアルエンターテインメントだって教えてないでしょ？　横綱のように品格を重んじてるわけでもない。そこで上のほう同士のグチャグチャしたものを全部背負った状態でアレをやったら、今度は叩かれて……もちろんやったことはよくないけど、あれを全部青木くんに背負わせちゃっていいのかってことだよね。

——なるほど。

山田　田村くんなんかはいちファイターだから、気に入らないのはよくわかるんだけどね。日本の悪いところで、青木くん一人が悪いってことにしてフタをするっていうのはよくないんじゃないかなあ。そこに真実はないような気がするんだよね。

——真実、ですか。

山田　だってさ、折った2秒後に、「廣田くん、ありがとう！」ってできないでしょ？

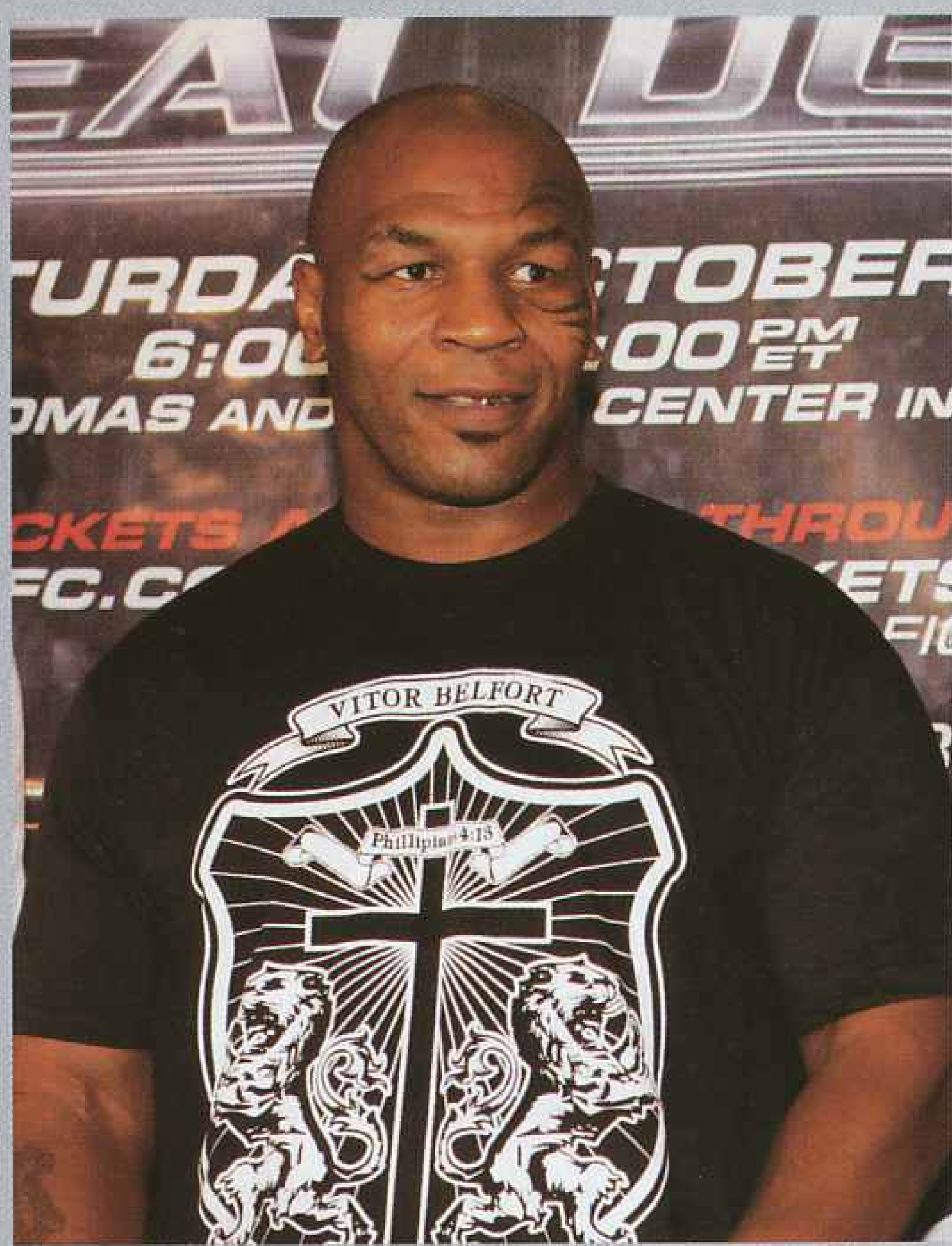
——ま、それができる人は折ってないでしょうからね。

山田　よくボクサーにも言うんだけど、信じられないようなKO勝ちをする選手とか、度肝を抜くようなカウンターを打つ人って、相手を無視してるんですよ。相手の存在を。

——意識に入ってない、と。

山田　相手がどんなパンチを打ってきても、バチーン！　とカウンターを合わせて倒しちゃうって選手が人気が出るし、試合もおもしろい。じゃあそれができる人間が、みんなリングを下りたら他人に気を使える礼儀正しい人間かっていうと、他人に気を使わない人が多いんですよ。全員じゃないけどね。だけど、それを直させちゃったら今度はリングの中でもあの勝ち方ができなくなっちゃう。ファイターってそういうものなんですよ。

——相手を倒すことを目的とする種目ですからね。



ボクシングの歴史上、パウンド・フォー・パウンドの呼び声も高いタイソン。しかし、有名な耳噛み事件をはじめ、私生活でも婦女暴行、コカイン使用所持で逮捕されるなど、スキャンダラスな話題に事欠かない。



戦前は会見でピリピリムードを漂わせながら激しい舌戦を繰り広げた川尻と横田だったが、試合が終わればノーサイド。握手、抱擁を交わしてお互いの健闘をたたえ合った。大晦日決戦はDREAMライト級の二枚看板、青木と川尻のキャラの違いをよく表わした大会でもあったのだ。

たぶん、オレのところの選手はああいうことはやらないんですよ

山田　マイク・タイソンなんかいい例だよ。

――ああ、誰でもわかるいい例ですね（笑）。

山田　耳かじるのは反則だけどさ。あれだけメチャクチャな人間だったからこそ、あんなに凄いKOを連発できてたってこともあるわけじゃない。もちろん、理屈はわかるわけ。リングの外では紳士であれとかよく言うけど、そこはつながってるからね。普通の人はリングで折らないだろうし。折れる人ってのは普通じゃないからね。

――いまの騒がれ方は、ゴッチャになってるところがあるんですよ。折ったことと、中指のことが。

山田　折ったことはいいでしょう！

――でも批判の中には、青木選手の試合後の「確実に折りにいった」っていうコメントを問題視してる意見も少なからずあって。

山田　いや、それは問題ないでしょう！　だって、あれが打撃だったとして、ボクシングでもKOされた選手が試合後に亡くなったりしてるじゃないですか。あれは殺すつもりではないにしても、倒すつもりで殴ってるわけだし、「できれば判定で！」と思って闘ってるわけじゃないですからね。

――そのとおりだと思います。

山田　やるときは、絶対倒そうとか、効かしてやろうと思ってやるわけじゃないですか。そこはちょっと不思議ですけどね。それだったら、藤田vsアリスターのほうがよっぽどヤバイよ。

――あれだって、脳細胞がもの凄い勢いで破壊されてるわけですしね。

山田　そうそう。いや、でも青木くんは凄いですよ。「折るよ」って言ってリングに上がって、「ほら折ってきた」ってやれるんだから（笑）。ホントに世界のトップですよ。神がかってる。

――よくないのは、中指の部分だけってことですよね。

山田　うん。よくないのは確かだけど、試合が決まるまでのドタバタ劇も知ってるからね、オレは。会見のときだって普通のテンションじゃなかったし。DREAM愛も半端じゃないし、廣田くんは北岡くんにも勝ってるわけだしね。そういう中で折るんだから、タガが外れちゃってるわけじゃない？

――青木選手は試合後の記憶がないらしいですからね。

山田　でしょ？　じゃあ、そうさせないためには折る前にレフェリーが止めるなり、セコンドがタオル投げるなり……いやあ、難しいなあ。

――難しいというのは？

山田　はたしてオレがそういう状態で興奮して、誰かの手をへし折ったときに、正座して「ありがとうございました！」って言えるかっていうと……難しいと思うんだよ。

――それはそれで怖いと思いますね（笑）。

山田　ここで難しいと思っちゃうから、オレは指導者としてどうかと思われるのかもしれないけどね（笑）。

――じゃあ、山田さんがセコンドについている目の前で教え子がああいうことをしたら、山田さんはどういう行動に出ますか？

山田　これはねえ……たぶんね、オレのところの選手はやらないんですよ。なんでかっていうと、普段オレのほうがキ○○イじみてるから、みんないい子になっちゃうんですよ、周りが。だから全然ないんだよね。

――そういうことですか（笑）。

山田　もっと悪くなってくれてもいいのにって思うぐらい、いい子ばっかりなんだよ。だから、そう聞かれても想像もできないんだよね。

――なるほどぉ（笑）。

山田　オレのほうが飛んじゃってるから、だから先に「オレが折っちゃったら……」ってほうに考えがいっちゃうんだよね。それじゃあダメだとは思うんだけどね。じゃあ、青木くんにはこれから誰が指導するんですかね？　笹原さんなのか中井（祐樹）さんなのか、わかんないけど。

――まあ一応、試合後には笹原さんが「著しくスポーツマンシップに欠ける」ということで厳重注意をしたようですが。

山田　じゃあ、それはルールブックに載ってるの？　スポーツマンシップに欠ける行為はしちゃいけないって。

――それに近いのは、DREAMルールの反則の項で「試合中、試合以外を問わず、選手による非人道的な行為」というのがありますけどね。イベントによってはルールミーティングの際に、セコンドなども相手やレフェリーに暴言なんかをしないように言うことはありますが。

山田　でも、ルールミーティングでも聞いてないなあ。少なくとも今回は。

トを問題視してる意見も少なからずあっ
いですよ。「折るよ」って言ってリングに
か?
てないなあ。少なくとも今回は。

青木くんを袋叩きにするのは結局、日本だからってことなんだよ

山田武士

——川尻選手も試合まではかなりエキサイトしてましたが、ゴングのあとは横田選手を立たせてあげてましたね。

山田 横田選手から「川尻選手、ありがとう!」って言われたみたいでね。川尻くんもそれでビックリして、「やっぱりノーサイドなんだな」って思ったらしい。で、また二人で盛り上げようよって。でも、二人とも1秒たりともテレビには映らなかったけどね、ハハハハハ(乾いた笑い)。

——そうなんですよねえ。

山田 まああの試合は、力を出しきって終わってるから、怒る気力もないんじゃないですか、そこで。ぶつかり合って両方の力を認め合ったうえでのゴングだから、「お疲れさん」になったんじゃないですかね。青木くんの試合はあんな短時間で「うわー! ボキーッ!」だから。

——逆に山田さんが、廣田選手の側のセコンドという立場だったら?

山田 たまんない気持ちになるでしょうね。はらわたが煮えくり返るだろうし。ただ、反則されて負けたわけじゃないんで。悔しいだろうし頭にくるだろうけど、どうしようもないよね。あれを罰してくださいってことにはならないと思いますね。勝負に負けたわけだから。あんなに何もできなかったら、その悔しさのほうがあるでしょうね。

——黙るしかない、と。セコンドが止めるべきだったんじゃないかという話もありますが。

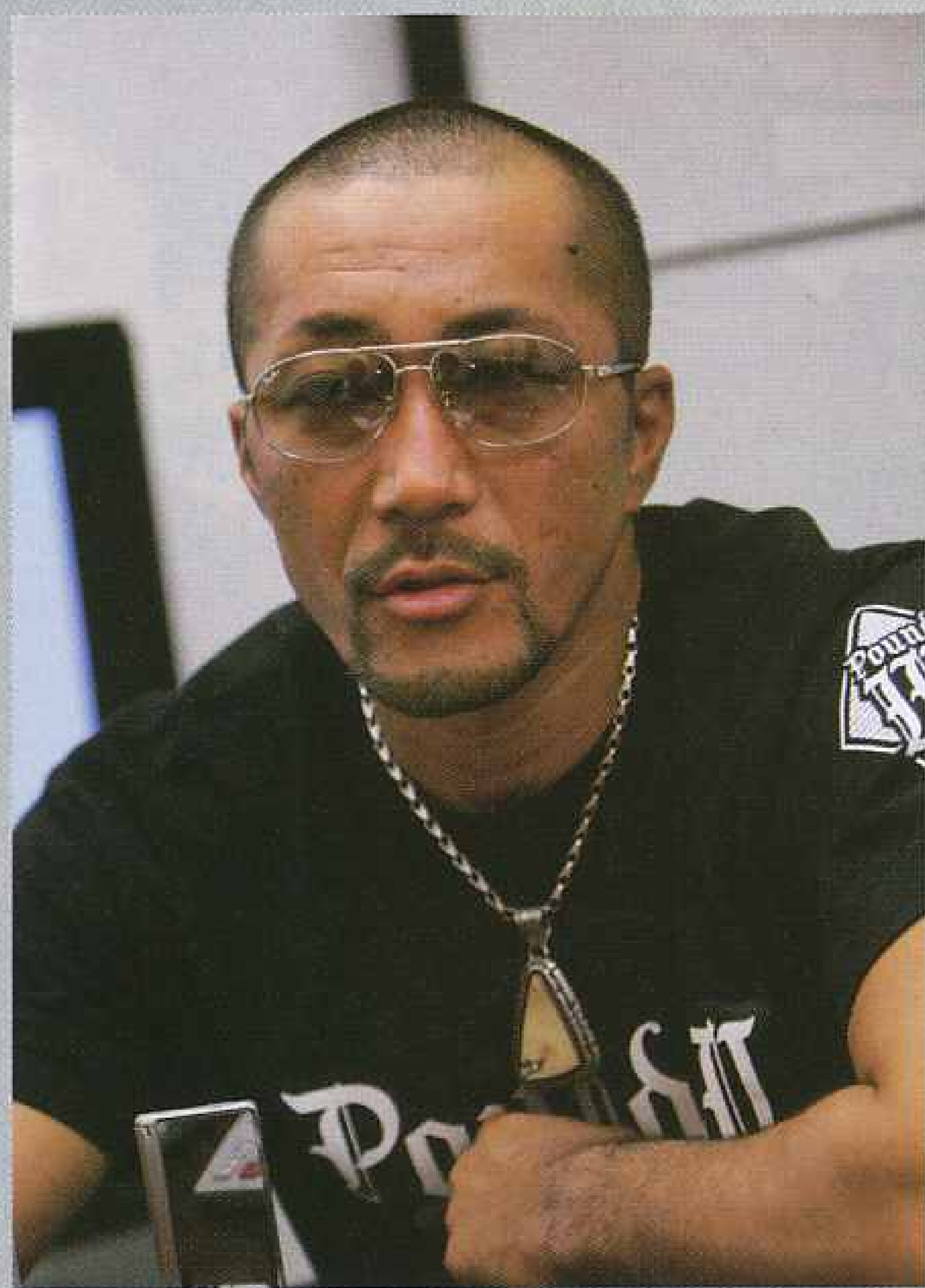
山田 あれは無理でしょう。本人がタップしなかったんだしね。スタンドでパンチをもらってるんだったら、様子を見てタオルを投げられるけど、関節技は難しいと思うよ。まあ……でもホント難しいなあ。あの態度が悪いのはわかってるんだけど、あれはもう青木くんのキャラでもあるわけじゃないですか。

——演じてる「キャラ」じゃなくて、本当にもともと持ってる「キャラ」。

山田 そうそう。川尻くんも「悪魔の子だ」って言ってましたけどね(笑)。まあトップ選手ってのはみんなどこか感覚が違ってて、みんなと同じだったらリングで突拍子もないことなんかできないし、そんな恐ろしい練習もできないからね。青木くんはその中にいても突出してるというか。

——突き抜けてる、と。

山田 まあプロだなとは思うけどね、今回は悪い意味で(笑)。



やまだ・たけし■1973年2月7日、埼玉県出身。JBスポーツ代表。同所にて川尻や高谷らMMAファイターのトレーナーを務める。今回の取材後、山田氏は体調を崩して緊急入院。右半身の痺れや記憶を断片的に失なうなど、原因不明の症状に見舞われる。なお、現在は退院。本誌はMMAファイターのよき兄貴分のいち早い全快をお祈りします!

——あと、スポーツにきれいなものばかりを求める傾向がとくに強くなっている印象があります。

山田 あるね。不景気だからですよ。

——不景気だから!

山田 みんな日々の生活がうまくいかないから、会社では見られないような爽やかな男同士の感動のドラマを見たいんですよ。熱い魂みたいなものを。でもやっぱりねえ、精神性の部分を誰が指導するんだって話ではあると思うんですよね。

——今回の件も、そこは一つの焦点ですよね。

山田 やっぱりそこはトレーナーになるんだろうとは思うんだけど、オレも自問自答してみて、できるかっていうと……ねえ。でも興行主にはそれはできないから、やっぱりトレーナーしかいないんだよな。ただ空手とか柔道と違って、MMAの場合は師匠がみんなを集めてしっかり言って聞かせるって感じじゃないじゃないですか。

——ジムにもよるでしょうけど、もっとゆるいイメージはありますね。

山田 友だち同士で集まって練習やるのが基本、みたいな感じだからねえ。そういうところも難しいんじゃないですかね。

——その部分で、中井祐樹さんを批判する向きもあるみたいですけどね。

山田 ただ中井さんは、やっぱり接しても物腰も柔らかいし、いい人じゃないですか。ボクシングのトレーナーなんかでも、もっと問題あるヤツはいっぱいいるからね。

——ほう。どんな問題ですか?

山田 それこそ、いつまで経ってもノーサイドにできないヤツなんていっぱいいるよ! 何ヵ月経ってるんだよって。

——そんなに長いあいだですか!

山田 自分じゃ何もできないし、リングに上がるわけでもないくせに、ずーっと引きずるヤツね。いっぱいいるよ!

——具体的にはどんなことを?

山田 挨拶しないとかね。会場ですれ違っても無視したり。こっちが挨拶してもね。子どもじゃないんだからさ。でもそいつだって生徒を教えてるんですよ。生徒というか選手同士はノーサイドになって挨拶してるのに、師匠は無視。

——小さいですねえ!(笑)

山田 それが現状なんですよ。青木くんのはテレビに映っちゃったから問題になったけど、舞台裏の誰も見てないところではこんなことばっかりだから。結局、日本だからなんだよな。

——そこに行き着きますか(笑)。

山田 そうだよ。スケープゴートにして袋叩きにするのだって、いかにも日本だからでしょ? じゃあ、あれを映したテレビはいいのかって話だよね。だって、それこそテレビのほうがああいうのは厳しいんじゃないの?

——そのはずなんですけどね。

山田 そのテレビが映してるんだから、OKってことじゃないの? なんでなの?

——いやあ、それは僕にもわかりません!

山田 やっぱり日本だからってことだよ。あんまり面倒くさいんだったら、アメリカで頑張ればいいんじゃない?

——ま、そのときは絶対に中指はまずいですけどね。ありがとうございました!

【09年1月6日/都内・JBスポーツにて収録】

たんだけど、いざ青木の欠席を発表

で青木がこういう凶行に走ったのか

んでなかったというのがありますも

青木vs川尻の前提で特集を組んだみ
たいですけど。

発想になるのかもしれないですし。
あと川尻達也の今年の流れからする



青木真也の発熱を考える座談会

1.8『格闘秘宝館vol.8』in 阿佐ヶ谷『ロフトA』

青木真也問題はいったいどこまで続くのか!?
今回は青木が出場する予定だった（発熱のため出演延期）
トークイベント『格闘秘宝館vol.8 新春スペシャル!』に
ジャン斉藤が緊急代打出場し、青木の“発熱”の原因を考察した。
はたして青木問題の最終地点とは!?

構成／松下ミワ

『格闘秘宝館』とは、『kamipro』でも活躍しているフリーライターの高橋ターヤン、橋本宗洋、高崎計三の三氏によって開催されている格闘技トークライブのことである。

毎回このイベントには有名格闘家や大会関係者がゲストとして招かれているが、1月8日の『格闘秘宝館vol・8』では、なんと渦中の青木真也が登場するはずだった。ところが、青木真也は〝発熱のため大事をとって〟欠席に。

7日の『SRC』会見で日本格闘競技連盟から大晦日の件に関する〝意見書〟が提出されたばかりなので、誰もがその関連性を疑わずにはいられなかった。いったい青木に何が起こったのか。急きょ、本誌編集長のジャン斉藤が同イベントに出演。青木問題を語ることになった。

斉藤　橋本さん！　今日のトークライブ、何を話せばいいすかね？

橋本　大晦日の青木問題でお願い。

斉藤　青木真也が悪い。以上！（笑）。

橋本　もっと詳しく！（怒）。今日の『格闘秘宝館』のゲストは第一部が菊野克紀&佐伯繁、第二部が郷野聡寛。だから、とくに青木問題のことは触れてないんだよ。

ターヤン　青木選手は「発熱のため」急きょイベントは欠席になってしまって、大晦日の件も面倒なことになってますし、第一部でも第二部でも触りにくいところはあるんですよね。

斉藤　ま、主催者の皆さんも立場上、「発熱なんてウソに決まってます！」とは口が裂けても言えないよね。

橋本　そこで部外者のキミの出番ですよ！（笑）。

斉藤　あの〜、いちおうボクは編集長という立場上、団体に気を使わないといけないんだけど……。

●

橋本　格闘秘宝館の第三部は、ジャン斉藤編集長に登場していただいて、『kamipro』座談会の公開収録を行ないたいと思います。

斉藤　どうもどうも。

橋本　で、いわゆる『kamipro』の青木番と言われてる斉藤編集長ですが……。

斉藤　（さえぎって）とはいっても、『ゴン格』や『格通』の青木番より全然仲良くないと思うんだけどね。あんまり格闘技に詳しくないから。

橋本　仲良くないのかよ！（笑）。でも、どうなの？　青木の病状は。

斉藤　たぶん自分の体調のほうが悪いと思うんですけどね（この日は風邪のためマスクをして登場）。

橋本　確かに悪そうだね（笑）。

斉藤　そういえば、北岡選手のブログに元気に練習している青木の写真がアップされてるんでしょ？　「どうなってるんだ！」って怒ってる人もいるみたいですけど、あれ、当日の写真だとは北岡は一言も書いてないですから。一休さんみたいな言い訳しますけど（笑）。でもまあ青木が発熱でイベントに出ないということはまずありえない。

高崎　あ、そうなの⁉　いきなり覆すねえ。

斉藤　そこは〝大人の事情〟があったんじゃないかと思いますけどね。

橋本　容易にそう想像させちゃう感じはあるよね。またさ、俺ドキドキし

青木が持ち出してる〝親のメンツ〟というのが非常にわかりづらい

たんだけど、いざ青木の欠席を発表してみたら、財務大臣が健康を理由に退陣を願い出てるっていうじゃない。俺、「体調の問題であればしょうがない」みたいなことを言ってた鳩山首相の気持ちがめちゃめちゃわかったよ（笑）。

斉藤　でも、熱が出る前というか、大晦日直後の段階では出場はOKだったんですよね？

橋本　OKだった。だってDREAMのオフィシャルサイトで発表までしちゃってるんだから。

斉藤　それも凄い話ですけどねぇ。ただ、やっぱり「いったい青木に何が起こってるんだ」と心配してる人は多いですね。正直、裏側では「青木、ガンバレ！」と応援したくなる事態になってるのは確かですよ。詳しくは知りませんが（笑）。

橋本　今日もパラエストラ東京のホームページ見たら、中井先生と若林さん名義の謝罪文が載ってて、「パラエストラ東京の指導スタッフを解任しました」ということが書いてあったし。

斉藤　はあ。それってどのくらいの意味があるんですかね？

橋本　うーん、まあ青木のお小遣いは減るよね。処分したというかたちはハッキリ残るし、パラエストラとしては所属解除に次ぐ重い処分だってことでしょう。

斉藤　なるほど。ただ、今回は対抗戦の成り立ちの話からしないと、なんで青木がこういう凶行に走ったのかのはわからないと思うんですよね。

橋本　だから大晦日から騒動が始まったように思われてるけど、俺はカード決定の段階から始まってるような気がするんだよね。青木vs川尻戦をやるはずだったのに、横ヤリが入って流された、と。そういうことへの怒りというふうにみんな理解してるんだけど、前提から言えば対抗戦に青木、川尻が出ないということがまずありえないわけで。青木は「決まってたものをねじ曲げられた」と思ってるのかもしれないけど、見方によっては「曲がったものを元に戻した」ことにもなるわけだよね。

斉藤　もう最初から異様でしたよ。というのも、まず青木が川尻戦を望んでなかったというのがありますもんね。そんな中、11月下旬に対抗戦の話が出てきたので、青木は記者会見で廣田に振ってるんですよ、「『戦極』のチャンピオンは誰だかわからないけども～」って。そしたら廣田が「ボクはアルバレスと闘いたいと思います」って返したんだけど……。

橋本　「噛み合うと思います」ってまったくそういう問題じゃないんだけどね（苦笑）。

斉藤　そこで青木は「あ、もういいや」という感じになったみたいなんですけど、そのあと川尻vs青木が12月上旬の段階で内定したんですよね。だから『kamipro』でも〝青木vs川尻〟という前提で青木と川尻に取材をしてるんですよ。でも取材した翌日に「どうもやんないみたいだよ」って話を聞きつけて、もう『kamipro』はどっちに転んでもいいような記事構成にしたんです。『ゴン格』は青木vs川尻の前提で特集を組んだみたいですけど。

橋本　へえ～。……って、俺が『ゴン格』読んでないのバレるなあ。

斉藤　俺もそう聞いただけなんだけど（笑）。という中で、大会2週間を切った段階で正式に対抗戦出場ということになった、と。

橋本　俺が疑問なのは、なんで初めから対抗戦という話にならなかったのかってことなんだよね。逆にDREAMサイドが青木vs川尻をやりたかったなら、もっと早く正式決定して発表されててもいいわけだし。

斉藤　まあ、それは各方面の事情があるんでしょう。たとえばの話ですけど、3月のストライクフォースに青木真也の出撃がほぼ内定してて、いったん大晦日で日本での物語を完結させないといけない、と。そう考えると、DREAMとしては大晦日で川尻戦をやらないといけないという発想になるのかもしれないですし。あと川尻達也の今年の流れからすると、当然タイトルマッチをやらないと気が済まないということもあるだろうし。

橋本　そうか。青木がアメリカに行くんだったらDREAMそのものも新展開になるからね。

斉藤　その一方で『戦極』側が「対抗戦に青木と川尻が出ないのはおかしい」と強く要請したという噂ですけど、まあ普通にボクが『戦極』側だったら「その二人が出ないんだったら、三崎も出さないし、石井vs吉田もどうなのかな」という話にはするだろうねえ。

橋本　そういう中で青木のイライラがあった、と。

斉藤　だから最初は川尻戦に乗り気じゃなかったけど、覚悟して決めたのに、それをさらにひっくり返されたから怒りが爆発しちゃったという。

高崎　要するに客から見たら、青木が川尻戦に乗ってないというのは見えてて、青木vs川尻戦が内定してたのは見えてなかった。さらにそのあとに青木vs川尻戦が潰されちゃったのが見えちゃったから、「乗り気じゃなかったのになんでそんなに怒ってるの？」って思う人が多いんですよ。

斉藤　で、青木の持ち出してる〝親のメンツ〟というのがまた非常にわかりづらいんですよ。

ターヤン　DREAMのことなのか、FEGのことなのか、特定の誰かなのか……。

斉藤　そこに純粋な怒りがあったとしても、プロの表現としてはわかりづらい。青木真也の物語を作るとい

kamipro AWARD 2009

MVP

1 **青木真也**
2 エメリヤーエンコ・ヒョードル
3 川尻達也
4 小見川道大
5 アリスター・オーフレイム
6 魔裟斗
7 バダ・ハリ
8 三沢光晴
9 桜庭和志
10 ミノワマン



BEST BOUT

1 青木真也vs廣田瑞人（12.31 Dynamite!!）
2 エメリヤーエンコ・ヒョードルvsブレット・ロジャース（11.7 ストライクフォース）
3 桜井“マッハ”速人vs青木真也（4.5 DREAM.8）
4 青木真也vsヨアキム・ハンセン（10.6 DREAM.11）
5 桜庭和志vsゼルグ“弁慶”ガレシック（10.25 DREAM.12）
6 五味隆典vs中蔵隆志（5.10 修斗伝承FINAL）
7 魔裟斗vs川尻達也（7.13 K-1 MAX）
8 バダ・ハリvsアリスター・オーフレイム（12.5 K-1 WORLD GP）
9 高谷裕之vs所英男（10.6 DREAM.11）
10 所英男vsエイブル・カラム（5.26 DREAM.9）

WORST MVP

1 青木真也
2 山本“KID”徳郁
3 石井慧
4 五味隆典
5 角田信朗

青木真也、『kamipro』史上初の3冠達成! 4月のマッハ戦では最高の煽り役&負けっぷりで評価を上げ、10月のタイトルマッチで悲願のライト級王者に君臨。もはや誰もが認める“世界の青木”となったのだが……2009年最終日に中指事件が勃発。とにかく1年中話題の中心にいたのがほかの誰でもなく青木真也だったということである。

青木真也の発熱を考える座談会

う意味ではDREAMもそうだし、マスコミもそうだし、青木自身もそうですけど、あの怒り方はちょっと観る側にはわかりづらいなあという気はしますよ。

橋本　青木はあの会見で本気で怒ってたわけじゃない。で、「刺しにいけと言われれば〜」というセリフを発したけど、あれは山本元気という選手のセリフのパクリというかパロディなんだよね。真剣に怒ってるのにパロディが出てくるというのがもう謎ですよ。

ターヤン　理解不能ですよねえ。

斉藤　半分乗りで半分本気というか。だから、パロディを使うことによってなんとか冷静な自分を作ろうとしてたのかもしれないですよ。でも試合は凄かったですよね。あんなに狂ってて強い人見たことないです。あそこまでは超一流で、そのあとはホントに最低というか（苦笑）。

橋本　まさに"人間白帯"だよねえ。でも、青木が悪いのは前提としても、この狂気性がもっとうまく昇華される終わり方もあったと思うんだよね。たとえば、あそこで廣田のセコンドが出てきて青木に詰め寄ったりしたら、因縁が次につながる感じが出たと思う。でも実際には、青木が一人で暴れて空回りしてた感じでね。

斉藤　そうならなかったのは誰も『戦極』を背負ってないからですよ。ドン・キホーテに向いてる選手はいるかもしれないですけど（笑）。今回の対抗戦で帰属意識が見えたのは青木と川尻だけ、あと吉田秀彦もそうですけどね。

橋本　でも吉田の場合は『SRC』じゃなくて『戦極』だもんね。

斉藤　そうなると、『戦極』を背負ってない"戦極軍"は青木にあんなふうに暴れられたら固まりますよね。「なんだ、このキ○○イは⁉」って。

橋本　それに、これは廣田をおとしめるわけではないんだけど、廣田って『戦極』のチャンピオンになってからガッツマン修斗道場を辞めたでしょ。で、新しいセコンドの人たちが、たとえばおもいっきり廣田のケツを叩いたり、「なんかあったら絶対に廣田を守ってやる」という姿勢でいたのかどうか。だって、あんなもん桜田直樹さん（ガッツマン修斗道場会長）がいたらタダじゃおかなかったよ。





対抗戦での怒りについて"親のメンツ"を持ち出した青木。一方で、青木の練習仲間である北岡悟やDREAMファイターの石田光洋が廣田に負けている"因縁"がクローズアップされなかったこともある意味異常だった。

対抗戦で帰属意識が見えたのは青木、川尻、そして吉田秀彦だけ

斉藤　そういう意味では廣田選手がオープニングでタイガーマスクを被ってきたパフォーマンスも微妙な感じはしましたけどね。結果的に「飛んで火にいる夏の虫だったのかなあ」って。

高崎　だから会見のときから「アルバレスとやりたい」とか、光岡は「ハンセンとやりたい」とか、『戦極』側が乗り込んできてる立場のはずなのに、なんかのんきだったんだよ。『戦極』を背負わないまでも、有明があれば間違いなく出れるけど、対抗戦になって出られなくなった選手もたくさんいたわけじゃないですか。その緊張感もなかったよね。

斉藤　まあ、名前は出せないけど、呼ばれてもないのに会見に来てた選手もいたらしいですけどね（笑）。

高崎　会見の当日ですら選手たちに「対抗戦をやるからね」と噛んで含めるヒマすらなかったんだろうね、あの空気から感じとると。

斉藤　じつはここに来る前、谷川さんに取材してきたんですけど、あの青木の行動は主催者の感情とかいろんな舞台裏がある中で出たことだから、ある意味では被害者だとは言ってましたけどね。

橋本　だから青木は度を越して純粋なんだろうなあ。いろんなもんを真に受けすぎたというか。

高崎　ただ、折ったことのいい悪いと好き嫌い、中指を立てたことのいい悪いと好き嫌いがごっちゃになって意見が飛び交ってるけど、それを分けて考えたときに、折ったのはまあルールの範囲内だよね。で、折った直後に、中指じゃなくて「折っちゃってごめんね。でもキミ強かったよ」というのもそれはそれで怖くないですか？

斉藤　あと試合後のコメントだけを抜き出して「最初から折ろうと思ってたんじゃないか」って批判してる人がいるけど、廣田だって弱い選手じゃないんだから確信犯でできるわけがないんですよね。もし最初から折る気があって試合に臨んでいたとしたら格闘技の天才ですよ。

橋本　だから、折ったらダメということなら、ある程度極まってるとき、修斗でいう「キャッチ」の時点で見込み一本を取るルールにしていくしかないし、それに文句を言わない選手と観客を育てないといけないよね。それに伴ってパウンドやスタンドのストップも早くしないといけないということだから、だいぶ競技のかたちは変わっていくと思うよ。

斉藤　でも、シチュエーションが4対4で大将戦でしょ？　あれで決着がつくわけだから、止めたら止めたで大問題になってたかもしれないですよ。青木がレフェリーに催促すれば良かったなんて意見もあるけど、それはファンタジーすぎるしなあ。

高崎　それに青木が「折れてるよ」と

橋本　意見広告みたいな感じなのか

だ、と。

かりませんよね。

一部の方々が満足しちゃうだけで誰

青木が出場停止処分を食らっても一部の方々が満足しちゃうだけ

高崎　それに青木が「折れてるよ」と言っても問題だっただろうし。ただそうやってレフェリーに催促するのは本当はいけないことですからね。

斉藤　要は吉田秀彦vsホイス・グレイシー戦の「落ちた、落ちた！」ですよね。

橋本　まったく落ちてなかったという。

斉藤　まあ、桜庭vsホイラーもそうだよね。シチュエーション的には10年前の"1・4事変"に匹敵する特殊な試合だから、前例とか、どうあるべきかとかというのはなかなか判断しづらいですよね。

高崎　じつは後楽園やディファレベルまで含めたら、前例自体は腐るほどあるんですよね。でも、大晦日で4万人以上入ってるところで、しかも地上波で映ったからこんなに大問題になってるんだよね。

斉藤　プラス、裏側の対抗戦の状況もあるわけですしね。

高崎　中指じゃないかもしれないけど、負けた選手に対して罵倒しちゃうような選手は、それこそ大森ゴールドジムの試合でもいるわけだから。

橋本　まあ、そういうのも含めて大騒ぎになって、昨日ですか、『SRC』が会見を開いたのは。

ターヤン　日本格闘競技連盟からは意見書が出たけど、でもFEGに対してではなくて、ただ発表しているだけというものですよね。なんかそれもおかしな話ですけど。

橋本　意見広告みたいな感じなのかなあ。

斉藤　ただ、客観的に見て厳重注意以上の処分を下すとしたらイエローカードかレッドカードになると思いますけど、でも意見書の文面を読むかぎりではそれ以上の処罰を要求しているような気がしますよね。

橋本　日本格闘競技連盟がどうしてほしいのかというのがわかりづらいよね。しかもFEG、DREAMサイドに意見書を送らず、「私たちはこう思っています」ということだけであれば、まあこのままでいいのかなとも思うけど。そうなると、逆に意見書まで出しておいてその程度のことでいいのか!?　って話にもなる。

斉藤　このリリースを『SRC』の会見で発表してるのはどうなんですかね。谷川さんは、こういう問題を判断する際にプロモーターが判断するのはよくないと言ってたんですよね。要は、政治的な向き合いのためにやったと思われるじゃないかって。だから判断を下すのであれば日本格闘競技連盟が単体で発表するべきだったんですよね。

橋本　これは余談かもしれないけど、日本格闘競技連盟って、日本ブラジリアン柔術連盟と修斗協会も加盟してるんだよ。で、青木真也はブラジリアン柔術の黒帯であり修斗の世界チャンピオンでもあるんだよね。

ターヤン　「ウチの所属選手じゃない」と言ってるけど、じつは所属選手だ、と。

斉藤　難しいなあ、それは（笑）。

高崎　だから日本格闘競技連盟がコミッション的なものを目指してるのかよくわからないんだけど、やるんであれば、求められるのは正しさなんですよ。だけど『SRC』の会見で発表しちゃったりとか、たとえば「テレビ中継があるイベントでやったことが問題である」って言ってるけど、それは競技の問題とまた全然別じゃないですか。そういうことが凄く曖昧。

橋本　あと、会見の中に出てた「煽り立てた関係者」というのも曖昧なんだよね。

斉藤　これは笹原さんなんですかね？

ターヤン　まあ、青木のコメントとしては「笹原さんが『刺しにいけ』と言ったから刺しにいきました」ということになってるから笹原さんだと思われてますけど、実際のところはわかりませんよね。

高崎　実際、それが誰なのか会見で聞かれたらしいんだよね。でも、「いるのかいないのかわかりません」っていう返答だったという（笑）。

斉藤　凄い、何それ！（笑）。

高崎　「その質問の答えは想定しとけよ！」って感じなんだよ。想定できないんだったらその文言は入れるべきではないし。

橋本　裏側がハッキリ見えるんだったらそれはそれで語りようがあるし、いい悪い、好き嫌いが言えるんだけど、へんに透けてる感じなんだよね。

斉藤　だからそれはやっぱり"親のメンツ"という言葉のわかりづらさにつきるんですよ。今回青木がいけないことをやったのは誰もが理解できるんだけど、イザコザやトラブルがあるのがダメだと思ってるのもそれはそれで間違ってて、青木が1年とか2年の出場停止処分を食らっても、一部の方々が満足しちゃうだけで誰もおもしろくないんですよ。だったら『戦極』の選手なりが青木を倒したほうが溜飲は下がりますし。だから3・7『戦極』に青木の参戦を要求したほうがおもしろいですよね。ロマンチックなことを言いますけど、やっぱりリング上で起きたことはリング上で決着をつけないと。



対抗戦ならばこの男に出てほしい！　と、本誌でもさんざん出場を煽っていた五味隆典。あと1ヵ月でも時間があれば『Dynamite!!』に参戦していたかも……!?　その後、五味がUFCと契約したことは広く知られている。

橋本　もしくは永久追放だよ。青木はアメリカに永久追放して、金網の檻に閉じ込めちまえ！（笑）。

斉藤　青木をUFCで観たい人間からすれば、永久追放を願ってるかもしれない。青木選手には怒られるかもしれないけど（笑）。

橋本　じゃあ、今回の座談会の結論としては「青木をアメリカに永久追放しろ」と（笑）。

斉藤　で、もう一つおもしろいのが『SRC』が吉田道場を使わないと宣言したことですよね。これは聞いたことないですよ、団体側が「あそこの選手は出しません」とオフィシャルで発表するのは。吉田道場と『SRC』の関係もわかりづらいですよね。

高崎　吉田道場側になんらかの不祥事とかがあって、それを理由に言うんだったらわかるけど、そういう発表はしていない中で「使わない」ということだけが出ちゃってる。

橋本　だから、そういうのを含めて今年の格闘技界はどうなるかわからないよ。

斉藤　そこで注目したいのが3・7の『SRC』両国大会ですよ！　いまザッと考えても吉田秀彦が出ない、小見川、瀧本、中村カズが出ない、そして北岡も出ないと言ってますよね。

3・7『SRC』は誰が出てどんなイベントになるのか注目

日沖選手もケガでどうなるかわからない。廣田選手もわからない。横田選手もあの敗戦だと……まあ本人は負けてないと言ってるそうなので出るかもしれないですけど（笑）。

ターヤン　そしてダン・ホーンバックルはベラトールに出るから『SRC』には出られない。キング・モーはストライクフォース。

斉藤　いったい誰が出るんだろう、どんな大会になるんだろうという話ですよ。

橋本　それだけ選手が出ないんだったら、〝東中野のボス〟にもいいチャンスが巡ってくるかもしれない（笑）。

斉藤　まあ、契約消化のために出てくる選手もいるかもしれないですけど。だから、次の『SRC』はもう新しいイベントとして見たほうがいい。國保さんもいませんし、いままでの方向性がガラリと変わる可能性が高いです。

橋本　それに全選手、試合後の態度にも注目だよ。『SRC』というか日本格闘競技連盟的に、「試合後にやっちゃいけないこと」の基準はどこからなのかっていうね（笑）。まあ、オレは勝った選手が相手を無視してガッツポーズしてる時点でちょっとムカつくんだけど。

斉藤　で、この話を『SRC』や日本格闘競技連盟がどういう展開に持っていこうとしてるのか、またDREAMがどういう展開に持っていこうとしてるのかが見えづらい状況なんですけど、でもヒントは転がってましたよね。普通に笹原さんも青木もブログをアップしてますけど、この件に関しても何も反応してないという。

橋本　ということは、これにリアクションしようということじゃなくて、何か自分たちで考えてるってことなのかな。

斉藤　『SRC』は会見で「近々（青木側から）なんらかの発表があると聞いている」と報道してますけど、谷川さんは「書面を読んでないのでわからない」と答えてますし、そこは温度差がありますよね。

橋本　そこも裏で話ができてるのかできてないのかわからないなあ。でも、青木の精神状況ってどうなの？　一連の騒動の中で今日『kamipro』携帯サイトのコラムを更新してたりするけど。

斉藤　どうなんですかねぇ。ちょっと前に話したときは「自分で映像を見直したら気味が悪かった」って言ってましたけどね（笑）。だからえらく反省してるんじゃないのかなって。

橋本　そうなんだ（笑）。でも、本人は今日のイベントにホントに出たがってたんだよ。12月のDEEPディファ大会のときに会ったんだけど、「1月8日よろしくお願いします」って言われたし、1月1日の段階でも「秘宝館、よろしくお願いします」って出る気満々だったから。だから本人はもの凄く悔しいだろうなって。逃げたと思われるのは絶対に嫌だろうしね。



3月7日に両国国技館の開催を発表した『SRC』。『戦極』のときは「○○の戦極、いざ!」という名文句や選手が登場する門など、『戦極』らしい演出があったが、両国大会ではガラッと変わる可能性も。これは、要注目である!

斉藤　まあ、発熱なんでしょうがないですよねぇ。練習はできるけど、イベントには出られない体質かもしれないし。

橋本　それじゃあしょうがないわ（笑）。

ターヤン　でも、「これで逃げた」と騒ぐ発想も凄いですけどね。だって、ここに来れば青木のファンしかいないわけじゃないですか。

斉藤　というか、ボクなら「絶対に何かあったんだ」と逆に興味を引きますね。だって「自粛」として発表したほうが丸く収まるわけじゃないすか。青木は本当に反省してるんだって思うわけでしょ。それが「なぜ発熱⁉」っていう（笑）。

橋本　だから青木はホントに熱が出たの！（笑）。

斉藤　ああ、そうか。でもホントに熱が出たとしても、自分だったら「自粛した」ことにしますけどね。それをわざわざ発熱のままストレートに発表するという。

橋本　青木というより青木をめぐる状況が急に「発熱」して、「大事をとった」ともとれるけどね（笑）。発熱ってそういう意味だったのかっていう。

斉藤　ちなみに青木といえば、これは他誌の宣伝になっちゃうかもしれないですけど、『格闘技通信』大晦日速報号の青木真也インタビューが本当に凄いんですよ。とくにレイアウトが。

橋本　レ、レイアウトが⁉

斉藤　青木の満面の笑みの写真を使ってるんですよね。これはちょっとゾッとしますよ。ますます青木真也への嫌悪感が出ますね（笑）。

高崎　へえ～。でも『格通』が大晦日直後にそういうことをやっちゃうというのはけっこうデジャブ感があるよな（苦笑）。

斉藤　2年前の「秋山の笑顔に救われた」でしたっけ？　当時と変わらない感じがしますね。だからこれは立ち読みでぜひ見ていただけたらなって。でも『kamipro』は買ってくれないと大変なんで、ぜひ買ってください！

橋本　で、そろそろ締めに入らないといけないんだけど……、『kamipro』はいったいどうなるの？

ターヤン　あ、あの「重大発表」ってなんなんですか⁉

斉藤　いや～、どうなんですかねぇ。なんか某雑誌で書いてるフリーライターの人は「『kamipro』がエンターブレインから切られた」って触れ回ってるみたいなんで、呪いをかけてやろうかなって思ってますけど（笑）。

ターヤン　でもその内容は……？

斉藤　いや～、皆さんから「いろいろ大変なの？」って聞かれて面倒だから、ああいうふうに書いちゃおうかなって。

ターヤン　次に買ってもらえるかもしれないし？（笑）。

斉藤　でも、わからないですよ。次号で何か重大な発表があるかもしれないですし。しかも1月下旬の『kamipro』はこの青木問題をまたいろいろ掘り下げてますからね。これはぜひ買っていただければと思いますよ！

橋本　じゃあ、今日はこんな感じかな。

斉藤　では、どうもありがとうございました！

【10年1月8日／都内・阿佐ヶ谷『ロフトA』にて公開収録】

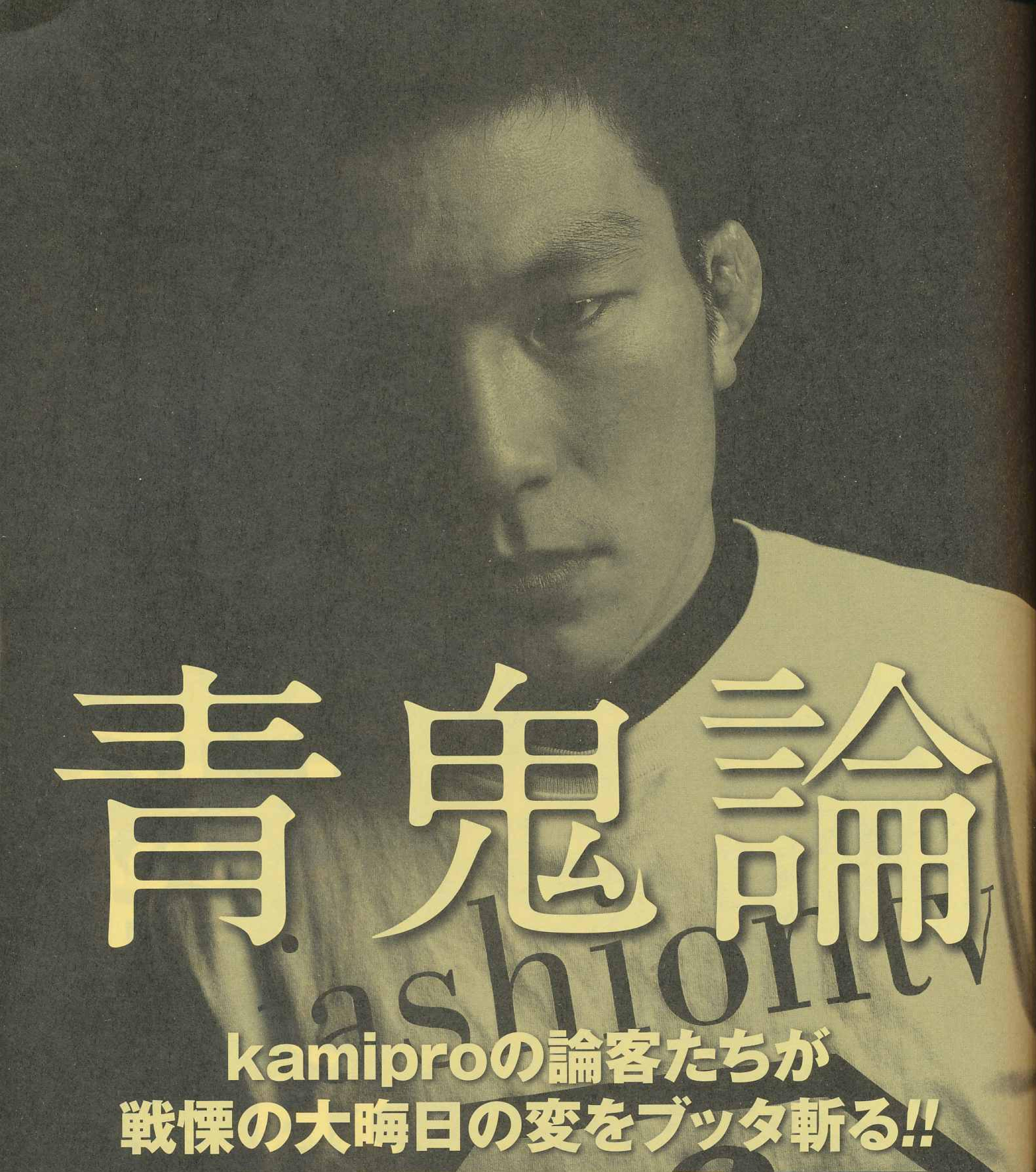
『格闘秘宝館 vol.9』

東京・阿佐ヶ谷ロフトA
2月5日（金）開場18:30 開始19:30

出演者
高橋ターヤン（映画秘宝、kamiproライター）
橋本宗洋（格闘技ライター、映画野郎! レビュアー）
高崎計三（格闘技ライター）

入場料
2000円（飲食別）

お問い合わせ
阿佐ヶ谷ロフトA
http://www.loft-prj.co.jp/lofta/index.html

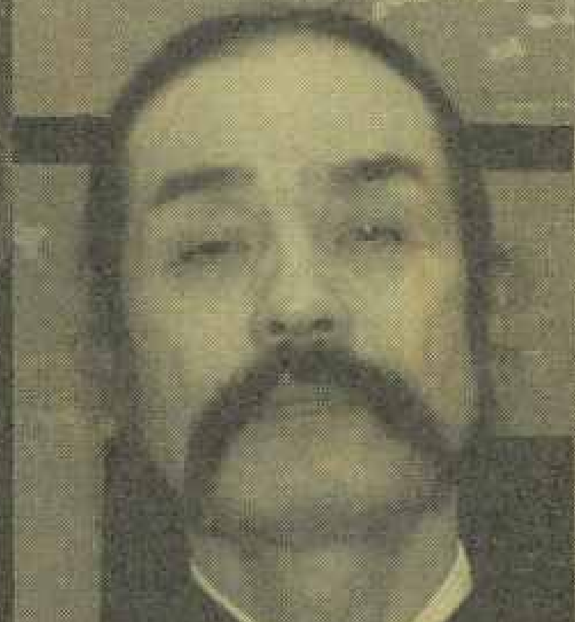


青鬼論

kamiproの論客たちが戦慄の大晦日の変をブッタ斬る!!



『1976年のアントニオ猪木』著者
柳澤健



日本武道傳骨法創始師範
堀辺正史



小説家
夢枕獏


音楽家にして文筆家
菊地成孔

どんなイベントになるのが注目

ね。だって「自粛」として発表したほ

といけないんだけど……、『kami



猪木という伝説（幸福） 青木という現実（不幸）

音楽家にして文筆家

菊地成孔

いまやすっかりと定着した「谷川黒魔術」の名付け親であり（それ以前は「谷川マジック」などともてはやされていた！）、鋭い批評眼をもってマット界の事象を論じる菊地成孔氏。大晦日の青木騒動をどう見たのか？　アントニオ猪木にあって、青木真也にないものとは？

聞き手／ジャン斉藤

——菊地さんは大晦日の『Dynami

きなりですが、この試合、TBSの雑な編

感じた」という論調には全然すべきじゃ

百年、何千年という時間をかけて神格化

されていった。それはつまり見てないが

不可視の過去が伝説化されて美化されていった豊潤な幸福さが猪木にはある

――菊地さんは大晦日の『Dynamite!!』をどのようなかたちでご覧になったんですか？

菊地 地上波でしっかり観ました。今年は大晦日の仕事が深夜からだったので、オンエア時は家にいたんですね。んで、ワタシはインターネットをあまり見ないし、業界の裏情報も知らないんですが、いま頃、青木真也の試合はたぶん大騒ぎになってると思うんですよね（笑）。

――凄くなってますね（笑）。

菊地 で、ワタシのような、もう50歳を手前にしてコンビニの『格通』立読みもやめ、ジ・アウトサイダーやUFC以外は積極的に格闘技を観ていない一般人が……。

――（さえぎって）あの〜、そんな一般人も珍しいですけど（笑）。

菊地 （笑）。まあ、そんな人間にとっても青木の試合がインパクトを持ってしまったことは予想に難くない。予想ばかりが続きますが、インターネット世論の中で、今回の件をたとえばアントニオ猪木のリアル・ペールワン戦であるとか、リアル・タイガー・ジェット・シン戦であるという見立てが出るはずですね。

――はい、すでにそういう見立ては出回ってますね。

菊地 これ、「ぜんぜんちげえよ」という反論も含めて、出回るのは当然ですねえ。猪木vsペールワンが1976年ですか。そうすると30年強の時を経て、その"リアル版"が地上波放映で大晦日の夜に流れたということじゃないですか。しかし、いきなりですが、この試合、TBSの雑な編集からすれば、べつに放送されなくてもよかったと思うんだよね（笑）。

――確かにもの凄く適当な扱いでしたよね（笑）。

菊地 だから、誰かを悪者にしたければ、毎度毎度のことですが、TBSなんだよね（笑）。で、まあ話を戻しますが、ワタシの立場は「青木に"リアル猪木"の狂気を感じた」という論調には全然すべきじゃない。これは比べるものじゃないと思うんですけど。



『Dynamite!!』のセミファイナルは青木真也という毒、メインは魔裟斗引退という清涼剤。格闘技の光と影ともいえる組み合わせが、00年代最後の大晦日格闘技イベントを飾った。

――ボクもそう思います。

菊地 ただ、どうしてもそういう見立てになってしまう。不況時に嫌々パキスタンに遠征させられて猪木はイライラしていたし、不況時に嫌々『戦極』との対抗戦を飲まされた青木もイライラしていた。

――イライラは根幹にありますね、今回の腕折りは。

菊地 どちらも「木」の字で脚韻を踏んでいるし（苦笑）。と、それはともかく、どっちも何かこの、自分が犠牲になったような、被害に遭ったような自意識があったでしょうし。まあ、穏やかに言えば、同じ部分もあるし、違う部分もある。根本的には全然違うけれども。

――青木との違いを言えば、猪木さんの凶行はそれほど目撃者がいないってこともあるんですね。ボクなんかも神話としてペールワンを聞いてるところはありますから。

菊地 結局ね、伝説や魔法をリアライズしてしまうとどうなるのかという問題なんですね。話が無限に逸れてしまいそうだから気をつけますけど、たとえば、マイケル・ジャクソンのドキュメンタリー映画『THIS IS IT』を観るとね、宗教の開祖たち、つまりムハンマドやイエス・キリストが行なった奇跡っていうのは、マイケル・ジャクソンのステージ程度のことだったんじゃないかなって思うんですよ。

――あ〜（笑）。

菊地 マイケルのステージでも火も走るし、空中に浮くし、奇跡の数々が披露されるんだけど。キリストの場合はそれが何百年、何千年という時間をかけて神格化されていった。それはつまり見てないがゆえに、ですが。つまりかつて人々はマイケル・ジャクソンのステージを見てトランスし、数千年かけて世界4大宗教に育て上げた。ところが、片方は単なるショービジネスでもあるわけよね。だから直接比較ではなく、比喩になっちゃう。マイケルとキリストは。

――そういえば、年配のプロレスファンはみんな否定しますね。「猪木さんのケースとは違う」って。

菊地 そうです。だからそれは「マイケル・ジャクソンとキリストを比べちゃいけないよ」っていう論法の拡小版なのね。まあキリストとマイケル・ジャクソンには何千年の時があり、猪木と青木には30年の時しかない。しかし、これは自分の話がもう一回ひっくり返るようですけど、そういう意味では、青木がやったことは猪木さんがやったことと同じか、それ以上とも言えるんですよね。だけど、ここで我々がさらされてるのは、不可視の過去が伝説化されて美化されていったという豊潤な幸福さが猪木にはある。それを地上波でちょろっと雑に流されて、多くの人間がなんの気なしに見てしまったという貧しい不幸が青木にあるわけです。90年代から00年代に向けて、リアルであること、見えること、共有できることが話題になってますけど、リアルに可視化されて共有されればそれがいいかっていうと、されないほうがいいんだっていうことを今回の青木戦は凄く訴えたと思うんですよね。

――確かに見えないゆえの幸せはありますね。猪木vsアリ戦の裏側なんて、いまだに語られてますし。

菊地　語ってる。それは不可視の部分が多すぎる……っていうか、そもそもウソだからね（笑）。粉飾されたウソの伝説のほうが人を癒し高揚させるんだよね。

——そうかもしれないですよねぇ。今回の件を実際に見てイヤな気分になる人もいるでしょうし。

菊地　見ると人間の暗部を焚きつけるんですよね。それはまあ誰にでも暴力衝動はあるし、単純にタブーを見て燃えた人もいるだろうし、「あのくらいなんともない」と思った人もいるはずなんですよね。アマチュアの柔道やアマレスの大会を見慣れてる人は事故による骨折を見慣れてるんで、「あの程度はたいしたことない」って論調もあると予想されますが、上腕の、しかも肩甲骨とつながってる骨頭のジョイントがねじ切られたりしたら、選手生命どころか、社会人生命にも傷がつきかねない。世界同時不況によって先行きが見えない世相の中で、非常に悪い興奮があって、ひさしぶりにみんな血がたぎったと思うんですよね。

——振り返ってみると、小川直也vs橋本真也のシュートマッチ以来のインパクトかもしれないですね。

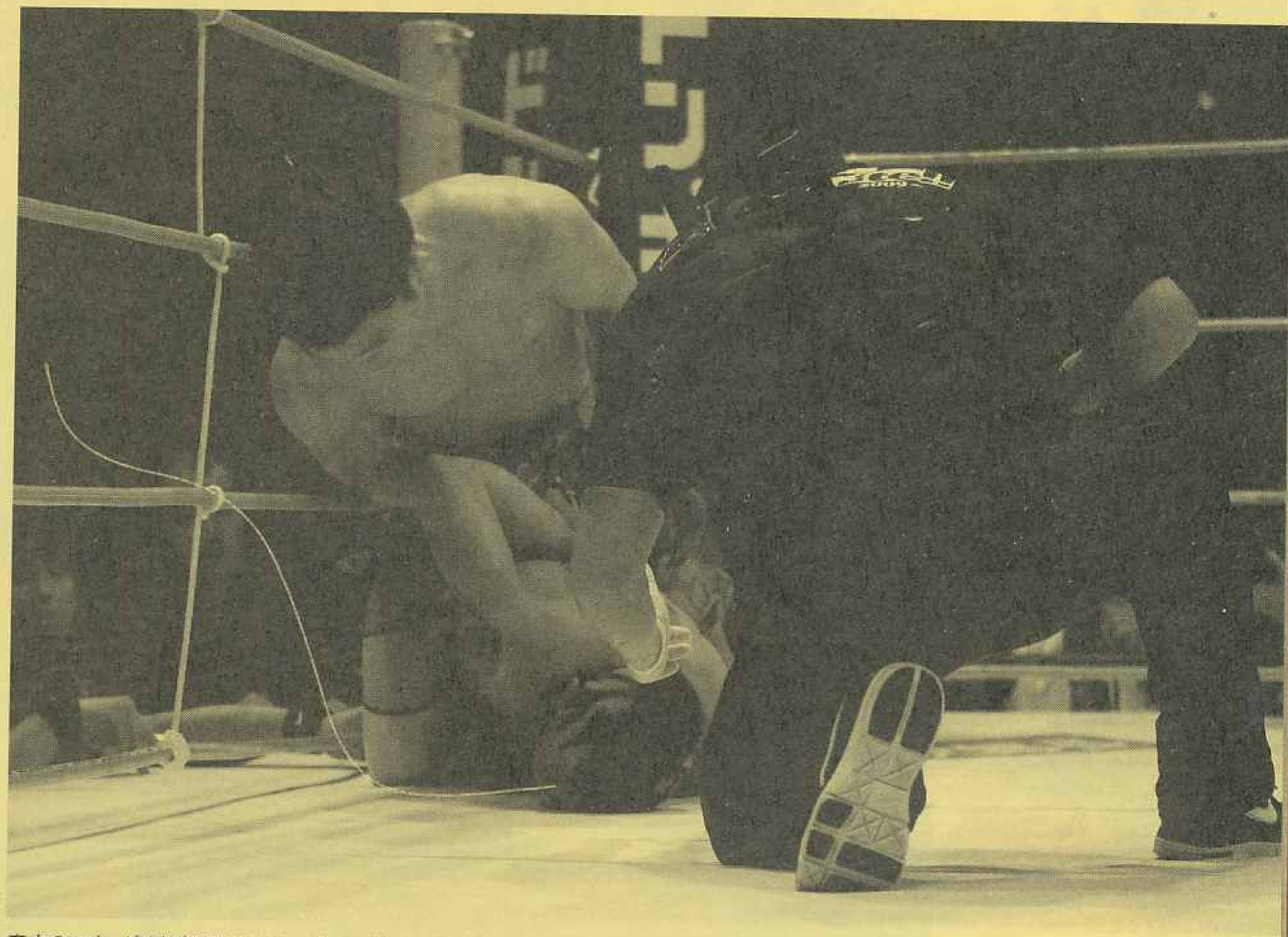
菊地　そうそう、どこか小川vs橋本戦に似てんの。どれだけ故意なのか、どれだけ覚悟があったのか興奮してわからないっていうことも含めて。ギリシャ神話の悲劇的な騒乱が起こる、みたいな。まあ、今回は騒乱は起こんなかったけど。

——廣田のセコンドも『戦極』側のファイターたちも青木にとくに突っかかっていくわけでもなく。

菊地　まあビックリしちゃったんでしょうね（笑）。しかし「格闘技だからこのぐらいあたりまえ。騒ぐんじゃないこのぐらい」説の人々だって、青木がケガさせずにタップさせて勝ったら、こんなに血はたぎらなかったと思うんですよ。

——そうですね。

菊地　折れたから騒いでるわけ。っていうか、一番興奮して騒いでるのが青木本人ですが（笑）。「中指立てた」って怒られてるけど、ワタシが見るかぎり、中指立てたり人差し指立てたり、どっちも立てたり大騒ぎですよ。あれは（笑）。まあそれはともかく、「格闘技なんだから折れるのはあたりまえ」という論法は、つまり事なきに収めるためのものであって、そうでもしないと一般視聴者の心理は落ちつかないですよね。じゃあ、あれはなんと捉えればいいのかってなるわけなんだけど、青木はいままでとにかく変わった極めを見せるわけじゃないですか。「こんなん見たことないな」「こんな極め方もあるのか」っていうシリーズの中の一環ですよね、今回も。解説の須藤元気って人は非常にクレバーかつ大人なんで、言葉を選んで「青木選手はマニアックだなあ」って言ってましたけど、あれはイコール「エグいな」っていうことなんだと思うんですよ。極めとしてもエグいし、折ろうと思えばすぐ折れる。「ずいぶん極端なことをするな」というのを「エグいな」という言葉で表現したんじゃないか。



青木のマナー違反ばかりがクローズアップされてる気配もあるが、"殺し"あふれる試合内容や試合前後の選手、関係者の言動を含めて、この試合はとにかく"異常"であった。I編集長にも語っていただきたかった!

どれだけ故意で、覚悟があったのか。小川直也vs橋本真也に似ている

——TK（高坂剛）が言ってたのは、ああいうかたちで腕を取られても普通だったら振りほどくことができるらしいんですけど、青木の握力ってとにかく異常らしいんですよ。

菊地　文字どおりグラップラーですね（笑）。あれ、ほどけるように見えなかったもんね。しかも、そのうえ足も固められて、もうあれじゃあ何もできないですね。

——寝技ってやっぱ怖いんだなって思いましたね。

菊地　うん。第一次UWFでクロックヘッドシザースが開陳されたときに、藤原喜明が「あんなもん1ミリずらしたら簡単に首の骨が折れるんだ」っていう名ブラフを吐いたことがありましたけど、あの怖さを青木によってよみがえさせられてしまったとも言えるんだよね。非常に今風なかたちで。伝説が出回るっていうかたちじゃなくて、もう地上波でハッキリと共有されてしまったというかたちで。ワタシは詳しくないですが、あれが逮捕術のスキルだったら、なおさらイヤですよねぇ（笑）。

——伝説にならないっていう意味では、こういうかたちで腕を折られて屈辱を受けた選手ってメディアの前には出てきづらいじゃないですか。

菊地　そうですね。

——でも、廣田はあの試合の二日後、『格闘技通信』の取材を病院で受けてるんですよね。

菊地　アハハハハハ！

——自分はそっちにもビックリしました。ウチは「たぶん取材は無理だろうな」って勝手に思い込んで取材申請しなかったんですよ。

菊地　廣田はなんて言ってたの？

——まだ読んでないんですけど、見出しになってたのは「青木選手をやっつけたいです」っていう。

菊地　アハハハハ！　ちょっとあの人、

天然だよね。あの人の危なっかしさって

菊地　いまはホントに悲しい時代で全部

——あと、今回は裏側の政治的な状況を

——菊地さんは以前から桜庭の本性は「嫌

ていうことも含めて。ギリシャ神話の悲
菊地　折れたから騒いでるわけ。ってい
て、もうあれじゃあ何もできないですね。
菊地　アハハハハ！　ちょっとあの人、

猪木は教祖型の狂気だったのに対して 青木はまだ信者方の狂気なんです

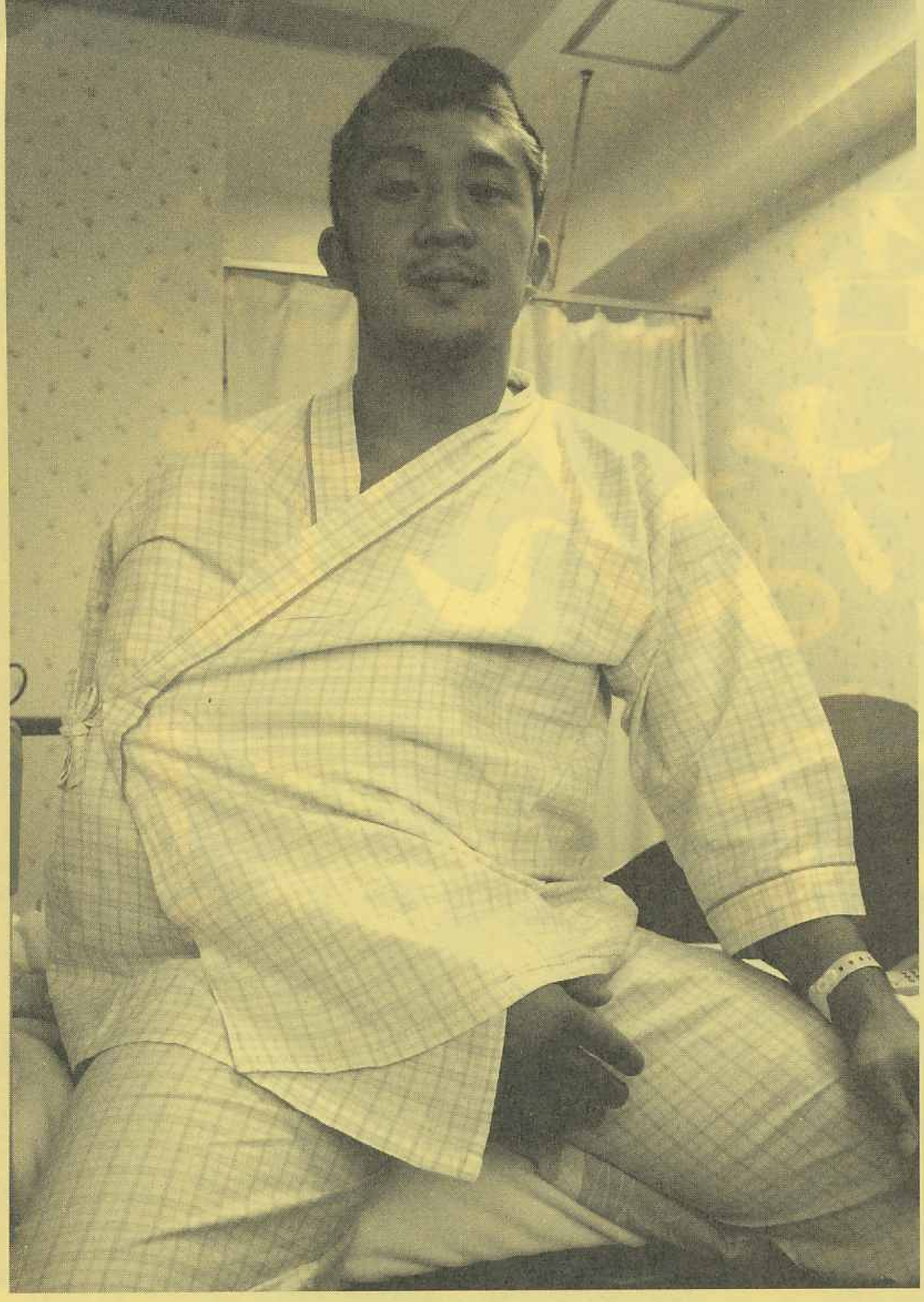
天然だよね。あの人の危なっかしさっていうか、中途半端に肩にパグ入れてたりとか、いまどき珍しい虎刈りにしたりとか、目もヤバいし。ペールワンみたいに一族を背負ってる人の腕を折ったわけじゃなくて、天然で危なっかしい人の腕を折っちゃったっていう意味でも痛かったですね、今回は。

——普通は半年くらい沈黙を守ることが多いんですけどね。

菊地　いまはホントに悲しい時代で全部の情報がどんどん出回っちゃうし、廣田もインタビューに答えちゃうんだもんね（笑）。青木はやっぱりオールドファンなんかは小物に見えたと思うんですよね。

——そう見えちゃいますよね。

菊地　自分が折ったことに興奮してるからなあ。猪木だったら、折って冷静か、あるいは折りもしないで勝手にトランスですよ。それが神だ（笑）。



今号の本誌にも登場しているが、廣田瑞人の“何事もなかった”ぶりも普通ではない(実際には大事なんだが)。10年後、あの日の大晦日はどのように語られるのか。

——あと、今回は裏側の政治的な状況を含めて青木真也は追い詰められてたところがあるのですね。

菊地　被害者意識ね。何か世間にヒドイ目に遭わされているような自己イメージ。

——なんか右翼の行動っぽいんですよね。しかもそれがPRIDEやDREAMってものに対しての狂信的な行動だったらまだファンはわかるんですけど、なんかすべてがそうとは言いきれない感じなんですね。ごく一部の関係者に向けられてるんじゃないかって。

菊地　まあ団体が信じられなくなって個人崇拝に向かうのはありがちですよね。団体を信じたい、つまりPRIDEを信じたい、国体を信じたい。でもその威信が失墜した。そこで個人崇拝に。っていうのは、まあ、右翼ですよね。ま、右翼的といえば右翼的かもしんない。元・警察官だし、右か左かといえば右ですよね（笑）。

——ちなみに昨日、猪木さんにこの件でインタビューしてきたんですけど、案の定全否定してたんです（笑）。「プロは折っちゃいけねえですよ」って言いつつ、「ペールワン戦は外国のことだからしょうがないんです」って。

菊地　完璧な自己正当化の力（笑）。そこが神だと言うわけですが、結局、青木はファザコンなんだよね。親父と抱き合って泣けるというね。PRIDE帝国の末期は、その父子愛にみんな感動してたんだけど、一歩ずれると右翼少年化する。ここでいう「一歩ズレ」は、帝国が崩壊したということもあるし、ワタシが本誌でしつっこく語っていた（笑）、「桜庭問題」の問題系というか、つまり、ああした容姿の人物に、日本人は「善人」というレッテルを貼りがちなので、つらいわけです。

——菊地さんは以前から桜庭の本性は「嫌がらせ」であるとおっしゃってきましたね。青木の問題は、その思いが周りに理解できない行動になっちゃってるところなんですよね。

菊地　だから、青木が痛々しいのは、猪木は教祖型の狂気だったのに対して、青木がまだ信者型の狂気だからですよ。

——なるほど！　それは凄く腑に落ちますよね。

菊地　今回の青木を「暴走」だとして、それが、選挙に落ちたあとのオウムの「暴走」と、経緯から何から相似形だ。なんていったら大ひんしゅくを買うでしょうけれども、いずれにせよ、青木は信者の側なんだよね。前田がやったり猪木がやったり佐山サトルがやったりするのはいいのよ。教祖だから。教祖の狂気はいいんだけど、信者の狂気は嫌よね。一言で言って。

——あがめてるものがみんなが共有できるものだったらまだいいんですけどね。

菊地　まあ、よくある話ですが、教祖が見えづらいわけですよね。でも、まあちょっと過小評価してあげるのが一番ヘルシーかなって気がします。興行全体を観てあげて、「青木の試合っていうとんでもないのもあったよね。そういえば」っていう感じに小さくしてあげれば、青木も救われるんじゃないかな。

——え〜っと、大特集しちゃってるんですけど（笑）。

菊地　まあ、確実に言えることは、魔裟斗は素晴らしい。そして気の毒だってことですよ（笑）。

——あんな青木のあとに引退試合でしたからね（笑）。

【10年1月8日／都内・某所にて収録】

——獏さん！　なんでも新年を迎えたと

のを考える要素があった試合だと思うん

——骨を折ったことについてはどう思わ
れますか？

んかぎりの罵声を浴びせてたことが。

獏　ただ、ハイアンの場合は確信犯だろ

格闘小説の第一人者が振り返る狂気の大晦日！

青木を否定したら小説なんて書けないよ！



ロマン派格闘技ファン
夢枕 獏

MMAをその創成期から見続けている我らが獏さん。
今回はその体験値をもとに青木vs廣田にまつわる一連の騒動について、いつものようにしみじみと語ってもらった。
「よかったね～」でおなじみの格闘技の見巧者は、青木真也狂想曲をいったいどう捉えているのか？

聞き手／鈴木佑　撮影／平工幸雄　試合写真／乾晋也

あれはいいか悪いかという目盛りしかない物差しだけで測ってはいけないよ

——獏さん！　なんでも新年を迎えたともに救急車で病院に搬送されたってお聞きしたんですけど、ご体調のほうは大丈夫ですか⁉

獏　いやぁ、お恥ずかしい話でね（苦笑）。もともと俺は尿管結石を持ってるんだけど、元旦になって家族でシャンパンを飲んでたら急に痛みだしてさ。いまはだいぶ収まったんだけど。

——それは一安心です。いや、てっきり『Dynamite!!』に興奮されたのが原因なのかと思いました（笑）。

獏　ハハハ。さすがにそれはないけど、確かに今回の大晦日は見応えがあったね～（しみじみと）。俺は地上波で観たんだけど、スカパー！にしとけばよかったって後悔したよ。ホント、TBSはよけいな映像を流すくらいなら試合を流してほしいね。今回大騒ぎになってる青木の問題にしろなんにしろ、そういうTBSの体質というか、主催者側のいろいろな問題が選手にいろんな意味で響いちゃったんじゃないの？（笑）。

——TBSのせいですか（笑）。さて、今回はその青木vs廣田と、その後の一連の騒動について獏さんの見解をお聞きしたいと思ってまして。

獏　いや、あのね、あれは非常に観る側が試される試合なんだよ！（キッパリ）。

——観る側が試される試合！

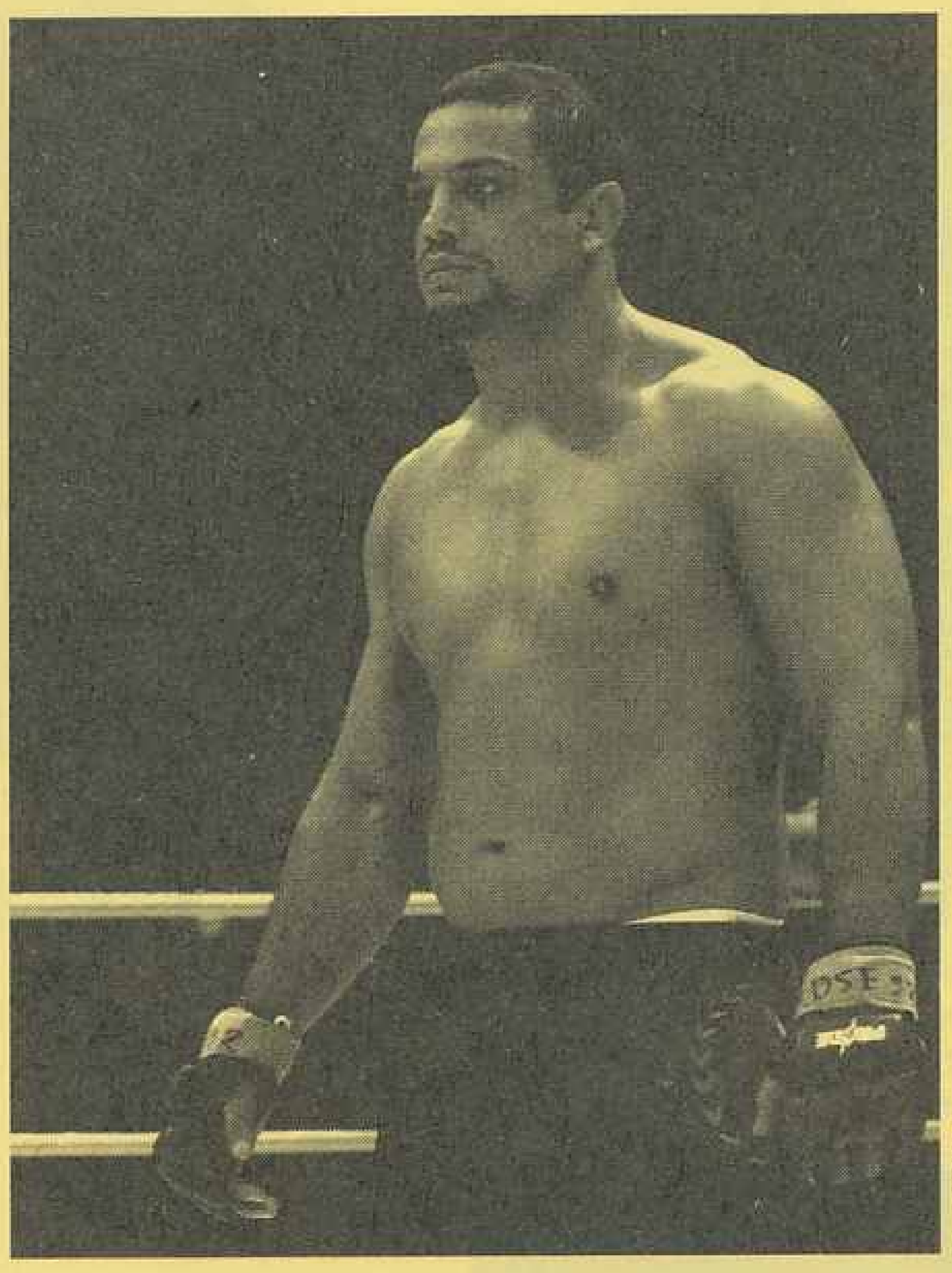
獏　うん。あれは試合はもちろん、そのあとを含めて「おまえはなんで格闘技を観てるんだ？」っていうことや、いろんなものを考える要素があった試合だと思うんだよね。

——なるほど～。

獏　まず、なぜ青木の中で精神のバランスを保つ針が、レッドゾーンまで振れちゃったのかっていうことだよね。逆に言うと、舞台裏のゴタゴタに巻き込まれたのかなんなのか、あそこまで振りきらないとやれなかった試合だったってことなんだろうけど。

——青木は「この試合に負けたらすべてを失なうぐらい怖かった」って言ってましたね。

獏　やっぱり人間は怖ければ怖いほど、思いもよらないようなことをやってしまうんだよね。だから本当に怖いヤツっていうのは、青木がそうだという意味ではないんだけど、臆病な人間なんだよ。心にゆとりがあれば、青木も相手を倒すだけで済ませることができたんだろうけど。



グレイシー最狂の喧嘩屋と呼ばれたハイアン。自分が納得いかなければレフェリーにまで手を出し、リングを下りればピストルで撃たれた話など、常に物騒な話題がつきまわった。まさに狂気とともに生きたファイターだ。

——骨を折ったことについてはどう思われますか？

獏　それは格闘家としては全然問題ないと思うよ。べつに折るのがかまわないということじゃなく、あれは仕方がないという意味でね。だって本人がタップしなくても、セコンドがタオルを投げるなり、レフェリーが止めるなりできたわけだから。まぁ、あの日は逆に三崎の試合みたいに「ちょっと早いな」っていうところで止めた試合もあったしね。このあたりはルールだったり、レフェリングの話になってくるから一口には言えない問題だけど。

——さて、物議を醸した試合後の行為についてお聞きしたいんですが？

獏　ネットなんかを見てみると、巷ではいろんな人が極端すぎることを言ってるんだよね。「もう二度と青木に試合をさせるな」とかね。でも、これはそういう次元の話ではないような気はするよね。たとえば、俺が格闘技でみっともないと思うのは、勝つために姑息な反則をして、バレても本人は素知らぬ顔をするってことなんだけど、べつに今回はそうじゃないしさ。

——反則とかそういうことではなく、最後の挑発的なポーズが問題で。

獏　あのファッ○ンポーズね！　あれには俺も体験値という意味でちょっとビックリしたよ。おそらくそのときに廣田に向かって相当ヒドいことも言ってたんだろうし。あれにはドキドキしたね～（しみじみと）。

——なかなかマット界でもああいうシーンはお目にかかれないというか。

獏　そういえば、前にハイアン・グレイシーがやったことがあったよね。

——あぁ、ありましたね～。PRIDEで大山峻護を脱臼させたあと、大山にあらんかぎりの罵声を浴びせてたことが。

獏　ただ、ハイアンの場合は確信犯だろうけどね。彼ならやりかねないから（笑）。

——確かに（笑）。

獏　ただ、青木の場合はハイアンみたいな狂犬キャラじゃないからね。いままで日本格闘技界の中で培ってきた人気や立場もあるから、今回は自然と反響が大きくなったっていう側面はあるよね。

——自称〝DREAMの大黒柱〟ですし。

獏　俺はね、あの日の青木を〝いい〟とか、〝悪い〟とかいうのはおかしいと思うんだよ。いいか悪いかという質問をされたら、そりゃあ悪いと言うしかない。そのぶんのペナルティはあっていいと思うけど、ただ、人間の全否定につながっちゃいけないと思う。いいか悪いかという目盛りしかない物差しだけで測ってはいけないっていうかさ。まぁ、とにかく人間はいろんな状況によっては、ああいうところまでいってしまう生き物なんだよ！

——人生経験豊富な獏さんは、ああいう人間の姿をこれまでにも目撃してきてるわけですか？

獏　俺が見てきてるっていうか、俺自身がああいうふうになったことがあるからね。

——え～、こんなに温厚な獏さんがですか⁉

獏　昔の話だけどさ（笑）。やっぱり青木と同じで20代という若かりし頃だったんだけど、それこそ刃物を持って女を助けに行ったこともあったよ……（しみじみと）。

——そんなことがありましたか～。

獏　まぁ、その刃物っていうのはカッターナイフっていう、ちょっとセコいものだったんだけど（笑）。でもいま思うと、

なんで自分がそういうことをやったんだっていうのはわからないんだよ。だって、自分がそんなことする人間だとは思わなかったしさ。

——僕も思いません（笑）。

獏　だから今回の青木もそうだけど、やっぱり人間は針が振れて、気もふれるときがあるってことだよね。いつ何をするかわからないっていう意味では、人間は信用できない生き物なんだよ。

——は〜、なんだか根源的な話になってきましたね。

獏　それは俺もそうだし、世間のみんなもそうだと思う。だから、「青木はイカン！」と言ってる人は、「人間はイカン！」と言ってるのと同じなんだよ。やっぱり人間はいろんな面を持ってるからこそ人間なんだから。少なくとも作家である俺みたいな人間は、あれを否定しちゃったら小説なんか書けない！（キッパリ）。

——書けませんか！

獏　俺のような小説を書く人間は、小説を書くという行為の中で、人間の絵解きを求めていくわけだよ。そういう意味では、今回の青木の試合を観た側はいい体験をしたと思うんだよ。青木の行為によって、みんながいろんなことを考えるカードをめくったというね。

——なるほど〜。

獏　そして、その答えは単純に「青木に試合させるな」とかそういう部分じゃないと思うね。それこそ自分自身についても考えるチャンスなんだから。

——そこまで深い試合だったんですね。

獏　まぁ、あの試合は内容自体も完璧だったよね。闘う二人が対等だったのはゴングが鳴るまでで、鳴った瞬間にはもう青木のワンサイドでさ。観た？　あの肩の肉の中で骨が外れるような動き！　腕が伸びる瞬間に肩の肉が「グァ！」って動くのが、ちゃんとテレビに映ってて凄かったね〜（しみじみと）。やっぱり、ああいう場面に出くわすと、観るほうは気持ちが揺さぶられるよね。

——前に獏さんは青木の試合を「最強を決める永遠の道の途中にある闘い」って評価されてましたね。

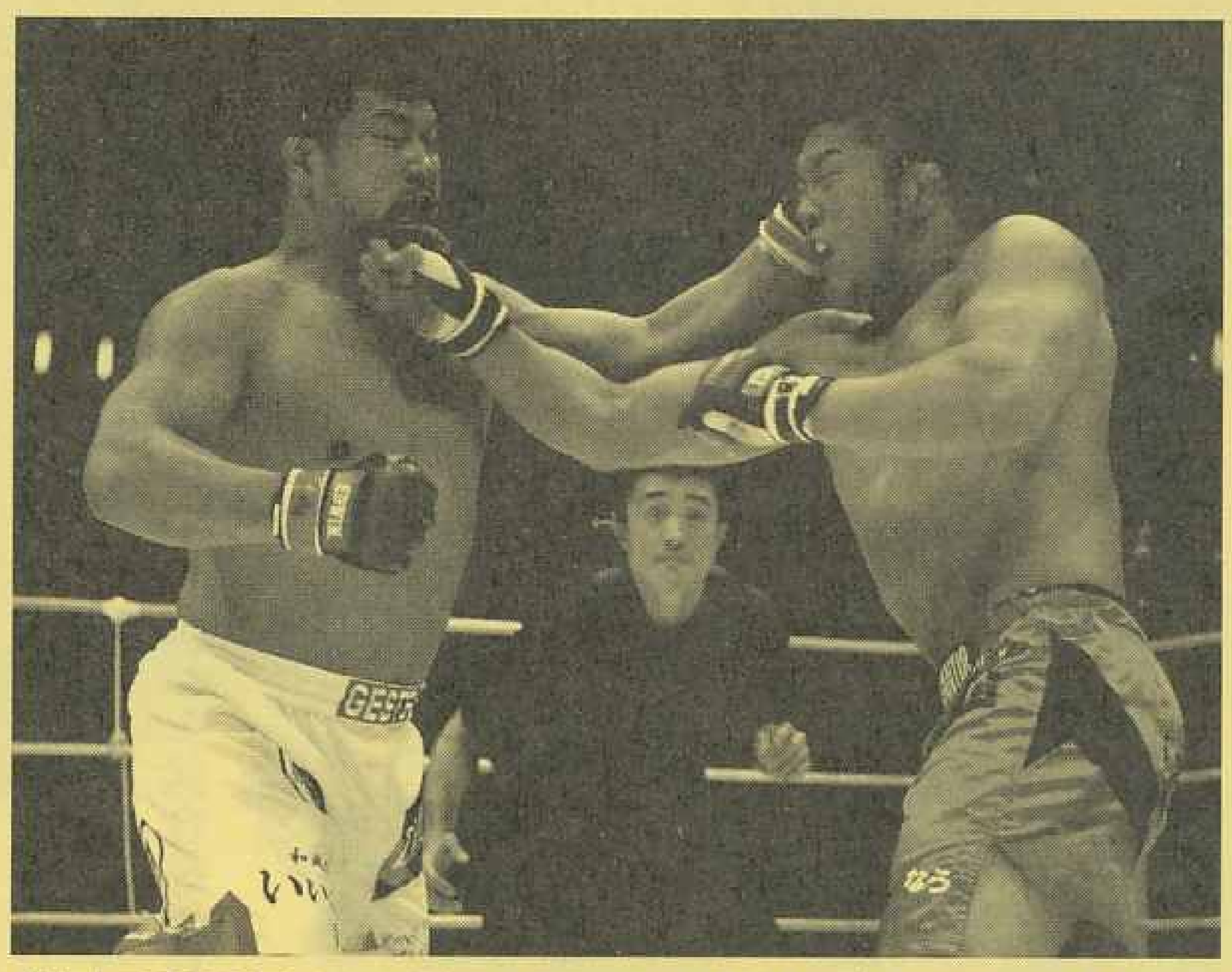
獏　そうそう、スペシャルな場所に立ってる人間だと思うよ。やっぱり普通の感覚で測れる存在じゃないっていうかね。そういえば、青木はしばらく謹慎か何かになったんだよね？

——所属するパラエストラ東京の指導スタッフを解任されまして。

獏　だからあれで解任っていうのは、一般社会の中の感覚なんだよね。社会人ということでは、それはまぁしょうがないよ。我々はそういう中にいるんだから、ペナルティという約束事は受け入れないと。ただ、「青木許さん！」とかそういうのは負けた廣田側の人間が言うべき言葉でね、世間がここまで言っちゃいけないんだと思うんだけどね。



稲村角雄SRC営業統括本部長は会見の席で、青木の行為について「せっかくDREAM側と困難を乗り越えて、団結して大晦日イベントを開催したにもかかわらず、この行為一つがそれをブチ壊してしまった」と、その憤りを表わした。



魔裟斗の引退試合と並んで大晦日の目玉であった石井慧のデビュー戦であったが……。「石井は相手が自分と同じ柔道家の吉田じゃなかったら、もっと違う展開を見せられたとは思うんだけどね」（獏さん談）。

——逆に廣田本人は青木の行為に対してそこまで憤ってはないんですよね。ただ、「リベンジは必ずする」、と。

獏　うん、廣田のコメントは男らしいよね。あれで廣田のモチベーションが上がるのなら、それはいいことだよね。だから「青木くたばれ！」って思ってる人は、次の青木戦まで廣田が勝っていく姿を応援していけばいいわけでさ。

猪木の狂気は青木と違って その中に何か計算が存在するんだよ

——獏さん、あの試合での青木の狂気を指して、一部ではかつての猪木になぞらえる向きもあるんですよ。

獏　あぁ、なるほどね。ただ、猪木は狂気の中に何か計算が存在するんだよ。狂気の演出が巧かったっていうかさ。

——狂気の演出、ですか。

獏　それこそ青木と同じ腕折りでいえばタイガー・ジェット・シン戦なんか、当時は凄い説得力を持っていたからね。

——伝説のアクラム・ペールワン戦はどうですか？

獏　パキスタンに関しては、あんまり演出はなかったと思うよ（笑）。ペールワンのときの猪木は完全なアウェーの中で闘ったわけだから、思わず狂気が出てしまったんだろうね。目を突いちゃうみたいな。

——「やらなきゃやられる」という。

獏　猪木本人が俺に言ったもん、「アイツが噛みついてきたから目を突いたんだ」って（笑）。で、自分の腕を見せてくれたんだけど、ちゃんとそのときの傷があったからね。

——猪木と青木の狂気性っていうのはまた別のものという感じですか？

獏　う〜ん、違うんだろうね。基本的にプロレスの狂気性っていうのは、やっぱり演出の中の出来事という部分が大きいだろうから。ペールワンのときは近い部分はあったかもしれないけど。まぁ、あとほかに違いがあるとすれば、狂気が宿ったことに対して青木は謝ったけど、猪木はべつに謝ったりしないってことかな（笑）。

——ダハハハ！　俺は悪くない、と（笑）。

青木のワンサイドでさ。観た？　あの肩

よ。我々はそういう中にいるんだから、ペ

――獏さん、あの試合での青木の狂気を

――ダハハハ！　俺は悪くない、と（笑）。

俺の中では今回の一件で青木に対してちょっと期待値が高まったね

あと、あの行為に対して『SRC』を傘下に置く日本格闘技連盟側が、青木と青木を煽動したであろう関係者に対して処罰を求める意見書を提出したんですけど、それについてはどう思われますか？

獏　いやぁ、それはみっともないよね〜（笑）。それはやっちゃいけないんじゃないの？　試合の判定がおかしいとかそういうのはいいけど、煽動したヤツがいるとかどうとかって（笑）。法的にどういうあれもないんだろうし。

――まぁ言い分としては、世間に格闘技をアピールする絶好の場で、ああいう行為をやったことでその品位を落としたという。

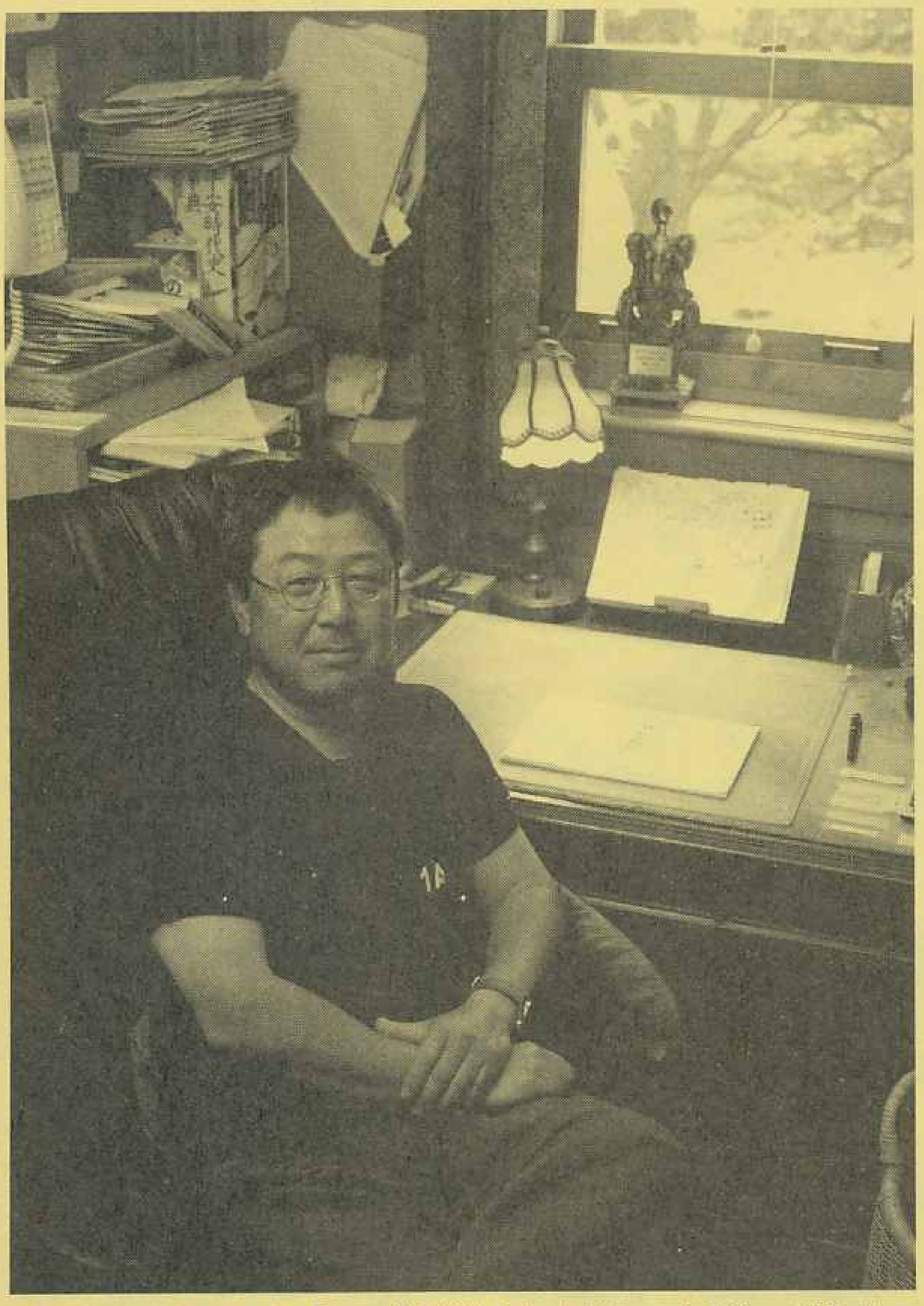
獏　う〜ん、まぁそれは一つの出来事を片方の面からしか見てない考え方だと思うし、『SRC』として見えるかのようにアピールしちゃダメだよね。なんか、世間の声を背景に背負って文句を言うっていうのはみっともないよね。いかにも世間を味方につけてるようなな。だいたい、地上波では生放送じゃなかったんだからさ。

――TBSが編集しようと思えばできたわけですもんね。

獏　だから、そのあたりのことは放送しちゃったテレビ局に文句言えばいいんだよね。でも、TBSもあれを流すということに関して、いいとか悪いとか、あんまり深い考えはなかったと思うよ（笑）。

――TBSならありえそうです（笑）。

獏　まぁ、でもTBSは起こったことをそのまま流せばいいんじゃないの？「これは見せてはいけないからやめましょう」とか、それは〝報道のTBS〟と呼ばれる局がやることじゃないよ（笑）。



ゆめまくら・ばく■1951年1月1日、神奈川県出身。小説家。77年デビュー以来、『キマイラ吼』『陰陽師』『サイコダイバー』シリーズなど話題作を発表。89年『上弦の月を喰べる獅子』で日本SF大賞、98年『神々の山嶺』で柴田錬三郎賞をそれぞれ受賞。格闘技をテーマにして『餓狼伝』を20年にわたり執筆するなど、格闘技への造詣は広くて深い。

青木を否定したら小説なんて書けないよ！

――ありのままを報道しろ、と（笑）。

獏　で、TBSが流したことを視聴者が判断すればいいんだよ。べつに犯罪があったわけじゃないんだからさ。だから俺自身はべつにTBSがあれを流したのは、悪いことじゃないと思うよ。

――なるほど。さて、獏さんとして青木はこれからどうするべきだと思いますか？

獏　う〜ん、しばらくおとなしくして、あとはこれまでどおりのスタンスでやっていけばいいんじゃないかな。まぁ世間に向けては大人になってもいいけど、やっぱり試合において狂気性というのは必要なものではあるし、それはなくさないようにして。

――今回の一件で青木に対する評価は？

獏　俺の中ではこれでちょっと期待値っていうのが高まったよね。というか、こんなことがあったら、次の青木の試合はみんな観ざるをえないんじゃないのかなぁ。アンチの人も観たいんじゃないのかな。どうだろう？

――逆に怖いもの見たさっていうのはあるかもしれないですね。

獏　そもそも、一人の人間が一生懸命やってることに対して「もう試合をさせるな」というほどのことか、という気はするよ。人間はもともとそんなにきれいな存在なのかっていう問いもあるし。だから今回、俺としては多少世間が過剰反応かなという気はするね。しかし、俺はあの試合は観ていてホントにドキドキしたね〜（しみじみと）。

――こんな感覚は格闘技ではひさしぶりですか？

獏　そうだね。ドキドキっていうか、やっぱりみんな自分が心に持ってる針が振れるのを味わいたくて格闘技を観に行くわけだから、そういう意味では凄く振れた試合だったね。俺の中ではここまで振れたのは船木vsヒクソン戦以来かな。

――船木が目を見開いて〝絶命〟した試合ですね。

獏　そう考えると、石井慧vs吉田秀彦も始まるまでは針が振れる準備をしてたんだけど、その振れ幅はちょっと小さかったかなっていう気はするよね。

――やはりそれは石井に対して？

獏　うん。終わってみて「ああいうものだったんだな」って飲み込んだ感じだよね。あの試合は吉田の格闘家じゃない部分の底力みたいなのが見えたんじゃないかな。石井はこれからの素材だからね。よくやったと思うよ。まぁ、なんにしろあの日は青木が一番インパクトがあったよ。

――なるほど。

獏　というか、もう青木はそろそろ海外でいいんじゃないのかなぁ。日本でやり残したことは川尻との決着戦だから。そのあとは勝っても負けても海外でいいと思うんだけどね。俺は海外で青木がどんどん勝っていくのを観たいね〜（しみじみと）。

――あのポーズを海外でやったらまずいでしょうけど（笑）。

獏　あれはまずいよ（笑）。まずいだろうけど、もしかしたら青木ならやりかねないというか、それはもう俺のわからないところだね。こうなったら青木には、いろんな意味で俺のわからないところまで突き抜けてほしいよ。

【10年1月10日／電話取材にて収録】

武術の達人から武道の達人となれ！

青木真也よ
〝修羅場の花〟を
咲かせよ

日本武道傳骨法創始師範

堀辺正史

年が明け2010年がスタートしてからも尾を引く〝青木問題〟。対抗戦で相手の腕を折って勝利し、試合後、中指を立てて挑発した青木の行為は、武士道の観点から見ると、どう評価されるのか？　おなじみ骨法の堀辺師範に青木vs廣田戦を論じてもらった。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也

――先生！　年明け一発目のインタビュ

術であった柔術を苦労して、試合ができ

柔術もスポーツにすればいいのか」とい

ないんですけど、勝負にこだわる選手は、

――先生！　年明け一発目のインタビューということで、今年もよろしくお願いします！

堀辺　はい、よろしくお願いします。

――今回は2009年の最後に起こった事件についてうかがいたいんですよ。

堀辺　あ、ターザン山本！さんが、なんか無名なレスラーと一緒に大晦日に『夢の懸け橋』をやったって話ですか？（笑）。

――まったく違います！（笑）。

堀辺　あ、そうですか（笑）。

――大晦日の『Dynamite!!』で、青木真也選手が戦極ライト級王者・廣田瑞人選手の腕を折り、そのあと中指を立てて挑発行為を行なったことが大問題になってるんですよ。

堀辺　そうみたいですね。

――青木選手の腕折りと中指という、この二つの行為がスポーツマンシップから大きく逸脱していると批判されているんですが、こういった意見についてどう思いますか？

堀辺　やっぱり、いまは総合格闘技というものを「スポーツ」という概念で観ている人が多いからそういう意見が出ると思うんですけど、そもそも格闘技っていうのは、本来スポーツの枠に収まらないものなんです。スポーツをゲームに置き換えてもいいかもしれない。

――スポーツの枠から逸脱する危険性を持っているものですか？

堀辺　そう。それを無理にゲームの中に押し込めようとして生まれたのが、いまのスポーツ格闘技なんです。それは何も総合格闘技だけじゃなくて、たとえば柔道というのは、いまスポーツとして世界中に普及してますよね？　でも、その柔道も嘉納治五郎が、もともとは人を殺す術であった柔術を苦労して、試合ができるかたちにしたんです。

――柔道もスポーツではなく、戦の殺人術だった、と。

堀辺　それをなぜ、スポーツにしたかというと、明治になって国内で殺し合うなんていうことが野蛮視された時代となったことで、みんなが柔術をやらなくなってしまったんですよ。

――柔術という〝殺す術〟を身につける必要がなくなったわけですね。

堀辺　そうなんです。でも、嘉納さんは柔術という、この貴重な侍文化をなんとかして残したいと思い、そこで考えたのがスポーツ化なんですよ。「西洋にはボクシングやレスリングという格闘術が、〝スポーツ〟として行なわれている。同じように柔術もスポーツにすればいいのか」という発想がそこで生まれたわけですね。しかし、嘉納さんはただスポーツ化するのではなく、柔術本来の〝殺し合い〟の部分を残したいとも思ったんです。

――武人として、根本はなんとか残したい、と。

堀辺　たとえば、柔道での投げの一本というのは、硬い路上だったら相手を殺せている、という意味合いで「勝ち」なんです。でも、実際に殺すわけにはいかないから、畳を敷いた。この「本来は殺せるけれども、実際には死なないようにした」のが、競技化でありスポーツ化なんですよ。

――ホントだったら殺してるから、あなたの一本勝ち、と。

堀辺　そして今回の青木選手が仕掛けた関節技というのもそうなんです。この関節技をどうスポーツ化したかというと、腕なんかを極められて、これ以上自分の腕はもちません、破壊されてしまう、となったら畳を叩け、もしくは「参った」と言え。そうすれば、本来は関節機能を破壊できるんだけど、破壊せずに「一本勝ち」というかたちのスポーツにすることができる、そうしたんです。

――タップアウトというのは、そもそもスポーツ化で始まったわけですか。

堀辺　そうです。江戸時代までは柔術、柔道に乱取りがなかったわけだから。

――そういえば、そうですね。

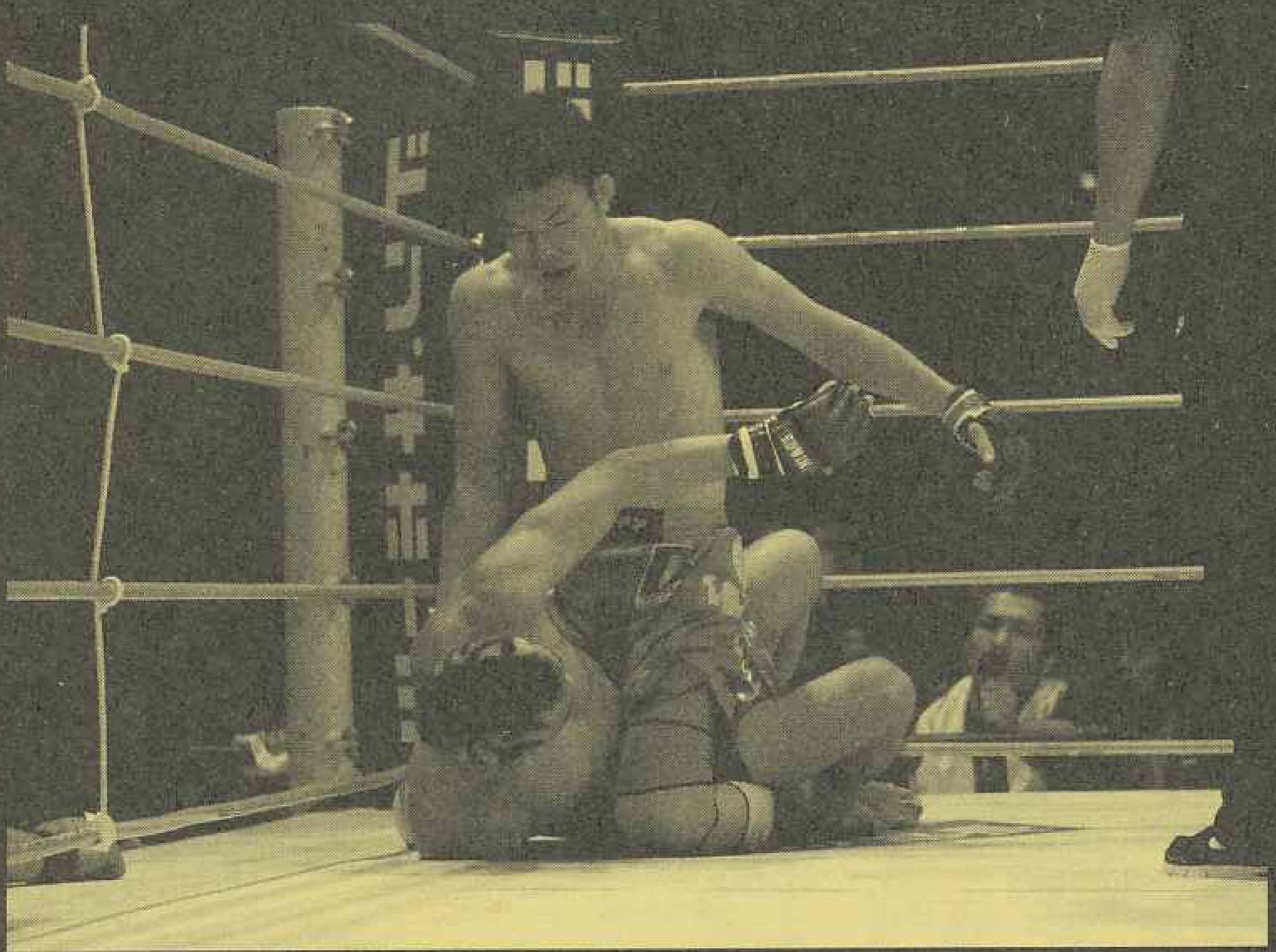
堀辺　だからスポーツであるならば、関節を極められたらタップしなくてはならないんですけど、勝負にこだわる選手は、ときにはスポーツではない精神状態になってしまう。本来、関節を極められてもう逃げられないとなったら、タップをすれば自分の身体を壊さないですむんです。もし折られたりしたら、しばらく試合ができなくなるし、場合によっては選手生命も危うくなる。我慢していいことなんてないんですよ。

――損得で考えたら、絶対に損なわけですね。

堀辺　でも、関節技っていうのは、打撃のノックアウトと違って意識がしっかりしているから、勝負にこだわっている人ほど、自分から「参った」を言えない。タップという行為を脳の中で封印して、自ら破壊されるほうを望むわけですよ。だからね、今回青木選手が腕を折ったことに対して、「スポーツを逸脱した行為」みたいに言われていますけど、じつは廣田選手が先に〝スポーツ〟を放棄したんですよ。

――なるほど！　タップをしないことで、スポーツではない道を選んだ、と。

堀辺　そうなんです。ここが重要なんですけど、みんなわかってないんですよ。そして、関節を極められている側がスポーツを放棄すると、極めている側もスポーツを放棄せざるをえなくなる。だから、あの関節を極めた状態というのは、ほんの2～3秒でしたけど、その2～3秒の中に意地の張り合いがあり、このときは技をかけたほうもかけられたほうも、競技、ゲーム、スポーツという感覚から外れた



賛否両論、さまざまな意見が飛び交った青木真也による“腕折り”。「スポーツマンシップにもとる行為」とも言われるが、「格闘技はもともとスポーツの枠に収まらないもの」と堀辺師範は言う。

この闘いで先に〝スポーツ〟を放棄したのは、廣田選手のほうだったんです

聞き手／堀江ガンツ　撮影／乾晋也



SRC側の総大将として青木真也戦に挑んだ、戦極ライト級王者・廣田瑞人。この重責は廣田に大きな力を与えたと同時に、その責任感とプライドが自らの腕を破壊してしまう結果となったか。

精神状態に陥っているわけです。

──闘っている両者ともに、スポーツではなくなっている、と。

堀辺　だから、廣田選手のほうも負けて悔しいでしょうけど、腕を折られたことに対しては、ある意味納得してるんじゃないですか？

──確かに、腕を折られたことについては、そんなに怒ってないんですよ。「自分が負けたんだからしょうがない」って感じで。

堀辺　それは彼の中でゲーム感覚がゼロだったから、納得しているんですよ。参ったすればよかったのに、自分でその選択をしなかったわけだから、腕が壊れても相手に文句を言う筋もないわけです。

──なるほど。逆にいえば、自分がスポーツとして闘っているのに、相手がスポーツじゃないと怒るわけですね。

堀辺　そうなんです。そういうところを見ないといけない。だから、廣田選手が怒ってなかったっていうのは重要なことです。それは彼がゲームとして闘ってなかったというあきらかな証拠なわけだから。そして青木選手もゲームではない闘いだからこそ、折ったわけですよね。これが試合後、冷静になって、周りから「おまえ、ちょっとあれはひどすぎる」とか言われたら、青木選手も「やりすぎました。反省してます」っていう言葉が出るんじゃないかな。それは試合が終わって〝平静な人間〟の感覚に戻ってるわけだから。

──野獣性、野蛮性を解放している試合中とは、感覚が違うでしょうからね。

堀辺　だからね、格闘技っていうのは、お互いの心と肉体を破壊し合うことで成り立っているわけだから、スポーツマンシップが破壊される危険性というのは、常にあるわけです。それは総合格闘技の宿命なんですよ。だから格闘技ファンだったら、観るほうも覚悟をもって来い、と。人間の美しい面も、人間の野蛮な面もすべて含めて、リングというのは露呈する場所なんです。ほかのスポーツを観に行くのとはわけが違うんだぞって、それを言いたいですね。

青木真也よ〝修羅場の花〟を咲かせよ

スポーツマンシップが破壊される危険性があるのは格闘技の宿命です

──観る側も格闘技はスポーツの枠に入りきるものじゃないってことを理解しなきゃいけないわけですね。

堀辺　格闘技って、やはりどこか戦争にも通じるものがあるんですよ。戦闘中というのは、あるときは狂気が、またあるときは、その狂気の中から平和な時代には考えられないような自己犠牲的な精神が光り輝いたりする。闘いというのは、本人自身も予測がつかなかったような自分というものを引き出してしまう場合があるんです。だから格闘技っていうものも、いくらルールで縛ったところで、そもそも闘いの本質が、そういうものなんですよね。人間のどんな部分を引き出すかわからない。醜さかもしれないし、美しさかもしれない。そこがちょっとほかのスポーツと違うんです。それがわからないで、スポーツの理論だけで観ていたら、格闘技を理解することはできないんじゃないかっていうのが私の持論です。「きれいごとで終わらせず、本質を見ようよ」ってことですよね。

──また、今回の青木vs廣田戦で、人間の極端な面が出た理由として、やはり対抗戦であったことが、大きな理由の一つじゃないですか？

堀辺　まさにそのとおりですね。やっぱりね、背負うものがあると人間は燃えるんですよ。人間というのは「公」だけでは動かないけれど、「私」だけでも力は発揮できないんです。自分の名誉や誇りと、公共的な精神が噛み合ったとき、巨大なモチベーションが誕生するんですね。ましてや今回はチャンピオン同士ですから、なおさら大きなものを背負った状態でリングに上がったと思います。

──戦時中の兵士も、国を背負ってるからこそ、命が懸けられたわけですよね？

堀辺　そうなんですよ。だから、たとえば神風特攻隊というのは、いくら国家のためとはいえ、あれは人間性をまったく否定するものだという考えがありますし、私も一理あると思う。ただ、その一方で自分の命が保証されなくとも、私欲や個人を超えてそれを遂行することに対して、何か言葉に言い表わせないほど崇高なものを抱くことも事実なんですよ。

──自分がこの世に生を受けた使命のように考えることもあるわけですよね。

堀辺　だから闘いというのは破壊と狂気を生むと同時に、普段では引き出せない崇高な精神を引き出す要素も持っているんです。そういった戦の文化みたいなものから見ていかないと、青木選手や廣田選手の心理っていうのは、わからないと思いますね。

──あと、この試合で一番非難が出てるのは、青木選手が腕を折ったことより、そのあとの挑発行為。そっちのほうがより問題視されているんですよね。

堀辺　ああ、これは大きな問題です。

朝青龍のガッツポーズが批判されるのは青木選手の件と同じ意味合いなんです

——腕折りより、中指を立てた行為のほうが問題視されるということは、おそらく日本人は相手を肉体的に壊すことより、誇りを奪うとか、侮辱することのほうが重罪と考えているんじゃないかと思うんですが。

堀辺　武士道文化は完全にそうですよ。

——やはり、そうですか。

堀辺　たとえば、一つの例を出します。幕末にイギリスから来た人が、偶然、侍同士の決闘を見たことがあったんですよ。そのとき、勝った侍は死んで横たわった相手に対して、自分の羽織を脱いで、遺体の上に丁寧にかけてやって、ひざまずいて合掌して立ち去った、と。その姿を見て、凄く感動したらしいんです。「日本の侍というのは、闘いで手加減はしなくとも、勝負が決したあとは、相手を尊ぶ行為ができる」、そういう武人だと知って言葉にならない感動を覚えたということを、そのイギリス人は帰国後、のちに現地の新聞に寄稿しているんですね。

——武士道精神は、当時の日本人を〝野蛮人〟のように見ていたイギリス人をも感動させた、と。

堀辺　イギリスにはジェントルマンの文化がありますよね。ジェントルマンというのは、もともと騎士、ナイトですから。日本の武士と通じるものがあるわけですよ。

——だからこそ、その本質がわかったわけですね。

堀辺　そして、なぜ相手を尊ぶかというと、武人というのは、いつも自分が勝者になるとはかぎらないことを知っているんですよ。そういう運命を知っている人は、命を奪っても、誇りまでは奪わない。これを今回の青木選手に当てはめると、腕を折るまでやったのはいい。ただ、そのあと相手を侮辱する行為をしてしまったというのは、やはり侍の国の格闘家として恥ずべき行為でしたね。



たびたび"品格"が問題となっている横綱・朝青龍。昨年の初場所では、優勝を決めたあとガッツポーズをして物議を醸したが、行為の違いこそあれ、青木の中指と同じ意味合いでの批判だという。

——逆に言えば、腕を折ったあと、敗れた廣田選手を尊ぶような行為をしていたとしたら、侍に感動したイギリス人のように、格闘技を野蛮視している人たちを、感動させていたかもしれませんね。

堀辺　そういうことですね。そして、侍というのは、闘いの中に美しさを求めたんですよ。やはり殺し合いという、人間の野蛮性を解放したことをしているがゆえに、そこに美というものを求めた。それが武士道なんです。

——「名を残す」ということですね。

堀辺　私はそれを「修羅場の花」と呼んでるんですけど、今回の青木選手は、完全なる勝利という実を取りましたけど、花を咲かせることはできなかった。戦場の修羅場というのは、血が飛び交い、腕が吹っ飛び、命までなくなるという、人間の獣性というのがむき出しになる場ですよ。しかし、そこでこそ人間の本質が問われる。そこで醜くなるか、それとも美しい花を咲かせることができるか。武士道っていうのは修羅場の中でも人間性を失なわず、高貴な人間というものを表現できるものなんです。

——人間が獣に変わる戦場であるからこそ、人間としての美しさを求めるわけですね。

堀辺　だから、武士道の観点からすると、青木選手の勝利は100点ではない。今回、青木選手は〝武術の達人〟であることを証明した。あとは、心を修行して〝武道の達人〟になってほしいね。

——これだけ武術が研ぎ澄まされたから、あとはそれがいかに武道になるか、ということですね。

堀辺　そう、廣田選手を完全に仕留めた彼の武術というのは、大きく評価されるべきものです。あとは、自分が負ける側に立ったときのことを考えられるか。また観客が、その行為を見てどう思うかを考えられるか。しかも、修羅場の中でそういった振る舞いができるか。それができるようになれば、素晴らしい大格闘家になる。だからよく相撲でも、朝青龍の品格があるなし論争がよく起こるんだけど、相撲が問題視してる〝品格〟っていうのはいま言ったようなことなんですよ。

——相撲の品格というのも、武士道の名残である、と。

堀辺　そうなんです。相撲の〝品格〟とは、いうなれば武士道なんです。

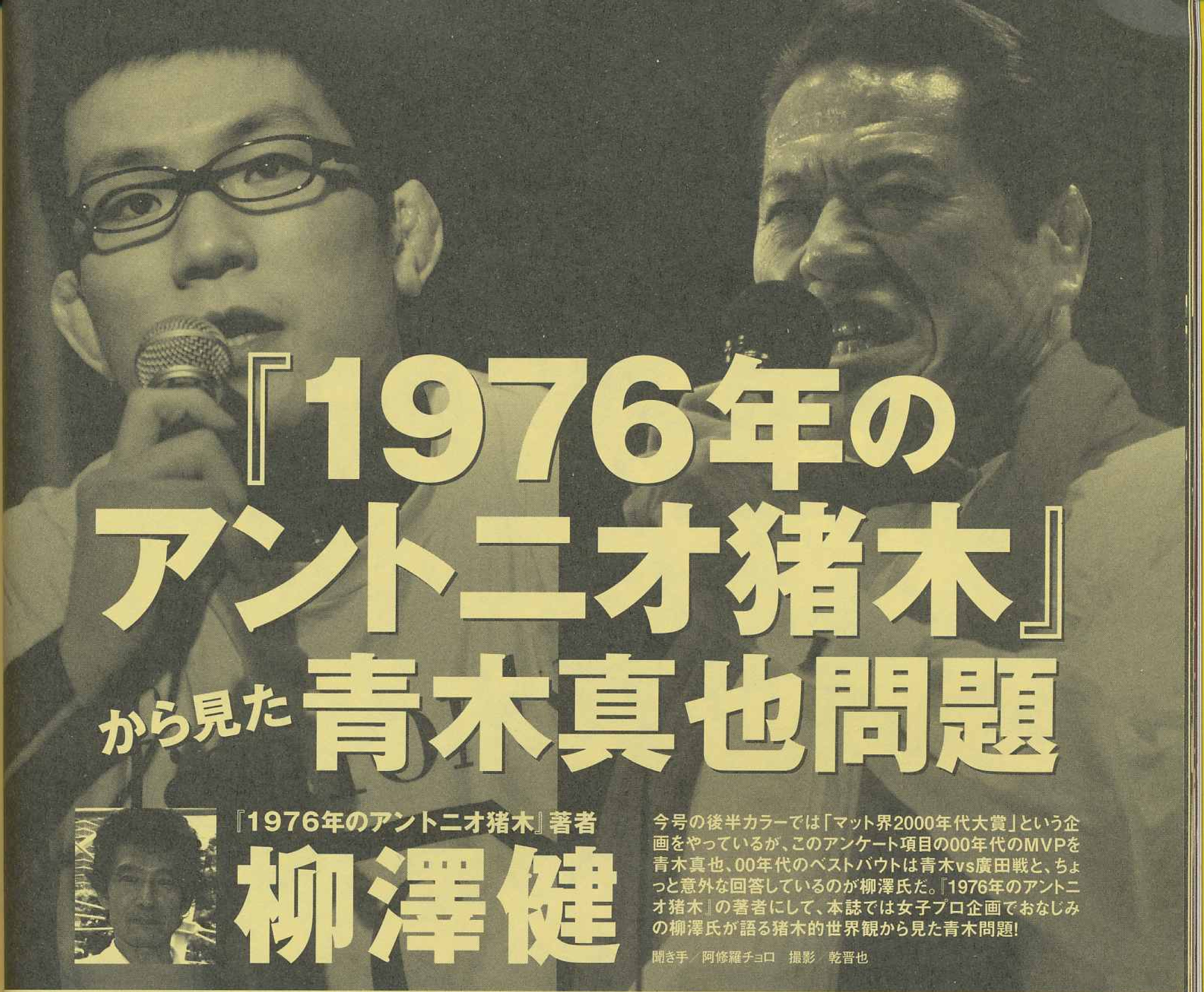
——要は朝青龍のガッツポーズがいけないのと、青木真也の中指がいけないというのは、同じ意味合いなわけですね。

堀辺　そうなんですよ。負けた相手というのは、戦でいえば死んだ相手なんだから、それに対する振る舞いが問われているわけです。青木選手も、あの強さがあるのだから、武士道精神もぜひ身につけてほしいですね。あと、一つ言いたいのは、負けたほうの廣田選手、立派だよ。スポーツを放棄するほどの闘いを行ない、腕が折られても文句は言わない。こういう負け方なら、必ず強くなっていく。青木選手同様、今後の廣田選手にも期待したいですね。

【10年1月8日／都内・骨法武術館にて収録】



ほりべ・せいし■1941年、茨城県出身。50年にわたる命懸けの求道の末、喧嘩芸骨法、さらに全局面打撃制kоppоを創始。最近はヨルダン国王護衛の近衛団にも武道を指導するなど、多方面で活躍中。格闘技・武道評論の第一人者でもある。



『1976年のアントニオ猪木』から見た青木真也問題

『1976年のアントニオ猪木』著者

柳澤健

今号の後半カラーでは「マット界2000年代大賞」という企画をやっているが、このアンケート項目の00年代のMVPを青木真也、00年代のベストバウトは青木vs廣田戦と、ちょっと意外な回答しているのが柳澤氏だ。『1976年のアントニオ猪木』の著者にして、本誌では女子プロ企画でおなじみの柳澤氏が語る猪木的世界観から見た青木問題！

聞き手／阿修羅チョロ　撮影／乾晋也

――今号では「2000年代大賞」という企画をやっておりまして、柳澤さんにも答えてもらったんですが、2000年代のMVPが青木真也で、ベストバウトがいま巷で物議を醸している『Dynamite!!』での青木vs廣田戦を選んでいたのがちょっと意外だと思いまして、お話を聞かせていただければ、と。

柳澤　意外かなあ。2000年代のMVPは青木真也しかいないんじゃない？

――確かにここ数年の活躍は凄いと思いますけど、柳澤さんが青木さんをそれほど評価しているとは思わなかったので。『kamipro』の読者的にも猪木さんだったり、女子プロのイメージが強いと思うんですよ。

柳澤　だって、桜庭和志のあとは青木真也が一番凄い選手でしょ？　五味（隆典）も山本KID（徳郁）も素晴らしいけど、私にとっては桜庭のあとは青木真也しかいない。アメリカで別格の評価を受けているのも当然だと思いますよ。重要なのは独自のスタイルですよ。上になって殴って勝つ、つまりボクシングとレスリングで勝つ。そんな選手はアメリカにも日本にも山ほどいますよ。だけど、このあいだの廣田戦みたいな技、観たことある？　観る者を仰天させることができる人間。それこそがプロフェッショナルじゃないですか。まあ、『Dynamite!!』で青木真也がやったことっていうのは悪いに決まってるよ、そんなの。

――それは腕を折ったことに関してですか？　それとも試合後に中指を突き立てたことですか？

柳澤　試合中に関しては全然問題ないでしょ。問題とされるべきは、結局は試合後のフ〇ック・ユーポーズでしょ。

――まあ、そうですね。

柳澤　そりゃまずいよ。あれはまずいけど、たとえば、山本KIDが修斗でレフェリーが制止してるのに、殴り続けたことがあったでしょ。

――2002年9月の修斗横浜大会での勝田哲夫戦ですね。

柳澤　あれはイカンよ。KIDはたしか修斗から半年近く出場停止処分を食らったと思ったけど（※120日間のライセンス停止処分）、修斗はスポーツであり競技だからそれは当然の処分だと思う。だけど、『Dynamite!!』はスポーツじゃないの。

――『Dynamite!!』はイベントですからね。

柳澤　そうでしょ。そりゃあ、レスリングの試合であんなことやったら永久追放だし、修斗でやっても充分まずいよ。だけど、『Dynamite!!』は基本的に話題になりゃなんでもいいっていう発想でしょ。スーパーハルクトーナメントなんか、あんな体重が違う選手を闘わせるなんて、スポーツとしてはありえない話。そんなスポーツじゃない世界の中で青木や川尻（達也）は必死に闘っている。二人とも根本的には競技としてやりたい選手なのに。

――どちらも修斗出身ですし、青木選手は修斗のチャンピオンでもあるので「ベルトを剥奪するべき」なんて声も挙がっているんですよ。

柳澤　プロ意識の高い彼らは、プロモーションやテレビ局からの「試合

を煽ってくれ」という要望に応えようとする。実際、谷川（貞治）さんや笹原（圭一）さん、名前は知らないけどTBSの人たちはそういう発言を望んでたはずだよ。実際に話題になってたし。だから、青木はプロモーターからの要請を必死にこなした。それを試合が終わった瞬間に正気に返れって言われても、それは無理よ。選手っていうのはリング上では頭がパンパンなんだから。

—まあ、そうでしょうね。

柳澤　試合翌日の会見とかで「俺の行動は間違ってない。フ○ック野郎、冗談じゃねえ！」とか言ってたのならよくないよ。だけど、青木は謝ってるじゃん。

—大会翌日「試合後にエキサイトしてしまって申し訳ない」と青木さんは謝罪してますからね。ただ、今回の件で『戦極』も加盟している日本格闘競技連盟からは福田富昭会長名義で処罰を求める意見書が提出されたり、青木選手が所属するパラエストラ東京からは指導者を解任するという発表もあったんですよ。

柳澤　それは筋違いだと思う。私は福田会長には何度も取材してるからよく知ってるし、本当に人として素晴らしい方だと尊敬している。でも、何度も言うけど『Dynamite!!』はレスリングのようなスポーツじゃないし、さらに、『戦極』や日本格闘競技連盟とかが批判するべきことでもないと思う。だって自分の大会じゃないんだもの。

—そうなんですよね。

柳澤　結局『戦極』は自分のイベントを大晦日にできなくて、結果的に『Dynamite!!』に相乗りしたわけじゃん。他所様の興行に相乗りさせてもらって、抗議を求めるってことはないんじゃないの？　それにね、もし青木が廣田に失神KOを食らっていたら、その選手に選手生命が終わる可能性があったことはわかってあげてほしい。

—その可能性もありますよね。

柳澤　そういうリスクを負って試合をしてるんだから。他流試合というのはDREAM内部の試合、『戦極』内部の試合とは違いますからね。対抗戦である以上、大将が勝って「ウチのほうが上」とアピールするのは当然。青木は中指じゃなくて、人差し指を出しておけば問題なかったのにね。

—そうですよね（笑）。で、今回の一連の青木問題というのは、かつての猪木さんの闘いになぞらえる人もいるんですよ。

柳澤　へぇ～、たとえばどういうところ？

—それこそ、76年のパキスタンでのアクラム・ペールワン戦での腕折りであったり、同じ年の韓国でのパク・ソンナン相手の暴走ファイトであったり、他流試合というシチュエーションも含めて、近いところもあるんじゃないかと。〝猪木〟と〝青木〟という語感も近いですし（笑）。

柳澤　アハハハハ。確かにね（笑）。



『ファイト&ライフ』にて「日本レスリングの物語」を連載中のため、日本レスリング協会の福田富昭会長には何度も取材し、尊敬しているという柳澤氏だが、福田氏名義の意見書には首を傾げる。

—それで『1976年のアントニオ猪木』の著者の柳澤さんから見て、二人の狂気性など近い部分があるのか、それとも重なる部分は感じられなかったのかをお聞きできればと。

『戦極』や日本格闘競技連盟が批判するのは筋違いだと思う

柳澤　なるほど。確かに腕を折ったという部分では猪木さんと一緒だね。だけど、腕を折るなんて、プロレスでは異常なことだけど、柔道や柔術では、わりとあることでしょ。プロレスは毎日商売してるわけだから相手を絶対に傷つけちゃいけない。でも、格闘技っていうものは相手が傷つき、自分が傷つく危険性を承知でみんな闘ってるわけだから、そこはずいぶん違うと思うけどね。

—まあでも、猪木さんというのは、プロレスという枠を平気で飛び越えたりする人じゃないですか（笑）。

柳澤　そうそう、そこが猪木さんの異常なところだよね（笑）。でも、腕を折ったことに関して言えば、青木は全然異常じゃないよ。フ○ック・ユーポーズに関しては異常だと思うけどね。

—猪木さんの一連の1976年の闘いっていうのは、『Dynamite!!』とはシチュエーションや時代背景も違いますけど、他流試合という意味では、どちらも負けられないという試合ではありましたよね。

柳澤　そこは一緒だよね。猪木さんがパキスタンでやったアクラム・ペールワン戦は、テレビも来ていたし、猪木さんにとって、絶対に負けるわけにはいかない試合だった。一方のアクラムも背負ってるものが大きくて負けられない。お互いに負けられない試合に関して言えば、「腕を折る前に止めろ」っていうのもへんな話で、リアルファイトである以上、1秒でも早く試合を終わらせたいのは当然。廣田は腕を極められてタップできなかったって言う人もいるけど、口でギブアップと言うことはできたんだから。だけど、廣田にもプライドもあるからギブアップはできない。それは他流試合という意識があったからでしょ。レフェリーが止めれば、相手は「早すぎる」だのなんだの言うに決まってる。だったら極めてしまおう、と青木が考えることは全然悪くない。

—まあ、そうですよね。

柳澤　でも、今回の青木なんかもそうだと思うけど、負けられない試合っていうのがあるんだよね。ペールワン戦をはじめとした1976年の猪木さんの一連の他流試合で、猪木さんが守りたかったのは自分のイメージであり、新日本プロレスだったと思うけど、そういう意味でも青木も「DREAMのために」と凄く考えてたと思う。もし青木が「DREAMなんか関係ねえ。俺は勝手にやるよ」というヤツだったら、ああいうことにはならなかったと思う。たぶん、青木には「俺がDREAMを背負ってる」っていうプロ意識や責任感が凄くあったんだと思う。

—今回の対抗戦に関して言えば、『戦極』の選手たちよりも、そういう意識は青木さんや川尻さんのほうがはるかに高かったような気がします。

柳澤　そういう心意気が青木や川尻にはあったよね。テレビ局の意向とかなんだとか、腹が立つことがいっぱいあったはずなのに、全部を腹にしまって、スポーツとしての格闘技というのを世界に届かせるために努力してるのが彼らだと思うよ。

—ただ、青木さんのDREAM愛というのが、いま一つファンに届い

ていないところもあって。

柳澤　「なんでそこまで」っていうね。まあでも、青木真也というよりも『Dynamite!!』というイベントそのもののほうが猪木さん的ではあるよね。

——と言いますと?

柳澤　だって、『Dynamite!!』でやってたスーパーハルクトーナメントとかっていうのは、要は猪木さんがやってた異種格闘技戦と一緒でしょ。ホセ・カンセコ呼んできたりとか、発想そのものが猪木さんの異種格闘技戦と一緒。石井慧と吉田秀彦の試合だって、猪木vsアンドレの格闘技世界一決定戦みたいなもんじゃん。

——石井vs吉田は柔道出身者同士の格闘技世界一決定戦だった、と。

柳澤　そうでしょ。要するに柔道の王者同士が殴りっこしたら、どっちが勝つんだっていう話じゃん。相撲なら、学生横綱だろうがモンゴル相撲の横綱だろうが、幕下からデビューするのがあたりまえだけど、『Dynamite!!』はスポーツじゃないからこそ、そういうカードを組む。

——『Dynamite!!』的な、世間を振り向かせるための手法というのは猪木さんの時代から変わっていない、と。

柳澤　まったく一緒でしょ。カンセコを呼んできて誰かとやらせるっていうのはUWFから派生した団体がトレバー・バービックやロベルト・デュランを呼んできたやらせたのと一緒で、要するに猪木さん的なものっていうのがいまだにあるわけよ。結局、そういうものだけが〝地上波

『Dynamite!!』のほうが青木真也よりも猪木さん的

的〟なメジャーになる。だから、べつにみんな総合格闘技なんか好きじゃないんじゃないの?

——そうなのかもしれませんね。

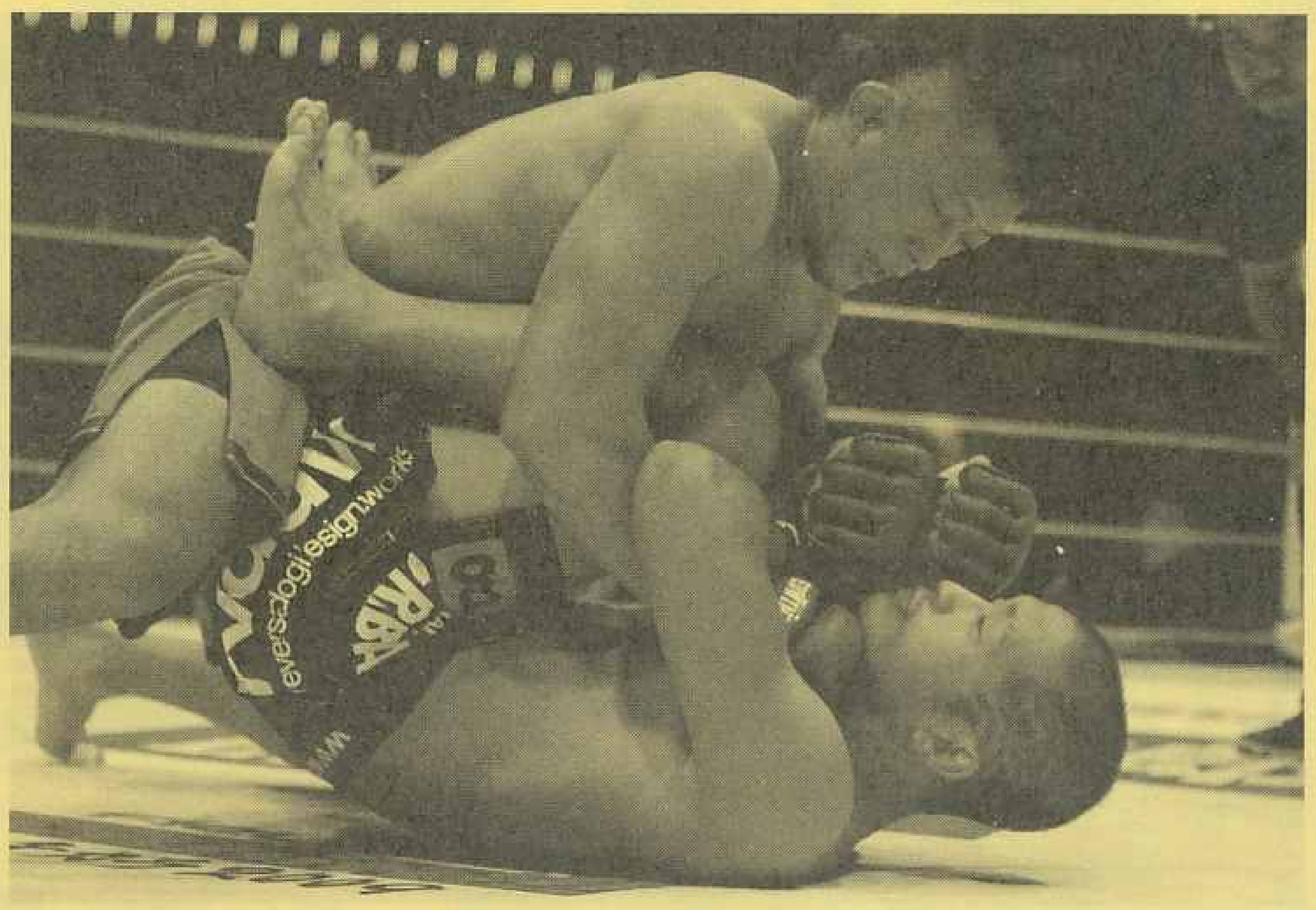
柳澤　でも、青木だとか川尻っていうのは、根本的には競技としての総合格闘技を観てほしいわけじゃない? スポーツとしてのMMAをちゃんとわかってほしい。だけど、みんなはMMAのことが好きなんじゃなくて、猪木さんの異種格闘技戦とかそういう世界のほうが好き。そんな現状を「過渡期だから仕方がない」と無理やりに納得している。

——いわゆる競技的なマッチメイクは『Dynamite!!』という猪木的世界観では、世間に届かないし、話題性に欠ける、と。要はそういったカードでは視聴率が獲れないと判断されてしまうわけですね。

柳澤　TBSなんて視聴率しか考えてないわけでしょ。まあでも、猪木さんと青木というのは、プロレスとMMAというまったく別のものをやっていながらも、その中で突出したオリジナリティを持っているという面では共通していると思う。猪木さんのプロレスを超えた狂気性、青木のほかのどのMMAファイターとも違う圧倒的で独創的な試合スタイル。そういうものがあるから二人ともリスペクトされるわけであって。

——確かに。

柳澤　結局、猪木さんがゴッチさんから学んだ関節技なんて、プロレスの世界では実際には使わないものなわけでしょ。その武器を実際に使っちゃうところが猪木さんの凄いところ。しかも、ペールワン戦のような異常な試合が、テレビに映ってしまった。青木の場合もよけいな部分がテレビに映っちゃったという意味では異常だと思うけどね(笑)。



柳澤氏が選んだ00年代ワーストMVPはTBS。『Dynamite!!』での川尻vs横田戦が地上波放送で全カットだったこともご立腹。「私が川尻だったらメチャクチャ文句言う! TBSは国際プロレス時代から……」と大炎上!!

——なるほど(笑)。

柳澤　結局、猪木さん自身にはいろんな引き出しがあって、エンターテインメントなアメリカンプロレスも猪木さんだし、タイガー・ジェット・シンに襲わせて事件まで作り上げるという大仁田的なケレン味みたいなのも猪木さんだし、真剣勝負を外国でやって目の中に指まで入れたり、腕まで折ってメチャクチャにしちゃうのも猪木さんだし、全部が猪木さんなんだよね。「世間に届かす」とかよく言うけど、『Dynamite!!』なんかも発想そのものが猪木さんなんだよ。

——それは言えますよね。

柳澤　昔『kamipro』で出した『猪木とは何か?』じゃないけど、私なんかも「○○とは何か?」ってことばっかり考えているわけよ。「女子プロレスとは何か?」とかさ(笑)。そんなことを考えさせてくれるのは猪木さんだけでしょ。そういう意味では青木なんかも試合のたびに「青木真也とは何か?」と考えさせてくれる存在ではあるよね。

——あ〜、よきにつけ悪しきにつけ、それはあるかもしれませんね。

柳澤　今回の件で私が言いたいのは、ファイターこそが宝物ってこと。『Dynamite!!』がなくなっても、PRIDEがなくなっても、『戦極』がなくなっても、DREAMがなくなっても私はべつにかまわない。だけど、青木はまさに10年に一度の選手だし、石井みたいな選手も川尻みたいな選手もなかなか出てこない。……だからって、中指を立てたことを大目に見ろって言ってんじゃないよ(笑)。

——はい、よくわかります(笑)。

柳澤　青木がやった「フ○ック・ユー」は悪いこと。それはちゃんと謝らなきゃいけない。でも実際に謝罪しているわけで、このうえさらに出場停止処分が下るようであれば、それはナンセンスだと思う。

——そのへんに関しては今後の動向を見守るしかないというか。

柳澤　そうだね。結論としては、今回の事件は『Dynamite!!』というエンターテインメントの舞台で起こってしまったことであり、スポーツのレベルで裁くことではない、ということ。確かに謝罪の必要はあるけれど、他団体からの抗議を受けて出場停止処分を科したり、修斗のベルトを剥奪するという発想は間違っています。

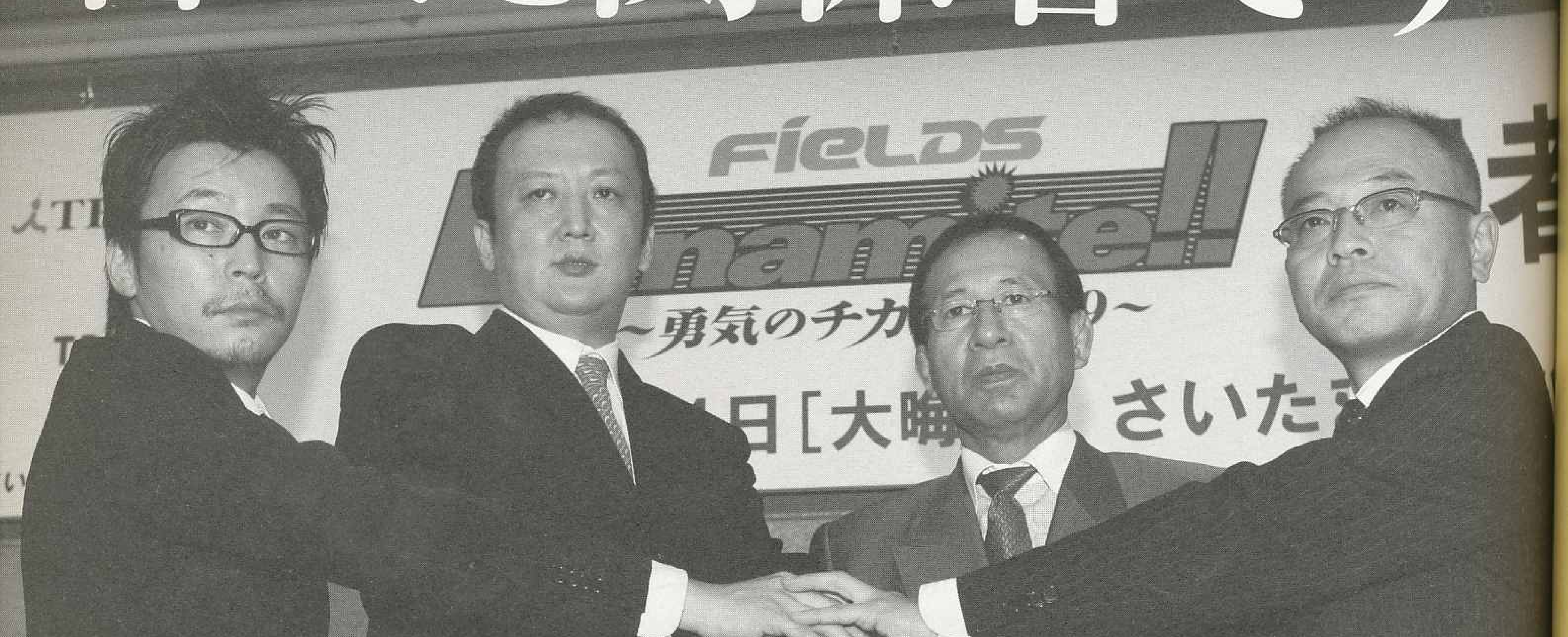
【10年1月9日／都内・某所にて収録】



やなぎさわ・たけし■1960年、東京都出身。慶應義塾大学法学部卒。84年に文藝春秋に入社。『週刊文春』、『Number』編集部を経て03年退社。以後フリーとして各誌紙で活躍中。09年3月に『完本・1976年のアントニオ猪木』(文春文庫)を刊行。

サダハルンバ、新年早々サトちゃん（石井慧）にゾッコン!?

青木真也を追い詰めたのはボクや戦極を含めた関係者です



日本格闘競技連盟の意見書にも言及!

FEG代表

谷川貞治

新年一発目のサダハルンバインタビュー。テーマはもちろん青木真也である。日本格闘競技連盟からは意見書なるものが提示され、事態はより複雑になっているが、サダハルンバはいったいどう思っているのか？ そしてジャニー谷川の"恋のお話"もポロリ!?

聞き手／ジャン斉藤　写真／乾晋也

結局、そういうものだけが〝地上波

MAというまったく別のものをやっ

わけでしょ。その武器を実際に使っ

極』がなくなっても、DREAMがな

春」、「Number」編集部を経て03年退社。以後フリーとして各誌紙で活躍中。09年3月に「完本・1976年のアントニオ猪木」（文春文庫）を刊行。

——谷川さん、あけましておめでとうございます！

谷川　本年もよろしくお願いしま～す。

——さて、今回は新年早々揉めている〝青木真也問題〟についておうかがいしなきゃいけないんですよ。

谷川　そうなの？　ボクの周りはあんまり反響ないよ。

——あれれ、そうなんですか。

谷川　それより、しるこサンドの反響のほうが大きいよ！

——しるこサンド？　あんなの単なるクッキーじゃないですか（冷たく）。

谷川　んあ～！　しるこサンドをバカにしちゃいけないよお（小鼻をピクピクさせながら）。

——そのしるこサンドをお茶菓子にして、『戦極』サイドとの揉め事を丸く収めてくださいよ。

谷川　そうだねぇ。ドン・キホーテの安田会長は岐阜出身だから、じつはドンキでしるこサンドが売ってるんだよね。さすがだよねぇ。

——もしかしてまだまだ続きます、しるこサンドの話？（笑）。

谷川　真面目な話、青木くんの試合に関しては、TBSの人から言われたのも「総合格闘技のイメージをよくするためには、ああいう行為はよくないんじゃないか？」ってぐらいだったんですよ。

——だったら地上波で放送しなきゃいいのに。

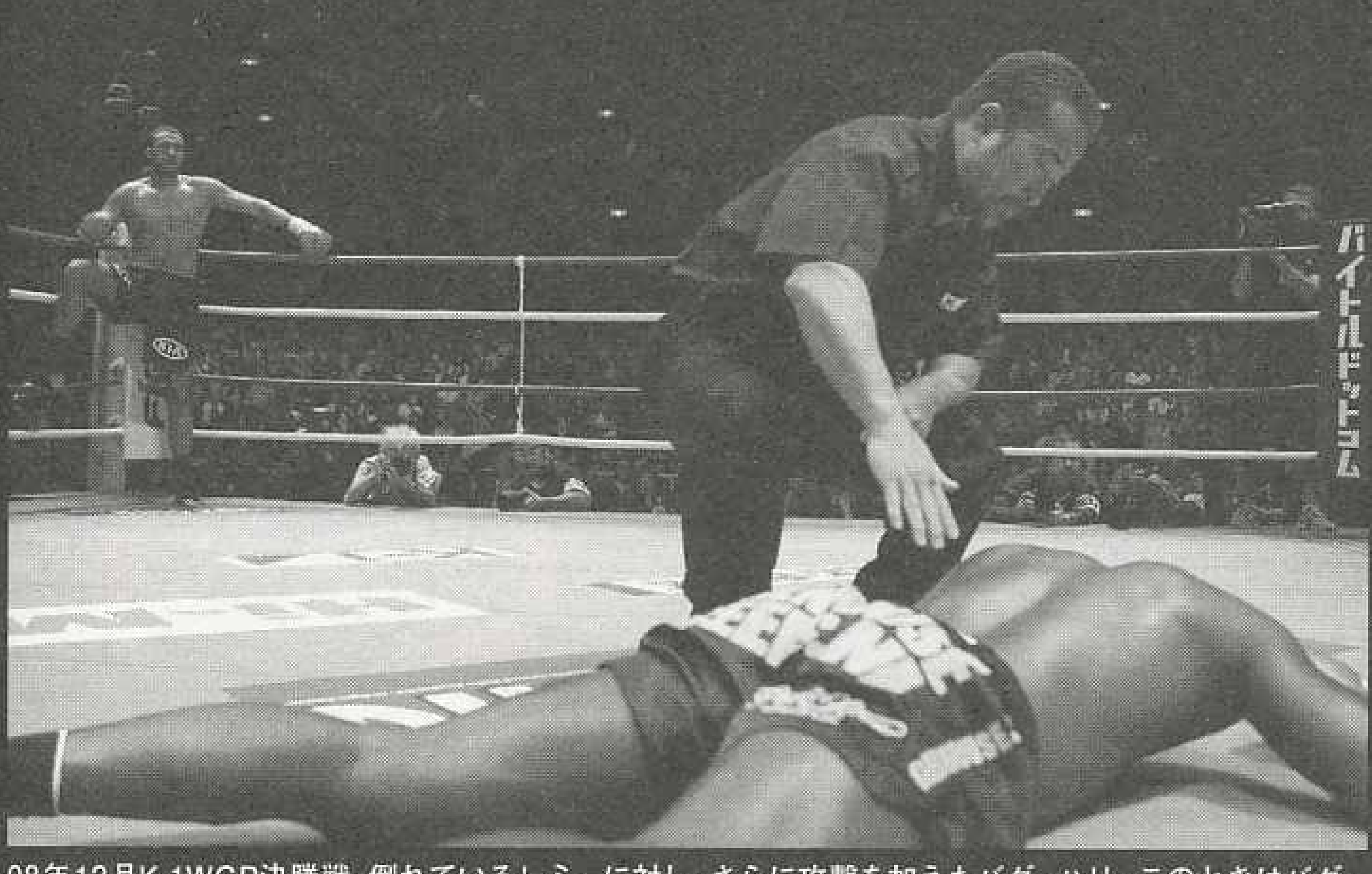
谷川　あれはTBSももうバタバタで「流した」というより「流れちゃった」んでしょう。普通はカットしていると思いますよ。

——インパクトがありすぎますよね。腕折りに中指挑発ですから。

谷川　腕を折ったことについては青木選手が悪いというわけでは全然ないと思うよ。あの場面で誰が止められる可能性があったかというと、それはやっぱりレフェリーと廣田選手のセコンドになるけど、でも関節技って一瞬だからさ。止める余地があったかどうかはボクは検証してないからわからないけど、これに関しては青木選手が悪いとは全然思わないです。

——そこで青木真也を責めたら格闘技というジャンル自体が成り立ちませんよね。

谷川　やっぱり今回の廣田選手みたいに絶対にタップしない人も出てくるじゃない。たとえば、桜庭和志vsホイラー・グレイシーでレフェリーが試合を止めたときに「止めるのが早い」ってホイラー側が猛抗議して問題になったように、今回ももし止めたときに廣田陣営が「なんで止めるんだよ！」という話になってたかもしれないからね。まして三崎戦のあとだったし。



08年12月K-1WGP決勝戦、倒れているレミーに対し、さらに攻撃を加えたバダ・ハリ。このときはバダ・ハリが「スポーツマンシップに反する」と判断されレッドカードが提示され、失格負けとなった。


06年『Dynamite!!』秋山vs桜庭戦で、クリーム塗布が発覚した秋山。最終的に秋山は無期限出場停止処分となった。これは“マナー違反”とは言いがたい事例だが、はたして青木のケースはどうなるのか!?

青木選手を使うか使わないかはボクらプロモーターが考えるだけ

——ストップに関する〝意見書〟が提出された可能性はありますよね。

谷川　とくに今回は対抗戦でしょ？　そういう勝負のときに、途中で止めるのはレフェリーも難しいと思うしさ。繰り返すけど、腕を折ったことに関しては、青木選手が悪いとは思わないですね。で、もう一つ。中指を立てたことに関しては悪いと思いますよ。

——これはマナーの問題になりますか？

谷川　そう。そのマナーの問題に関して対抗戦ルールにどういうふうに書かれてたかはわかんないけども、プロのファイターとしてのマナー規定みたいなものがあるとしたら、そこでたとえばレフェリーなりがイエローカードを出して罰金を取るのが一番いいと思いますね。あれは絶対よくない。

——マナー違反ということでの罰則。

谷川　そこはもう競技の問題。そして、青木選手をこれからどう使っていくのか、あるいは使わないのかというのは、これはもうプロモーターの判断なんで、それは世論を見ながらボクらが考えるだけですよ。だから、そこでプロモーターが出場停止処分にするというのはボク個人の意見としてはおかしな話だと思うよ。

——まるでどこからか「出場停止にしろ」という圧力があるかのような話ぶりですね（笑）。

谷川　それにマナー違反にもいろいろあって、たとえばレミー・ボンヤスキーが倒れてるのに、バダ・ハリが踏んづけたりした試合があったじゃない。ボクはね、試合後や中断中の接触行為に関しては、重大な反則だと思うんですよ。勝負が決してるのに相手に危害を加えてるわけだからね。でも、青木選手の場合はそれでもないんだよ。

——危害は加えてないですね。

谷川　だから、まずはマナーに反する行為の規定があるとしたら、そこに対してのイエローカードであって、ボク個人は

対抗戦をやる中で、正直舞台裏ではお互いトラブルやストレスがあった

そのイエローカードに関しても、レッドカードまではいかないと思う。で、もしたとえばコミッショナーみたいな機関があって、そういう倫理規定も正式にあるんだったらそこで判断すればいい話だからね。だから、ボクの個人的な意見があるとしても、そこはプロモーターが判断する話じゃないと思います。

——谷川さんが判断する話じゃない、と。

谷川　だって、そこでプロモーターが意見を言うと、なんか政治的に「政治力が選手の自由を奪った」もしくは「守った」みたいなことになるからね。それが一番ファンに反感を買うことです。プロモーターが考えるのは選手をどう使っていくかということだけだから。だから一番失敗だったのは、秋山（成勲）くんの問題（クリーム塗布）のときに世間の波に押されて、ボクが関わったり、しゃべったりしたことなんですよ。あそこでプロモーターのボクが介入したから、ちょっとおかしな話になっちゃったんだよね。

——ただ、実際いまDREAMサイドでいうと、コミッショナーとかルール委員会ってないですよね。そういう場合はどうするんですか？

谷川　それでもやっぱり競技の中で話し合うべきだと思いますけどね。ルールに書いてなくてもやったほうがいい。で、もう一つ青木選手に関して言うと、ボクは「対抗戦に前田日明が足りない」とか言ってたじゃない。

——青木選手には前田さんや長州さんのように『戦極』に噛みついてほしいと言ってましたね。

谷川　そう煽ったボクから見ると、青木選手はそれを純粋すぎるほどストレートにやったんだよね。その背景には、DREAMと『戦極』が対抗戦をやる中で、正直舞台裏ではお互いにいろんなトラブルがあったりストレスがあったわけですよ。



1月7日、『SRC』の会見にて日本格闘競技連盟・福田富昭氏名義の意見書が発表された。本来ならばコミッション的立場の福田氏が単体で会見を開くべきだと思われるが、『SRC』の会見で意見書を発表したことが、よけいに話を複雑化させている。

そういうストレスが青木選手の耳に入ったりしたのか、DREAM軍の〝大将〟としてストレートすぎるぐらいに言葉で発し、試合後にその感情が出ちゃったという感じだよね。つまり、青木選手を追い詰めたのはボクも含めた関係者の責任だったということなんですよ。そこはファンにもわかってほしい。

——その関係者というのは、『戦極』サイドも含めた関係者ということですか？

谷川　そうです。純粋すぎるがゆえにやったことだし、ボク自身、青木選手ときちんと向き合ったわけではないんだけど、何かあるともの凄く気にする性格だって聞くし。だからいまだっていろんな人たちの意見を聞いてホントに落ち込んでると思うよ。腕を折ったことに関しても、同じファイターとして廣田選手には申し訳ないって絶対に思ってるんじゃないかな。その気持ちはボクはわかってあげたいと思うし、ファンにもわかってあげてほしいです。

——つまり、青木真也が中指を立てて舌出した行為というのは、大晦日の舞台裏の交渉を含めた対抗戦における象徴的な出来事だったと谷川さんは理解してるということですね。

谷川　そう。やりすぎだと思った人も多いと思うけどね。でも、みんながそこまで青木選手を追い込んだんですよ。だから、あくまでも指を立てる行為はよくないけども、やっぱり誰よりも大きなDREAMへの愛情だったわけだし、非情さも持ってるし、ファイターとしては凄いなと思いましたけどね。これはかばうわけじゃなくてね。

——いや、ホントに試合は凄かったですもんね。

谷川　凄いタマだなって思ったね。

——今回の青木真也の件で、『戦極』の会見では日本格闘競技連盟から意見書が出されましたけど、全文はお読みになりました？

谷川　サラッと見ました。

——サラッと？

谷川　べつに反論しようとする気持ちがないからね。

——それはどういう意味ですか？

谷川　誰かから何かを言われて処分することじゃないと思うんですよ。ただ、そういう会見を開いたり、過敏に反応する人たちがいること自体、青木選手と同様、ストレートなぐらい純粋な人たちだなとは思うけど。

——その意見書には「青木選手を焚きつけた関係者がいる」というふうに書いてありましたけど、そこまで青木真也を煽った人がいるんですか？

谷川　それは知らない。でも、そのぐらいの気持ちで試合をしろってことは、べつに今回の対抗戦にかぎったことじゃないよね。むしろ「殺すつもりでいけ！」って発破をかけるのは格闘技ではありふれた光景だと思うし、「ぶっ殺せ！」って言われても実際に殺す人なんかいないよね。

——でも、意見書ではそこを問題視してるみたいですよ。

谷川　うーん、それはボクはあんまりピンとこないですね。

——文面を読むかぎりでは、イエローカードやレッドカード以上の処分を求めてるとも読み取れるんですけど。

谷川　まあ、それは一つの意見でもあって、そういう意見なんだなという気持ちでは受け止めてはいるけど、処分する、しないというのは言われなくてもDREAMとして考えるべきだと思う。

——では「青木選手によって団結が壊された」と主張している部分はどうですか？ボクは逆にDREAMと『戦極』って団結

谷川貞治

してたんだってビックリしたんですけど。

谷川　団結が壊された……?　ボクは団結が青木選手の行為自体で壊れることはないと思ってるんですけど、こういう意見書やらのやり取りにこだわっていくと壊れますよね。もちろん考え方としてはよかれと思ってやってるんでしょうけど、ワールドビクトリーロードさんに対するファンの印象も含めて悪くなる可能性は高いですよ。だから凄く慎重にやらないといけない話ですよ。

——こういう事態になってること自体、団結どころか信頼関係が築けてないってファンは受け止めてると思うんですね。

谷川　そう思われちゃうだろうね。でもボクは『戦極』さんがFEGと付き合ってくれる以上、『戦極』にもどんどんメリットを持ってもらいたいと思ってるんですけどね。そうじゃないと交流した意味がないし。『Dynamite!!』に出ることで、知名度も含めてメリットをどんどん持ってもらいたいんだよ。今回は凄くいいきっかけになったんじゃないかな。

——もともと今回の対抗戦は、今後も一緒にやっていく前提の企画だったんですか?

谷川　もちろん前提にはありましたね。ただ、具体的にどうやっていくかという話まではしてないです。それは『やれんのか!』とまったく同じ状況ですよね。『やれんのか!』で旧PRIDEスタッフに協力したことに関しては、大前提として「来年から一緒にやっていきましょう」という話はもちろんありましたよ。ただ、イベント名とか、どういう路線でいくかとか、そういうことは全然決まってなかったですから。

——『やれんのか!』とは違って、今回のケースが建設的じゃない雰囲気を感じるのはなぜでしょう?

谷川　まあ、同じようなかたちで今回の『戦極』との協力もスタートしてるんですけど、『やれんのか!』のときはね、舞台裏で一切揉めたことがないもん。それは、ボクらと彼らがPRIDEとK—1で対立してはいたけど、やっぱり感性の基盤が同じだったからだと思うんです。でも、『戦極』とは感性の部分が違いますよね。「見せる」とはどういうことかという考えが違うよね。だから意見はわかるけど、あの意見書を発表した会見のやり方は、ボクらの感性にはないですから。

——『やれんのか!』のときは、同じ感性でできると思ったから続けて一緒にやっていこうと思ったわけですか?

谷川　だから『やれんのか!』のときボクはどう思ったかというと、もう全部彼らに任せようと思ったんですよ。感性の基盤は一緒だから、決定的に何か揉めるってことはないと思った。で、彼らに総合格闘技を任せようと思ってできたのがDREAMだったんですよね。もちろんいまでもボクなりの仕事はやってるんだけど、お互いの考え方が似ているから、へんなところでせめぎ合いにはならないし、おかしくなることはないんですよ。でも、『戦極』とはそこがまだできてはいない。ボクらに任せてくれるのかどうかも含めて。



07年大晦日の『やれんのか!』では、それまで対立関係にあったK-1と旧PRIDEスタッフが協力し、サダハルンバも揉め事が一切なかったと語っている。しかし、『SRC』とのケースは『やれんのか!』とは状況が違うようだ……。

ボクらに任せてくれるんだったら廣田、金原、三崎の活かし方も考える

——そこは『戦極』の人たちとの信頼関係はまだ築けていないということなんですか?

谷川　そうですね。信頼関係もまだまだこれからだし。逆にボクらに任せてくれるんだったら、廣田選手の活かし方、三崎選手の活かし方、金原選手の活かし方を考えますよ。でも、あくまでも自分たちでやりたいんだったら、こういうジャンルはそこで船頭が二人いちゃいけないと思うし。

——船頭はあくまで一人ですか。

谷川　うん。DREAMのときは、船頭は旧PRIDEスタッフに任せようと思ったんです。だからボクらはもう宇野vs石田でも、宇野vs青木でもOKだったし、彼らがKIDくんをプロデュースしたらどうなるんだろうみたいな興味もあったしね。その中で秋山くんなんかはそこに乗れなかったし、所くんなんかは歯を食いしばって乗り越えようとしてるわけだし。だってボクが所くんや秋山くんを使ったら任せるとはそういうことなんですよ。全然違ったわけだからね。それは青木くんや川尻くんもしかりで。

——『戦極』の人たちに任せないとしても、今後、選手を派遣して交流戦を行なうことは考えてますか?

谷川　それは、根本のところで誰が『戦極』というコンテンツを作っていくのかによりますよ。その点、いままでは國保さんだったわけだけど、これから誰がやっていくか、そういう人たちと信頼関係をいかに作っていくかですよね。

——谷川さんとしてもちゃんと『戦極』の方向性を見てから動きたいというわけですね。

谷川　団体のポリシーがあってもいいけど、いかに信頼関係を築けるかだろうね。

——じゃあ意見書に書かれてあるように、青木問題が両団体の結束を崩すということはないということですね。

谷川　うん。青木選手の行為自体は関係ない。ただ繰り返しになるけど、青木問題をお互いがどう処理するかというのは『戦極』側には関係あるんだろうね。というか、影響は出ますよね。

——たとえば『戦極』が「青木が出るイベントとは交流戦はできない」という姿勢だったらどうしますか?

谷川　というか、そういう問題じゃないんだよ。だってその理由を挙げられるんだったら交流戦をしていく意味がないも

ん。それに、さっきも言ったけど、出すか

吉田道場勢の扱い方の配慮はしたいと思

川選手が登場してきたからビックリした

ないということをツイッターでつぶやい

青木問題よりも、一番なんとかしないといけないのは石井慧選手

ん。それに、さっきも言ったけど、出すか出さないかはプロモーターの判断であって、それはDREAMで考えていくことですからね。逆にたとえばボクが『戦極』のプロモーターだったら、「勝ち逃げなんて許さない」って会見をするかもしれないし、「あんな屈辱はない。次は北岡と闘え」とか「じつはBJペンは『戦極』の選手だから闘え」とかは言うかもしれないよ～。

——ダハハハ！ でも、そのほうが健康的ですよね。

谷川 それがプロモーターの仕事だから。

——なるほど。しかし、これは無事に解決するんですか？ けっこう感情的なもつれになっちゃってますけど。

谷川 いや……どうなんだろうなあ。

——あの会見を見るかぎりはただごとじゃないですよね。たぶんイエローカードとかじゃ済まさねえぜっていうオーラが漂ってますし。

谷川 それは誰が納得するか、どういう基準で納得するんですかってのがわからないからね。解決する、しないで言うと、そういう意味では絶対に解決しないですよ。

——解決しないんですか（笑）。あと気になるのが、『戦極』側が吉田道場勢は使わないと宣言したことなんですよね。

谷川 みたいですね。まあ、『戦極』との関係の中において、うまい関係でできるんだったらば、それはやっぱり配慮はしたいと思ってますけどね。DREAMでの吉田道場勢の扱い方の配慮はしたいと思ってます。

——もし『戦極』が吉田道場とダメなんだったら、たとえば吉田選手の引退興行は國保さんが自主的にやるか、FEGさんがやるかたちになったりするんですか？

谷川 いや、FEGはないですね。話もないでしょうし。そこはいろんなものが整理されてからですよ。大晦日だって結果的に小見川選手も出てきたりしたじゃない。

——確かに『戦極』と吉田道場の関係性を考えると、あの判断は不思議でしたよね。そこは吉田秀彦が出るんだったら小見川も使ってくれっていう交渉があったんですかね？

谷川 ボクもよくわからない。でも、小見川選手が登場してきたからビックリしたって感じだけど。その件に関してはコメントのしようがないぐらい情報がないんだよね。

——じゃあ1～2カ月経たないと、『戦極』との向き合い方、吉田道場との向き合い方を含めてよくわからない、と。

谷川 そうですね。ただ、青木選手の問題よりも、一番なんとかしなきゃいけないなと思うのは、やっぱ石井（慧）選手だよ。いろんな意味で日本の格闘技界の大黒柱になってもらうには、いまのままじゃダメだと思う。

——役割ということで言えば、石井選手が担ってる役割って充分はたされてないですよね。

谷川 だから、大晦日が終わってボクの一番の感想は「石井選手どうなるんだろう？」っていうことですよ。その次が青木選手の件も含めて「『戦極』とどうしようか？」ということ。その次が吉田選手だよね、優先順位としては。

——優先順位のナンバーワンは石井慧の今後。

谷川 だって青木くんの試合に関してなんかは、終わった瞬間に自分の中で結論が出てるもん。だから全然動揺も何もないんだよね、自分の中で答えがあるから。

——ちなみに、石井選手は『戦極』との契約があと一試合残ってるんですよね。

谷川 うん。次が大事なんだけどなあ。ボクだったらこうするなというのはあるんだけど……（遠くを見つめて）。

——谷川さんは石井サイドに信用されてないということをツイッターでつぶやいてたじゃないですか。

谷川 うん。まーっったく信用されてない！

——まあボクも石井さんの側近だったら絶対「サダハルンバに騙されるな！」って言いますけどね。

谷川 ホント、周りも含めて誤解されてるんだよお。でも、慧くんをなんとかできるのはボクだけだと思うんだけどなあ。それに、じつはサトちゃんボクのこと好きだと思うんだよね。

——石井選手から慧くん、そしてサトちゃん！ 谷川さん、ズバリ気持ち悪いです。

谷川 だって、サトちゃんのことを一番わかってあげられるのはボクなんだよ！ それに……かわいいよね。

——あ～、また始まった。とりあえず、気になる選手は「かわいい」とほめればいいと思ってないですか？

谷川 そんなことないよぉ。

——ちなみに、そのかわいさはHIROYAくん以上ですか？

谷川 HIROYAくんは、最近ちょっとすれてるもん。大人の階段を上ったって感じがするなあ。

——はあ。なんだか意味深だ。

谷川 でもサトちゃんは……純粋でかわいいんだよなあ。

——じゃあ、誌面を通じてラブコールを送ってくださいよ（適当な感じで）。

谷川 え～、こほん。……サトちゃん！ 恥ずかしがらずにボクの胸に飛び込んでおいでよぉ！ まずは一緒にしるこサンドを食べよう。うふふふ！

——さて、もう気が済みましたか。

【10年1月8日／都内・FEG赤坂分室にて収録】

谷川貞治



カワイイ男の子が大好きなサダハルンバことジャニー谷川。今年一発目に気になったのは、サトちゃんこと石井慧だという。しかし、ツイッターではサトちゃんに「信用されてない」とボソリ。はたしてサダハルンバの恋の行方は？

日本格闘技連盟が青木真也に処罰を要求!
怒りの意見書会見全容

**大晦日の余波がまだまだ消えない1月中旬、なんと『SRC』が会見を開き、日本格闘技連盟名義の青木真也に対する怒りの意見書を提示!
さらに想定外だったのは、同会見で『SRC』が吉田道場勢との絶縁を明言したことだ。いったいこの会見では何が起こっていたのか!?**

雷電杯は"宝探し"だった!?

**青木問題、ますます混乱状態に!?
1月7日、『戦極』あらため『SRC』が会見を行ない、なんと青木真也ならびに青木を焚きつけたとされる関係者に対し、意見書を提示した。
その内容はすでに出回っているが、『Dynamite!!』の対抗戦の大将戦である青木vs廣田の試合で、青木真也が敗れた廣田に対して舌を出し、中指を突き立てた行為に対し、処罰を求める内容となっている。
意見書の存在自体もさることながら、その意見書が会見を開いた『SRC』ではなく、会見にも出席してない日本格闘技連盟・福田富昭氏名義で提示されたものであることも混乱に拍車をかけている。これは、いったい誰が怒っているということなんでしょう……?
それはさておき、その会見で提示された意見書を公開。内容は以下のとおりである(以下、原文ママ)。**

■『FieLDS Dynamite!!〜勇気のチカラ2009〜』廣田vs青木戦における青木選手の廣田選手に対する侮辱行為に関する意見書

昨年大晦日に開催された格闘技イベント『FieLDS Dynamite!!〜勇気のチカラ2009〜』の第16試合終了後において、試合当事者の青木真也選手による、常軌を逸した許されざる行為が見られました。ここに改めてその内容をつまびらかにすると共に、厳重なる抗議と強い遺憾の意を表明する次第であります。

周知のように、青木選手は対戦相手である廣田瑞人選手の右上腕骨を折る結果となり、試合はレフェリーストップによる青木選手の勝利が確定いたしました。当然のことながら格闘家同士の真剣勝負を行なっている以上､試合の経緯については敢えて言及するつもりはございませんし、青木選手のことは日本ライト級屈指の実力者であると認めております。

しかしながら、全国ネット放送という総合格闘技の地位を向上させる最高のチャンスにも関わらず、青木選手の試合直後の節度を越えたパフォーマンスにより、そのチャンスは水泡に帰することになってしまったと考えます。レフェリーストップがかかるまで戦い抜きリングに横たわる敗者に向かって、敬意を表するのではなく、舌を出し中指を突き立て、さらに観客の怒号が飛びかう中、骨折させた部分をことさらに強調するかのように腕をぐらぐらさせて、リング内を得意気に走り回るという行為を繰り返しました。

当連盟傘下団体の主催する試合において、同じ陣営の選手が今回の青木選手と同様の行為を取るならば、選手資格の取り消しをも含む厳罰な処分が下されることは言うまでもありません。

また試合後のインタビュー等においても、形式的に謝罪の弁は述べておりますが、青木選手から反省の気持ちを感じ取ることはできません。別紙のインタビュー記事(大会後の青木の試合後インタビュー)にも記載の通り、青木選手は笹原氏より厳重注意を受け「反省しています」と言いながらも、その後フィニッシュした極め技のことを「笹原さんが『刺しに行け』と言って、しっかり刺してきたので『笹原圭一2010』です」とコメントしたり、廣田選手の腕を「確実に折りにいきました」と述べるなど、誠意と謝意は微塵も感じられない言葉を重ねております。

いずれにせよ我々は、青木選手自身はもとより、彼をその影響下におき、煽り立て、結果としてかかる振る舞いに至らしめたと推測される関係者に対して、心からの猛省を促すと共に、然るべき処罰を強く求めます。少なくとも「厳重注意」「反省」といった、お手盛りの言葉とやりとりで許される類いのものでは決してないはずであると考えます。

総合格闘技を目指す若者は、荒くれ者の集りではなく、柔道やレスリング、フェンシング等と同じように、紳士的で礼儀を守り人間的にも人から愛される、教養ある人間でなくてはならないと考えます。われわれ日本格闘競技連盟の構成メンバーは、総合格闘技を真のスポーツとして確立し、いずれはオリンピック種目にまでその地位を引き上げようと日夜努力している立場からも、今回の不祥事は断じて看過することができませんし、何より最強を求め日々努力を重ね、栄光の舞台を目指し一生懸命練習をしている選手たちまでもが、社会に対しまるで無法者集団のごとき印象を与えてしまったのではないかと思うと、これほど残念で無念なことはありません。

今後、二度とこのような行為が行われないよう、厳重なる処罰を望む次第であります。

2010年1月7日
日本格闘技連盟会長　福田富昭

また、その後の質疑応答では同会見で発表された3月7日の両国国技館大会の件や、吉田道場勢、DREAMとの今後の関係性に話がおよび、稲村営業統括本部長、飯田広報

からは気になる回答が続出した。そ

ませんが、その直後の行為というの

な、と。あるいは合同開催というの

りません。『SRC』のリングで闘う[illegible]させていただきました。今年はそれ

（焚きつけた関係者が）いるかいないかは我々ではわかりません

からは気になる回答が続出した。その内容は以下のとおり。

――今日の青木選手に対する意見書というのはDREAMサイドには送るのか？

稲村　これからです。今回の会見が一番最初のリリースになります。

――『SRC』としては、青木選手に対してどの程度の処分を要求されるのか？

稲村　私どもは今日の書面やこうして抗議させていただいた以上は、青木選手サイド、あるいは青木選手が所属する団体の判断に任せたいと思います。

――『Dynamite!!』の大会自体はTBSとFEGの主催で、青木選手はDREAMの選手だが、意見書はどちらに送るのか？

稲村　とくに送付はする予定はございません。青木選手の関連する団体、あるいは所属しているところからも話は来ておりますので、いずれ早い時期になんらかの発表があると聞いておりますので、それを見たうえで我々も対応してどうするかを考えたいと思っております。試合内容的には、上腕骨折という痛々しいかたちでレフェリーストップという勝負になったわけですけど、骨が折れてしまったことに関しては、これはもう試合中のことですので、そこについては我々はとくに意見は持っておりませんが、その直後の行為というのは、スポーツ界においてあってはならない行為と考えますし、仮にほかのスポーツにおいて同じような行為がなされた場合どのような批判を浴びるのかということを考えていただき、また一方でこの行為が総合格闘技というもの全体を冷えさせてしまうというか。せっかくDREAM側といろいろな困難を乗り越えて団結して大晦日イベントを開催したにもかかわらず、この行為一つがそれをブチ壊してしまったと、我々はそういうふうに思っておりますので、そのへんを青木選手サイドにはご理解をいただき、処分を決定していただきたいと思っております。

――意見書には「彼をその影響下におき、煽り立て、結果としてかかる振る舞いに至らしめたと推測される関係者に対して、心からの猛省を促すとともに、然るべき処罰を強く求めます」と書かれていますが、具体的にそのような関係者がいたのか？

稲村　いるのかいないのかは、これはもう我々はわかりませんので。ここは関係者のほうに判断をしていただきたく思っております。

――今後、DREAMとの対抗戦を続ける可能性は？

稲村　青木選手の件はちょっと横に置かせていただいて、一つの大きな総合格闘技というものを考えれば、対抗戦というのは意義のあるものかな、と。あるいは合同開催というのは意義があるものかなと考えております。今年1年のあいだにそういったチャンスがあるかもしれませんし、今後いろいろな話し合いがあるかもしれませんが、我々とすればそういった話し合いは前向きに取り組んでいきたいなと考えております。

――廣田選手は試合前体調が悪かったということだが？

飯田　試合前日に計量と会見があったんですけど、計量の日の朝に僕のほうに電話がありまして「今日の会見出なきゃダメですか？」って言うんで「どうしたんですか？」って聞いたら「凄い体調が悪いんです」って言ってまして。計量のときに話をしたら、上からも下からも戻すような感じの状態ということで。ちょっと原因はハッキリはわからないんですけども、そういった症状は訴えていました。減量苦というわけではないと思います。

――試合後はノーコメントだったが、何か話は？

飯田　翌日、病院に行ったときに話した言葉ですと、「とにかく悔しい。ぜひもう一回、青木選手と試合がしたい」と言ってました。あとは「すぐ終わってしまって、試合をした気がしない」とも言ってました。

――青木選手の行為に関しては？

飯田　とくにそれは言ってませんでした。

――吉田選手の今後は？

稲村　吉田選手は一部報道では、次の試合が最後というようなことが取りざたされてますが、我々はそこに関しては具体的に直接お話はしておりません。『SRC』のリングで闘うのかどうかもちょっと話し合いは一切しておりませんので、いまはコメントできる状態ではないです。

――今後、取締役を解任された國保（尊弘）さんがマネージメントしている吉田道場勢との関係はどうなる？

稲村　いまの状態であれば、『SRC』のリングに上がることはないと思います。

――当初は年末にタイトルマッチが予定されていた小見川選手や瀧本選手の出場もないのか？

稲村　そうですね。

――今後、吉田道場勢と交渉していくつもりは？

稲村　私どもはありません。

――それは國保さんが関係しているから？

稲村　そこが所属事務所ですので、我々とするとそことの交渉をする用意はない、と。

――『SRC』でトーナメントを開催するという話も出ていましたが、3月大会から開催する予定なんでしょうか？

飯田　その予定です。そういった話し合いを今週末に詰めて、来週にでも発表できるように調整していきます。

――「雷電杯」とはなんなのか？

稲村　今年の我々のリングの一つのテーマにもなるんですが、雷電という日本古来の相撲界においての伝説の格闘家、これをいまのこの時代の一番強い格闘家は誰なのかという宝探しのようなイメージで、『SRC』のリングでこの時代における雷電は誰なのか、と。そういう意味で大晦日には「雷電杯」という打ち出しをさせていただきました。今年はそれが我々のリングの大きなテーマになってくると思います。

――タイトルマッチではない？

稲村　違いますね。それがタイトルマッチにも影響してくるかどうかはトーナメント等の作成にも影響してきますので、今週の打ち合わせ、来週の発表あたりでご説明できると思っております。

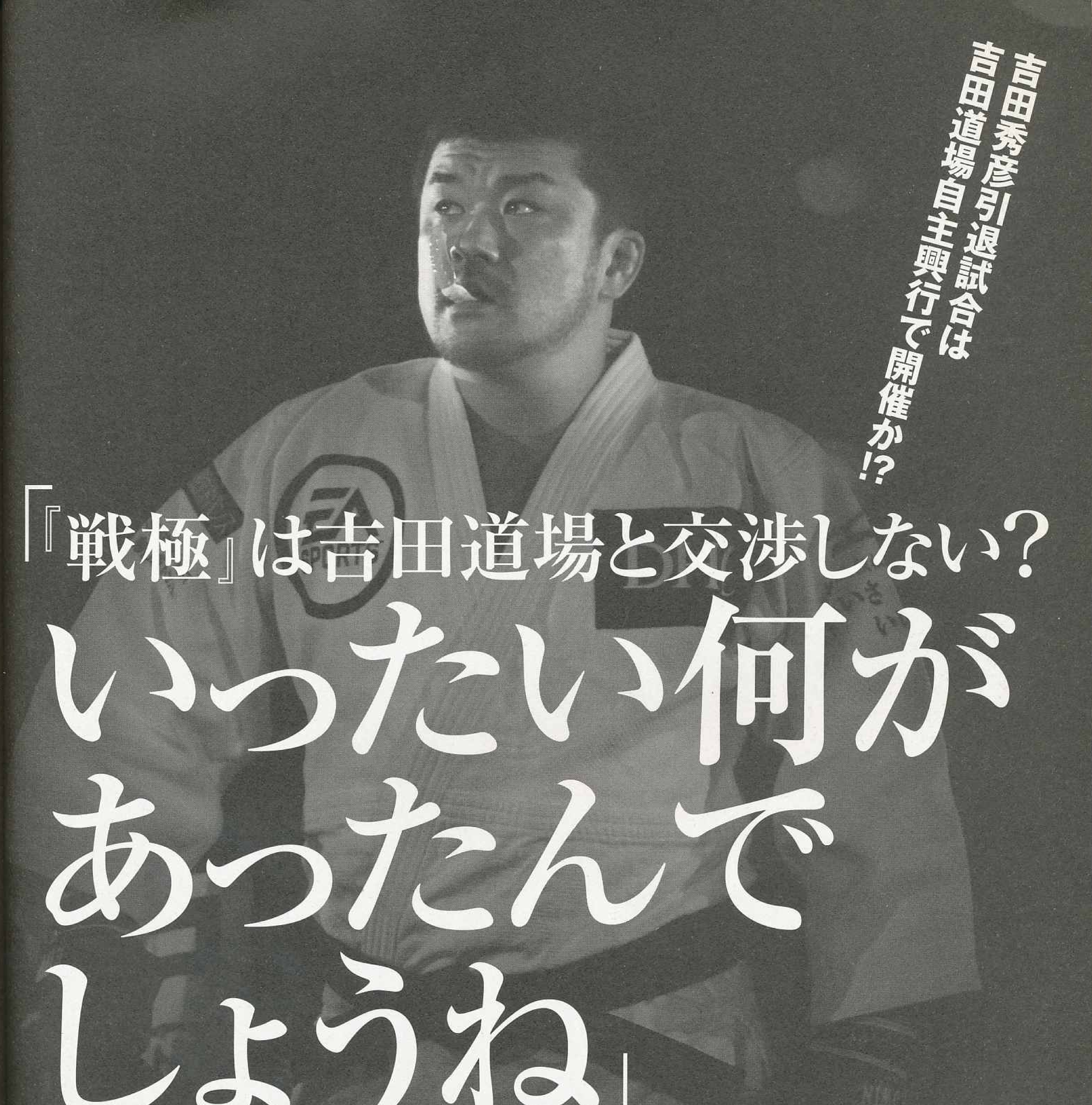
ちなみに、同会見では飯田広報が対抗戦の試合を総括。冒頭では、「残念ながら直前にカードが発表になった選手が負けてしまいました。もっと早い段階で発表して準備段階ができていれば違う結果になったと思っております」と話し、さらに青木vs廣田の試合については「廣田選手は体調が悪い状態でリングに上がっていただいた試合でした。内容的には追い込みましたが残念な結果になりました」とコメント。

意見書の「怒号が飛び交う中〜」という記述含めて、これはなかなか理解しがたい内容だが、『SRC』の青木やDREAMに対する敵愾心がうかがえるコメントである。

それに加えて質疑応答で出た吉田道場との絶縁宣言も非常に気になるところ。わざわざ「あそこの選手は使いません！」という宣言は前代未聞とも言える事態だ。

はたして、吉田道場勢も出ない『SRC』とはいったいどんな大会になるのか……!?　いずれにせよ、近々のイベントは、最も見逃せない大会になること間違いなし。みんなで、両国に行こう!!

先月号の本誌を読んで「吉田秀彦のイ
試合もいくつかあったと思います。やっ
アーはまだきてない」とお話ししてまし
——その契約体重は『戦極』サイドから聞



吉田秀彦引退試合は
吉田道場自主興行で開催か!?

「『戦極』は吉田道場と交渉しない? いったい何があったんでしょうね」

J-ROCK代表取締役
國保尊弘

**ホントに何が起きているんだろうか。
運命共同体だったはずの『戦極』と吉田道場の関係は、
ここにきてさらに緊張感あふれるものになっている。噂される自主興行を含めて、
吉田道場をマネージメントする國保氏のインタビュー、いざ！ シャキーン!!**

聞き手／ジャン斉藤

先月号の本誌を読んで「吉田秀彦のイライラの正体がようやくわかった」という声が寄せられているが、まだご理解できていない読者の方もいらっしゃると思うので、ここで簡単に整理してみてよう。

まず大晦日の『Dynamite!!』と『戦極』の合体は、当時『戦極』を主催するワールドビクトリーロードの取締役だった國保氏はまったくノータッチで、『戦極』の実質的オーナーである安田隆夫ドン・キホーテ会長主導によるもの。國保氏は『戦極』大晦日イベント消滅決定を機に、取締役辞任を申し出たが、のちに『戦極』側は國保氏の解任を発表する。これにより、大晦日以降、國保氏がマネージメントする吉田道場勢の『戦極』登場は絶望的となる（業界の噂では吉田秀彦の大晦日出場キャンセル説も流れた）。推測だが、おそらく國保氏は大晦日の合体に反対したのではないだろうか？ そのために吉田道場勢は『戦極』を追われた……ということ念頭にインタビューをお読みください。

——大晦日の『Dynamite!!』は会場に行かれたと思うんですが、國保さんはどういった立場で行かれたんですか？

國保 まあ、そこはいいでしょ。

——そうですか。では、大会自体の感想はいかがでしたか？

國保 一本、KOで決まる試合も多かったし、よかったと思いますけどね。次やったらどっちが勝つかわかんないなという試合もいくつかあったと思います。やっぱり自分たちが『戦極』に呼んだ選手なんかはどうしても応援してしまいますよね。そういった選手が勝つといいなという気持ちで観てました。

『Dynamite!!』の出場に関してFEGとは交渉してないです

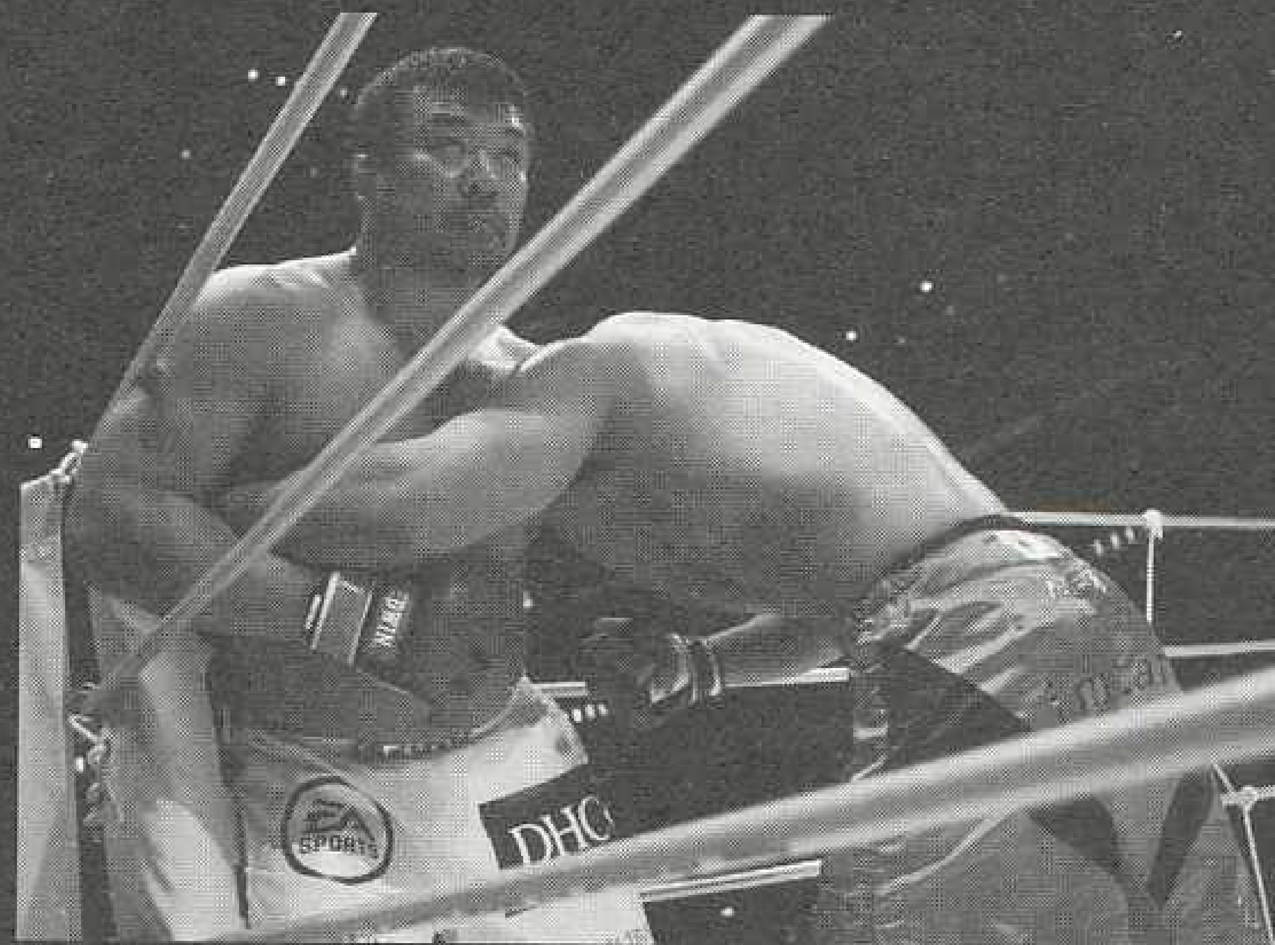
——今回、國保さんがマネージメントする吉田道場からは吉田秀彦選手と小見川道大選手の二人が出場されました。小見川選手の場合はかなりドタバタの中での出場になっちゃいましたけど、オファーはどの時点であったんですか？

國保 ちょっと覚えてないですけど、対戦相手も含めて正式に決定したのは発表した前の日ですね。

——12月13日の「VIVA JUDO!」の囲み会見のときは小見川選手は「オファーはまだきてない」とお話ししてましたけど。

國保 打診はその前からあったんですが、まだどうなるかわからない状態でしたから、確定するまでは小見川に伝えられない状況でした。小見川は大晦日に試合したいという気持ちが強かったですから。

——ヘタに話をして結局なくなったりしたら、本人の受けるショックが大きいですもんね。





"完全アウェー"のリングで勝利を飾った吉田秀彦と小見川道大の吉田道場勢。2010年の先行きが見えないだけに、負ければ次を失なう"敗北の重み"は、大晦日に出場した選手の中でも1、2を争うだろう。小見川は高谷撃破で選手としての商品価値をさらに高めたニャー!

國保 そういうことです。

——小見川選手の試合に関して言えば、試合直前の計量時に契約体重のトラブルがクローズアップされてましたけど。小見川選手側は今回は65キロ契約と聞いていた、と。

國保 そうですね、65キロ契約と聞いてました。まあ急な話ですから契約書上ってことではないですけど、65キロということで小見川としても調整してたんですけどね。

——その契約体重は『戦極』サイドから聞いたんですか？ それともFEGから伝えられたんですか？

國保 FEGとウチは直接交渉してないですから。

——じゃあ『戦極』サイドから。

國保 そうですね。まあ、いまさら振り返ってもしょうがないですけどね。

——最終的に小見川選手が64キロに落として決着がついて。

國保 最終的に本人がいろんなことを言われることも含めて「できるところまでやろう」と。そういうことで意地になって落としたんですよね。結果、小見川は計量後はグッタリで。

——あの身体から1キロ落とすって相当大変ですもんね。

國保 そのあと3リットルから4リットルの点滴を打ちに行ったんですよ。かなり深刻な状況でした。

——マネージメントの立場として今回のそういうドタバタはどういうふうにご覧になったんですか？

國保 前もってしっかりと決まってないと選手たちがかわいそうですよね。仮にそのまま65キロで試合をしたとすれば、小見川が勝っても「体重が違うからだ」って言われるでしょうし。いろんな可能性を考えて今回、小見川の場合は何がなんでも落とそうと思ったんでしょうね。

——小見川選手も吉田選手もイベント側に対する不信感をこぼしてましたけど、それは國保さんが『戦極』の取締役から解任されたことも含めたものなんでしょうか？

國保 それはまったく関係ないですよね。純粋に選手として大晦日のイベントが近づいているのに対戦相手が決まらない、

ルールや契約体重もわからない。選手の立場からすれば、2週間前に対戦相手も決まらない、試合があるかどうかもわからないということでは、誰でも不満は言いたくなりますよね。

──今回、瀧本（誠）選手は『戦極』の有明大会があればタイトルマッチという話もあったと思うんですけど、瀧本選手のオファーはあったんですか？

國保 瀧本はですね、もう1ヵ月以上前から「もう大晦日は試合をしたくない」と。1ヵ月半前の段階でまだオファーがなく、どうなるかわからないという状況では試合に向けての調整ができないので「仮にオファーがあっても断る方向でお願いしたい」と言ってきました。中村（和裕）に関しては、チャンスがあればとは思ってたんですが、彼はアゴの骨にプレートを入れていて、そのプレートを抜いて1～2週間でよくなるという話だったんですが、現在でも腫れてる状態なんです。残念ながら12月の段階で試合ができる状態じゃなかったです。

──今回、『戦極』と『Dynamite!!』が合同で大会をやるということに関して、決定から発表までかなりドタバタしたような状況だったと思うんですけど、國保さんはマネージメントの立場としてどのようにご覧になってたんですか？

國保 まあ、中のことはわからないですけどね。どういう話をしていたのか。ただ、対戦相手、体重、ルール、そういったものを早く知りたかったなと思いますね。

──ファンからすれば対戦カードがなかなか揃わない中で、「別々にやったほうがよかったんじゃないか」みたいな話もあったと思うんですけど。

國保 まあ、いろいろな見方があるのではないですか？「別々でよかった」というファンもいれば、「合同でよかった」というファンもいるだろうし。

──國保さんはどうですか？

國保 それをいまさら言ってもねぇ……。

──たとえば、吉田選手は「有明コロシアムで『戦極』のために」っていう気持ちが強かったと思うんですけど。吉田選手は『Dynamite!!』で闘うことには



『SRC』の何が飛び出すかわからない記者会見! 業界の“会見マニア”からは「アントンの成田会見を超えるクオリティ」と熱視線が送られているので、次回もぜひ爆弾発言を投下してほしい。なお、向かって左が飯田広報、右が稲村常務だ。しっかりと覚えておくように!

納得されてたんですか？

國保 最初は突然のことでビックリもしただろうし、戸惑いもあったと思うんですけど、まあ最終的には舞台は変わっても対戦相手は変わらないので「選手としてはやるしかない」というところにマインドを変えたんだと思います。

自主興行？ 年が明けたばっかりで そういうことはまだ考えてないです

──その件に関して國保さんは吉田選手とどんなお話をされたんですか？

國保 「こういう理由で場所が変わるよ」と言ったときには、先ほども言いましたけど「えっ!?」っという驚きは当然のことながらあって、そこから先は本人も自分でマインドを変えて試合に向けてやっていくしかないと思ったと思います。

──吉田選手は『戦極』のために石井選手と闘う、大一番に打って出る」という気持ちが凄く強かったと思うんです。「それが『戦極』のためになるなら」という気持ちはどの選手よりもあったと思うんですけど、「今回の『Dynamite!!』はなんのために闘うんだろう？」って自問自答されてたんじゃないかなって気がするんですけども。

國保 そうですね。吉田の場合には『戦極』の旗揚げイベントから出場して、「大晦日で幕を引こう」という気持ちを昨年の中盤あたりから心に決めて、我々もそのつもりでしたから。大晦日に向けての集中度は高かったと思うんですね。で、一度その集中も切れたとはいえ、最終的にはまず試合をやるというのが大前提になってたと思いますから、意味がどこにある、ないというよりも、本当に対石井戦ということだけを見つめて試合に臨んだと思いますね。

──可能性として「出ない」っていう選択肢はあったんですか？

國保 どうでしょうね。最初は「えっ!?」っていうところはあったでしょうけど、やっぱり試合自体を楽しみにしてるファンもいたと思いますし、それはこれまで応援してくれたファン、石井戦を楽しみにしてくれているファンがいるのなら試合をしなきゃいけない。そういうコメントを本人もしてると思いますが……。

──最近『戦極』サイドからは「もう吉田道場とは出場交渉はしない」という、事実上の絶縁宣言が飛び出したんですけども。

國保 いったい何があったんでしょうね。

──その発言を受けて國保さんのほうからは何かありますか？

國保 とくに何もないですね。オフィシャルな発表に対して新聞社とかにも聞かれましたけども、あえてコメントを出してないです。

──吉田選手があと一戦で引退するという発言をされて、DREAMも『戦極』も引退試合に名乗りを挙げましたけど、そのあと急きょ『戦極』側は「吉田選手も含めて交渉しない」という声明を出されたので、こちらとしても困惑してるんです。

國保 交渉しないっていうのは、我々に需要がないってことですね。

──吉田道場が自主興行を開くんじゃないかみたいな噂が流れてますけども。

國保 まだ年が明けたばっかりで何もそういうことは考えてないんですけど、まあいくつかいろんな団体から需要もありますんで、そういったところと交渉していくっていうのがまず一つ。やっぱり選手が出る場所というのを考えていかなきゃいけない、と。いまの時点で言えるのはそこまでかなと思いますね。

谷川氏と話をするケースですか？ まあ、ゼロじゃないですよね

——じゃあ、吉田選手はいろんな可能性がある中で次の試合で引退する、と。

國保 そうですね。本来ならば吉田は大晦日で「勝っても負けても引退」ということを心に決めてやってきましたから、もしも次の試合があるとするならばその試合で引退、と。

——じゃあ、早速そういったお話があると受け止めてよろしいんですね。

國保 そうですね。

——あと、いま青木選手の試合後の挑発行為が話題になってるんですけど、國保さんはどんな感想がありますか？

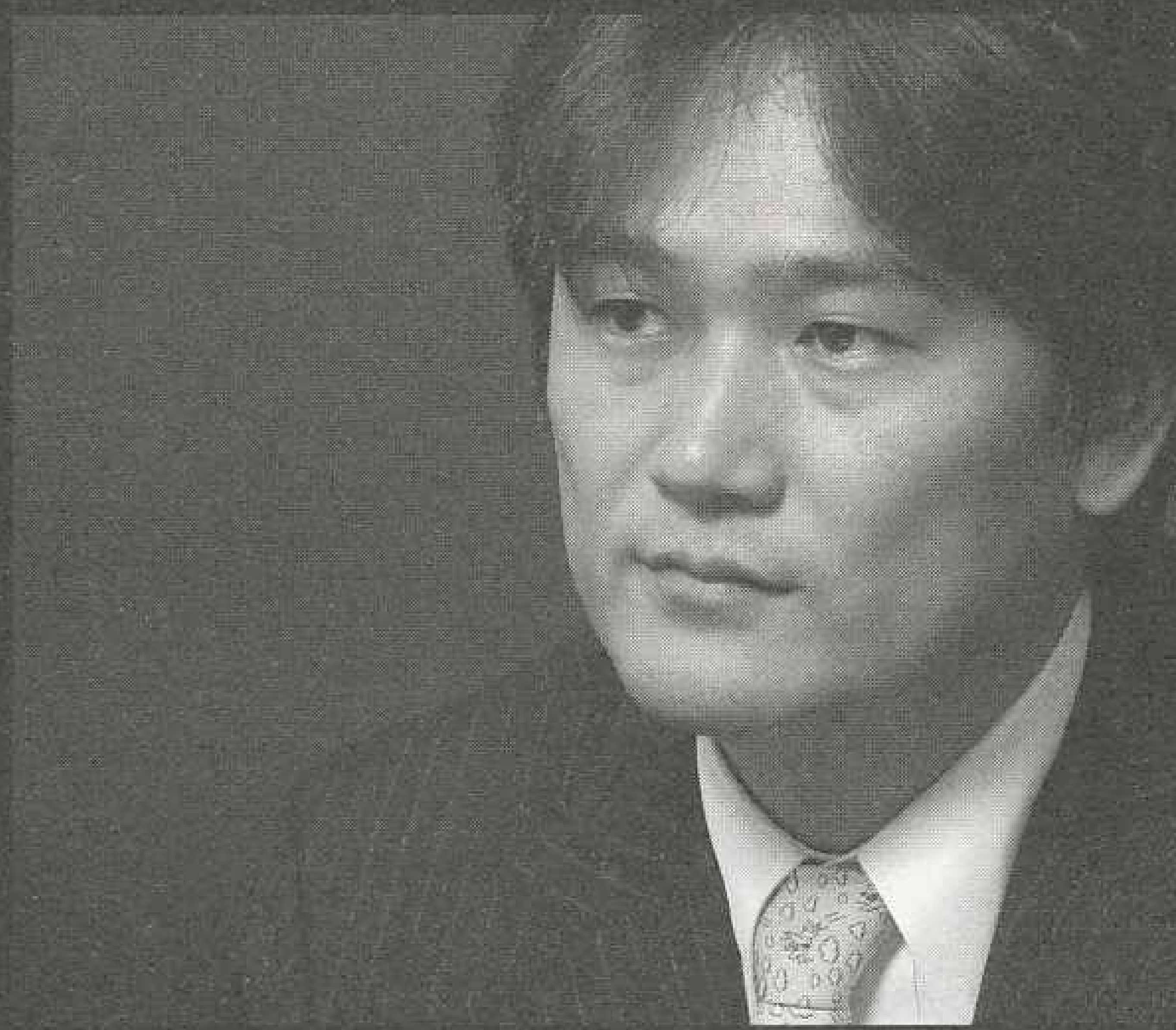
國保 試合に関しては青木選手が完全に圧倒したと思います。ただ、展開が変われば廣田選手は良いところをもう少し出せたんじゃないかなと思いますけど。まあ、いま物議を醸している試合後の行動は、試合後ということで興奮してたっていうのも一つあるでしょうし、そのくらい青木選手がその試合に懸ける気持ちが強かったんじゃないかな、と。そこで完璧に勝ったということが興奮の表われになったんでしょうし、まあ少し度がすぎてるといえばすぎてるでしょうけども、青木選手は記者会見でそれなりに謝罪もしてますし。これ以上問題を大きくするということではないと思います。もっと互いの健闘をたたえてあげるべきだと思います。

——今回の青木選手の行動は、政治的な動きから派生したところが大きいんじゃないかなという見方もあると思うんですけど。

國保 政治的な動きとは？

——カード決定における政治的な駆け引きですね。

國保 まあ、青木選手と話してないからわからないですけども、まず青木選手はおそらく川尻選手とやりたかったのかなとも思うし、おそらくやろうと思ってここまで来たんでしょうし。それが急きょ、合同でやるということで相手が廣田選手になり、廣田選手も『戦極』のチャンピオンであるということで、青木選手はモチベーションを目一杯高めるしかなかったんじゃないかと思いますね。



「いったい何があったんでしょうね」——早くも今年の流行語大賞有力候補が飛び出した! キミもさっそく学校や職場で使ってみよう。まあ、そんなことはともかく、今年上半期のキーを握るのは吉田道場勢の動きだろう。噂では5月に自主興行開催が噂されているが……。

——日本格闘競技連盟からの意見書では、「青木選手だけじゃなく、それを煽り立てたと思われる関係者にも処罰を求めたい」とされています。

國保 そこで誰かが青木選手に指示することはありえないと思いますよね。

——まあ、仮に「腕を折ってこい」って命令してもなかなか腕は折れるものじゃないですからね。

國保 よほど実力差があればあれですけど、あの高レベルの中で狙って折りにいくってことはできないでしょうし。

——じゃあ、それはちょっと考えすぎというか。

國保 考えすぎだと思いますね。

——昨日の『戦極』の会見でも話題が出たんですけども、『戦極』育成選手であり吉田道場所属の大澤（茂樹）選手はどうなるんですか？

國保 それはこれから選手と話して決めていかなきゃいけないと思います。

——同じ『戦極』育成選手の真騎士選手もですか？

國保 同じですね。レスリングの福田（富昭）会長がずっとかわいがってきた選手ですし、そのへんは本人とよく相談して、本人にとってよい方法を考えてあげたいと思ってますけど。

——いまパンクラスは、ドン・キホーテさんがスポンサーということで『戦極』とは非常に密な関係であると思うんですけど、吉田道場とパンクラスの関係はどうなっていくんですか？

國保 それは向こうサイドの考え方じゃないですか。こちらとすれば、需要があれば選手を供給するか考えないといけないですし。選手の出る場所を潰していってもしょうがないですから。

——正直、政治的な絡みがありすぎて、ファンからすると何が起きてるのかわからないという状況だと思うんですよね。

國保 まあ、いずれわかるんじゃないですか。

——状況によっては谷川さんと國保さんがお話しするケースもあるわけですよね？

國保 どうでしょうね。まあゼロじゃないですよね。

——『戦極』の広報時代は谷川さんとあまり良い関係には見えなかったんですけども。

國保 難しいよね、その質問は（笑）。ただ、格闘技の人たちはどんなに仲が悪そうに見えても、お互いによくは知ってるわけだよね。話そうと思えばいつでも話せるし。かつてあれだけPRIDEとK－1の仲が悪かったのに、いまは一緒にやってるわけだから。そこらへんは話そうと思ったら難しいことじゃないですよ、まったく。

——そこらへんは皆さん大人ですよね。今後は一つの事務所の代表として、選手個人をマネージメントしていく立場になると思うんですけど、いま日本の格闘技業界にはいろんな問題があると思うんです。いったんプロモーターサイドに立ってみて「こうしていけばいいんじゃないか」みたいな反省点というか「こうあるべきだ」みたいな意見はありますか？

國保 そうですね、いまあえてここで言いませんけど、やっぱりやってみて「こうなったらいいなあ」とか「こうすべきだな」っていうのは大きなところでも何点かはありますね。


——それはいまはなかなか言えない、と。

國保 言えないというか、「あえて」ですね。

【10年1月8日／都内・J－ROCKにて収録】

――佐伯さん、新年早々心労は溜まって
ねえなあ……。

――ありがとうございま



2010年も 男はつらいよ

前厄を迎えた不惑の男に 青木問題、レフェリー問題、健康問題、女性問題(!?)が降りかかる!

DEEPのタコ社長

佐伯 繁

DREAMでもSRCでもない、"第三国"的なDEEPの代表ながら、青木真也とは深い関わりがあるという、じつに微妙な立場である佐伯代表。そんな微妙な立ち位置であり、選手に最も身近なプロモーターと呼ばれる佐伯さんは、今回の青木問題や、『Dynamite!!』でのレフェリング問題をどう捉えているのか。沖縄土産の黒糖菓子サーターアンダギーをムシャムシャ食べながら話をうかがった。

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／乾晋也

中指に関してはマズいこと。この騒ぎを沈静化させるのは時間しかないんですよ

——佐伯さん、新年早々心労は溜まってないですか？

佐伯　ホント疲れてるわっ‼（ビックリするくらいの大声で）。

——凄く元気じゃないですか（笑）。

佐伯　俺、今年が前厄なんですよ。で、今年に入ってからホントにいいことがない！

——佐伯さんの場合、年がら年中ついてないイメージがありますけど。

佐伯　今年はとくにおかしいんだわ。だから明日か明後日厄払いに行ってこようと思ってるんだけど。ちょっとヤバいよ。

——ちなみにどんなことがあったんですか？

佐伯　新年一発目、『Dynamite!!』が終わったあと、知り合いの女性に「新宿に戻るけど車に乗ってく？」って言ったら「いや、いいです」って拒否された。

——ガハハハ！　そんな話ですか！

佐伯　（ムキになって）おかしいじゃない！　大晦日のあの時間帯、誰だってさいたまから電車に乗って帰りたくないだろ？　なんで乗っていかないの？　おかしいわ！

——じゃあ、来年はボクを乗っけってってください（笑）。

佐伯　それがまず一つ。で、青木の件でしょ。それで正月は沖縄に旅行に行ったのにずっと雨でしょ。それでカゼひいたでしょ。最悪だわ‼

——ずいぶん微妙な不幸ですね（笑）。

佐伯　あとDEEPのグアム大会が中止になった。航空券も買ってたのに。ついてねえなあ……。

——そんなつらいときに聞くのもなんなんですけど、青木選手の件が大騒動になってますよね。半分親代わりの佐伯さんからするとどうですか？

佐伯　これはDREAMの広報とか関係なく、俺個人の意見として言わせてもらいたいんだけど、結局いろんな意見があるわけじゃん。

——立場によって意見はまったく違いますね。

佐伯　だから俺の意見として、腕折りの話になっちゃうと、これは仕方がない。これは格闘技やってる以上はどうしようもないよな。ただ、試合後の中指に関してはマズいな、と。やっぱりネットとかでも批判されてるみたいだし、もともと青木に対していい感情を持ってない人も含めて騒ぎ始めるじゃん。そういった騒ぎを沈静化させるためには、"時間"しかないんですよ。ほら、いまはのりピー（酒井法子）のことを誰も騒いでないでしょ。

——すっかり過去の人ですね（笑）。

佐伯　そこで青木が記者会見やりましたっていったらまた火がつくでしょ。だから難しい問題なのよ、いまは残念ながらネット社会になっちゃったから。ボクはご存知のとおり、あんまりネットが得意じゃないから、記者さんから「ネットでこういう情報が出回ってますけど」って言われても、「そんなの噂だろ」っていうふうにしか思わないしね。

——仮に本当だとしても「事実です！」とは言いづらいですよね（笑）。

佐伯　だって、オフィシャルの発表じゃないんだから。気にしてもしょうがない。だから俺は選手のブログも読んでない。見るのはスポナビとGBRかな。DREAMの携帯サイトで自分のコラムをやってるんですけど、それも入ってませんからね！

——自慢しないでください（笑）。

佐伯　で、一応『格通』と『kamipro』と『格闘王国』の携帯サイトは入ってるんですよ。

——ありがとうございます（笑）。

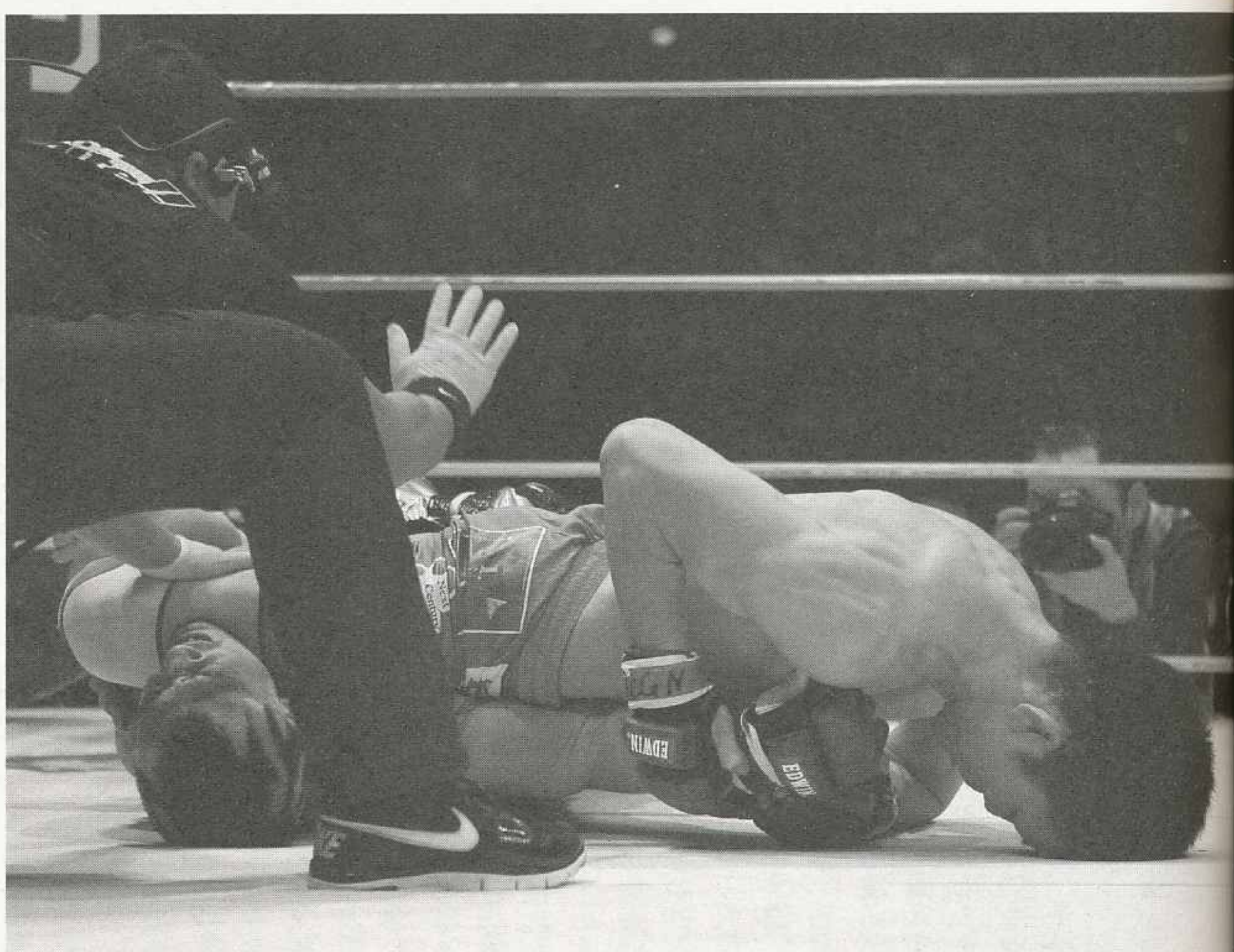
佐伯　そういうレベルなんで、選手のブログまで読もうとあんまり思わないし、前に2ちゃんねるで叩かれたことがあったからな。

——それで見なくなったわけですか（笑）。

佐伯　そうそうそう。でも、たまに見ますよ。バカなこと書いてるなとか、だいたい身内が騒いでるんだなとか思うしさ。昔、「佐伯はいつも選手を焼肉とキャバクラ連れていってくどいでいる」と書かれたこともあったし。だいたい俺キャバクラ嫌いだし、そんな金くれるなら本当にやりたいよ。いちいち真に受けてらんないですよ！　ただ、書かれてるときのほうが、話題になってると考えればホントはおいしいんですよね。書かれないのが一番寂しいんだから。

——そうですね。へんな話、元日のグーグル検索の件数で、「青木真也」が人名では第1位になったんですよ。

佐伯　騒がれてるなあ～。まあ、僕が思うにニュートラルな立場でだったら、『戦極』さんは、やっぱりあの中指に対しての返答じゃないけど、DREAMから何か声明がほしいっていうのはあたりまえだと思うんですよ。DREAM側としても、それにどう対応するのかっていうのは難し



結果的に廣田の腕を折ったアームロックだが、選手の立場に立つと、折る前に止めることは自殺行為という面もある。ゆえに腕を折ったことは仕方がないが、その後の中指はよけいであったか。



い問題だと思うんだけど。

―先ほど言われたように、ヘタに動くと、問題がまた複雑化するかもしれないですしね。

佐伯 そうなんですよ。だからそこらへん難しいんだよね、ホントに。ただ、俺はやっぱりこうなったこと……ただ青木にとっては、年末川尻とやる予定が最後に変わって、そういう政治的なものへの思いが廣田瑞人っていう相手にぶちまけられたと思うし。ホント凄い感情があったと思うんですよ。ホントの"果たし合い"みたいな感じで試合をしたと思うんだわ。あそこはもうレフェリーが止めないと腕を折るしかないよな。

―青木選手からすれば、腕を離すわけにいかないですもんね。

佐伯 いかないです、それは無理です。思い出してみなさい、桜井隆多と岡見勇信の試合。『PRIDE武士道』の挑戦試合。アームロックを極めたけど、隆多はいけなかったんですよ。

―一線を越えられなかった、と。

佐伯 で、2ラウンド目は隆多がやられて判定負けになった。やっぱり関節が極まらなかったあとって、逆転されちゃうもんですよ。

―関節を極めるってもの凄いエネルギーが必要ですからね。

佐伯 そうそうそう。たとえば女子格闘技なんかは、関節が柔らかいから本当に難しいよ。あともう一つ言えるのは、青木vs廣田は王者同士の、日本のトップ同士の試合なんですよ。ウチのフューチャーファイトじゃないんですよ。フューチャーファイトだったら、止めても「次もあるから」で済むけど、彼らはいろんなものをお互いに背負って試合してたわけですよ。

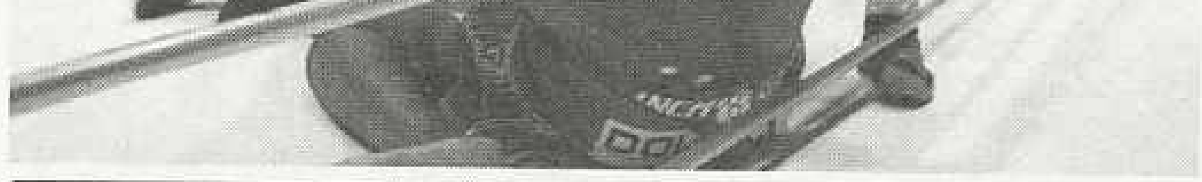
―へんな話、自分一人の勝ち負けじゃないというか。

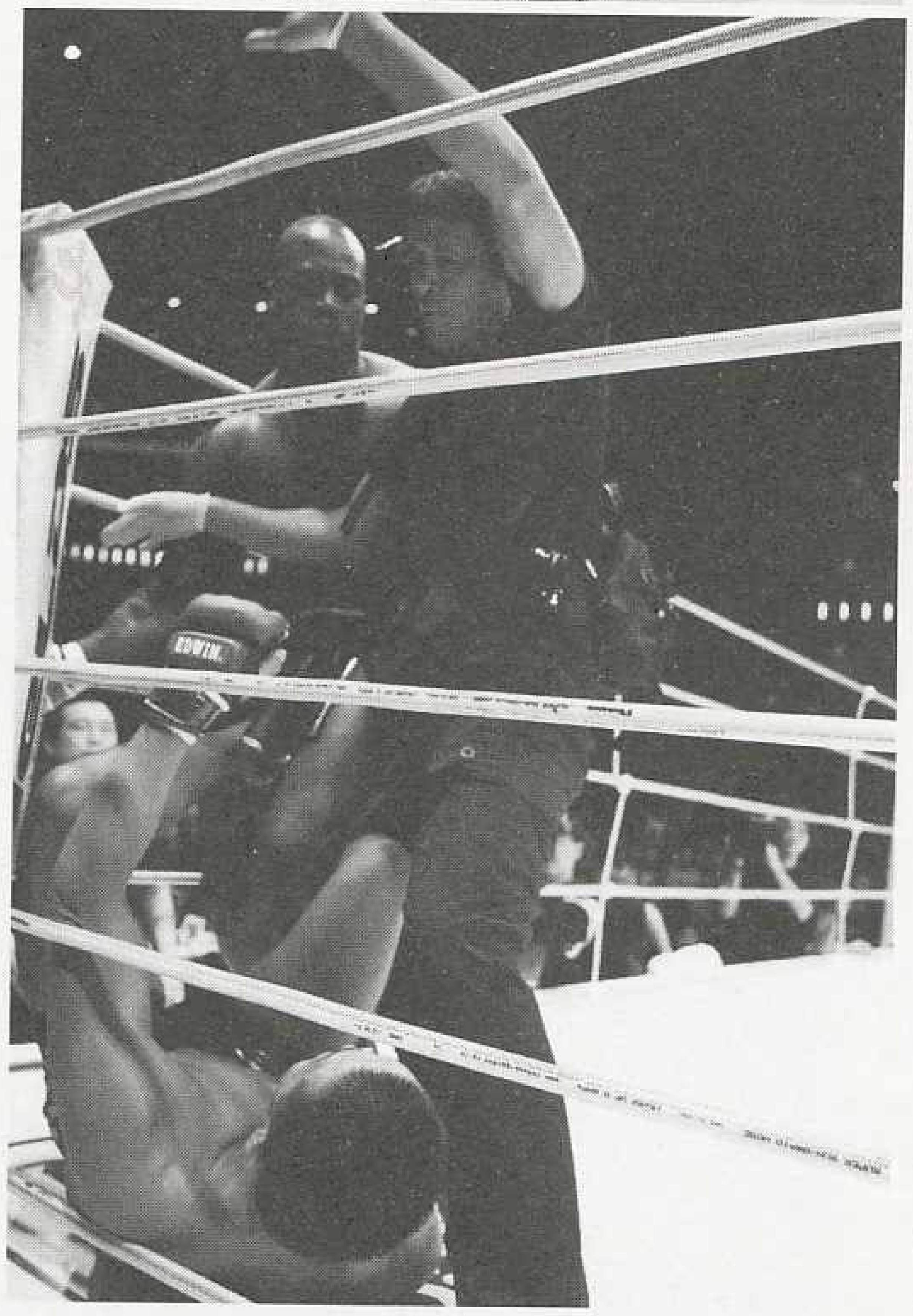
佐伯 そう。だからちゃんとした基準の中で、「ここまで極まったら止める」っていう基準をレフェリーが統一して決めるしかない。それに対して選手も絶対に文句を言わないこと。あとから「極まってない」とかね、よくあるでしょ。

―見慣れた光景ですよね。

佐伯 今回の三崎の試合も難しい問題だね。ただ過去には、早く止められて終わった試合はけっこう多いんだよね。テレビ問題もあるのかな？

―そこは、いろんな考え方がありますよね。





『Dynamite!!』でのミノワマンvsソクジュと三崎和雄vsメルヴィン・マヌーフ。どちらもワンパンチでのダウンで、即レフェリーがストップしたが、ストップが早すぎるという声も聞かれ、実際、三崎和雄陣営は正式に抗議を行なった。

選手が文句を言えない状況にならないと
レフェリーもなかなか止められない

佐伯 だから選手が文句を言えない状況にならないとレフェリーも止められないよ。選手があとから文句を言わないんだったら止めるよ。俺だって止めるわ！

―佐伯さんも止めますか（笑）。

佐伯 そこを解決するためには、ホントは統一コミッションがあって、そこからレフェリーとドクターが派遣される、と。そうしたら、こっちもお金を払わなくていいから助かるじゃん。

―お金の問題は大きいですね。

佐伯 コミッションができることによって、ルールもある程度統一化できるし、レフェリーの技術の向上もできるわけじゃん。結局ね、レフェリングで揉めても選手と主催者との話になるんですよ。だからそこで協会ができればちゃんと話し合いができるし、あんまり文句を言うと出場停止になって、ほかのイベントにも出られないって話になる。

―いまはたとえ出場停止の処分が下されても、極端なことを言えば、ほかの団体には出られますからね。

佐伯 俺個人の意見を地上波テレビは関係なく言わせてもらうと、早く止めるか止めないかっていうのは、さっきの話を繰り返すけど、トップファイター同士の試合なると、よっぽどのことじゃないかぎりは止めづらいんだよ。2～3発くらいのパウンドがあってから止めてもいいんじゃないかって気がするよね。それぐらいの気持ちで来てるし、ちゃんとお金ももらってるし。

―欠場しても生活していけるファイトマネーをもらってる、と。

佐伯 実際は知らんけど（笑）。たとえばそれはDEEPの第1試合や第2試合、フューチャーファイトの試合で危ないから止めるのとはわけが違うしな。言い方は悪いけど、ダウンしたあと一発殴られたって死なへんから。

―まあ、そうですね。

佐伯 結局、そこは選手を納得させる部分もあるし、お客さんを納得させる部分もあるんですよ、実際。セコンドだって納得しないことがあるからな。選手が抗議するのをセコンドが止めなきゃいけないのに、セコンドまで興奮してる場合もあるわ！

―何をやってるんだって話ですよね。

佐伯解

技なんかは、関節が柔らかいから本当に
よね。

そこで協会ができればちゃんと話し合い
——何をやってるんだって話ですよね。

結局、いまの基準は選手、セコンド、お客さんが納得するかどうかなんです

佐伯　セコンドがやるべきことすらできていないんだよ。まあ、選手やセコンドを教育していかなきゃ無理ですよ。あとは団体との信頼関係。信頼関係のない中でやってるから、いろんなことが起きると思うんだよね、実際には。

——基準がどこにあるかっていうのがわからなかったりしますもんね。

佐伯　それはブレイクの早さもそうだけど、同じレフェリーがやってても、さっきは早かったとかさ、そういう話になるから。レフェリーは一生懸命やってますよ。

——へんな話、大晦日はソクジュにしても三崎選手にしてもストップが早かったのは、レフェリングの統一見解なのかなと思ったんですけど。

佐伯　それは俺もわかんないんだよ、レフェリーがどういう話してるか。まあ、いまの基準は選手、セコンド、お客がどう納得するかどうかだろ。

——基準はそれぞれの納得感。エンターテインメントのルールといえば、わからなくもないですけども。

佐伯　お客さんだってそうじゃん、ストップが早かったら納得しないじゃん。それにどんだけいい試合だったって判定の試合ってみんな心に残らないんですよ。格闘技を観に来てるお客さんってやっぱKOや一本が観たいんですよ、やっぱり。なんでK−1が流行ったかって、そこでしょ。


DREAMのルールディレクターである島田裕二レフェリーが裁いた青木真也vs廣田瑞人戦。今後もDREAMとSRC間で選手の行き来があるのなら、レフェリング基準の統一も当然必要となってくるだろう。

——ヘビー級のノックアウトがあったからですよね。

佐伯　そうそうそう。判定でも「おぉ！」って喜んでくれるお客さんならいいですよ。じゃあビアーノと今成の試合観てさ、お客さんが「おぉ～っ、すげえな」「おもしろい試合だな」って思った？

——ブーイングでしたよね（笑）。

佐伯　だから競技性より納得感そこなんですよ。だからストップなんかもみんなが納得するかたちが望まれてるのが現状なわけ。

——レフェリー問題は別組織というか、統一コミッションみたいなものが必要になってくる時期ですよね。

佐伯　そこは現実的にはお金の問題になってくるんじゃない？　レフェリーとドクターの派遣したら、１大会○○万円ぐらいになるじゃん。それが年間でウチだけでも20大会で××万になるでしょ。……考えただけで頭が痛いわ!!

——つらいことばかりですねぇ、格闘技興行って（笑）。州によってコミッションがあるアメリカとは違うってことですね。

佐伯　そうそう、最初のスタートからして違うからね。それにいまは素人が出るイベントも多いじゃん。そういうこと考えたら、どこまで縛るかって話でしょ。もともとプロとプロじゃない者の境がないんだもん。

——それこそライセンスもないですしね。

佐伯　まあ、今日のポイントは、青木に関しては中指はよくないと思うし、ただファイターとして彼もいろんな思いがある中で闘ったわけだしね。

——思いが強すぎてっていう部分でしょうね。今回の問題って、ルールっていうよりも感情ですもんね。

佐伯　そうそうそう!!

——この件で『戦極』とDREAMが揉めそうな気配がありますし。

佐伯　この件が問題なかったとしても、『戦極』さんとDREAMさんがこれからどういう関係でやっていくのかなっていうのは俺にもわからないし。とりあえず、自分は自分できる事をやるだけだわ。

——前厄ですし、他人をかまってる場合じゃないですね（笑）。

佐伯　今年とりあえず10周年だしな。そんなに余裕があるわけでもないんで、上の舞台がほしいと思うような選手を作っていきたいなっていう。ま、とりあえず厄払いに行ってくるわ！

【10年１月９日／都内・DEEP事務局にて収録】

『アメトーーク!』新春SPに徹底便乗企画!

いまこそプロレス黄金期に学べ!!



俺たちの ゴールデンプロレス 大特集

「プロレスがゴールデンタイムに帰ってきた!」を合言葉に、1月7日に放映された『アメトーーク!』の新春スペシャル「俺たちのゴールデンプロレス」。
この番組であらためてプロレスの素晴らしさを再確認した人も多いと思うが、これに本誌もおもいっきり便乗!
あの俺たちを熱狂させた昭和プロレスを大特集します! “テレビ格闘技”のヒントは、すべて“ゴールデンプロレス”にある!

〝俺たちのゴールデンプロレス〟を作りあげた男

初代タイガーマスク

「タイガーの闘いとはストロングスタイルが生んだ芸術であり新日本プロレスの英知だった」



かつて金曜夜8時から放映されて、毎週20パーセント以上の視聴率を誇った『ワールドプロレスリング』。そんな80年代前半に起きた大プロレスブームの立役者といえば、誰がなんと言おうともこの人、初代タイガーマスク。あれから20数年経ったいまでも、あの鮮烈な闘いは色あせない。数多くのプロレスラー、格闘家に影響を与えた初代タイガーの佐山サトルに、いまあらためて「タイガーマスクとは何か？」を語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／原悦生



聞き手／堀江ガンツ　試合写真／原悦生

タイガーマスクの闘いというのは新日本プロレスの哲学が作りあげた

――佐山さん、『アメトーーク！』っていうテレビ番組はご存知ですか？

タイガー　いや、知らないです。

――バラエティ番組とか観ないですよね。

タイガー　観ないですね。

――その番組では若いプロレスファンの芸人さんが集まって、「ゴールデンタイム時代のプロレスがいかにおもしろかったか」っていう話を先日やってたんですけど、その中で若き日の初代タイガーの試合も流れて、あらためてタイガーマスクの素晴らしさが再評価されてるんですよ。

タイガー　へぇ～っ。

――佐山さんご自身は、初代タイガーマスクのプロレスが20年以上も色あせないのは、なぜだと思いますか？

タイガー　それは思想的なものでしょうね。

――思想！　プロレスに対する考え方というか。

タイガー　やっぱり師匠たちが良かったんじゃないかと思いますけどね。僕に影響を与えた藤原喜明、アントニオ猪木、山本小鉄、そしてカール・ゴッチ。ほかの諸先輩方もそうですけど、そういう環境があったからこそできたんじゃないかと思います。

――佐山さんは以前、「（初代）タイガーマスクの試合の原点は、新日本プロレスの前座試合にある」と、おっしゃられてましたよね。

タイガー　そうですね。やはりガチンコをベースにして、その中から生まれたバリエーションなんですよ。僕はプロレスに対して、そういう教育を受けてきましたからね。

――やっぱりレスラーには初期教育が大事ですか？

タイガー　一番大事ですよ。これはレスラーにかぎらずね。

――新人時代、プロレスとはどんなものだと教えられたんですか？

タイガー　プロレス自体は教わらないですよ。基礎運動とゴッチ式のセメントだけ。

――その中で、自分なりに考えていくわけですか。

タイガー　デビューまでの1年弱は、試合のことなんて考えないで、セメントばっかりで。デビューしてからは、山本さん、猪木さんの目を気にしながら、自分なりに考えたプロレスを展開していったということでしょうね。だから、ガチンコやってる連中がプロレスやっても全然成功しないっていうのは、まったく思想が違うからってことですね。

――いわゆる格闘家が考える「プロレス」と、当時の新日本のレスラーが考えていた「プロレス」には大きな違いがある、と。

タイガー　全然違うものですよ。だから、僕らが前座でやっていた試合は極め合い主体で、レスリングの動きの中でお客さんを沸かせなきゃいけなかったから。

――当時の道場の練習も、「その厳しさと練習量は世界でも5本の指に入るんじゃないか」と思うくらいのものだったらしいですね？

タイガー　スパーリングはおもに藤原喜明さんとやっていて、最初は極められっぱなしだったんですけど、1～2年経つとお互い極まらなくなってくる。で、ライバルみたいになりながら、練習後に「俺たちがやってることは、世界で5本の指に入るよな」なんて話したりとか、うぬぼれていた時期があったんですね。

――それぐらい練習量や、やっている内容に誇りがあったわけですよね。

タイガー　そうでしょうね。やはり、100キロを超える人間たちがそんなこと毎日やってるわけだから、それなりに実力もあったと思います。

――その道場では、当時道場破りなんかもあったわけですよね？

タイガー　ありましたね。藤原さんが相手したり、僕もやったし。僕は相手の腕を折っちゃったけど。

――折りましたか！　プロレスを守るためには、そこまでやるしかない、ということですか？

タイガー　違う違う、たまたま折れちゃっただけですよぉ。

――でも、本気になれば折れる技術と胆力はあった、と。

タイガー　そんなのは当然ありますよ。いまの総合の選手だってそうでしょ？

――ちょうど、大晦日の試合で青木選手が相手の腕を折って大騒ぎになりましたしね。

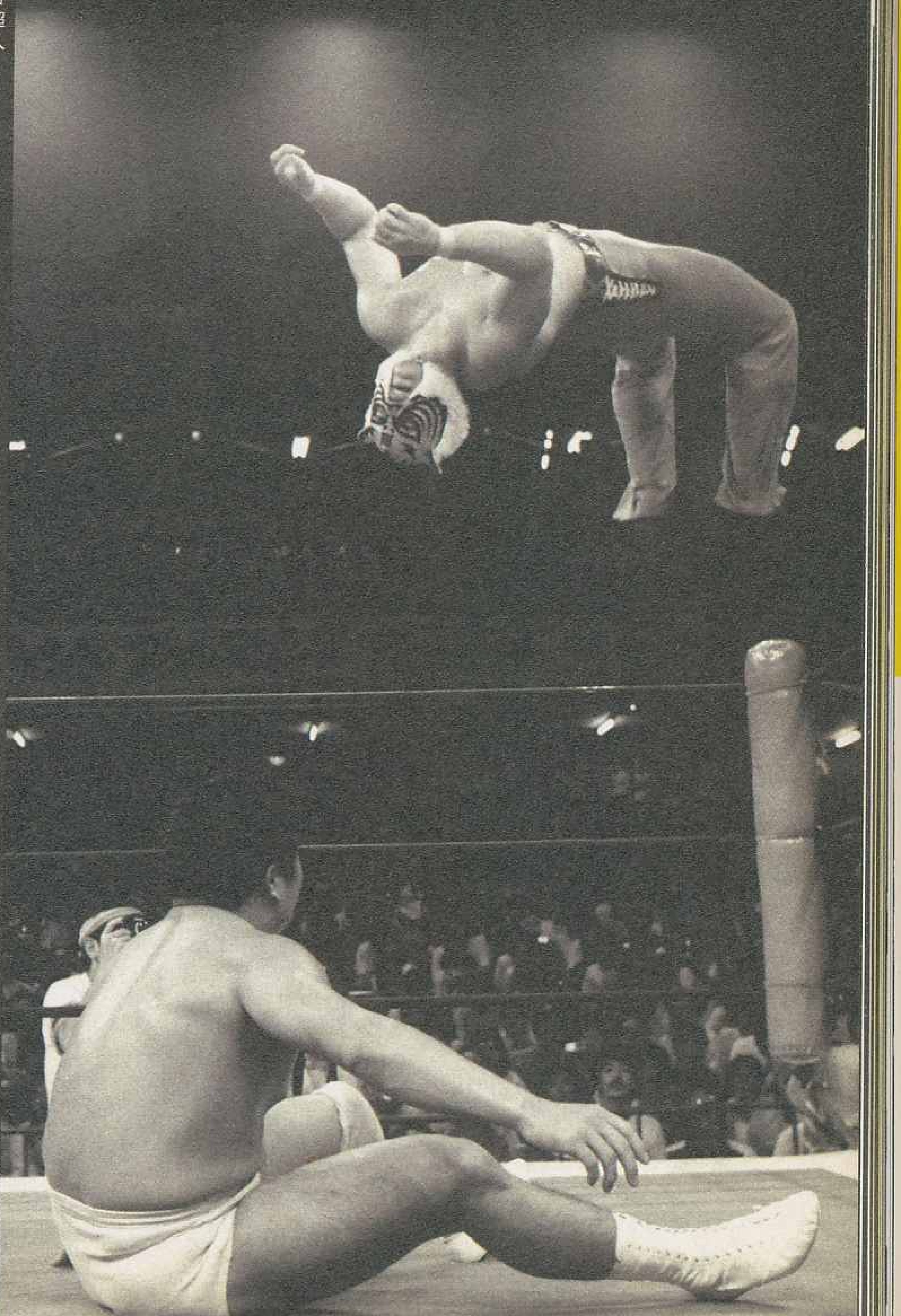
タイガー　あっ、そうなんですか？

――はい。アームロックで廣田選手の腕を折ったんですよ。

タイガー　試合で危険な事態になってしまうのは、気をつけなければならないですけどね。

FIRST TIGER MASK

「タイガーマスク」として最後の試合である、83年8月2日の寺西勇戦。超満員の客席を見てもわかるとおり、人気絶頂での突然の引退宣言だった。





このドロップキックの打点の高さを見よ！ 抜群の運動能力、そして厳しい鍛錬から、タイガーマスクという"芸術"が生まれたことが、この写真1枚だけでもわかる。

――タイガーマスクの試合スタイルというのは、どのようにしてできあがったんですか？ やはりメキシコやヨーロッパでの経験が大きいわけですか？

タイガー よく覚えていませんけど、当時のいろんな影響から考え出してああなったんじゃないかな。

――試合スタイルについて、ほかの人のアイデアやアドバイスもあったんですか？

タイガー ないですね、自分で考えましたから。いろんなものを取り入れたけど、やっちゃいけないことはわかっていたし。ストロングスタイルだけで考えると、プロレスが難しいこともわかっていた。でも、ちゃんとしたことをやろうとするのがプロレスラーだろうとも思っていたし。だから、あの若いなりに思想や哲学があったうえで、あのタイガーマスクがあったと思いますよ。だから、なぜああいうスタイルになったか、と聞かれたら、当時の自分なりに一生懸命考えてやったと言うしかないと思うんですよね。

――自分なりに考えたタイガーマスクを一生懸命やった結果だった、と。

タイガー うん、メキシコに行く前から格闘技のほうに行くつもりだったので、ある程度割りきっていたんですけれども。メキシコというところに行って、感化されちゃいけない部分はもちろんあったけど、取り入れたらおもしろいという部分もあったから、それを自分なりに考えた結果ですね。

――ストロングスタイルの自分を見失わないようにしながら、糧にしていこう、と。

タイガー そうですね。

――メキシコの選手って、ああ見えて気が強い選手が多いですしね。

タイガー というより、日本人が弱いんでしょう。ホントに弱すぎる。

――それは当時から思ってましたか？

タイガー いや、それはのちに気づいたんですけど、弱くなったのは戦後からの体制でしょう。そういうことを、現在執筆中の本に書いていますので。

――また新しい本を書かれたんですか？

タイガー はい。ですから、正月はその本の執筆の追い込みで大変だったんですけど、あとはあとがきだけですね。

――なんという本なんですか？

タイガー 『新生武士道　真陰』というタイトルの予定ですね（タイトルは未決定）。これは普通の本ではないですから。

――普通じゃない本って、どんな本なんですか？

タイガー できあがったらわかりますよ（笑）。ホントに普通じゃない。これを読めば、自分がこの15年間ずっと武道を作るために温めてきたことがわかるし、なぜ右翼と呼ばれたり、催眠をやっているのかっていうことも、全部わかりますから。

――いまの佐山さんの考えがすべてわかる、と。

タイガー はい、詳しくは本を読んでほしいですけど、掣圏真陰流の理論ですね。「掣」っていうのは制御の意味で、「真」を制御するための「陰」というのは無意識の意味なんですよ。そして「圏」というのは距離感。だから「真実の距離感を陰が制御する」、そういう理論を科学的に、大脳生理学や催眠、心理学などを使って説明したような本ですね。そして、新しく始める格闘技についても書いています。それは格闘技というよりも、武道です。

――また新しい格闘技、武道をやるんですか？

タイガーマスクがいなかったら いまの総合格闘技なんてないでしょうね

タイガー　もちろん。ずっとやりたかったことが武道ですから。僕はもう何年も前から言っていますが、次に出てくるのは武道です。そういうことを言っても誰も信用しないと思いますが、これからは武道ですね。

——以前から言われてますけど、やっぱり佐山さんは気づきが早すぎるんじゃないですか？

タイガー　いや、全然。早いんじゃなくて、見えているものがみんな見えてないんですよ。僕はそれが見えるだけ。僕は修斗やってるときから、相撲みたいなものをやりたいと言っていましたし。

——その前はタイガーマスクをやっているときから、シューティングみたいなものが見えていたわけですか？

タイガー　見えていましたけれど、それは間違っていた。あれは若気の至りだったかもしれない。武道にしなかったですからね。でも、本当は武道にしたかったんですよ。「相撲みたいなものを作って、天覧試合をやりたい」と思っていましたから。その天覧試合をやりたいっていうのも相撲のようにしたい、という意味ですね。

——確かに「相撲のようにしたい」とか「天覧試合をやりたい」っていうのは、シューティング初期の頃にも言ってましたね。

タイガー　そのとおり。当時から言っていたのですが。「佐山さん、なんで考えが変わっちゃうの？」とか言われますけど、全然変わってないんです。前からやりたかったことを、その都度始めてるだけなんですね。

——それこそ、新日本でプロレスをやってる頃は、佐山さんの考えを理解してくれる人なんて、なかなかいなかったんじゃないですか？

タイガー　でも、プロレスは僕のものじゃないから。初代タイガーマスクの闘いだって、自分で考えたことですけど、猪木会長、山本小鉄さん、カール・ゴッチさん、そういった方たちの思想が作ったんだと思いますしね。だから「タイガーマスクって何？」って聞かれたら、僕は「新日本プロレスの英知です」って答えています。そして、タイガーの闘いっていうのは、「ストロングスタイルが生んだ芸術」ですよね。



FIRST TIGER MASK
しょだい・たいがーますく■1957年11月27日、山口県出身。本名・佐山聡。76年、新日本プロレスでデビュー。メキシコ、欧州遠征を経て、81年にタイガーマスクとして帰国。空前のプロレスブームを起こす。83年に一度引退。その後、第一次UWFを経て、総合格闘技・修斗を創設。現在は掣圏真陰流・興義館総監を務める。

——それは非常にいい言葉ですね！

タイガー　まさにそのとおりだと思いませんか？　だから、プロレスは僕のものじゃない。ただ、タイガーマスクのプロレスがあったからこそ、いまの自分があるし、総合格闘技もああやって発達したっていうのは、間違いないでしょうね。

——確かにそれはそうですね。

タイガー　タイガーマスクの時代があったからこそ、これから自分がやる武道もできるんだと思いますね。

——では、本意でないにしろ、かつてタイガーマスクを必死にやっていた佐山さんの原動力はなんでした？

タイガー　やっぱり新日本プロレスに対する責任感と、新日本プロレスが金曜8時の枠を任されていたことの責任感でしょうね。あとは、諸先輩方の目が光っていたっていうのもありますよ。僕は、タイガーマスク時代も試合のときは怯えていたからね。

——怯えていた⁉

タイガー　マスクを被っていても、まだ若かったから、気持ちは若手の頃と一緒ですよ。ヘタな試合したら、試合後、山本さんに殴られるんじゃないかとか、猪木会長が木刀持って待ってるんじゃないかと思ってましたもん（笑）。

——そんな新弟子みたいな緊張感が、スーパースターになってからもありましたか（笑）。

タイガー　だって若手の頃はドロップキックやっただけで殴られたりしてたんですから。タイガーマスクをやりながら「こんな試合をしてもいいのかな」って思ってましたよ（笑）。

——「大技なんか使うな！」と言われていた若手時代のなごりで（笑）。

タイガー　でも、そういう山本さんや猪木会長の考えは正しいと思いますけどね。プロレスは何をやってもいいもんじゃないんですよ。でも、いまはなんでもやっていいわけでしょ？　ホントにキッチリとした哲学で戻さないと、違う方向に行ってしまいますね。

——それは哲学という根本がなくなったから、ですか？

タイガー　そう、哲学がすべてだから。それも正しい哲学。プロレスはある意味、格闘技とエンターテインメントの狭間なわけですよね？　だったら、その狭間であるストロングスタイルという哲学がなければダメなのはあたりまえなんですよ。

——わかりました。今日はありがとうございました！

【10年1月10日／都内・興義館にて収録】



黒い呪術師×名物アナ・

全日本プロレス同窓会対談

アブドーラ・ザ・ブッチャー × 元全日本プロレス中継実況 倉持隆夫

新日ファンにとっての“ゴールデンプロレス”が金曜8時の『ワールドプロレスリング』なら、
全日ファンにとっての“ゴールデンプロレス”は土曜7時の『全日本プロレス中継』。
というわけで、約18年にもわたり、名物番組の実況を担当した倉持隆夫氏と、
当時の全日本マットで大暴れしていたブッチャーがひさびさに再会! 昭和・全日本プロレス同窓会対談ですよ!!

構成／阿修羅チョロ　撮影／平工幸雄

ブッチャー　オ～～～、クラモ～チ！

倉持　ひさしぶりだねぇ、ブッチャー！（再会を祝してガッチリと握手）。

——今回は昭和・全日本プロレス同窓会ということで、ブッチャーさんと倉持さんの対談を企画したのですが、再会されるのは何年ぶりぐらいになるんですか？

倉持　もう20年ぶりぐらいになるんじゃないかな。元気そうで何よりだね。でも、ホントに懐かしいなぁ。

ブッチャー　やっぱり、クラモ～チの顔を見ると、どうしても（ザ・）シークに流血させられたことを思い出してしまうな。

——昭和52年5月の後楽園ホール大会でのブッチャーvsシーク戦で、倉持さんは場外乱闘に巻き込まれたあげく、シークに額を切られて病院送りとなったんですよね。

倉持　そうなんだよ。いまのファンは知らないだろうけど。

——前もって話を聞いていたわけではなく、本気で襲われちゃったんですよね。

倉持　もちろん、なんにも聞いてなかったし、新聞でも大きく取り上げられたから。それに、いまでも傷が残ってるしね。

ブッチャー　傷ならオレもいっぱい残ってるよ（ニヤリと笑って額を指差す）。

倉持　そりゃあ、傷の数だったらブッチャーには到底敵わないよ（笑）。

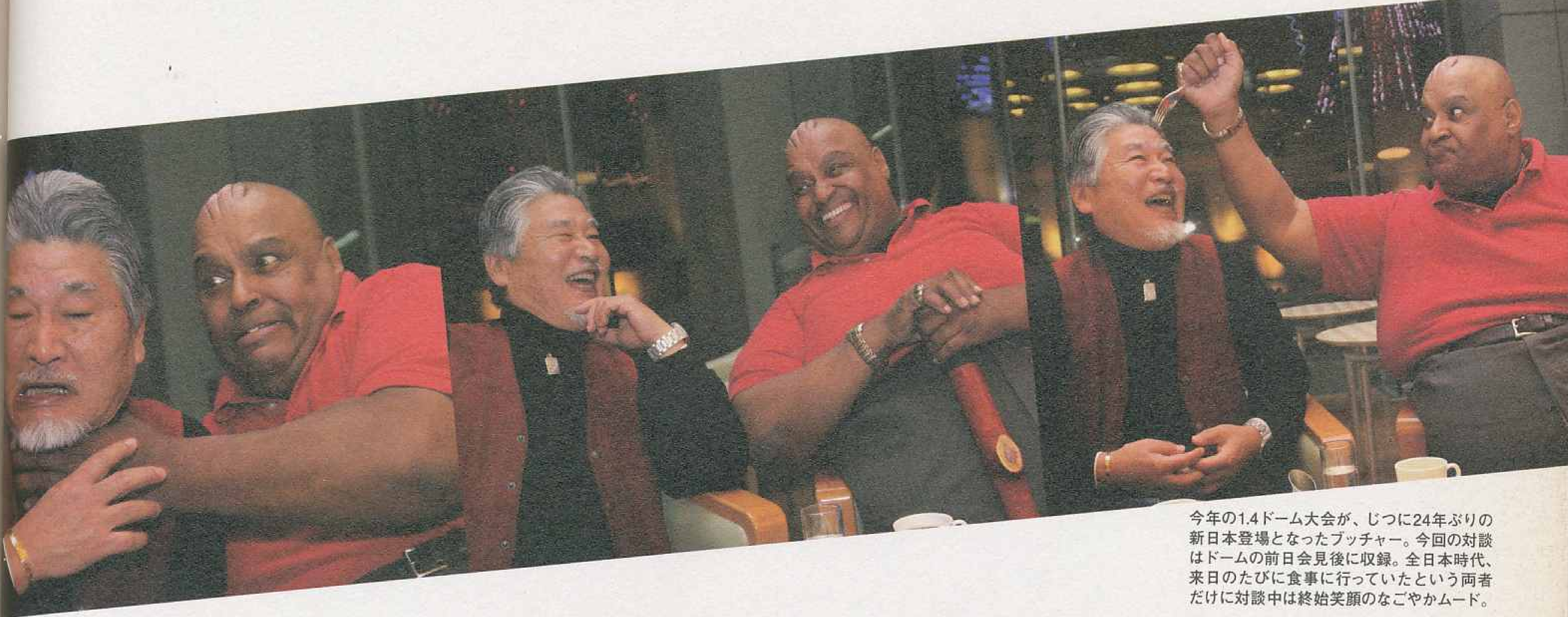
ブッチャー　ハッハッハッハッ。たしか、そのときはオレが犯人だと思って、オレのことをボロクソに言ってたんだよな。

倉持　そんなことはないよ。でもそのときは18針も縫ったからね。そんな実況アナウンサーはいないと思うけど（笑）。

ブッチャー　それは大変だったな。

倉持　やられたあと、すぐに救急車で病院に運ばれたんだけど、覚えてる？

ブッチャー　そのときに着ていたスーツが真っ赤な血で染まってビューティフルだったのは覚えているよ（笑）。



今年の1.4ドーム大会が、じつに24年ぶりの新日本登場となったブッチャー。今回の対談はドームの前日会見後に収録。全日本時代、来日のたびに食事に行っていたという両者だけに対談中は終始笑顔のなごやかムード。

この際だから聞くけど、どうしてシークは僕を襲ったの？（倉持）

倉持　この際だから聞くけど、どうしてあのときシークは僕を襲ったの？

ブッチャー　オレにとっても、まさかシークがあんな行動に出るとは思わなかった。ホントに予想外の行動だったんだ。でもあのときは客も大騒ぎしてただろ？

倉持　お客さんも「やれ、やれ！」って言ってたみたいですね。僕はボーッとしてわかんなかったけど（苦笑）。でも、アメリカのプロレス界だったら、そんなことは絶対しないと思うんだけど、そういうパフォーマンスがウケると思ったの？

ブッチャー　アメリカでも同じようなことはやっていたよ。アナウンサーのネクタイを食べたこともあるしね（ニヤリ）。

倉持　アメリカのプロレス界の場合はユニオンでみんな仲間だし、アナウンサーもレスラー上がりがほとんどでしょ。僕らみたいに放送局から来てアナウンスをするっていうのはなかったと思うんだけど。

ブッチャー　いや、自分にとってそれは関係ない。その会場内にいて、プロモーターからギャラをもらっている人間はすべて仲間であり、敵でもあるんだ。

倉持　あ～、そういう考えなんだ。

ブッチャー　たとえ、テレビ局の人間だろうと視界に入ったらレスラー同様にやるだけさ。その結果、「うわ～、凄い」ってなればオレにとっては満足なんだ。

倉持　さっき「シークがあんなことをするとは思わなかった」って言ってたよね。でも、僕を襲うというアイデアはブッチャーが考えたんじゃないの？　この際だからハッキリ言ってよ！（笑）。

ブッチャー　真実が知りたいのか？

倉持　ホントのことを教えてください。

ブッチャー　じゃあ、教えてやるよ。あのアイデアを出したのはオレさ（ニヤリ）。

倉持　やっぱり、そうなんだ（笑）。

ブッチャー　もう一つ真実を言うと、最初はシークとオレの二人でクラモ～チの首を絞めるだけのつもりだった。それがシークが何を思ったのかいきなり襲いだしたんだ。流血してるのを見たときは、さすがのオレもショックだったよ。

倉持　そういうことだったんだ。でも、シークはその後、デトロイトで僕にヒザをついて謝ってくれたんです。ご馳走もしてくれたし、僕のワイフには宝石をプレゼントしてくれました。

ブッチャー　アイツにもそんな面があったとはな。ヒッヒッヒッヒッ。

倉持　日本ではヒールに徹してたけど、地元ではいい人でしたよ。ところで、ブッチャーはいくつになったの？　僕はつい先日69歳になったんだけど。

ブッチャー　オレも1月11日で69歳だよ。

倉持　同い年？　初めて知ったよ（笑）。

——ブッチャーさんの生年月日はいろんな説がありましたからね（笑）。

ブッチャー　（ギロリと睨んで）オレは真実しか言わないんだ。

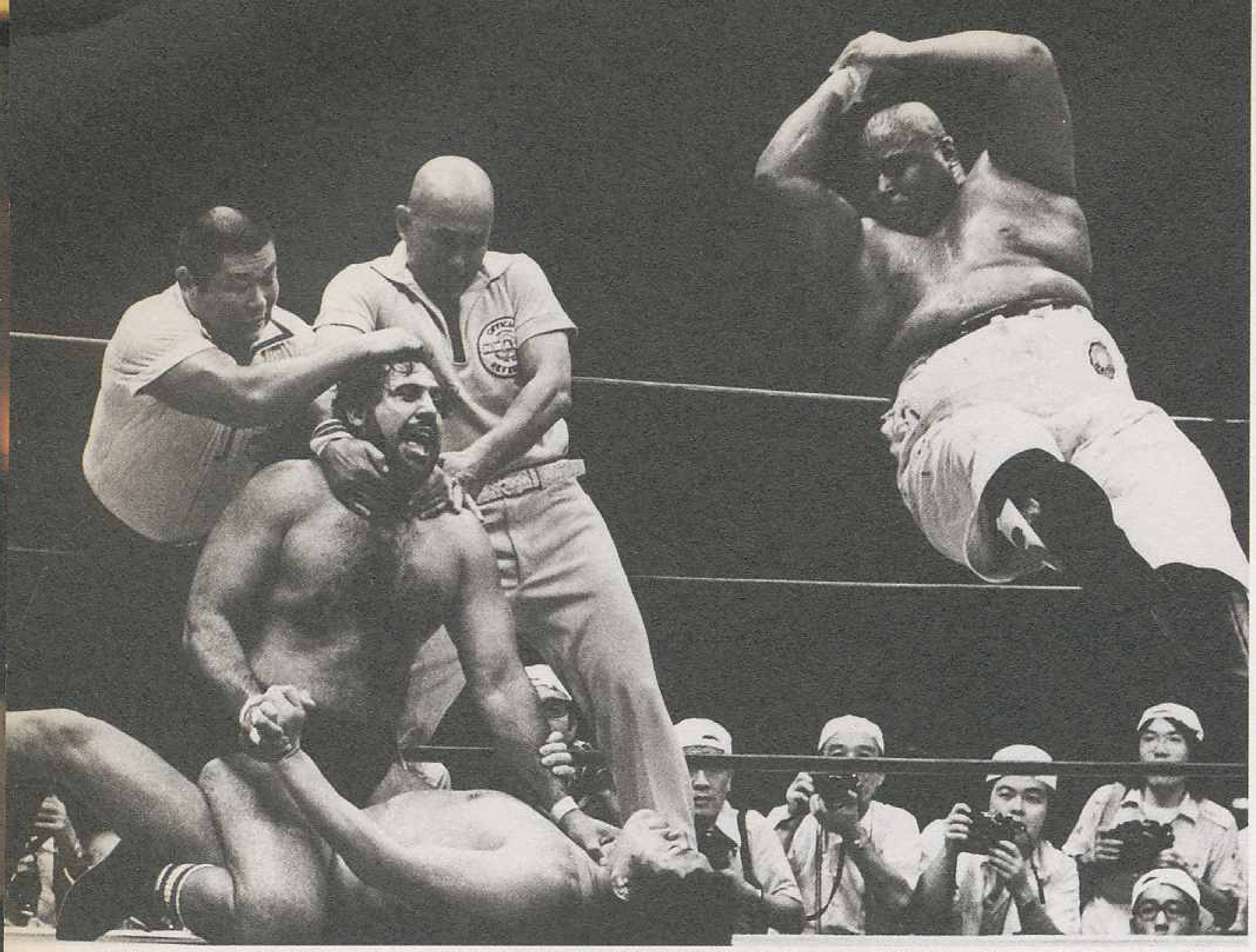
——し、失礼しました。

倉持　凄く元気そうで安心したけど、どこか悪いところはあるの？

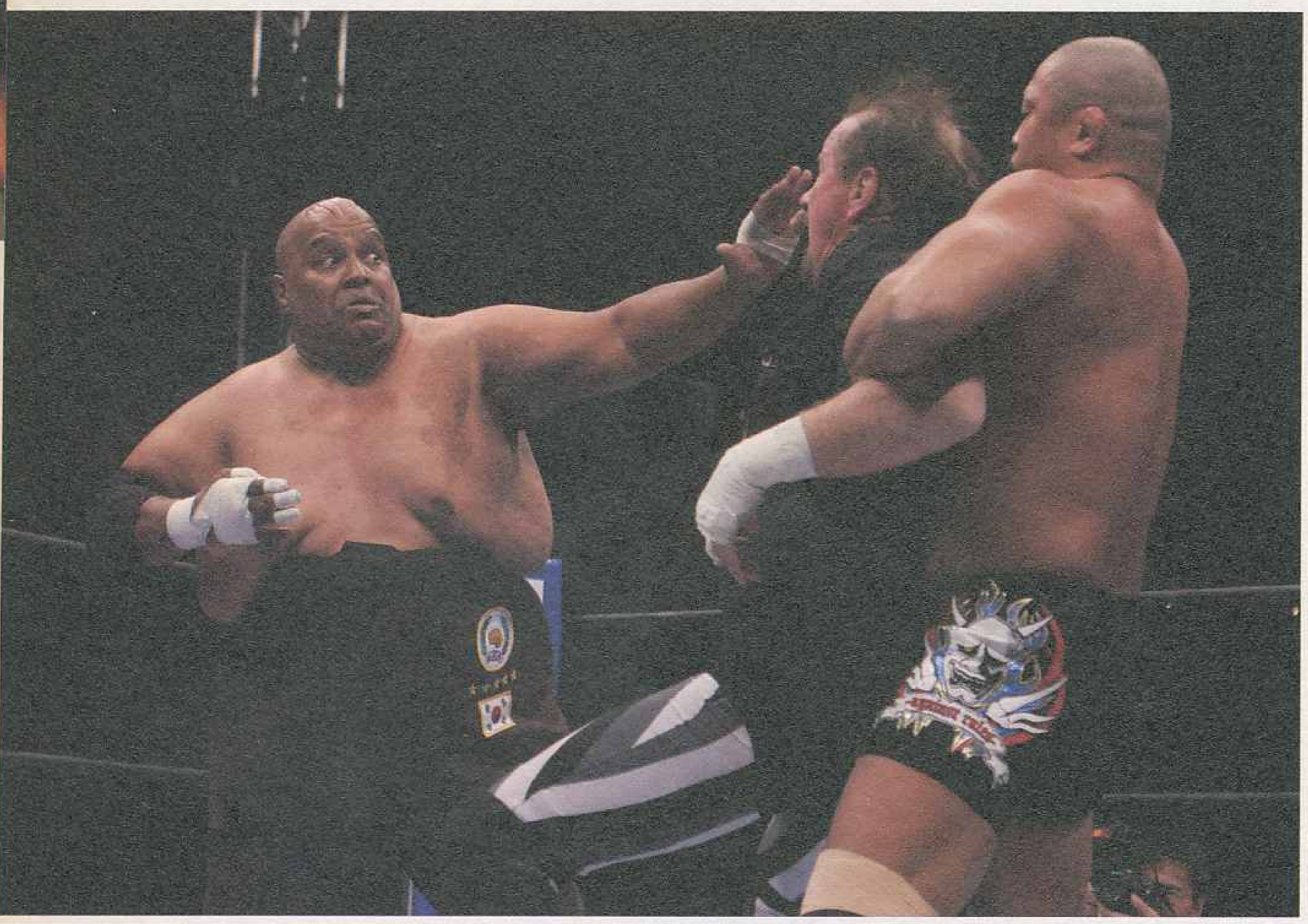
ブッチャー　股関節がちょっと悪くて手術をしなきゃいけないんだ。それ以外はどこ

窓会対談

も悪いところはないよ。
倉持　肉体は衰えてないんですね？
ブッチャー　完璧だよ！（とウインク）。
倉持　強いねぇ。でも僕がアナウンサーをしていた頃のブッチャーが一番強くて、いまよりも完璧だったと思うんですけど。
ブッチャー　それも正解だね（ニヤリ）。
倉持　あんまり元気すぎて、試合の度に放送席で襲われて大変でした（笑）。僕はアナウンサーとしてマイクを離しちゃいけなかったので、マイクを持っていつも睨み合ってたのをよく覚えています。
ブッチャー　オレも覚えているよ。
倉持　いつも襲われていたけど、僕はブッチャーが一番好きだったんですよ。
ブッチャー　それは本当かい？
倉持　あんまり好きだったので僕はブッチャーのレコードも作ったんですよ。『ブッチャー・ザ・グレーテスト』ってタイトルで（と言ってレコードを取り出す）。
ブッチャー　ふ〜ん、どれどれ（としげしげとレコードをチェック）。



1970年の日本プロレス参戦がブッチャーの初来日。それ以来、約40年にもわたり日本マットで活躍を続けるブッチャー。79年8月に日本武道館で開催された「プロレス夢のオールスター戦」では天敵のシンとタッグを結成し、馬場&猪木のBI砲と対戦。倉持アナはこの試合も実況を務めている。

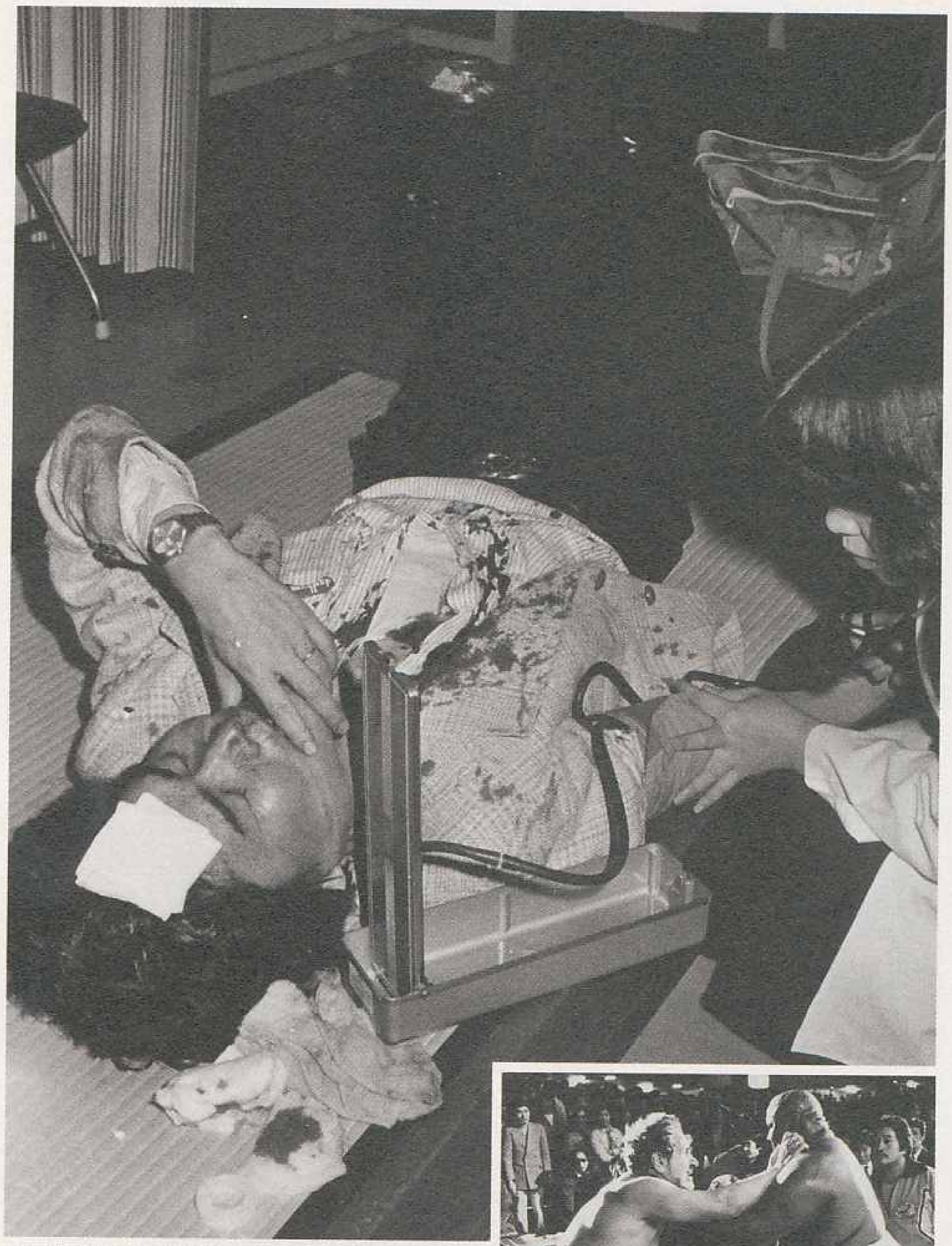


今年の1.4新日本ドーム大会では飯塚&矢野&石井とタッグを組み、テリー&長州&蝶野&中西と対戦したブッチャー。テリー相手に元気なところを見せたブッチャーだったが、試合後はなぜか「プロレスラーなんかになるもんじゃない。弁護士か医者になったほうがいい」と若者にメッセージ。

倉持　僕が歌って、当時アシスタントをしてた松永二三男も参加してるんですけど、かなり売れましたよ。
ブッチャー　そうなのか？　初耳だし、このレコードも初めて見た。ロイヤリティも入ってきていない（不満げに）。
倉持　いやいや、僕ももらってないですから。これはテイチクっていう会社が出したレコードなんだけど、たぶん全日本プロレスには許可を得てるはずです。
ブッチャー　それはそうなのかもしれないが、これはオレのレコードだろ？
倉持　まあ、そうなりますね。
ブッチャー　ということは、本来ならオレにロイヤリティが入るはずだろ。
倉持　そうですけど、もう20年以上前の話だから、許してください！（笑）。
ブッチャー　わかったよ。けっこう、馬場夫妻が自分の知らないところで、そういうことをやってたみたいなんだ。
倉持　ええ、よく知ってますよ（笑）。
ブッチャー　モトコのことは覚えているか？
倉持　元子さんのこともよく知ってるけど、まあまあ、今回はそういった薄暗い話はやめましょう。テープを止めてからたっぷり聞かせてもらいますので（笑）。
ブッチャー　OK。じゃあ、モトコの話はあとでたっぷり聞いてくれ（ニヤリ）。
倉持　はいはい、了解しました（笑）。
――以前、倉持さんからお聞きしましたが、会場では毎回襲われていたそうですが、来日のたびにブッチャーさんから高級ウイスキーを2本もらってたんですよね。
倉持　そうそう、いつももらってたんだよね。シーバス・リーガルの13年モノだったかな？　ホントにありがとう！
ブッチャー　今日はないけどな（ニヤリ）。
倉持　でも、こんなに年を取っても現役として頑張ってるなんてエライよね。
ブッチャー　オレはアブドーラ・ザ・ブッチャー。その生き方は変えることはできないからな。まだまだ、これからも闘っていこうと思っているよ（ニッコリ）。
倉持　でも、もうお金もいっぱい貯まってるんじゃない？
ブッチャー　もっともっと必要さ（笑）。
倉持　なんでそんなに必要なの？
ブッチャー　中毒みたいなもんで、金が入れば入るほど、もっとほしくなるのさ。
倉持　だって、アメリカにもカナダにも凄

全日本プロレス同

くデカいおうちがあるんですよね?
ブッチャー　まあ、日本の家に比べたらどの家もデカいだろうけどな(笑)。
倉持　昔、エビの養殖をやって、それで大成功して、大金持ちになったんでしょ。
ブッチャー　そんな事実はないな。エビの養殖ではだいぶ損をしてるんだ。
倉持　そうなんだ。でも、いまもステーキハウスとか経営して、実業家としても成功してるって聞いたけど、どうなの?
ブッチャー　レストランは4件経営しているし、不動産業もやってるんだ。大成功してるかどうかはわからないけどね。
倉持　へぇ～、凄いなぁ。僕は今度、実況アナウンサー時代の話をまとめて出版するんだけど、題名は『マイクは死んでも離さない』って言うんです。
ブッチャー　それはオレやシークに対するメッセージなのか?(ニヤリ)。
倉持　題名は新潮社の方が決めたんだけど、そうかもしれないね(笑)。
ブッチャー　でも、オレとシークが襲ったときはマイクを離していたよな?
倉持　確かに最後には離しましたね。だって初めてだもん、流血したのは。
ブッチャー　シークに襲われて流血した話は書いているのか?
倉持　はい、書かせてもらってます。
ブッチャー　さっきはオレが指示したと言ったけど、本にはどっちがやったかわからないようにしたほうがいいだろうな。
倉持　それはどうしてですか?
ブッチャー　どちらがやったかわからないようにすれば謎かけになるだろう。読んでる人に頭を使わせるようにしたほうがいいんだよ(ニヤリ)。
倉持　それはとてもいいアイデアだね。
ブッチャー　そうだろ。まあ、金ならいらないけどな(ウインク)。
倉持　アハハハハ！　もう書いちゃってるので内容は直せませんけどね。でも、明日のドームでは、永遠のライバルでもあるテリー・ファンクと闘うんですね。
ブッチャー　そうだ。テリーやドリー(・ファンク・ジュニア)と闘うときには、毎回、「アイツらはどういう仕掛けをしてくるのか?　それに対して、こっちはどうやり返すべきか?」と、常にアイツらの想像を上回るようなことを考えていたんだ。
倉持　ただのクレイジーなプロレスラーとはそこが違うんですね。
ブッチャー　そういうことさ(ニヤリ)。まあ、クレイジーなレスラーはたくさんいるが、テリーほどのクレイジーレスラーはあまり見たことがないよ(笑)。



これが本文中で両者が語ってる、問題の倉持アナ流血事件時の一枚。1980年5月2日の後楽園大会でのブッチャーvsシーク戦は途中から場外乱闘となり、これに巻き込まれた倉持アナはシークに額を切られ大流血。この試合は当時の日テレ社長の判断でノーTVに(数年後に放送)。

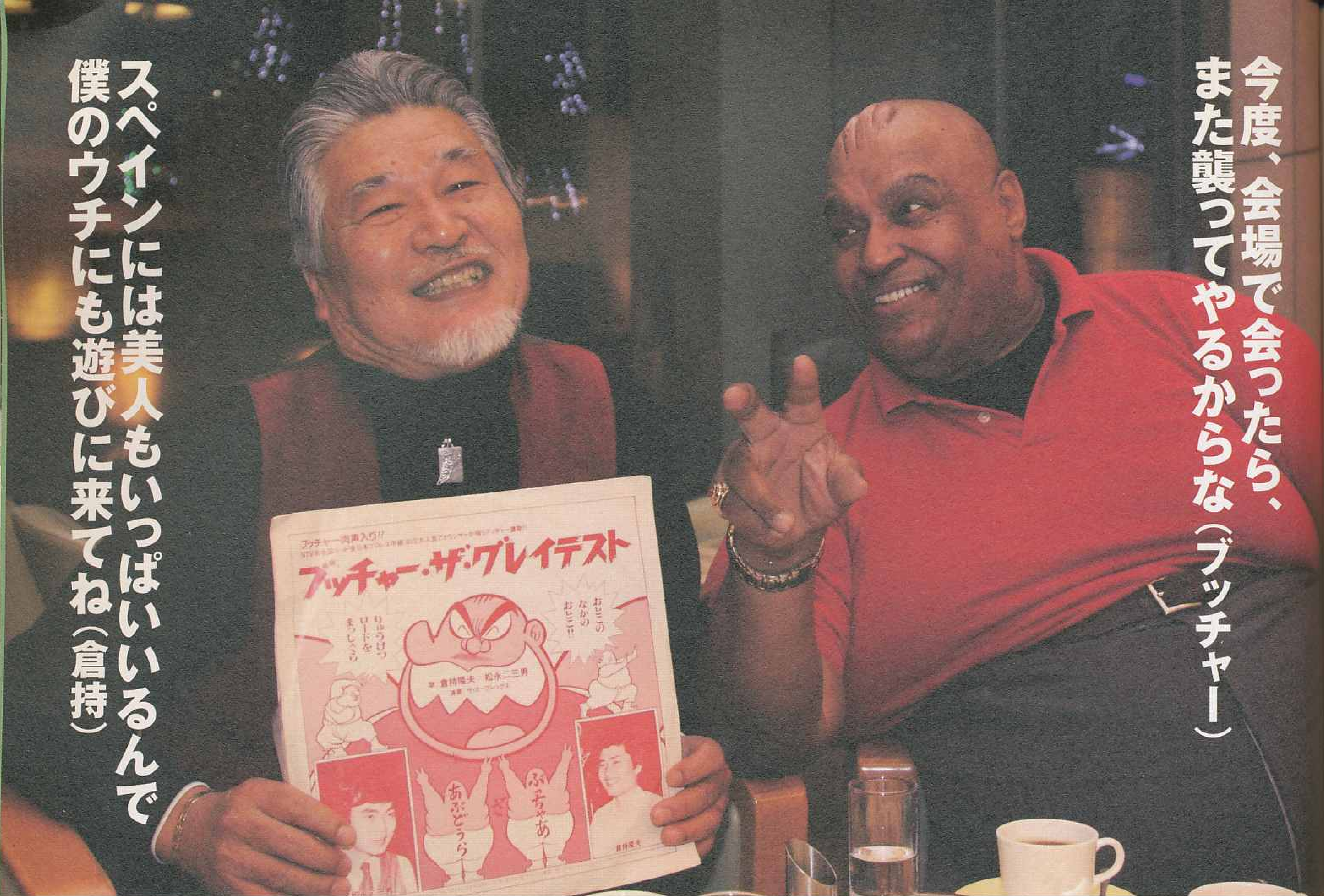
倉持　ある意味、テリーはヒールでもあったし、かなりクレイジーでしたね。
ブッチャー　馬場もクレイジーだし、大木(金太郎)もそう。でも、いくらクレイジーなヤツでもオレやシークには敵わない。オレたちからは誰も逃げることはできないんだ。わかるだろ?(ニヤリ)。
倉持　よ～くわかります(笑)。
ブッチャー　オレの額を見ろ?　この傷はクレイジーなヤツらにつけられたオレの勲章であり、この傷を見ればプロレスは何が起こるかわからないということを物語っているのがわかるだろ?
倉持　そうですね。そういうことを本でも書かせてもらいました。
ブッチャー　何が起こるかわからないような闘いをしてきたヤツらのことは一生忘れないよ。明日闘うテリーのことも忘れることはないだろうし、クラモ～チもそう。会うのはひさびさだけど、オレやシークの写真を見るたびに、自分の額の傷の苦い経験を思い出してたんじゃないのか?(ニヤリ)。
倉持　傷は消えることはないので、忘れようにも忘れられないですよ(苦笑)。
ブッチャー　そうだろう。それはどういうことかというと、当時のオレたちの試合はリアルだったってことさ。本を書くなら、リアルな話を詳しく書いてほしい。
倉持　だいたい、そのようなことを書きました。僕は真実しか書きませんので。
ブッチャー　それなら問題はない。
倉持　テリーとの試合はたくさん記憶にありますけど、中には凄く凄惨な試合もありました。闘ってるうちに本気で憎しみの感情も生まれてきたりしたの?
ブッチャー　それはシークレットだ。想像に任せるよ(ニヤリ)。
倉持　やっぱり、ヒールとして答えづらい質問になるのかな。
ブッチャー　まあいい。クラモ～チだから話してやるよ。オレは誰と試合をしても頭の中には常に憎しみはあった。これはすべての試合で言えることさ。なぜなら、それがアブドーラ・ザ・ブッチャーだから。
倉持　そこが普通のヒールと、キング・オブ・ヒールの違いなんでしょうね。
ブッチャー　そのとおり(満足げに)。
倉持　僕はブッチャーとは食事にもよく一緒に行ってたし、優しい一面も知ってたけど、キング・オブ・ヒールであることを尊重して、あえて当時の放送ではそういったことは言わなかったんです。
ブッチャー　優しい一面?　それは違う。誰もブッチャーのことは知らないんだ。
倉持　いや、僕は知ってますよ。一緒に飛

プロレス同窓会対談

今度、会場で会ったら、

行機にも何度か乗ってるし。ブッチャーは

をアメリカで売ってもいいか?



今度、会場で会ったら、また襲ってやるからな（ブッチャー）

スペインには美人もいっぱいいるんで僕のウチにも遊びに来てね（倉持）

くらもち・たかお■1941年1月2日、東京都出身。日本テレビのアナウンサーとして33年間マイクを握り、『全日本プロレス中継』の名物実況として活躍。54歳から読売新聞金沢総局に出向し、ニュースキャスターとして活躍。定年後はフラメンコ愛好家の夫人とともにスペインに移住。2010年1月18日に新潮社より『マイクは死んでも離さない』を刊行。

あぶどーら・ざ・ぶっちゃー■1941年1月11日、カナダ出身。1970年に日本プロレスに初来日。72年からはジャイアント馬場が旗揚げした全日本プロレスの常連ガイジンとして活躍。その後は新日本や『ハッスル』、ドラゴンゲートなど、さまざまなリングで大暴れ。飲食店経営や不動産業など、古くから実業家としても活躍。186cm、140kg。

行機にも何度か乗ってるし。ブッチャーは飛行機の一番うしろに行って小さい枕を抱いて寝てたのも見てるし、その話は本にも書かせてもらいましたよ。

ブッチャー　それも本当のブッチャーではない。オレのことを知っているつもりなのかもしれないが、「おそらく僕はブッチャーのもう一面を知ってるかもしれない」ぐらいにしたほうがいいだろう。

倉持　アハハハハハ！　気持ちはわかるけど、僕としてもなるべくこの目で見た真実を書きたいと思ったので、僕が感じたことをしっかり書かせてもらいました。

ブッチャー　そこは信頼しているよ。ただ、オレをベビーフェイスに変えようとするのは賛成はできない。アブドーラ・ザ・ブッチャーはいままでも、そしてこれからもヒールというのは変わらない。

倉持　最後の最後までヒールを貫きたい？

ブッチャー　もちろん。今度、会場で会ったら、また襲ってやるからな（ニヤリ）。

倉持　そうなんだ（笑）。じゃあ、たくさん日テレのスタッフがいた中で、どうして、僕にだけウイスキーをくれたの？

ブッチャー　ウイスキーでも渡しておけば、何か事故があって「ブッチャーなんて、弁護士立てて訴えてやる」と思ったとしても、「いつもウイスキーをもらってるし、そんなこともできないしな」ってなるだろ？ヒッヒッヒッヒッ。

倉持　一枚上だったんだ（笑）。

ブッチャー　ところで、さっき言ってた本はいつできあがるんだ？

倉持　まだ完成はしてないんだけど、できたら自宅まで送りますよ。

ブッチャー　ありがとう。本もいいけど、さっきのレコードは必ず送ってくれ！

倉持　わかりました。

ブッチャー　その送ってもらったレコードをアメリカで売ってもいいか？

倉持　あ、売ろうとしてたんだ（笑）。まあ、もう20年前のものだからいいんじゃないかな？　たぶん、大丈夫！

ブッチャー　サンキュー！　じゃあ、最後にオレからのプレゼントだ（と言ってマイフォークにサインして手渡す）。

倉持　お～、グラシアス！（スペイン語でありがとう）。

ブッチャー　今日は会えて凄くうれしかった。仲間がドンドン死んでいくので、生きていてくれたことがうれしいよ（笑）。

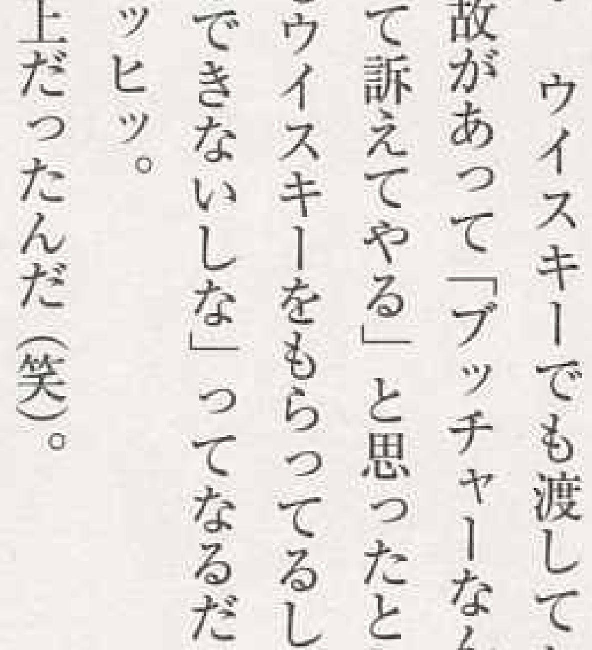
倉持　僕も一緒だよ。機会があったらスペインの僕のウチにも遊びに来てね。スペインはいいところだし、ブッチャーが好きな美人もいっぱいいるんで（笑）。

ブッチャー　それは真実かい？（ニヤッ）。

倉持　だから、僕は真実しか言わないって何度も言ってるでしょ？（笑）。

ブッチャー　じゃあ、必ず行くから、アトランタにも遊びに来てくれよ！

【10年1月3日／都内・東京ドームホテルにて収録】



『マイクは死んでも離さない「全日本プロレス」実況、黄金期の18年』
新潮社／￥1575（税込）

昭和48年から約18年にもわたり『全日本プロレス中継』を実況した倉持隆夫アナウンサー自らが実況アナの視点で、歴史に残る名物番組を振り返り、プロレス中継の現場を回顧。今回対談を行なったブッチャーはもちろん、ジャイアント馬場、ジャンボ鶴田、ザ・ファンクス、三沢光晴など、縁の深いレスラーのエピソードから、当時、新日本の実況アナとして活躍した古舘伊知郎アナとの気になる関係まで、倉持節満載の一冊。昭和プロレス者は必読ですよ！

・全日本プロ



祝!『アメトーーク!』
昭和プロレス芸人企画
ゴールデン放送!!

藤波辰爾×ユリオカ超特Q
ドラゴン対談

我々は殺し合いを◇●×△※★◎■!!(ドラゴン調) というわけで、夢のドラゴン対談ついに実現! ご存知、我らがドラゴン藤波辰爾と、ドラゴンモノマネの第一人者であるユリオカ超特Qの豪華な顔合わせである。いわゆる"ご本人登場"対談であるが、はたしてドラゴンはユリオカ超特Qのモノマネをどう思っているの!? さっそく二人の対談にドラゴンリングイン!

聞き手/阿修羅チョロ 撮影/タイコウクニヨシ

俺たちの ゴールデンプロレス 大特集

――新年一発目に、藤波さんと藤波さんのモノマネの第一人者であるユリオカ超特Qさんのドラゴン対談が実現しました！

ユリオカ　もうね、猪木さんや長州さんのモノマネをする人はたくさんいますけど、藤波さんは僕が独り占めしますよ。ドラゴンモノマネの第二人者は出しません！（ドラゴンストップポーズで）。

藤波　フフフフ。

――今回〝ゴールデンプロレス〟特集をやるきっかけになったのが、ユリオカさんも出演された『アメトーーク！』の特番なんですけど、藤波さんはご覧になりました？

藤波　観ましたよ。もうね、息子が大騒ぎ！

ユリオカ　あ、怜於南（れおな）くんが！

藤波　僕も『ドラゴン体操』はビックリしたしね（笑）。

――アハハハ！　藤波さんが子どもたちと踊る『ドラゴン体操』は番組でもクローズアップされてましたね。

藤波　ウチにもないんだよ、あのフィルム。さすがテレ朝ですよね。あれ、毎朝テレ朝で放送してたんだから。

ユリオカ　へえ～！　朝の子ども番組でですか？

藤波　そう、ワンクール。番組ではゾウしか映らなかったけど、ホントはまだまだ続くんですよ。フラミンゴとかね。中途半端で終わったから、そこがもったいない！

ユリオカ　ハハハハ！　でも、あれだけ流れたらけっこう凄いですよ。

藤波　いや、あのあとからおもしろくなるんですよ。せめてフラミンゴ。僕のは片足で立ってて凄くバランスのいいフラミンゴだったんですから（ちょっと得意げに）。

――妙にフラミンゴ押しですね（笑）。

藤波　あと（エル・）サムライも取り上げられてて、おもしろかったね（笑）。

ユリオカ　越中さんに続いてブレイクしてもらいたいところですけどね。

藤波　それはちょっと難しいんじゃない（ニッコリ）。

――さすがにそれは難しいですかね（笑）。

藤波　まあでも、頑張ってほしいよね。

――ここ最近はユリオカさんの単独ライブに藤波さんがサプライズで登場したり、お仕事で一緒になる機会も多いみたいですが、対談というのは何度かあったんでしょうか？



プライベートでも親交があるというドラゴンとユリオカさん。ユリオカさんのモノマネに、ドラゴンもご覧のとおりの大爆笑。なんとも心が和むワンショットである。

藤波さんの誕生日パーティに呼んでいただけるようになったんです（ユリオカ）

ユリオカ　対談というかたちは初めてですね。でも、最近はありがたいことにプライベートでもよくお会いしてるんですよ。藤波さんは12月28日が誕生日なんですけど、それに呼んでいただけるようになったんです。

――すっかりドラゴンファミリーの一員なんですね（笑）。

ユリオカ　ええ。このパーティはもう10年来やってるそうなんですけど、毎回サプライズパーティになってるんですよ。

藤波　そうそう、僕には一切何も告げられないんだよね。

ユリオカ　伽織（かおり）夫人がプロデュースされてて、たとえば普通にご友人とご飯を食べに来たという体で藤波さんを連れて来るんですけど、じつはそのお店にはお仲間が50人ぐらい揃ってて、全員が藤波さんのお面をつけて出迎えるというのもありました。

藤波　電気がついたら「うわーっ！　騙された！」ってね（うれしそうに）。

ユリオカ　それに、今年のパーティはドラゴンディナーショーだったんですよ。

――ドラゴンディナーショー！

ユリオカ　藤波さんは何も知らずに入ってきて、すぐにキンキラの衣装に着替えさせられて。僕がそこで「さあ、藤波さんどうぞ！」ってアナウンスしたんですけど、そしたらカラオケがかかって石原裕次郎の歌を藤波さんが3曲続けて歌うという。

藤波　そういう設定だったんだよね。でも、クソ真面目に3曲歌ったってところが凄いでしょ？（笑）。ああいう場面では歌わないのが普通らしいんですけど、僕はダメなんだよね。責任感があって「歌わなきゃいけない！」って思っちゃう。

――そこはさすがのユリオカさんもドラゴンストップはかけられず（笑）。

ユリオカ　僕はもう聴き入ってましたね。でも、毎年サプライズパーティがあるんだったら多少警戒しそうなのに、藤波さんって毎回騙されてますよね（笑）。ホントにあれは気がつかないんですか？

藤波　巧妙だからねえ……（しみじみと）。それに皆さん、協力してくださる方がね、一切僕に届かないように準備をしてるんですよ。たとえば昼間にこうやって話してるとするでしょ。そしたらその方がそのパーティにいたりするわけ。中には「明日から海外行く」とか、そういう前振りしていく人もいるしね。

ユリオカ　で、今年はばっちり藤波さんの格好をしてモノマネをやらせていただいたんですけど、『アメトーーク！』効果なのか、去年よりもウケましたね。

藤波　フフフ。やっぱりタイムリーなんだろうね。

ユリオカ　いやいや、皆さん藤波さんのお知り合いなんですからいつでもタイムリーなんですよ（笑）。

藤波　あ、そうね（アッサリ）。

――でも、藤波さんは自分のモノマネを初めて見たときはどう思われました？

ユリオカ　あ、それ聞きたいです！

藤波　ああ、最初はね、息子から言われたんだよね。猪木さんのモノマネする人とか長州小力くんはいたけど、どうしても僕はあんまり特徴がないっていうかね。

ユリオカ　（小声で）充分あると思います。

藤波　でも、あるとき息子が「お父さんのモノマネしてる人が出てたよ！」と言うからビックリしたんですよ。で、そのへんはユリオカさんの芸風で僕のおもしろい部分を出してもらって。……でも、僕自

藤波辰爾×ユリオカ超特Q

身はいつもクソ真面目だったんですよ。で

ユリオカ　もちろんそうでしょう！　でも藤波さんのマネといえば、僕らが小学校の頃は、藤波さんの息づかいは凄くマネしてましたよ。「フフン、フフン」っていう。

藤波　へぇ～っ！　そうなの？

――でも、どうですか？　ユリオカさんのモノマネって似てると思います？

藤波　うん、思いますね。やっぱりあれだけウケがいいとこを見ると、似てるんでしょうね。

ユリオカ　いやー、嬉しいですねえ。でも、たしかご本人の前で初めてやったのは、藤波さんが調布の郵便局で一日局長みたいなのをされてたときなんですよ。あれ定期的にやってますもんね？

藤波　なんでご存知なんですか？

ユリオカ　僕、見に行ってましたもん。平日の昼間2時ぐらいからやるんですよ。一般の人は行けない時間ですけど（笑）。

――ユリオカさんの追っかけっぷりも凄いです（笑）。

ユリオカ　それが終わったあとに共通の知り合いの方が伽織夫人を紹介してくださったんですけど、伽織夫人はボクのこと知っててくださって、「ほら、この方あなたのモノマネしてくださってる方よ」って。そしたら藤波さんは「そうなの？　じゃあここでやってみてよ」って郵便局の廊下でお願いされましたよ（笑）。

――郵便局の廊下でモノマネをリクエスト（笑）。

ユリオカ　だけど僕も芸人だから、ここはやるしかない！　と思って「（藤波ボイスで）藤波さん、こんなとこでモノマネなんて急にできないです！」ってやったんです。そしたら「あ、そう？　残念だなあ。じゃあまた今度ね」ってモノマネに気づかずに帰っちゃったんですよね。

――アハハハハハ！　で、ユリオカさんのドラゴンモノマネで一番有名なのは飛龍革命だと思うんですけど、ご本人の前で披露したことはあるんですか？

ユリオカ　つい最近も猪木、藤波の一人二役でやりましたよね？

藤波　そうね。見せていただきました。

ユリオカ　あのシーンはもう500回ぐらいは観てて、たぶん僕が日本で一番観てると思うんですけど、いまだに藤波さんが最後に叫んだ言葉がわからないんですよ。

――猪木さんを引っぱたいたあとのセリフですね。

ユリオカ　一番有力な説は、音声的には「モイスチャーミルク配合です！」って言葉なんですけど、それじゃ意味がわからないんですよね。藤波さん、あれはホントになんて言ったかわからないんですか？

藤波　うん、わかんない（キッパリ）。

ユリオカ　ハハハハハ！　藤波さんにわからないって言われちゃったら、もう永遠の謎ですよ。しかも、あそこで前髪を切りだしたじゃないですか。なんであれ前髪を？

藤波　うーん、だから結局ね、子どもが駄々こねるときに地団駄踏むとか、あるじゃないですか。それと同じでしょうね。

ユリオカ　ちょ、ちょっと待ってください！　あれドラゴン地団駄だったんですか？（笑）。

藤波　自分の意思表示をなんとかかたちにする行為が結局それしかなかったんですよ。だって、猪木さんを引っぱたいたあとでしょ？　もう自分の中では「これはえらいことしたな」って頭の中真っ白なんですよ。で、普通だったらそのまま出てっちゃうんだろうけど、もう一つなんか意思表示をしたかったんだろうね。

ユリオカ　そこで急箱のハサミを取り出して、前髪を切り始めた、と。

藤波　あとで女房に怒られましたよ。「切るんだったらもうちょっとちゃんと切ってよ！」って。

ユリオカ　そこですか！（笑）。やっぱりカッとしたときって自分で何をしてるかわからなくなるときってあるんですか？

藤波　それはありますよ、少なからずね。

ユリオカ　たとえばマシンさんへの「おまえ、平田だろ」発言も、我を忘れてのことなんですか？　ゴールデンの生放送でマスクマンの本名を言うという、プロレス史上稀に見る珍事でしたけど（笑）。

藤波　あれも、とっさの判断だね（アッサリ）。

ユリオカ　とっさの判断！　藤波さん、それはとっさの判断で一番悪いの選んじゃいましたよ（笑）。

藤波　だからアドリブが利かないんですよ。当時のレスラーって、リング上のパフォーマンスってめったに許されなかったから慣れてなかったしね。で、たまたまそういう場面がきたときに出ちゃったんですよ、ポロッと。……でも、実名を言っちゃいけないよね（苦笑）。

ユリオカ　ハハハハハ！　実名報道の是非が叫ばれる昨今、早すぎた実名事件です！

藤波　でもね、そういう生放送でのアクシデントがプラスの結果になることもあったんですよ。僕と（木村）健悟が揉めてね、結果的に後楽園ホールでワンマッチ興行やったこともあったし。

ユリオカ　あっ、それも伝説の試合ですよね！

藤波　あれも前のシリーズで、たまたまマイクで「決着戦をやろう」となって開催が決定したんですよね。チケットもポスターも何も準備できないっていう状況だったけど、とにかく後楽園ホールを押さえてね。でも、それも数日後にはチケットがソールドアウトになったんだから。

前髪を切った理由？　結局子どもが駄々こねるときに地団駄踏むのと同じ（藤波）



これぞ有名な飛龍革命のシーン。ドラゴンが自らの前髪を切って猪木さんに改革を訴えるという場面だが、ユリオカさんはなんと猪木さんとドラゴンの一連のセリフをカンコピしており、一人二役でモノマネすることもできるのだ！

——ユリオカさんは熱狂的なプロレスファンとしても知られてますけど、一番熱心に観てたのはいつぐらいになるんですか？

ユリオカ　80年代前半の新日本ですよね。藤波さんがいて、タイガーマスクも長州さんもいて、猪木さんとホーガンが闘ったりしてた時代ですよ。

藤波　当時はお客さんも凄かったもんね。そのあとの90年代も大阪城ホールや両国はもうあたりまえだったし、東京ドームが年3回ですよ！　年3回やっても5～6万人お客さんが入った時代だからね。

ユリオカ　だからさっき言った80年代のゴールデンの頃は、僕がちょうど思春期のど真ん中の中学生ぐらいだったんですけど、学校ではプロレスごっこもしてたし、『ワールドプロレスリング』の翌日にはみんながプロレスの話題をしてましたからね。で、その頃ビデオがまだなかったんで、ラジカセで音を録音して何度も聴いてましたよ。

藤波　え、そうだったの？

ユリオカ　ええ。だから古舘さんの実況もテープでの記憶なんですよね。「掟破りの逆サソリ！」とかね。もうビデオとかDVDに録れるいまの時代よりも、あの頃のほうが試合展開はハッキリ覚えてました。ちなみに、僕が一番好きな藤波さんの試合は、前田戦なんですけどね。

——藤波さんが大流血した試合ですね。

ユリオカ　ほかにもいろいろとあるんですけど、その試合はちゃんと生観戦したというのもあるし、UWFが戻ってきたときの新日本vsUWFの空気は凄かったですからね。

藤波　あれは異常だったね。片や一つの興行を守ろうと精一杯の新日本と、壊してなんぼっていうUWFのぶつかり合いだからね。

ユリオカ　それは長州さんの噛ませ犬発言のときもそれに近い構造がありましたけど、でもいつの時代も僕は藤波派だったんですよ。なぜかというと、長州派にしても前田派にしても、結局文句つけるほうがカッコいいように見えるんですよ。でも、藤波さんが受けて立つからこそ文句言えるんですよ！　ね、藤波さん？

藤波　こういうファンの方がいたから僕もできたんだろうね。そう思っても、当時はそれを口にするのはファンも凄く勇気がいったと思うよ。

ユリオカ　でも、藤波ファンは藤波さんの性格がうつるようなところがあって、



こちらも有名な「おまえ、平田だろ!?」事件のシーンであるが、ドラゴンにこの日のことをうかがってみると「頭が真っ白になった!」とのこと。ホントにドラゴンはどこまでも我々を幸せな気持ちにさせてくれる。

長州派や前田派の言い分を聞いちゃうんですよね（笑）。

——ファンの中にも受けの美学があった、と（笑）。

ユリオカ　僕がいま使ってるコスチュームはその前田戦のときに着てたものなんですよ。

藤波　あ、ホントだね。でもね、当時は衣装がピンクというのは凄く勇気がいったんですよ。絶対リングじゃありえない色じゃない？　それをデザイナーに「あえてリングのコスチュームに持ってきましょう」って言われて、僕は「うーん……」って考えたんですよ。でも一回、言われるがままやってみようって着たんだよね。

ユリオカ　そこも無我なんですね（笑）。あと藤波さん、これは素朴な疑問なんですが、生放送で試合してるときって、僕らからすると「もしかしたらメインの時間が足りなくなっちゃうんじゃないか」とか「最後まで観れるのかな？」みたいなヒヤヒヤ感ってあったんですけど、それって選手側にも時計を気にするような余裕ってあったんですか？

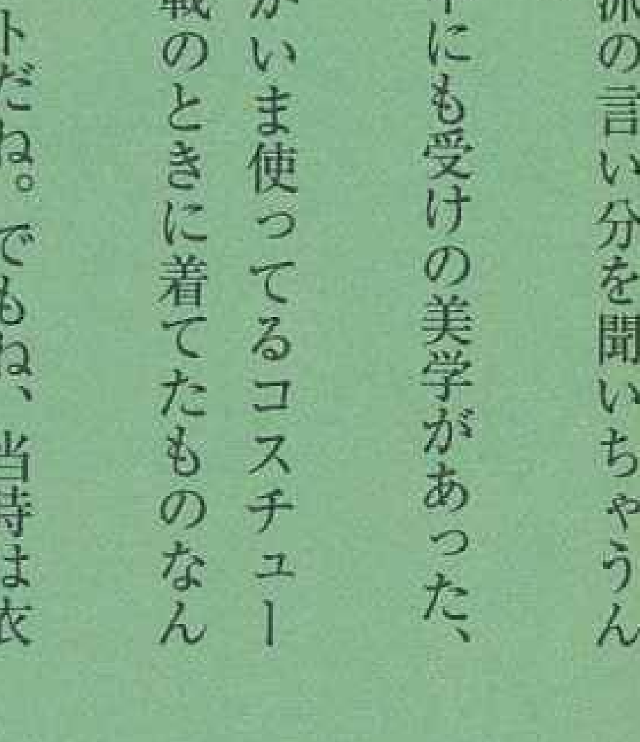
藤波　ありました、僕はね。余裕というか、自然とそうなってたんだけどね。だから、リングに上がったときにはまず会場の時計を探してましたよ。

ユリオカ　へえ～！

藤波　でも、絶対そのとおりにはいかないですよ。相手選手もいることだしね。ただ頭のどっかで時間を気にしてるから、自分にダメージがあっても「猪木さんにつながないと」って意識してましたね。

ユリオカ　なるほど。いや、僕ら田舎で観てる者からすれば、いまみたいにネットで結果がすぐわかるわけでもないし、やっぱり結果まで映るかどうか気になりましたよ。最後のエンディングテーマが流れたあとに、ちょっとだけまたリング上の映像が流れるんですけど、そのとき猪木さんが手を挙げてたら「あ、勝ったのかな」みたいな感じで観てましたから。

藤波　そういう意味では、猪木さんは僕らよりもそういう意識がもの凄い長けてる方でしたよ。たとえばリング上でダラダラ試合してると、猪木さんが飛んで入ってきて試合をブチ壊してましたから。やっぱりエンディングは寝転がって終わるよりも混乱してたほうがおもしろいわけでしょ？　そういうのは僕ら以上に猪木さんのほうが意識が強かったよね。



藤波辰爾伝説の迷曲『マッチョドラゴン』はあまりにも有名だが、『アメトーーク!』で放送された『ドラゴン体操』はこのB面に収録されている。ある意味、なんて贅沢な一枚なんだ!

ユリオカ　そこまで考えてたって凄いよなあ。でも、あの頃は毎週金曜日に生放送されてたわけじゃないですか。猪木さんもそうですけど、20年以上はほぼ毎週ゴールデン番組に出てたということですからね。そう考えると、当時のプロレスラーの知名度がいまでもあるってあたりまえですよね。芸人やタレントでもなかなかいないですよ。

藤波　しかも、平均視聴率は20パーセント以上いってましたからね。20パーセント切ったら、「ちょっと考えないと」って思ってたから。

ユリオカ　それこそ、最近のドラディションでは初代タイガーマスクや長州さんとのゴールデントリオで全国を回ったり

藤波さん、『タモリ倶楽部』にいったい何回出てるんですか！（ユリオカ）

フフフ……お城の話だからね（笑）（藤波）

してますよね。

藤波　いまウチができる範囲でやってるんですけどね。『アメトーーク！』を観てるようなファンは僕らの試合なんかを一番観たがってますから。

――その一方で、最近は芸人さんがプロレスラーと一緒にリングに上がることもあって、先日もF―1タッグ王者の武藤さんと神奈月さんにケンドーコバヤシさんと越中さんが挑戦したりしてましたけど、お二人で挑戦するという可能性はあるんでしょうか？

ユリオカ　また難しいところを突っ込みますね（笑）。

――イメージ的に藤波さんはちょっと固いところもありますし、そういったプロレスには抵抗があるんじゃないかと。

藤波　僕もプロレスにはやっぱりこだわりがあるからね、自分の中ではメインのプロレスとそういうプロレスは分けてますよ。だから年に一回のファン感謝デーとかでやったりするのはアリだと思うけどね。武藤もそうだし、猪木さんも少なからずそういう気持ちはあるでしょ？

ユリオカ　それこそ猪木さんはタッキー（滝沢秀明）ともやってますからね。前田さんは怒ってましたけど（笑）。

――藤波さんもファン感謝デーのようなお祭り的なイベントだったら、Wドラゴンでの出陣の可能性もないことはない？

藤波　まあ、機会があればね。

ユリオカ　でも、そこは正直僕らも複雑なんですよ。僕もファンとしてリングに対する憧れはあったんですけど、本音の部分ではどちらかというと最初はイヤでしたから。だって、（ビート）たけしさんがTPGとして両国にベイダーを連れてきて暴動になったことがあったじゃないですか？



ゆりおか・ちょうとっきゅう■1968年4月1日、兵庫県出身。お笑い芸人、漫談家。ドラゴンモノマネの第一人者であり、そのクオリティは本人も驚くほど。また芸能界屈指のプロレスファンであり『アメトーーク!』のプロレス芸人企画には絶対に欠かせない存在である。合言葉は「らっしゃい」

ふじなみ・たつみ■1953年12月28日、大分県出身。言わずと知れた名プロレスラー。99年から04年まで新日本プロレスの社長を務めており、その後『無我ワールドプロレスリング』代表取締役に就任。現在は『ドラディション』に団体名を変更し、自らリングイン。長州力やタイガーマスクらも参戦している。

藤波　あったね。

ユリオカ　あのときなんか、ホントにイヤでしたもん。たけしさんは大好きでしたけど、リングに上がったときは「ふざけんな！」って思ってましたから。

藤波　でも最近のファンはそういう抵抗はあまりなくなってきてると思うんだよね。

ユリオカ　そのあたりのことは神奈月さんとかケンコバくんとか、芸人同士でも凄く話し合うんですよ。「芸人がリングに上がるなんて、俺たちの素人時代だったら認めなかったよな」って。だけどいまはボクらが上がることによってファンが喜んだり、プロレスにスポットが当たるんだったら、もしかしたら間接的にはプロレスの役に立ってるかもしれないのかなって。

――そこは悩んだうえでのドラゴンリングインなんですね。

ユリオカ　だから重々承知なんです。

――確かに『アメトーーク！』がきっかけでプロレスに興味を持つ人って少なからずいると思いますし、「長州力は知らないけど小力は知ってる」って人も多いって言いますからね。

藤波　そういう人も多いよね。

ユリオカ　でも、ここ最近の長州さんは小力くん以上に芸能活動に力を入れてるような気もしますけど（笑）。

藤波　彼もいろいろとやってるよね。

――それこそ藤波さんもテレビでは芸人のお株を奪うような活躍をされてるじゃないですか。

ユリオカ　そうですよ！　藤波さん、いったい何回『タモリ倶楽部』に出てるんですか！（笑）。

藤波　フフフ。お城の話だからね（笑）。

ユリオカ　しかも、隙を見せると藤波さんがデパートの地下食品売り場でリポートしてる場合があるんですよ。そういうの、我々の仕事ですよ。

藤波　フフフフ。

ユリオカ　もはやライバルです！　でもですね、コレだけはぜひかなえたいんだけど、僕の夢はいつか藤波ファミリーと『いい旅・夢気分』に出ることなんです。

――そんな野望がありましたか（笑）。

ユリオカ　僕が「（藤波ボイスで）じゃあ美有、怜於南、伽織、行くぞ！」なんて言ったら「待て待て、本物はこっちだよ」って藤波さんがあとから追いかけてくるっていうね。「じゃあ一緒に行こうか」「行くぞーっ！」なんつって。ね、藤波さん？

藤波　フフフ。……あるかもしれないね（ニヤリ）。

ユリオカ　ホ、ホントですか！（笑）。

――ちなみに、『いい旅・夢気分』もゴールデンですからね。

ユリオカ　そうですよ！　今度はぜひドラゴンタッグでゴールデンに進出しましょう！

藤波　フフフフ……（意味深に）。

【10年1月8日／都内・某所にて収録】



孤高のプロレス侍

エル・サムライ

『アメトーーク!』効果でブレイク間近!?
哀愁のマスクマンがボソボソとその半生を激白!

「マスクを脱ぐのは パンツを脱ぐよりも 勘弁ですね……」

『アメトーーク!』新春SPで“切ないマスクマン”として
フィーチャーされたエル・サムライが『kamipro』に初見参!
伝説の野毛道場時代から90年代ジュニア黄金期、
そして新日離脱の真相まで、背中を丸めてボソボソと激白!
さぁ、“サムライノンフィクション”のはじまりはじまり〜!!

聞き手／鈴木佑　試合写真／平工幸雄

エル・サムライ

——サムライさんは『kamipro』はご覧になったことはありますか？

サムライ　……俺、いまはプロレス雑誌ってほとんど読んでないんですよね（ボソッと）。

——そ、そうですか。失礼ですが、サムライさんのインタビュー記事ってあまり見かけた記憶がないんですよね。なので、ミステリアスに包まれてるというか。

サムライ　いや、単純に無口だし、おもしろいことも言えないからじゃないですかね？

——は、はぁ（汗）。あ、ちなみに『アメトーーク！』というテレビ番組はご存知ですか？

サムライ　あ、よく観てますよ。けっこう深夜番組とか好きなんで。

——お！　では、あの番組で「プロレス芸人」という企画があるのは知ってます？

サムライ　あぁ、越中さんがプッシュされたヤツですよね？

——そうですそうです。で、この取材時にはまだ放送されてないんですが、今度の『アメトーーク！』の特番でまた「プロレス芸人」がありまして、そこでサムライさんが取り上げられるそうなんですよ。

サムライ　……本当ですか？（ちょっとうれしそうに）。

——はい（笑）。そういうこともあって、今回は知られざるサムライさんの半生を中心にお話を聞きたいな、と。

サムライ　あぁ、なるほど。わかりました。

——そもそもプロレスに興味を持ったきっかけというと？

サムライ　小学校5～6年の頃に、たまたま本屋でプロレス雑誌を読んだのが入り口ですね。で、そのあとにテレビを観るようになってハマっちゃって。

——やっぱり新日本ファンで？

サムライ　いや、最初は全日本でしたよ。いろんな外国人レスラーを観るのが好きで。ブッチャーにシーク、ファンクスとかあのへんですね。

——そういえばサムライさんは若手の頃、体型がドリー・ファンク・ジュニアに似てるってことで〝和製ドリー〟とか言われてましたよね（笑）。

サムライ　あぁ（笑）。たまに言われてましたけど、それはうれしかったですね。あとはホースト・ホフマンとかスティーブ・ライトとか、ヨーロッパ系の渋いレスラーが好きでしたよ。

——職人肌のサムライさんが好みそうなレスラーですね～。で、プロレスラーを目指して高校の頃にレスリングを始めた、と？

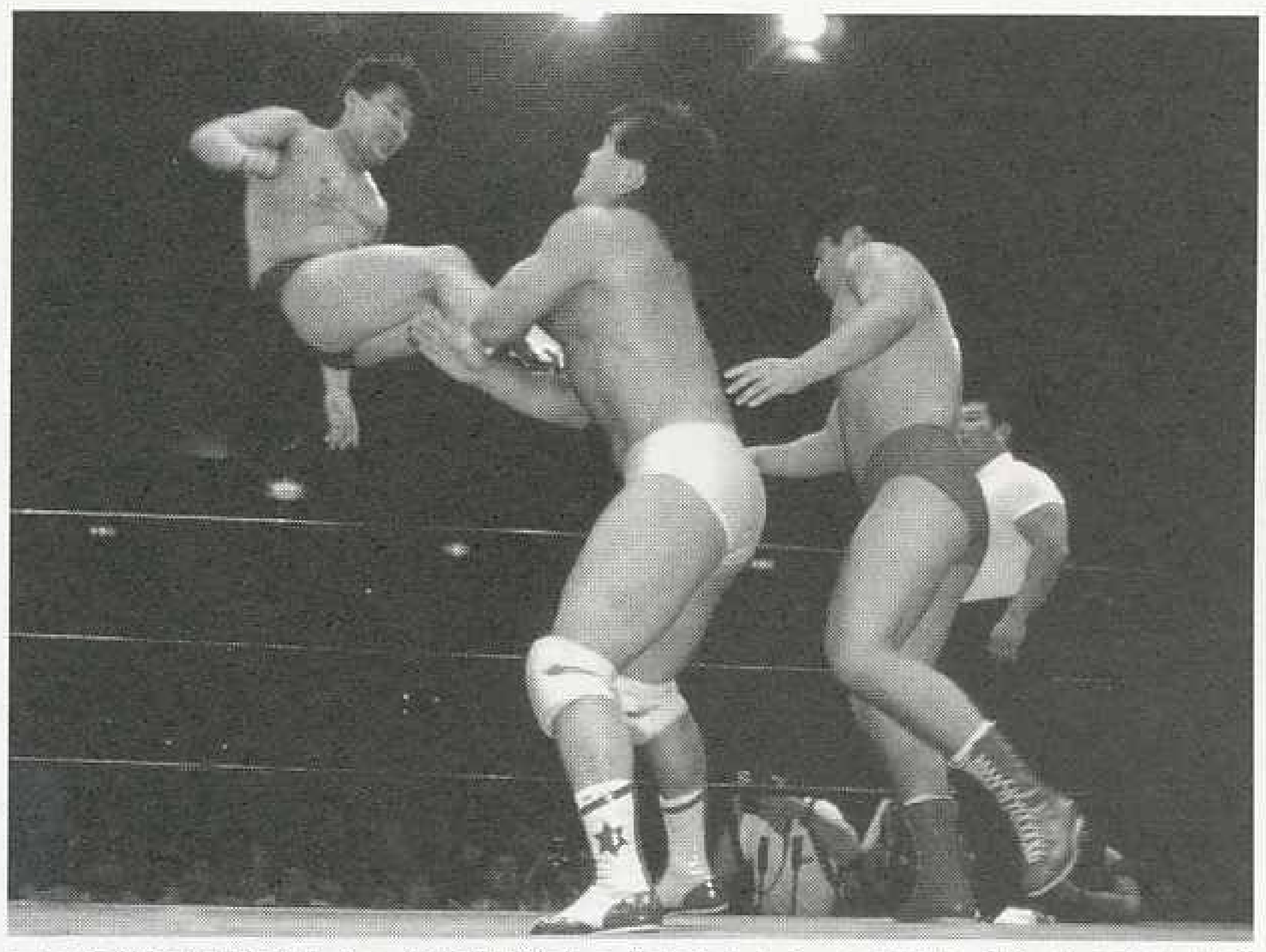
サムライ　はい。当時、岩手県にはレスリング部のある学校が6つしかなくて、実家近くにあった専修大学付属北上高校に入ったんですけど。

——それは長州さんをはじめ、専大卒のレスラーが多かったから？

サムライ　いや、たまたまです。だから大学にも進学してないし、そもそも中学を出たらプロレスに入門したかったくらいなんで。

——あ、そうなんですか？

サムライ　当時、船木さんが中卒でプロレス入りしたんですよね。しかも同じ東北出身ってこともあって、なんか影響されて。とにかくその頃は早く入団したかったのを覚えてます。でも、「その前に何かやっといたほうがいいな」と思って高校に進学して。



マスクを被る以前のサムライは飛び技もこなすかたわら、レスリングをベースにした動きでUWFの若手とも五分の試合を展開するなど、玄人受けするセンスを見せていた。

——アマレス部の仲間にはレスラーになりたいって伝えてました？

サムライ　いや、全然。一切言ってないですね。

——は～、それはまたなぜ？

サムライ　……恥ずかしくて（ボソッと）。まぁ、その頃から自己主張とかするほうじゃなかったし。周りから見ても静かだったと思いますよ。

——新日を受けた理由というと？

サムライ　最初は迷ったんですよ、全日にするか。まぁ、当時は新日のほうが若手も多かったんで。

合宿所のイタズラですか……船木さんだけは勘弁してほしかったです

——若手が多いとライバル争いが激しいとか思いませんでした？

サムライ　いや、なんかとにかく若い人がたくさんいるほうがいいなって思って。全日は若手がいないってこともないけど、少なかったですよね。川田さんとか越中さんとか。

——それで高校卒業してから上京して、入門テストを受けたかたちですか？

サムライ　いや、履歴書を送ったら「岩手で試合やるから会場に来てくれ」って連絡があったんです。そのときは坂口さんが試験官で、自分一人でテストを受けて。とりあえずリングで片山（明）さんとスパーリングとかスクワットをやって、その場で合格を言い渡されたんですけど。

——わりとあっさり合格だったんですね。

サムライ　そうですね。それで新幹線代をもらって上京して。

——サムライさんが入寮したときの合宿所のメンバーは闘魂三銃士を中心とした人たちですよね？

サムライ　はい。あとはライガーさんや佐野さん、船木さんに畑さんとか。で、自分の10日くらいあとに飯塚が入ってきて。

——同部屋だったのは？

サムライ　入った当初は武藤さんが一緒でしたね。俺も武藤さんもマイペースなんで、とくに交流もなかったですけど。

——お互い干渉せず、と（笑）。当時の合宿所はシャレにならないイタズラが横行してたって聞きますけど、サムライさんは餌食にはなりませんでしたか？

サムライ　……やっぱり船木さんだけは勘弁してほしかったですね（ボソッと）。

——船木さんですか（笑）。どんな被害に遭いました？

サムライ　あの頃はしょっちゅう、喉元を絞められて落とされてましたね～（しみじみと）。

——それはスパーリング中に？

サムライ　いや、普段からです。

——普段って日常生活で、ですか？

サムライ　船木さんが「マツ、ちょっとこっち来て」って笑顔で呼ぶんですよ。で、そばに行くと喉元を両手でクゥーッて押すんです。で、こっちの意識が遠のいて「ストン！」って落ちると、船木さんはそれをうれしそうに眺めてるらしいんですけど。

——うわ～、恐ろしいですねぇ～。

サムライ　で、パンツ脱がされて写真撮られたり……ホント、勘弁してほしかったですね（苦笑）。

——さすがマッドネス（笑）。よく船木さんとライガーさんが新弟子を絞め落としたあとに風呂に沈めてフタを閉めたとかって話を聞きますけど、サムライさんは大丈夫でしたか？

サムライ　あ、それは自分が入った

で。一応、ずっと同じ部屋だったのは

から」って笑いながら言われたんです

——ほかに先輩で「この人は変わっ


06年にはみちのくプロレスのふく面ワールドリーグ決勝トーナメントで獣神メカマミーとの異色対決に臨んでいるサムライ。ロケット掌底を見事に受けきるなど、"匠の仕事"を見せた。

サムライ　あ、それは自分が入ったあとですね。いやぁ、「かわいそうだな」って思いましたよ。まぁ、それが原因かどうかはわかんないですけど、あの頃は辞めていく新弟子も少なくなかったんじゃないかな。でも、こっちは見てるしかないですからね、もう。

――ちなみにイタズラ好きな橋本さんからは何かされたりは？

サムライ　俺は橋本さんからはないですね。あの頃はよく片山さんが狙われてましたね、橋本さんに空気銃で頭を撃たれたり。

――ひどいなー（笑）。当時、サムライさんが仲よかったのは誰ですか？

サムライ　……とくには（ボソっと）。

――誰とも、ですか？

サムライ　基本的に一人が好きなんで。一応、ずっと同じ部屋だったのは飯塚でしたけど。

――飯塚さんと何か息抜きに遊んだりとかは？

サムライ　……とくには（ボソっと）。

――な、なるほど。あの、プロレスラーだと若手時代のお酒にまつわるトンパチエピソードなんかを持ってたりしますけど、サムライさんは何かありますか？

サムライ　……。

――「とくには」ですか？（笑）。

サムライ　あ、一回だけ前田（日明）さんと飲んだことがありましたよ。

――お、それは珍しい組み合わせですね！

サムライ　前田さんがもう新日本を辞めた頃だったんですけど、船木さんに「いま、六本木で飲んでるからちょっと来い」って電話がかかってきたんです。それで俺も誘われて行ったんですけど、席に着くなり前田さんが「おまえはコレや」ってウォッカを出してきて。ガーッて何杯も飲まされたんですけど、あれにはまいりましたね……（しみじみと）。

――前田さんとどんな話をしたか覚えてます？

サムライ　いや、全然覚えてないですね。そのときはどうやって帰ったかも記憶がないんですよ。船木さんには「マツ、写真撮っといたから」って笑いながら言われたんですけど……また脱がされてたかもしれない（ボソっと）。

――ダハハ！　けっこう船木さんにはかわいがられてたんじゃないですか？

サムライ　どうなんですかね。まぁ、俺のデビュー戦の相手でしたしね。

――去年、船木さんもプロレスに復帰しましたけど。

サムライ　「どういう試合してるんだろう？」って気にはなりますね。まぁ、やりたいとかはとくに思わないですけど（ボソっと）。

――なるほど（笑）。サムライさんが若手の頃に付き人をしてたのは木村健悟さんなんですよね？

サムライ　そうですね、木村さんだけです。

――どんな方でしたか？　武藤さんをはじめ、木村さんの付き人は出世するっていうジンクスがありますけど。

サムライ　いま思うとけっこう楽でしたね。理不尽なこともしないし、そんな気を使うってこともなかったですし。

――食事に連れてってくれたりはしました？

サムライ　はい。でも、何回か断ったこともありますけどね。

――え、普通は大先輩の誘いは断れないんじゃないですか？

サムライ　いや、「今日はちょっと」って（笑）。まぁ、木村さんだから言えたんでしょうけど

――長州さんとかだったら許されなさそうな（笑）。

サムライ　そうなんですよ。木村さんは厳しくなくて助かりました。

――ほかに先輩で「この人は変わってるな」と思った人はいましたか？

サムライ　……やっぱりジョージ（高野）さんは変ってましたよね。

――あぁ、周りから"宇宙人"って言われてたくらいですもんね。

サムライ　あの人、練習するたびに「おい、俺の筋肉どうだ？」って何度も聞いてくるんですよ。ホント、勘弁してほしかったですね。

――とことんナルシストだった、と。

サムライ　カールやりすぎて筋肉痛になって湿布貼ったりしてましたから。あとは（高野）俊二さんも勘弁してほしかったな～（ボソっと）。

――弟さんからも被害を被ってましたか（笑）。

サムライ　あるとき、巡業で飯塚と同室だったんですよ。で、夜中に二人とも寝てたら、ベロンベロンに酔っぱらった俊二さんから電話がかかってきて。寝ぼけながら俺が電話に出たら「コールは3回以内に出ろ！」とかいろいろわめいてるんですけど、何を言ってるかよくわかんないんですよ。

――迷惑ですね～。

サムライ　で、電話を切ってしばらくしたら、ドアをドンドン叩く音がして、部屋に俊二さんが乗り込んできて。それで俺と飯塚にゲンコツをくらわしてまたさんざんわめいたんですけど、なぜか帰り際に俺らに「食べなさい」って寿司を置いていって（笑）。

――ダハハハ！　いい人なのか悪い人なのか（笑）。あと、若手時代のサムライさんは飯塚さんや鈴木みのるさんとの試合が多かったですよね、順繰りにというか。

サムライ　あぁ、やってましたね。や

孤高のマスクマンは ミスター・スーパージュニアだった！

新日本プロレスのジュニアナンバーワンを目指し、ジュニア戦士たちがしのぎを削る年に一度のリーグ戦、ベスト・オブ・ザ・スーパージュニア。トップ・オブ・ザ・スーパージュニア時代を含めるとこれまでに20回開催されているこのリーグ戦で、最多出場＆最多連続出場回数を誇るのが孤高の覆面レスラー、エル・サムライなのだ！

サムライは92年の初出場から07年まで17回連続出場。ちなみにジャイアント馬場の世界最強タッグ決定リーグ戦の連続出場記録が18回、"夏男"蝶野正洋のG1出場回数は16回であり、ここからもいかにサムライの記録が偉業であるかがわかるというものだ。

「いや、ただ出続けてただけじゃないですかね（ボソっと）。まぁ、最高記録っていう意味ではうれしいですけど」と語るサムライは、過去に二度の準優勝と一度の優勝を記録。

初参加の92年では凱旋帰国の勢いもあってか、リーグ戦単独トップとなるが、惜しくも決勝でライガーに敗北。「あの試合でもマスクを破られちゃって。先に自分が破ったのが悪いんですけど（笑）」（サムライ談）。

そして翌93年にもサムライは決勝に進出。この日3試合目となるサムライは驚異のスタミナでペガサス・キッドに善戦するも、最後はスーパーパワーボムで撃沈。「ペガサスはいいレスラーだったのに死んじゃって。彼が留学生時代に合宿所で一緒だったんですよね」（サムライ談）。

そして本文中で語られてるように、97年の決勝では金本浩二を垂直落下式リバースDDTでマットに沈めて悲願の初優勝！

新日本退団にともなって残念ながら連続出場記録こそついえたものの、いまだに最多出場記録を誇るサムライ。地味と言われがちだが数々の実績を残し、いかんなくテクニシャンぶりを見せてきたプロレス職人は、ミスター・スーパージュニアでもあったのだ！

エル・サムライ

っぱり鈴木はアマレスが強かったですよ。アイツが入った頃にスパーすると、こっちは関節技を知ってるから極められるんですけど、それがなかったらまずかったですね。

――鈴木さんはデビュー1年で第二次UWFに移籍して注目を集めたり、飯塚さんも2年目くらいで抜擢されて長州さんとIWGPタッグのベルトを巻いたりしてましたけど、そういう同世代の活躍を見て焦りとかありませんでしたか？

サムライ いや～、まったくなかったですね。もともとタイトルとかにあんまり興味なかったんですよ、本当に。

――サムライさんのイメージどおりといえばイメージどおりなんですけど、プロとしての欲みたいなものはあんまり？

サムライ ……ないですね（ボソっと）。とにかく、ただ「プロレスをやりてえ」っていうのがあって、その延長でずっといままできてるだけなんで。

――そ、そうですか……。その後、91年にメキシコ遠征に行くわけですが、ルチャに興味はあったんですか？

サムライ いや、とくにはなかったですね。ただ、マスクには興味あったんですよ。新日入る前に集めてたりもして。

――それはタイガーマスクとか？

サムライ いや、メキシコのやつです。

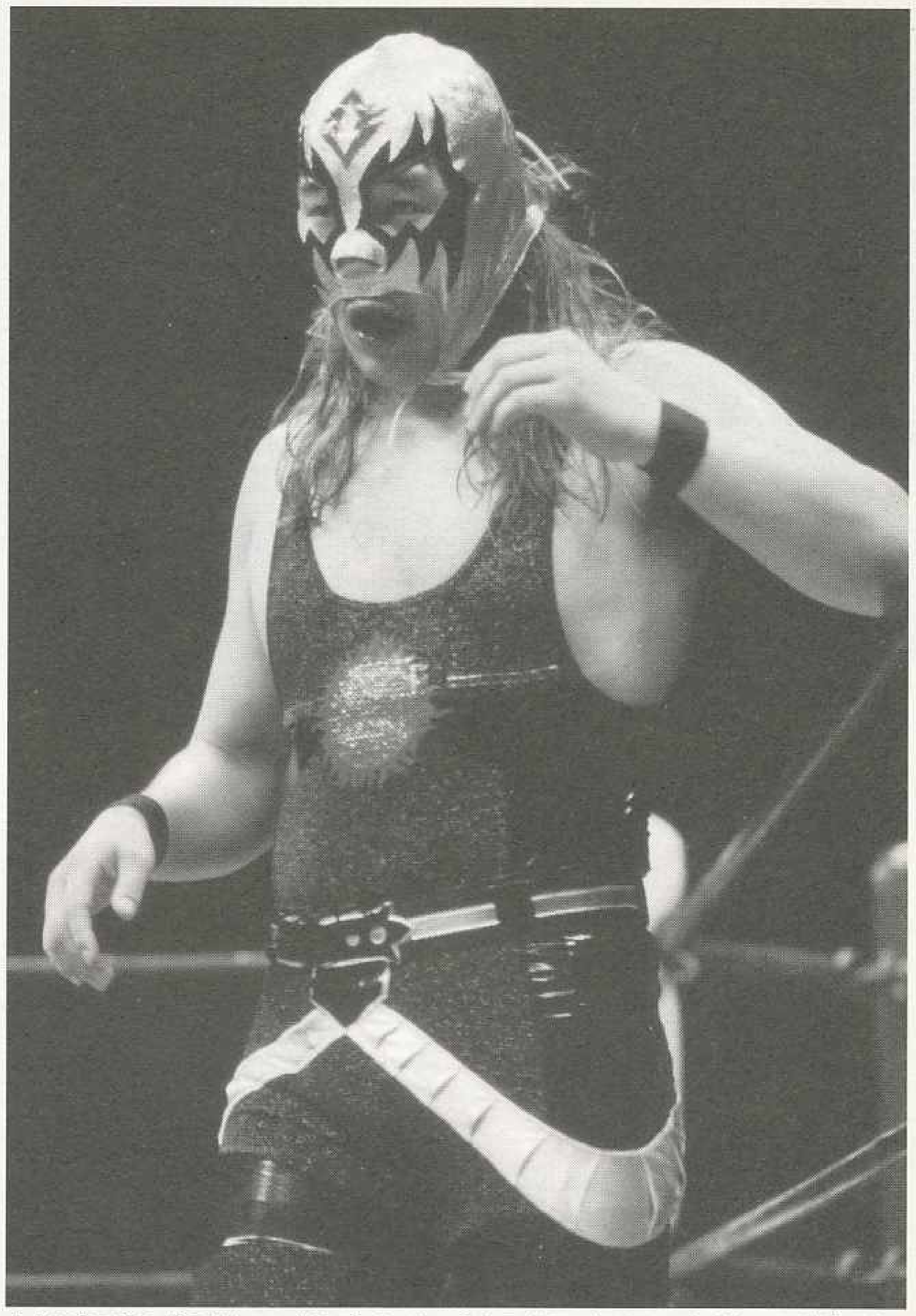
――マスカラスとか？

サムライ いや、エル・ソリタリオとか。

――また渋いですね（笑）。じゃあマスクマン願望はあった、と？

サムライ そうですね。

――そもそも「エル・サムライ」っていうリングネームは誰が考えたんですか？



文中に出てくる“顔だけマスカラス”がこれ。サムライは92年のスーパージュニア決勝でもマスクを破られるなど、何かと切ない目に遭遇している。そしてそれがまた似合う。

サムライ それはUWAの人じゃないですか、代表のカルロス・マイネス。あの当時、俺は浅井のアパートに世話になってたんですよ。だから、メキシコのことは何かと相談して。

――サムライのキャラ作りとか？

サムライ いや、とくにそういうのはなかったですね。ただ、メキシコなんだし、「何かやんなきゃいけねえな」って思って、普段やらない空中殺法をやるようにしたり。

――何かメキシコ時代の苦労話はありますか？

サムライ ……ひどい目っていうか、いまのカミさんに一日おきにメキシコから電話してたんですよ。だから電話代が大変でしたね。けっこうな額いったんじゃないですかね。

――橋本さんはカルガリー遠征してたときは会社に請求したみたいですけど（笑）。

サムライ 俺はとりあえず自分で払いました（笑）。あと、当時はわりと日本人の選手がたくさん来てましたね。浜田さん、浅井、邪道、外道。そのあとはサスケとデルフィンも来て。

――ユニバーサルの選手たちですね。

サムライ 俺と浜田さんとサスケでお金賭けて、トランプでゲームやってたりしてましたね。途中でサスケが「試合あるんで」って抜けても、俺と浜田さんで朝までやってたり。

――サムライさんはギャンブル好きでも有名ですよね。

サムライ あぁ。確かにパチンコとか開店に並んでそのまま閉店までやってるとか、普通にありますからね。

――ギャンブルはどういうきっかけで好きになったんですか？ さっきもこの取材の待ち合わせ場所で競馬新聞を読んでましたけど（笑）。

サムライ 新日本に入って1年ぐらいでしたかね、後藤達俊さんにパチンコに連れてってもらったんですよ。で、座ったらすぐに出たんで、それからハマっちゃって。

――やっぱり巡業でも空き時間ができると？

サムライ 行ってましたね……一人だから気楽ですし（ボソっと）。

――サムライさんは負けても淡々としてそうですね。

サムライ 荒れることはないですね。そういえば天山が負けた悔しさでパチンコ台を叩き割ったっていうのは聞いたことありますけど。

――ダハハハ！ ちょっと話が脱線したので戻しますが、サムライさんの凱旋は92年の新日本創立20周年記念大会でした。あのときは対戦相手が3代目タイガーマスクで、本来なら目立つべき立場のサムライさんよりタイガーのほうに注目が集まったきらいがありましたけど（笑）。

サムライ そうそう（苦笑）。中身が金本って聞いたときは「えっ！」って思いましたよ。まぁ、先輩後輩とかはとくに気にしないんですけど。

――その後、90年代のジュニア戦線で活躍されるわけですけど、帰国してからはずっとマスクマンとしてやっていくつもりで？

サムライ べつに会社からは何も言われなかったですけど、こっちも「ずっとマスクでやるんだろうな」とは思ってましたね。

――でも、せっかくマスクを被ってるのに、マサ斎藤さんが解説で時折「松田は……」ってポロっと本名を言っちゃったりしてましたね（笑）。

サムライ いやぁ、勘弁してほしかったですね～。たまに長州さんや木戸さんとタッグを組むと、「代われ、マツ！」って名前で呼ぶんですよね。また、大っきな声で（笑）。

――バレバレだ、と（笑）。そういえば凱旋当時、闘魂三銃士に対抗して新世代闘魂トリオとして、飯塚さんと野上さんとユニット組んでましたよね？

サムライ ああ……あれはなんだったんですかね？ あんま、ひとまとめにされたくなかったですねぇ（ボソっと）。

――で、気づいたらサムライさん以外の二人がJJジャックスを結成して。

サムライ そんなのやってましたねぇ。「俺にはああいう格好はできねえな」って思ってましたよ（笑）。

――ちなみに同期としていまの飯塚さんのヒール姿はどうですか？

サムライ いきなりああいうふうに変わったから驚きはしましたね。デビューの頃からずっと知ってるわけだし。まぁ、プロレスはなんでもアリだと思うんで、ああいうのもいいん

じゃないですかね。

——なんでもアリということでいうと、90年代の新日本ジュニアは門戸を開放していろんな団体の選手が上がるようになりましたけど、サムライさんはインディーの選手に対して思うようなところはなかったですか？

サムライ　それはないですよ。べつにインディーだろうとメジャーだろうと、プロレスはプロレスですから。どこでやろうと一緒だなって思ってるんで。

——こう言うとなんですが、けっこうサムライさんは〝便利屋〟というか、みちのくプロレスやいろんな団体に新日代表として上がってましたよね。まだ90年代はいまと比べてメジャーとインディーに壁があったと思うんですけど、それこそSPWFでエキサイティング吉田と対戦したり（笑）。

サムライ　エキサイティング？……あぁ、やったような気がしますね。まぁ、仕事ですから会社に言われれば俺はやるだけですから。相手は誰でもいいんです。

——実際、メカマミーともやってますしね（笑）。さて、90年代後半になると、ライガー&サムライ&カシンvs金本&大谷&高岩が定番カードだったじゃないですか？

サムライ　うん、どこの地方に行ってもそのカードでしたね。あの頃はジュニアもそんなにメンバーいなかったですし。

長州さんや木戸さんが試合中に本名で呼ぶのは勘弁してほしかったです

——あの6人タッグで専門誌の最高試合賞を獲得したりもしてましたけど、毎回同じカードで飽きませんでしたか？

サムライ　まぁ、同じ相手でも試合は同じじゃないですし。自分なりにアレンジしつつ。

——その頃に現場監督だった長州さんが、大谷さんたちに「マツを怒らしてみな。おもしろいから」って言ってたって話を聞いたことがあるんですよ。

サムライ　あぁ、確かによくおちょくるようなことしてきましたねぇ（ボソっと）。手で頭をこづいたりとか。

——それでけっこうサムライさんがヒートアップしてたって印象があるんですけど？

サムライ　いや、表面上は怒ってるように見えるかもしれないですけど、内心はそうでもないんですよ。

——あ、そうなんですか？　なんかブチ切れて、金本さんを会場内で延々と追い回したことがありませんでしたっけ？

サムライ　あぁ、一度だけありましたね。いつもの6人タッグだったんですけど、もう試合抜きでバーッと場外を追いかけ回して。あんまキレやすい性格じゃないんですけど、ブチ切れるとわけわかんなくなっちゃいますね。

——そういうのは試合が終わるとトーンダウンするんですか？　試合後も興奮してます？

サムライ　いや、試合後は……タバコ吸ってますね（ボソっと）。

——ダハハ！　そうそう、サムライさんはタバコっていうイメージも強いんですよ。試合が終わるとマスク姿のまま一服するっていう。

サムライ　それ、ほかの人にも言われたことあるんですけど、勘弁してほしいですよ（笑）。確かに試合後には吸いますけど、さすがにマスクは脱ぎますよ。

——ちなみにタバコはいつから？

サムライ　最初、新日に入門した頃はやめてたんですよ、2年くらい。

——えっ、やめてたってことはいつ覚えたんですか？

サムライ　高校入ってからですね、16のときに部活の先輩にすすめられて。それで一度停学になったこともありましたけど（ボソっと）。

——べつにサムライさんが不良だったっていうわけではなく？

サムライ　全然全然。でも、吸ったらなんかハマっちゃって。でも、新日に入ったら立場的にすぐ吸うわけにもいかないんで。

——また吸いだしたきっかけは？

サムライ　蝶野さんに誘われたんですよ、部屋が前だったんで。

——蝶野さんは元不良ですもんね（笑）。ちなみに吸うときはどのくらいの量を？

サムライ　……パチンコやってると3箱くらいいくんじゃないですか？

——凄いな〜。サムライさんはスタミナが無尽蔵って言われますけど、よくヘビースモーカーなのに体力ありますよね。

サムライ　なんかみんなそう言うんですけど、べつに自分では体力あるとは思わないんですよ。マスクしてるから表情わからないでしょうけど、けっこうキツいときもありますし。

——あとは受け身の達人でケガをしないとも言われたり。

サムライ　そんなことないんですけどね。ケガもちょこちょこはありますから。まぁ、多少のものなら我慢しますけど。

——ケガが少ないってことにつながると思うんですけど、身体が凄く柔らかいんですよね？

サムライ　そんなことないんですけどね。自分ではそういう意識は全然ないです。

——「サムライは練習しないのにコンディションがいい」という話もよく聞きますけど、自分がほかと比べて練習熱心じゃないっていう意識は？

サムライ　あ、それはあります（即答）。

——それはある（笑）。サムライさんはもうデビューして23年のベテランですけど、そのキャリアの中でのベストバウトというとなんでしょう？

サムライ　う〜ん……（熟考）。タイトルに興味がないっていっても、やっぱりスーパージュニアで優勝したときですかね。

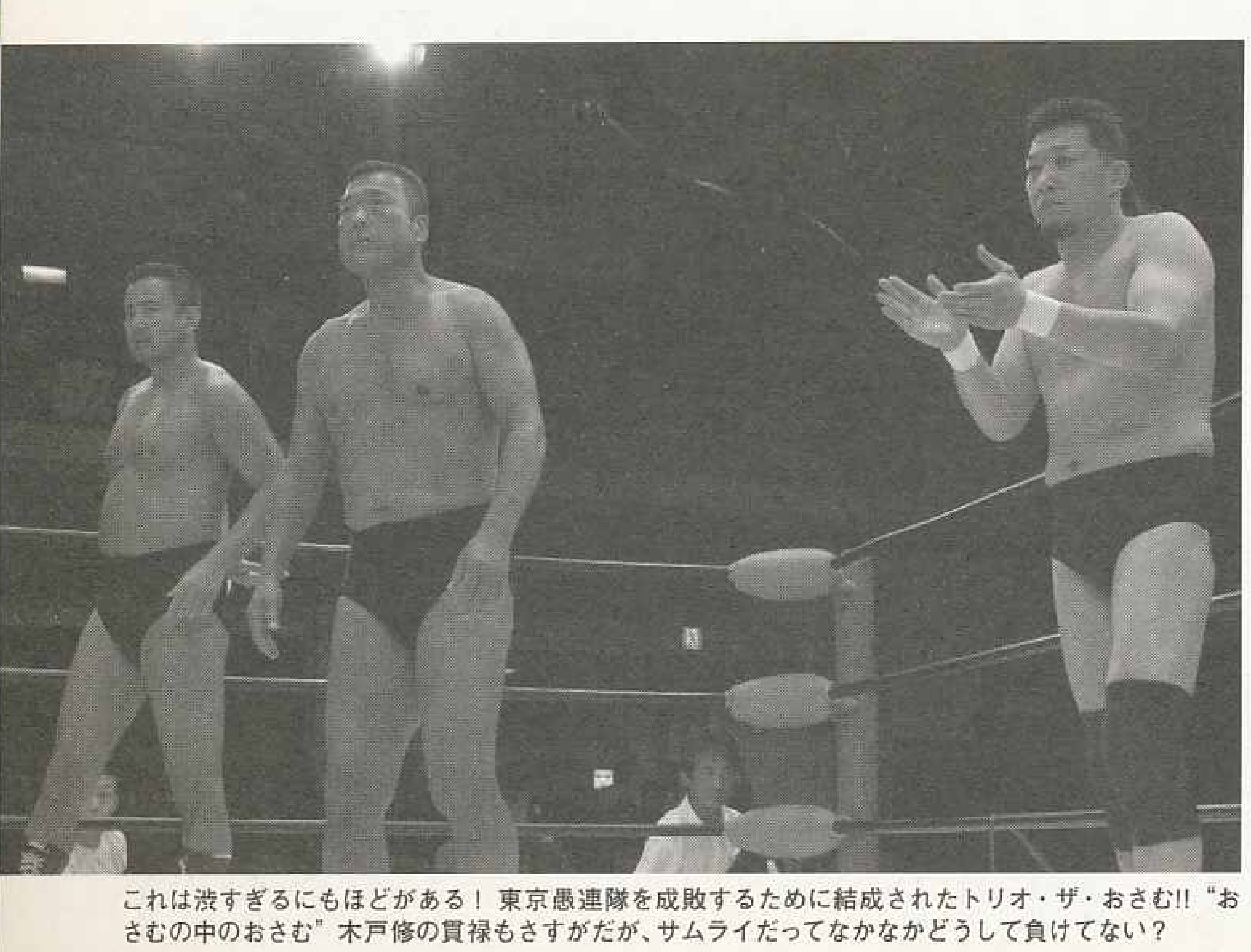
——97年のベスト・オブ・スーパージュニアで金本さんを下して優勝したときですね。たしか、あのときはマスクを破られて。

サムライ　そうそう。ホント、あれだけはねぇ、せっかく優勝したのに……（ボソっと）。で、代わりのマスクを真壁が持ってきたんですけど、俺の通常のマスクじゃなくて、なぜかオーバーマスク用にもらったマスカラスのヤツを持ってきたんですよ。

——せっかくの大舞台での優勝なのに、なぜか顔だけマスカラスでそれ以外はサムライっていう（笑）。

サムライ　ちょっとマヌケでしたねぇ。まぁ、いろんな意味で記憶に残ってますよ。

——マスクにこだわりを持つサムライさんですけど、04年には松田納と



これは渋すぎるにもほどがある！ 東京愚連隊を成敗するために結成されたトリオ・ザ・おさむ!! “おさむの中のおさむ” 木戸修の貫禄もさすがだが、サムライだってなかなかどうして負けてない？

息子がエル・イホ・デ・サムライ？ それは本当に勘弁してほしいです

エル・サムライ

して再デビューっていうのもありましたよね。

サムライ　あぁ、あれは本っ当にやりたくなかったですね！（この日一番力を込めて）。でも会社に言われちゃしょうがないですからね……。で、「もう二度とやらない」って誓ってたのに、そのあとにまたやるハメになったんですけど。

――08年に全日本で結成した〝おさむトリオ〟ですね（笑）。木戸修さんと西村修さんとタッグを組んで。

サムライ　いや、もう素顔はホント、勘弁してほしいです。恥ずかしくてしょうがないんですよ。マスクを脱ぐのはパンツを脱ぐよりも恥ずかしいですから（笑）。

――ダハハハ！　マスクを脱ぐのはそのくらいの辱めだ、と。あと、話しづらいかもしれないですが、08年に新日本を退団した経緯についてもお聞きしたいんですよ。

サムライ　あぁ、はい（声のトーンが落ちて）。

――当時、一番の理由はやっぱり契約条件の厳しさだったんですか？

サムライ　そうですね（ボソっと）。

――新日がユークスに買収される前後に、サムライさん以外にも退団者が続出しましたけど。

サムライ　みんなそれぞれ理由はあるんでしょうけど、俺個人は単純にもうこれ以上下がると厳しいなって。新日に最後にいた2～3年はどんどん下がっていって。一番もらってた時期と比べるとだいぶ削られましたね。もちろん、いいきっかけというか、外に出て自分を試してみたいっていうのもありましたけど。

――やっぱり新日がドームを連発してた90年代は羽振りが良かったんですか？

サムライ　とくにこっちがギャラアップを要求しなくても上がってましたしね。それでギャンブルもできたし（笑）。まぁ、いまはどこも厳しい時代ですからねぇ（ボソっと）。

――新日に対するこだわりは？

サムライ　辞めたいまは全然ないですね。向こうが必要としてないなら、もうそれはそれで。逆にオファーがあればいまでも上がりますし、断る理由もないですし。それはどこに対しても一緒ですね。

――辞めるときに誰かに相談はしました？

サムライ　いや、全然しませんでした。

――レスラー仲間から電話とかは？

サムライ　とくには（ボソっと）。

――う～ん（笑）。もちろん奥さんには事前に話してたんですよね？

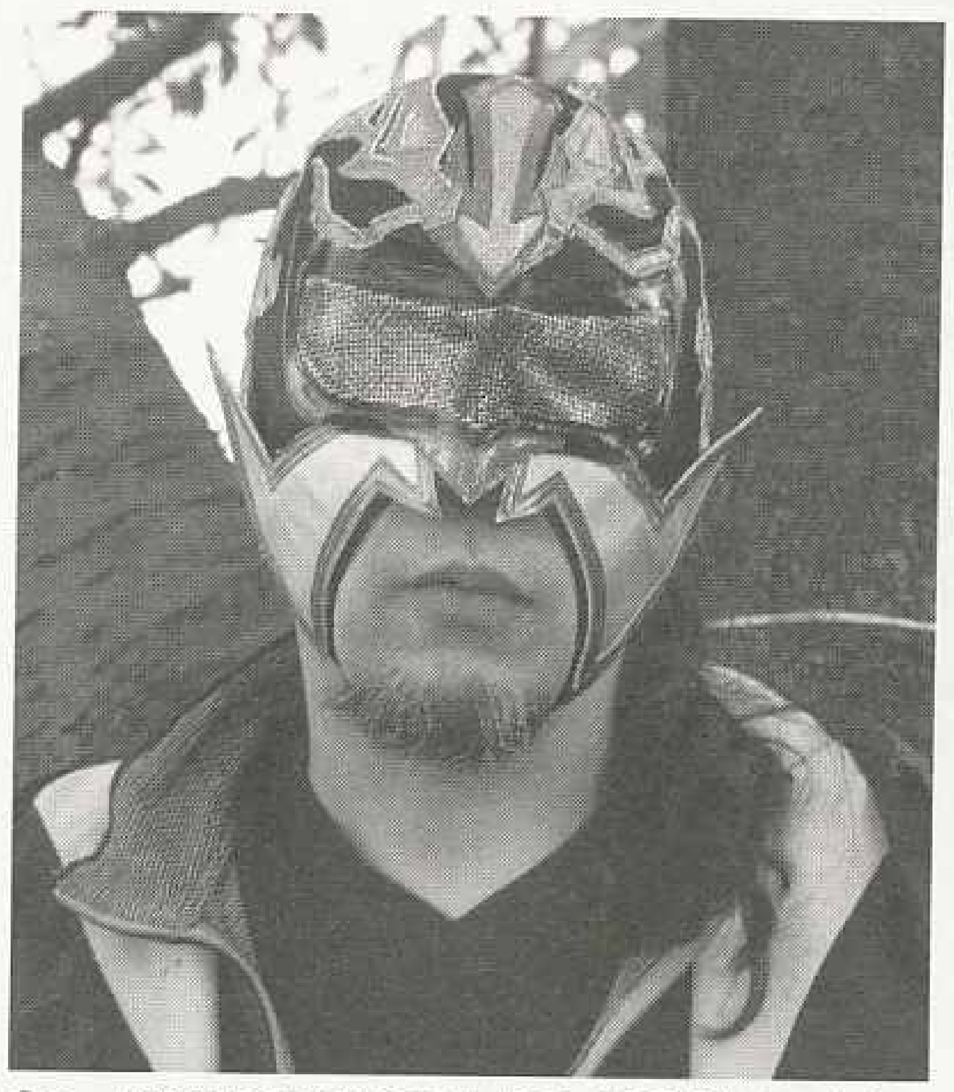
サムライ　いや、してないです。あとで「辞めてきた」って報告して。

――えぇ～!?　それ、奥さんもビックリしたんじゃないですか？

サムライ　まぁ、多少は揉めましたね。「これからどうするの？」って。でも、普段から誰かに相談せず、基本的に自分で決めちゃうので。

――辞める段階で「フリーでやっていこう」とか「別の仕事で第二の人生を」みたいに具体的なビジョンはあったんですか？

サムライ　そういうのは全然なかったですね。とりあえず一回辞めて、プロレスを続けていけるならやっていこうって感じでした。



える・さむらい■1966年4月19日、岩手県出身。本名・松田納。86年7月デビュー。91年3月からマスクマンとなる。97年の『ベスト・オブ・スーパージュニア』で優勝。08年2月に新日本退団。現在はフリーとして活動中。180cm、92kg。

――その後は全日やさまざまなインディーに参戦して。

サムライ　いやぁ、何かと大変ですよ……（しみじみと）。あたりまえですけど、会社にいれば月々にこれだけって決まった額がもらえますけど、フリーだとそれがないですからね。基本的に来た仕事はなんでもするようにしてますけど。

――へんな話、プロレス以外にも何か仕事を考えたことはありますか？

サムライ　あぁ、辞めてすぐの頃は時間が空いてたし、ヒザが悪かったこともあって、アルバイトをしてた時期もありましたよ。荷物の仕分けとか。

――エル・サムライが荷物の仕分けですか!?

サムライ　まぁ、2ヵ月くらいしかやらなかったですけどね。でも、高校出てプロレスしかしたことなかったんでちょっと新鮮でしたけど。

――バイト先で「あっ、サムライだ」！とか言われませんでした？

サムライ　いや、だってマスク脱いでますから。

――あぁ、そうですよね（笑）。いまは愛知を中心に活動されてるとか？

サムライ　はい、カミさんの実家がそっちなんで。後藤さんもこっちに住んでるんで、地域密着の団体の大会があるときなんかに声をかけてくれるんですよ。けっこう面倒見がいいんですよね。

――いまは団体に所属したいっていう気持ちは？

サムライ　もう歳も歳ですからね。声があれば行きますけど、自分から売り込むということはないですね。

――サムライさんは飯塚さんをはじめ、佐々木健介さんや金本さんなんかと同級生ですけど、まだまだバリバリやっていけるんじゃないですか？

サムライ　いや～、最近厳しいなって思いますよ。いまは両ヒザとも悪いんで、もう前ほど自分で自分の思ったように動けないですし。愛知だとドラゲーが夜中にテレビでたまにやってるんですけど、「よくこんなに動けんな」って思いますから。俺が出たらたぶん動きについていけないかもしれないですね（ボソっと）。

――でも、サムライさんには誰とでも試合を組み立てられる職人的なインサイドワークがありますし、それに『アメトーーク！』効果で越中さんみたいなブームが来るかもしれないですよ！

サムライ　ハハハ。う～ん、とにかく試合はしていきたいとは思うんですけどね。まぁ、それと同時にプロレスだけにこだわってていいのかなとも思いますけど（ボソっと）。

――まだまだ頑張っていただきたいですけどね～。ちなみにお子さんは？

サムライ　二人います。中学校1年と小学校2年。もう放任主義なんで、上は反抗期ですけどね。

――お子さんはプロレス好きなんですか？

サムライ　いやぁ、どうなんですかね？　とりあえずは柔道やってるんですけど。

――もし、息子さんが将来的にプロレスの世界に入ったらエル・イホ・デ・サムライですね。

サムライ　いやぁ、それはないっしょ～！　勘弁してほしいです（ボソっと）。

――失礼しました（笑）。とにかくサムライさんは現役を続けるかぎりは、ずっとマスクを被っていく、と？

サムライ　そうですね。やっぱり脱ぐのは恥ずかしいですから。船木さんにパンツを脱がされるよりも（笑）。

――ダハハハ！　では今後もマスクマンとして、いぶし銀の活躍を期待してます！

【09年12月20日／都内・某所にて収録】



co.jp/



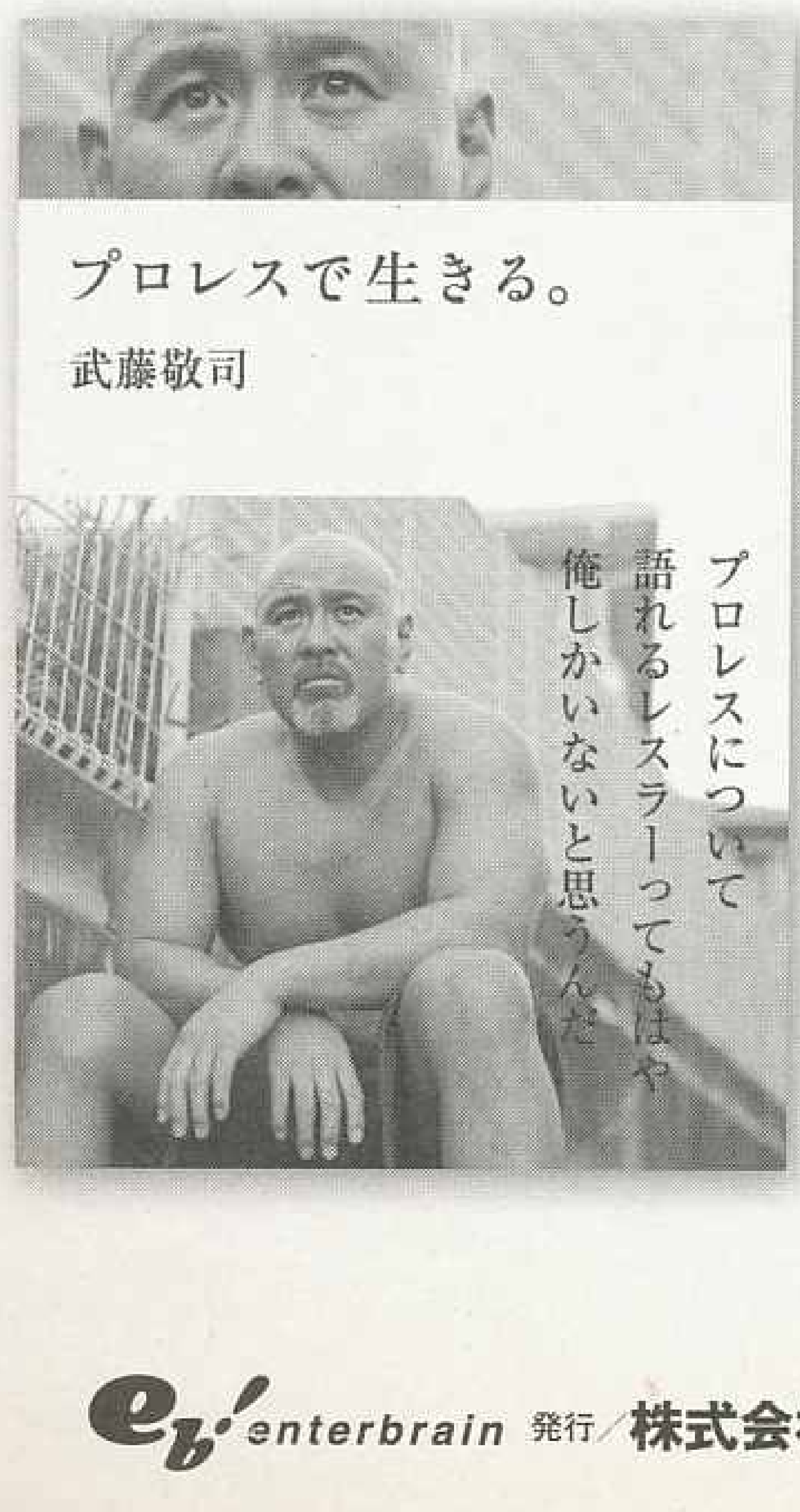
大好評!
増刷出来!!

デビュー25周年記念出版!

“プロレス界最後の砦”
武藤敬司が「プロレス」を語った!!

「プロレスについて語れるレスラーって、もはや俺しかいないと思うんだ。それならば、ちゃんと語っておいたほうがいいのかもしれない」

低迷が叫ばれ続けている現在の日本のプロレス界において、
唯一スーパースターと呼べる存在、最後の砦、
それが全日本プロレスのトップレスラーであり代表取締役社長の武藤敬司である。
そんな武藤がデビュー25周年を迎えた2009年、盟友であり、
同じく団体のトップレスラー兼社長であった三沢光晴さんの急逝をきっかけに、
あらためて「プロレスという生業」について考え、そして語った。
プロレス界の抱える問題点、疑問点、矛盾点に対する緊急提言、
あるいは他のエンターテインメントにはないプロレスの持つ優秀で素晴らしき長所……。
本書ではプロレスを生きる術として選択した男がそのすべてをさらけ出した──。



プロレスで生きる。
武藤敬司 著

**全国書店にて
絶賛発売中!!**

B6変型判 240ページ 定価=1,680円(本体1,600円+税)
発行/エンターブレイン　発売/角川グループパブリッシング

enterbrain 発行/株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表) 発売/株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/

力道山とアダルトビデオ

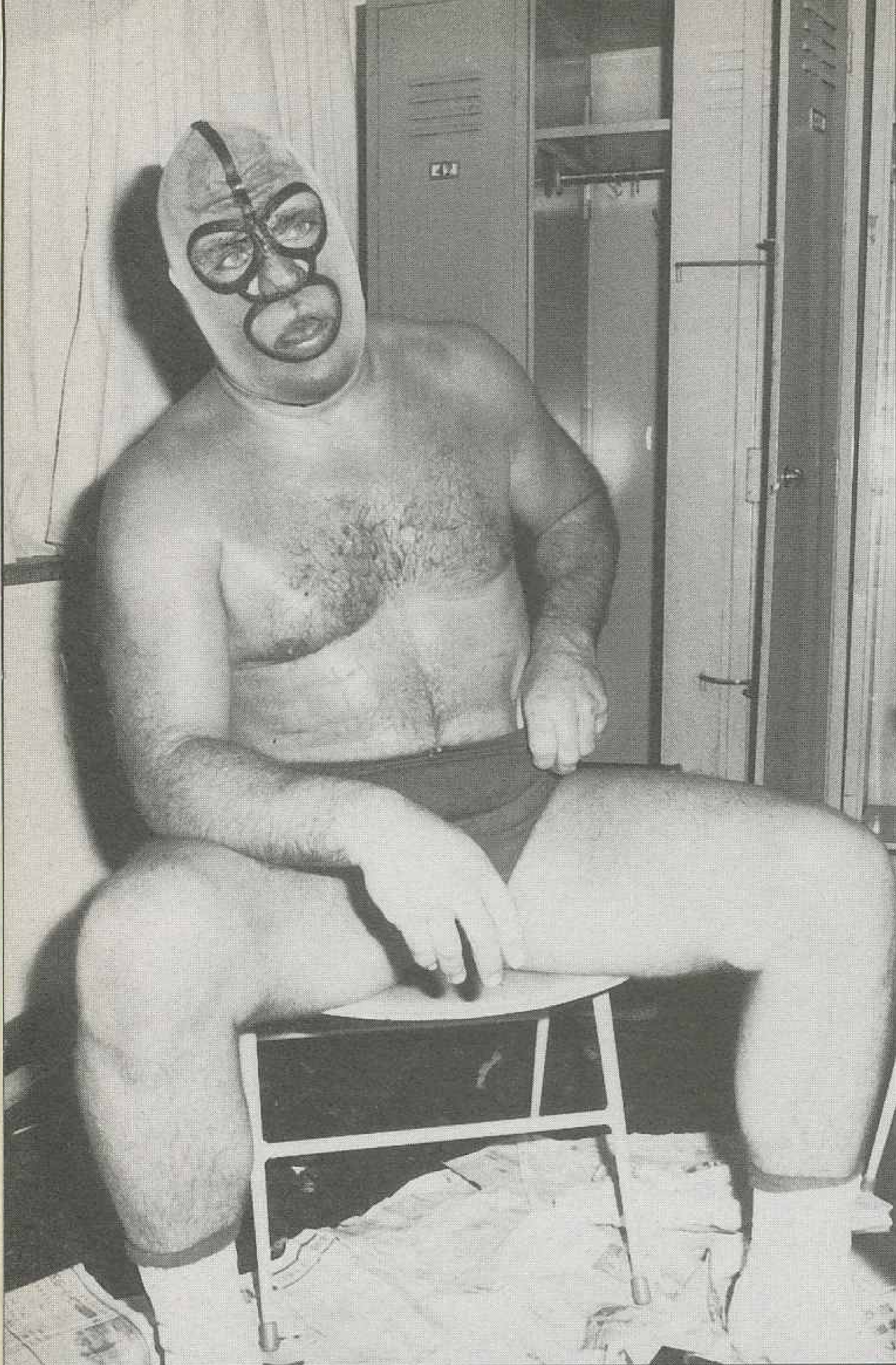




AVの帝王のゴールデンプロレス

村西とおる

アダルトビデオの帝王として知られる村西監督は、自身のブログで
ときおりプロレスの話題を綴っているのであります。三沢光晴や剛竜馬、
それはかつて黄金に彩られたプロレスを懐かしむように。
それでは、村西監督の“ナイス”なプロレス論をお聞きください!



大変お待たせいたしました。じゃあ、さっそくお話しますか。

私たち団塊の世代のプロレスといいますとね、それこそ「命懸け」というか「生きがい」そのものなんです。自分が「日本に生まれてよかった」ということを初めて実感できたのが、プロレスリングにおける力道山という存在でした。

戦後の混乱期からの流れの中でね、いまでもそう思ってるんだけど、世界に発信して恥ずかしくない存在として、日本を代表する存在が力道山というプロレスラーだったんです。

力道山が北朝鮮の出身どうのこうのは関係ないよ。私どもがガキの頃、力道山は日本人だと思ってたから。いや、力道山が日本人じゃなくて北朝鮮の出身だとわかっても、彼が日本を代表する存在だという思いはまったく変わらない。あの高倉健が○○だと知ったって大好きなのと同じように。

そういう意味でね、力道山というのは自分たちの青春時代から含めて日本が一人前の国として世界に出ていくときのね、日本人としての気持ちやプライドをもたらしてくれた唯一の存在なんです。

私は団塊の世代だけど、「ギブミー・チョコレート」みたいな世代でもあるわけね。米兵がジープでやってきて、私の場合はチョコレートじゃないよ、ミカンの皮なんですよ。

「ギブミー・ミカンの皮!」

米兵から投げてもらったミカンの皮に群がっていく。ミカンの皮を友だちと奪い合って食べた時代だった。そういう戦後の混乱期の中に力道山が出てきたんだよね。

プロレスもアダルトビデオもやっていればいいだけじゃダメなんですよ!!

で、私たちの思いというよりもね、おふくろとか親父の力道山への思いが凄かった。親父は5人兄弟の長男で、3人の弟たちが戦争で死んでんですよ。で、母は唯一の最愛の弟を特攻で亡くしていたから、「鬼畜米兵!」っていうのは心の底から思っていたんですよね。

だからテレビで力道山がブラッシーやデストロイヤーなんかをやっつける姿を見たらね、俺も興奮したけどさ、親父とかおふくろはそれこそ命懸けで大騒ぎしてたよね。いつもはもの静かなおふくろが狂喜乱舞しながらね、夫婦喧嘩の3倍くらいのパワーを出していたもん。

親父もこんなパワーがあるんだったら、なんでいつまでも行商しながら傘直しなんかしてんのかなって子ども心に思いましたよ。それくらい、いままでに見せたことがないような形相やパワーを見せながら、テレビにかじりついて力道山に熱中していたんです。

あれはようやくテレビが家庭に入ってきた時代でした。町内会でも裏の家でも前の家でも、力道山の活躍に大騒ぎですよ。翌日は力道山の話で持ちきりみたいな。だから力道山を頂点として、それを軸として日本が動いてた時代なんじゃないかな。日本で一番の偉人として力道山はいたんですね。

ああいう時代はもう二度とこないのかなあと思うけど、それが私どものプロレスですよ。

で、そこから今日まで観ててね、いまのプロレスはやっぱりプロデュースができてないよね。物語性がまったくない。プロレスはいくらでも物語を作れるはずなのよ。

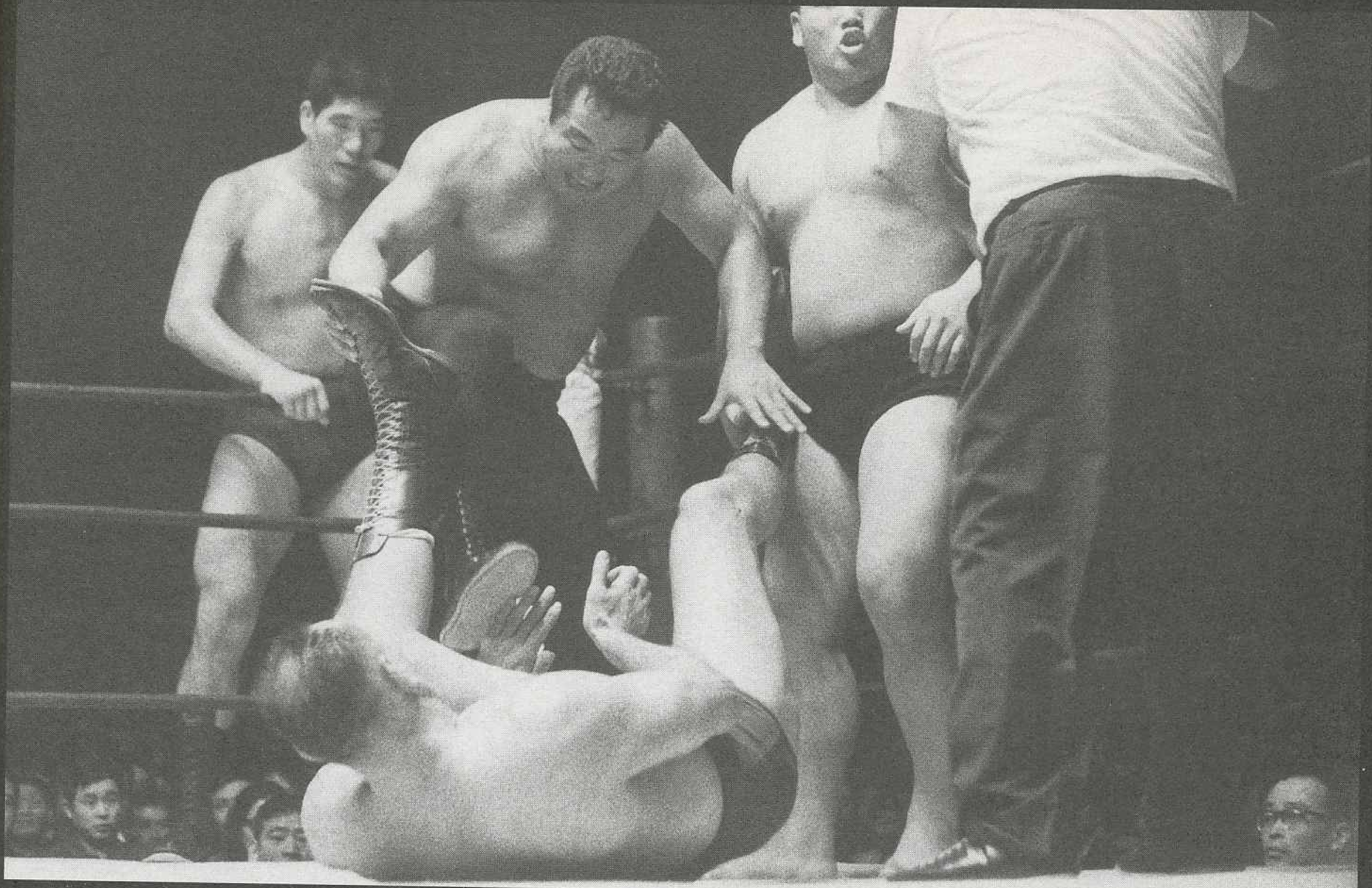
ボクシングの亀田(興毅)vs内藤(大助)だってさ、試合内容的には2~3日前にやった長谷川(穂積)の試合のほうがよほど爽快だよね。でもさ、亀田の視聴率が今年最高の視聴率だった。やっぱりそこには物語があるからなんだよね。スポーツと言えども、私たちはやっぱり物語を観てるんです。

アダルトビデオの世界でもそうなんですよ。ただ、セックスをやってるシーンをダラダラ映したって誰も興奮しないし、そこに物語が見えるから感情移入ができるんだよね。ただフェラチオしてたって、よほど想像力がたくましいか、自分の女房に似てるとか、ハードなやつが大好きなコアな人以外はね、やっぱり感情移入できないんだよ。

だからクリトリスや挿入シーンやペニスを見せなくてもその感情移入できる物語がハッキリしてればね、そりゃあね、全然問題ありませんよ。修正したってもっと興奮する。

そういった物語の不在が今日のプロレスをダメにしてしまってるんだな、と。精神力、忍耐力、筋力、持久力、瞬発力……人間のあらゆる可能性というものを見せるのがプロレスラーですよね。あらゆる角度から万華鏡のように人間の可能性を見せてくれるのがプロレスラー。そういう意味ではプロレスというジャンルは凄

スなんてどっちも合い混ざって見せてく
ーテインメントですよ。
ては生きていけない。だから裏本をやっ
山口日昇さん？



プロレスには人間の不条理さがある。人間の真実をドラマ仕立てで見せていく

力道山とアダルトビデオ

い存在なんですよ。

しかし、そこに物語性を加味しないがためにね、もう我らのアダルトビデオでいうところの裏ビデオみたいな、ただやってればいいみたいなプロレスになっている。プロレスもAVもやってればいいだけじゃダメなんですよ！（ドン）。

だからそこはプロデュース不足なんだね。AV女優だってそうなんですよ。テメエの女でもあるまいし、100本も200本も365日毎日セックスしてるような、AVに出てるような女なんかあんまり観たくないんですよ。どれを観てもお仕事のセックスになってるから。ネタバレなのよ。そうでしょ？

プロレスもそうなのよ。だからもう一つ感情移入ができない。象徴的な闘いをやって、マスメディアやいろんなものを巻き込んでね、物語の一つも作れないのか、と。四六時中物語を作れっていってるんじゃないよ。物語の余韻ってものが必要でしょう。プロレスラーは人生の春夏秋冬を見せるべきなんですよ。

そこにある種のインテリジェンスというか人間のコクというかね、詩人ということまでは期待してないけど、やっぱり詩的な世界もプロレスにあってしかるべきだろう。

いまでも松の廊下の物語が語り継がれてきてますけど、あの松の廊下があることによって武士社会というものが正当化され、今日を見ても武士道という生き様が検証されてるわけですね。そういうことでいいんですよ。あの忠臣蔵のシチュエーションは何回読んでも楽しいものなんですね。

だから3回の試合を1回にしてもかまわないのよ。5回の試合を1回にしてもかまわないんですよ。そういうプロレスを見せてください。AVで言えばさ、企画ものの女みたいに数でこなそうとするなっていうの！

そうでしょ？　ボクはプロレスを愛するがゆえにね、あえて述べてるわけです。30代でも40代でも50代でも、鍛えればこれだけできるんだっていうものを私は非常によしとする。私は62歳だけど、62歳でパンツ脱いでますよ、と。オチンチン出してますよ、と。そこがね、非常に絵になるわけですよ。ね？

62歳でもまだこれだけやれるのか。65歳でも70歳でもまだまだ現役でやれるんだってことを見せることによってね、あとに続くものがある。

肉体なんて何も瞬発力ばっかりじゃないよ、と。持久力だって大切なんだよ。

三島由紀夫は「人間の肉体とは様式美である」と言いました。一方で石原慎太郎は「それは違うよ」と反論しました。「人間の肉体の美しさとは瞬発力だったり持久力だったり。たとえば屈伸するしなやかさとか。こういうのが人間なんだ。あなたみたいに、ただボディビルで鍛えた肉体だけが美しいんじゃない。人間の肉体っていうのは動的支点から跳躍するんだ」という一連の論争がありましたけども。プロレ

プロレスのためにインドに行ったのか？　AVは世界中を駆け回ってるのに

スなんてどっちも合い混ざって見せてくれるものでしょ。だから「人間ってこんなに凄いぞ」ということを見せてくれるものが本当のプロレスなんだけれどもね。

やっぱりね、ガチンコのおもしろさっていうのは確かにあるかもしれないけども、プロレスのおもしろさってもう一つガチンコとは違いますよ。そこにはやっぱりドラマ性がある。人間の不条理がある。ガチンコみたいにスパンと輪切りにするかたちじゃなく人間の真実をいうものをドラマ仕立てにして見せることってあるんですよ。人間の生き様として共感できるものがプロレスにはあるはずなんだよ。

試合内容だけではダメですよ。そこに物語というものがなければ感情移入できないでしょ。そこに人間のドロドロがなければ。

団体経営者も借金でもして盛り上げろっていうんですよ。ね？　おまえはプロレスのためにインドに行ってんのか？と。トルコだとかさ、行ってこいっちゅうんですよ！　AVなんてね、みんな全世界中を駆け回ってるのに。世界にはハチャメチャなのが必ずいるんだから。

世界中を走り回って、そこに物語をつけなさい。それがエンターテインメントなのよ。プロレスラーはアーティストじゃないんだから。アーティストはテメエだけのやりたいことやってりゃいい。エンターテインメントってのは「観衆はどういうものを期待してるか」を考える仕事なんです。その一点に絞ってやるのがエンターテインメントですよ。

プロレスを盛り上げたいなら金を用意しなさいって。１億円争奪戦をやってみろって。その１億円をリングに積んだだけでみんな観に行くよ。

やっぱり俺なんかはね、借金50億もあって60をすぎてもパンツ脱いでるでしょ。キャッチフレーズはね、「地上最強に逆境に強い男」なのよ。

私はいままで何十回何百回「死にたい」と思ったし、挫折したことなんか山ほどありますよ。ただ、挑戦するから挫折するんだけどね。しかし、それにつけても踏ん張らざるをえないよ。なぜならばそれが自分自身の商品価値だから。「このまま死んでたまるか！」と、最後の最後の頑張りでやっとるわけですよ。



むらにし・とおる■1948年9月9日、福島県出身。ゲーム機の販売で財をなし、裏本の制作・販売にも進出。一大帝国を築く。警察に摘発されたあとはアダルトビデオの世界へ。自らが監督、男優、カメラマンを兼ね、独特の語彙をもって撮影に挑むスタイルによって一般にも浸透。波乱に満ちた半生を送ってきている。

学歴もない資格もない、何もないから、時代の3歩先に行かないとビジネスとしては生きていけない。だから裏本をやったし、衛星放送も日本で初めてやったし、DVDも日本で初めて作ったし、という歴史があるわけですよ。

よく自己破産しないって？　自己破産をするのは、サラリーマンなんかはかまわないよ。ただね、「強くてたくましくて」っていう一つのキャッチフレーズを持ってる私がね、自己破産してしまったことによって、それが無になってしまう。その伝説を自分自身で粉々にしてしまう。それはできない。

こんな借金を抱えながら、詐欺師だペテン師だって言われながら苦節15年、こうしてよみがえったからまた新たに伝説が作れるんです。ところが自己破産をすると、その伝説を自分で粉々にしちゃうわけだよね。まあ、借金なんかで命は取られないんだから！

いまでは毎月４００万ぐらい払ってるからね。そりゃそうだよ。払わないと自己破産させられちゃうから。で、こういう事務所があって生活していくとなるとそりゃとんでもないお金が毎月必要ですよ。だから破産したほうが楽だってのはあるんだけど、破産しちゃうと今度はお役ゴメンになっちゃうわけだよ。自己破産というのは、楽なようだけどね、じつはまったく楽じゃないんだよ。

それに世間の人は自己破産したら「終わった」と思うわけでしょ。「な〜んだ、自己破産したのか」って思っちゃう。「村西とおるの野郎、なんだかんだ頑張ってんな。なんでくたびれねえんだ」と思わせなければならないんです。

え？　『ハッスル』もお金の面で大変だって？　ああ、なんかインリンからも訴えられてたね。代表の名前はなんて言うの山口日昇さん？

山口さんって……俺でさえも知らないもん。申し訳ないけど。俺が知ってないようじゃ、世間の人は『ハッスル』の力になってくれないだろうね。手の打ちようがない。悪いけどね。

少なくとも俺みたいにさ、40代以上の男に聞いたら誰でも知ってますみたいなところがないとね。俺なんかも40代以上の男の人たちはことごとく俺のことを知ってるから。

俺なんかは「苦節30年、いまでもやってます」っていうのが一つの評価になってるんだよ。『ハッスル』だってそんなにやってないだろ？　山口さんは『ハッスル』を何年やった？　え、5〜6年？　だったらいますぐやめなさい。たまたまのまぐれみたいな成功で食っていこうとすると首吊るようになっちゃうよ。

だから猪木なんかは破産だって倒産だって言いながらもさ、あっちこっちからわけのわからないことを言いながら金を引っぱってきてはわけのわからないことを頑張ってるでしょ。それはアントニオ猪木が世間に知られてるから。

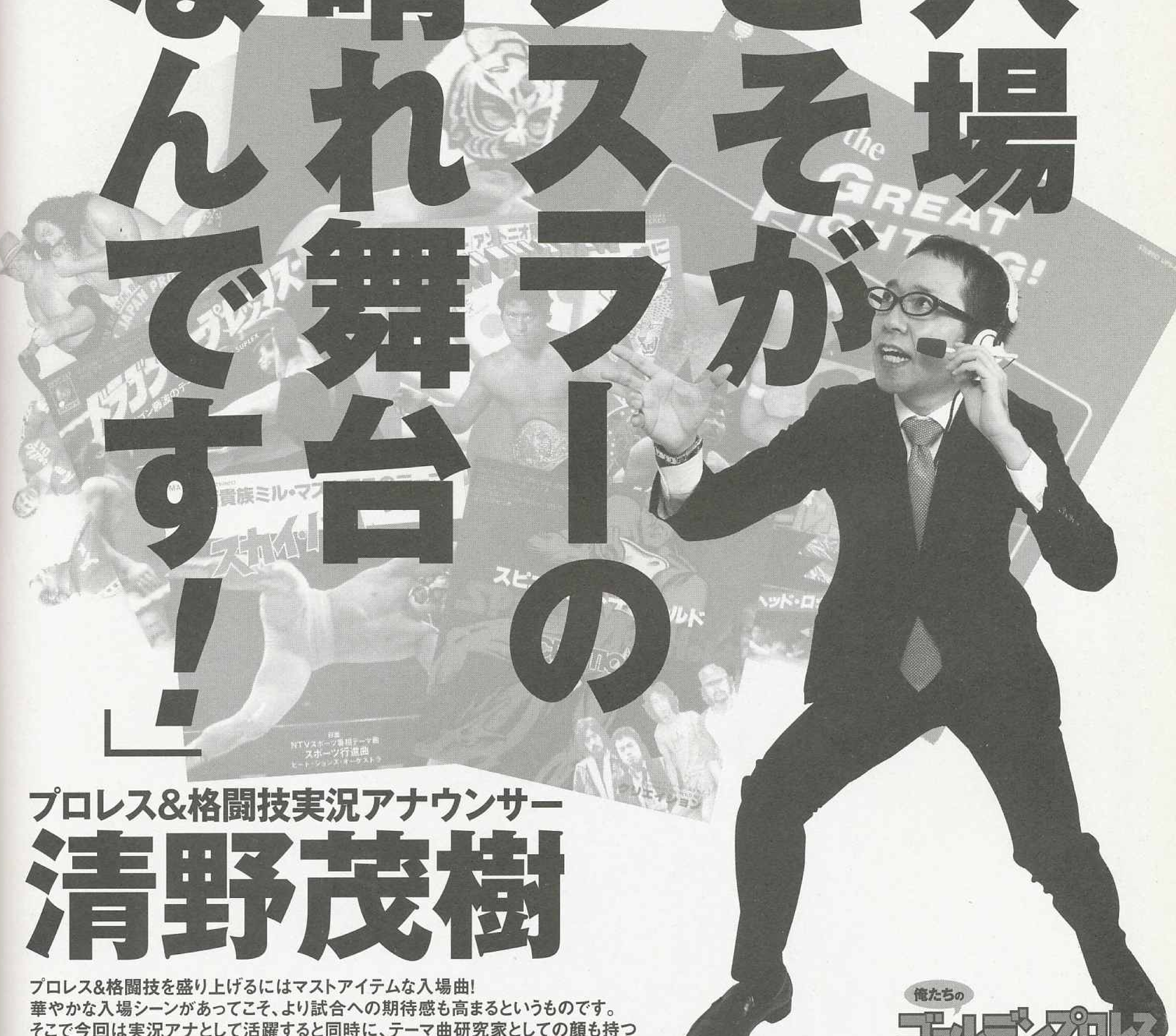
俺の場合だってテメエでパンツ脱げばいいんだけど、山口さんがテメエでパンツを脱いでリングに上がったってどうしようもないでしょ？　まあプロデューサーってのはさ、お金があるかもしくはお金を引っぱってくる力がなけりゃあもう無理だよ。金を引っぱってこれるのか、金があるのか、世の中二つに一つだよ！

まあ、困ったことがあればいつでも相談に来なさい。山口さんにもそう言っておいてよ。少なくともプロレスはいまのままじゃあダメだよな。

【09年12月某日／都内・某所にて収録】

業界屈指のコレクターが語るテーマ曲の魅惑の世界

「入場こそがレスラーの晴れ舞台なんです！」



プロレス&格闘技実況アナウンサー
清野茂樹

**プロレス&格闘技を盛り上げるにはマストアイテムな入場曲！
華やかな入場シーンがあってこそ、より試合への期待感も高まるというものです。
そこで今回は実況アナとして活躍すると同時に、テーマ曲研究家としての顔も持つ清野アナに、その魅力をおおいに語ってもらいました！ キヨノ、ボンバイエ♪**

聞き手／鈴木佑　試合写真／平工幸雄

俺たちのゴールデンプロレス大特集

――今号の特集は『俺たちのゴールデンプロレス』なんですが、やっぱりプロレスに欠かせないものといえば入場テーマ曲なんじゃないかな、と。

清野　いや、もう、おっしゃるとおりですね！（キッパリ）。

――そこで今回はプロレス&格闘技の実況アナであり、業界では入場テーマ曲コレクターとしても有名な清野さんに、いろいろとお話を聞きたいと思います！

清野　よろしくお願いします。

――昨年の年末にNHK－FMで延々と入場テーマ曲だけを流す『今日は一日〝プロレス・格闘技テーマ曲〟三昧』という画期的な番組がありましたけど、なんでも清野さんはブレーンとして参加されてたとか？

清野　そうですね。いやぁ、あの番組は相当マニアックでしたね～（しみじみと）。11時間にもわたってテーマ曲を流し続けて。そもそもあれは『今日は一日〇〇三昧』っていうシリーズものの一つなんですよ。ほかだと『今日は一日〝アニソン〟三昧』や、一人のアーティストを特集した『今日は一日〝玉置浩二〟三昧』みたいなものがあって。で、あの番組はプロレスファンのNHKのディレクターがたまたま企画書を出したら実現したもので、出した本人も驚いてたみたいですけどね（笑）。

――清野さんはどういった経緯で参加したんですか？

清野　最初はTBS格闘班のプロデューサーに「こんな番組やるらしいよ」って話を聞いたんですよ。それで僕もテーマ曲ファンとして血が騒ぎ

前田さんのイチ押しがジェレミー・ホーンなのには驚きました（笑）

まして、すぐにNHKに電話して番組ディレクターに「楽曲提供もできるのでぜひ協力させてください」というかたちでお願いして。要は売り込みですね（笑）。そこからブレーンとして参加させてもらったんです。

——そのくらいテーマ曲の音源を持ってる、と。

清野　そうですね。もともと僕はプロレスにかぎらず、レコードを発掘するのが趣味なんですよ。大体1000枚くらい持っていて、その中にプロレスものがどのくらいあるかはさだかではないんですけど。

——凄いですね～。あの番組では藤波辰爾から青木真也まで、いろんなレスラーや格闘家が自分の好きな曲をコメントとともにリクエストしてましたけど、「マニアックだなぁ」と思った選曲の人はいました？

清野　やっぱり前田日明さんにはちょっと驚きましたね。なんてったってジェレミー・ホーンの『GRINDER』ですから（笑）。

——ジェレミー・ホーン！　いきなりそう言われて、パッとそのテーマ曲が頭に浮かぶ人はなかなかいないと思います（笑）。

清野　そういえばこの前、TBSの『Music Birth』っていう深夜番組に前田さんが出てたんですよ。アウトサイダーのイメージ曲を新人バンドに作らせるっていう企画だったんですけど、前田さんがプレゼンされる曲にことごとくダメ出しをしていて。

——ほ～、どんなダメ出しを？

清野　なんか「もっとストレートなほうがいい、これじゃ場内の雰囲気に負ける」みたいな感じで。で、「たとえば、こういうのがいいよ」って、そこでまたジェレミー・ホーンのテーマ曲を出してきたんですけど（笑）。

——ダハハハ！　よっぽどお気に入りなんですね。

清野　前田さんは「このリズム、このシンプルさだよ！」って力説するんですけど、バンドのメンバーはポカーンとしてるっていう（笑）。

——なるほど（笑）。話を戻しますが、あの番組で苦労した点というと？

清野　やっぱりオリジナル音源かどうかのチェックですね。ご存知だと思いますが、テーマ曲ってアレンジし直したものがいっぱいあるじゃないですか？

——テーマ曲を買ったけど場内使用バージョンと違ってガッカリしたという経験は、プロレスファンの多くが一度は味わってると思います（笑）。

清野　そうですね（笑）。要はアレンジものが多いのは版権の問題なんですけど。で、NHKのライブラリーに行ったら、番組で使用するCDが軽く100枚は山積みされてたんですね。ただ、これが開けてビックリだったのが、オリジナルじゃないものが多くて。

——え～、それは困ったんじゃないですか？

清野　なので、なるべくオリジナルのものを優先的にかけて、音源の一部は僕が提供して。たとえばウルティモ・ドラゴンの『Separados』や長州力が歌った『明日の誓い』、あとは倍賞美津子が『イノキボンバイエ』に合わせて歌った『いつも一緒に』とか（笑）。



かつて清野アナはコンピレーションCD『格闘魂』にスーパーバイザーとして参加。車田正美のイラストがジャケットとなっているこのCDには、ミルコから藤原組長までファイターの入場曲がぎっしり！

——ちなみに番組にリスナーからのリクエストはけっこうあったんですか？

清野　「三昧シリーズ」の中では多いほうだったみたいですよ。アニソンにこそおよばなかったもののそれに匹敵するぐらいで、メールが1952通、FAXは111通寄せられたって発表してましたね。

——へ～！　そんなにニーズがあるとはちょっと驚きですね。

清野　でも、ちょっと残念というか傾向として目立ったのが、リクエストのほとんどが80年代ものに集中してたんですよ。90年代だと三銃士、四天王までで。一応、ミルコ・クロコップや五味隆典の曲も用意してたんですけど、全然リクエストは来なかったですね。

——どっちも格闘技ファンなら誰もが知ってそうな曲ですけどね。

清野　おそらくいまの若いファンがラジオをあまり聴かないというのと、やっぱり80年代に毎週ゴールデンで放送してた頃と違って、いまはテーマ曲が思ったほどは浸透してないんでしょうね～（しみじみと）。

——なるほど。ちなみにあの番組は第二回とかは予定されてるんですか？

清野　反響もありましたし、その方向で話が進んでるみたいですよ。そのときは僕もまたブレーンとして参加する予定なので、リスナーにはミルコや五味のような格闘技ものや、前田さんのようなマニアックなものをぜひリクエストしてもらいたいですね（笑）。

——さて、ちょっと清野さんのことについてもお聞きしたいんですが、そもそも実況アナの前はFM放送のアナウンサーだったとか？

清野　はい、FM広島に勤めてました。でも、もともとはプロレスの実況アナになりたかったんですよ。ただ、僕の時代はスカパー！もなかったですし、実況をやるなら日本テレビとテレビ朝日しかない状況で。

——全日本か新日本か、と。

清野　そうですね。で、ラジオ局に入ったときに考えたのが、FMイコール音楽だから、「プロレスのテーマ曲をガンガン流すような番組をやりたいな」ってことだったんです。

——仕事とプロレスを結びつけるものがテーマ曲だったんですね。

清野　僕、大槻ケンヂさんが大学時代から大好きだったんですけど、ぜひプロレスや格闘技に造詣が深いオーケンさんと、FMでゆくゆくはそういうテーマの番組をやりたいと思っていて。で、いざ入社してみるとそういうことがわりとスンナリできる環境だったんですよ。

——あ、そうだったんですか？

清野　テレビと違ってラジオは作る人としゃべる人の境界線がけっこうあいまいなんです。DJがディレクター的な役割をして、一人で何役もこなして。それで入社2年目の97年に、僕とオーケンさんでプロレスのテーマ曲をかけ倒すっていう番組の企画書を出したら、それがすぐに実現しまして。

——ほ～、凄いですね！

清野　また当時タイミング的によかったのが、再発ブームが起こる前だったってことで。

——再発ブームというと？

清野　昔のレコードは廃盤になると市場に出回ることはなかったんですけど、いまはその廃盤になったものをCDで再発売するんですよ。で、いろいろなアルバムのおいしいところだけをつまんで出す、いわゆるコンピレーションアルバムが00年前後

あの山下達郎さんがラッシャー木村の入場曲をプレゼントしてくれて

から流行りだして。

——あぁ、よく洋楽とかR30ものとか、一つのコンセプトに基づいたアルバムがリリースされてますね。

清野　そうそう。プロレスで一番有名なコンピレーションだと『プロレスQ』シリーズになるんですけど、97年当時はそういうものもないし、テーマ曲はなかなか手に入らない時代で。だからプロレスファンのリスナーがテーマ曲に飢えてたっていうのも、この番組が反響を呼ぶきっかけになりましたよね。

——なるほど～。

清野　プロレスファンで音楽好きな人は、アブドーラ・ザ・ブッチャーやブルーザー・ブロディをきっかけにピンク・フロイドやレッド・ツェッペリンを知ったっていう人が多いと思うんですけど、もちろん僕やオーケンさんも同じで。そういった話で盛り上がって、その番組もシリーズものとして3回くらい続きました。

——好評だったわけですね。

清野　しかも、このオーケンさんと60分CMなしでプロレスのマニアックな曲をかけ続ける番組が、なんと日本民間放送連盟の番組コンクールで優秀賞をいただいたんですよ（笑）。

——え～、凄い！　それ、プロレス大賞より権威あるんじゃないですか？（笑）

清野　ハハハ！　しかし、そういう評価をいただけたのも、本当にプロレスのテーマ曲様々っていうか。

——ちなみにそのときはどんな曲をかけたんですか？

清野　やっぱりこだわったのは、アレンジものじゃなくオリジナル音源でしたね。基本的には広島FMの膨大な量のレコードライブラリーから探してきて。でも、中には見つからないものもあって、一番苦労したのはラッシャー木村が新日本に上がったときに使ってた『REBIRTH OF THE BEAT』っていう曲なんですけど。

——国際軍団時代ですね。

清野　はい。で、この曲はサンディ・ネルソンっていう50年代に活躍したドラマーの曲なんですけど、広島中のレコード屋をかけずり回ってもなかなか見つからなくて。最終的に同じサンディ・ネルソンの『BIRTH OF THE BEAT』っていう似た名前の曲を見つけたんで、念のために買ってみたんですけど、これがまた全然違う曲で（笑）。



ニューミュージックの大御所・山下達郎を動かした男、ラッシャー木村。入場曲に50's オールディーズを使うなんて、その風貌同様に激シブ! ちなみにその隣の"和製チャールズ・ブロンソン"こと阿修羅・原は、現役時代に『ゆき子』『恋遊び』と言ったムード歌謡をリリースしている。

——結局、実物は見つらなかったんですか？

清野　いや、そこで途方に暮れてるときに、「オールディーズでドラマーといえば、あの人なら知ってるかも！」という方に心当たりがありまして。まぁ、それは山下達郎さんだったんですけど。

——え、山下達郎って、あの大御所ミュージシャンの？

清野　はい（笑）。でも、もちろん私は面識がなかったので、山下達郎さんが毎週日曜にやってる『山下達郎のJACCS CARDサンデーソングブック』というラジオ番組に、リスナーとしてリクエストのハガキを出したんですね。「僕は広島FMのアナウンサーで、プロレスの入場テーマ曲の番組を担当しています。そこでラッシャー木村選手が使用していたサンディ・ネルソンの『REBIRTH OF THE BEAT』を流したいのですが、どうしても見つかりません。ぜひその曲をお願いします」というかたちで。そうしたら実際に達郎さんがハガキを読んでくださったんですよ！

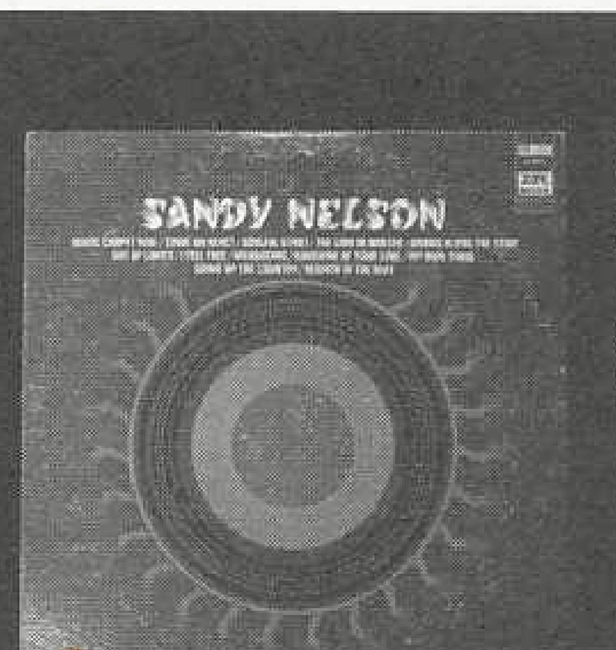
——ほー！

清野　で、達郎さんがその番組で「残念ながら私も『REBIRTH OF THE BEAT』は持ってないんですよ。もしラジオをお聴きの皆さんで持っている方がいましたら番組までご一報ください」というかたちで募集をかけてくださって。

——全国に呼びかけてくれたわけですね（笑）。

清野　そうなんですよ（笑）。で、それから2ヵ月後ぐらいに同じ番組を聴いていたら、達郎さんが「少し前にリクエストのあった『REBIRTH OF THE BEAT』ですが、東京都にお住まいの○○さんが送ってくれました。でも、私も別ルートから仕入れることができたので、この1枚はリクエストしてくれた清野

すべてオリジナル盤！ 清野アナの愛蔵テーマ曲



『REBIRTH OF THE BEAT』
ラッシャー木村

文中に出てくるように清野アナがその入手に困難をきわめた一枚。「山下達郎さんはこれと一緒に直筆の手紙も添えて送ってくれたんです。僕の家宝ですね」



『移民の歌』
ブルーザー・ブロディ

洋楽のヒット曲のカバーアルバム。「元はツェッペリンの曲ですけどブロディはカバーを使用したので、テーマ曲としてはこっちがオリジナルってことですね」



『燃えろ！ 吠えろ！ タイガーマスク』
タイガーマスク

古舘伊知郎が歌っていることで知られる一枚。「タイガーマスク関連の曲はたくさんありますけど、僕は佐山さんが歌ってる曲も好きですね。プレスリーをカバーしてたり（笑）」



『ハリケーンズ・バム』
スーパー・ストロング・マシン

マシンがカルガリー・ハリケーンズ時代から使用しているテーマ曲。「長州と同じく平沢さんが作曲なんですよね。だから『パワーホール』と作風が似てるんです」

さんに差し上げましょう」という感じで、わざわざプレゼントしてくださって！

——それはイキな計らいですね～。

清野　あれはうれしかったですね～（しみじみと）。その後、03年くらいにたまたま達郎さんに仕事でご挨拶する機会があったんですけど、「あぁ、あのときの！」って覚えていてくださって。達郎さんもプロレスがお好きなので、なぜかFMWのことや、「どうしてラッシャー木村はあれをテーマ曲に選んだのか？」っていう話で盛り上がって（笑）。オーケンさんにしろ達郎さんにしろ、そういう出会いは凄い財産になってますね。

——プロレスのテーマ曲がつないだ縁ですね。ちなみに清野さんが一番好きなテーマ曲は？

清野　う～ん、難しい質問ですね（笑）。ときどき変わるんですけど、やっぱり『炎のファイター』は問答無用って感じがしますね。いろんなバージョンがありますけど、僕は会場使用バージョンのものが一番好きです。外国人レスラーだとロード・ウォリアーズの『アイアンマン』がいいですね。ブラック・サバスが見事にハマっていて。あとはブルーザー・ブロディだったり、ダイナマイト・キッドだったり。

——80年代くらいまでのレスラーって、いまみたいにオリジナルじゃなく、そのイメージに合った曲を使用してることが多かったですよね。

オリジナルじゃなく、ありものの曲をハメてた80年代は最高です！

清野　そのへんは〝選曲の妙〟ですよね。WWEなんかはレスラーの歩幅に合うように、そのリズムの細部にまでこだわってオリジナル曲を作るらしいですけど、個人的にはありものの曲を合わせるっていうほうが好きですね。「よくハメたな」みたいな。そういう意味でも80年代は最高です！（キッパリ）。

——80年代は最高！　映画の『レスラー』みたいですね（笑）。

清野　それと、名曲としてはやっぱり『パワーホール』も外せないですね。テーマ曲ファンのあいだでは有名な話ですが、あれはプロレスに興味のないP－MODELの平沢進さんが〝やっつけ〟で作ったんですけど、それが思いもよらずにウケちゃったっていう（笑）。

——いまだにあれが鳴ると場内に長州コールが巻き起こりますもんね。

清野　それもずっと同じ曲を使い続けてるっていうのが大きいでしょうね。やっぱり曲をコロコロ変えないっていうのは大事だと思いますよ。まぁ、中には変えて成功する人もいますけど。たとえば、武藤なんかは節目節目でモデルチェンジしてますよね。だから『HOLD OUT』がいいって人もいれば、『TRIUMPH』がいいって人もいる。いまだったら『TRANS MAGIC』。その曲が流れれば、その時代時代の武藤が思い浮かぶっていうか。

——中にはよくわからない曲の変え方をする人もいますよね、一回だけですぐに戻したり（笑）。

清野　そういうのはガクってきますよね～。いまだに謎なのが吉田秀彦とやったときの田村潔司！　みんなが『FLAME OF MIND』で手拍子するのを待ってたら、全然違う曲で入場したっていう（笑）。ああいうズラし方をするのも田村らしいんですけど。

——かと思えば、リングス時代のヘンゾ・グレイシー戦では『UWFのテーマ』で入場して場内の感動を呼んだり（笑）。

清野　そうそう（笑）。あと、さっきの長州コールの話じゃないですけど、コールのしやすさっていうのもテーマ曲では重要だと思いますね。三沢光晴の『スパルタンX』なんても凄くコールしやすいテンポじゃないですか？　二小節目から条件反射的に「ミ・サ・ワ！　ミ・サ・ワ！」ってなりますから。

——いま活躍してるレスラーで「ハマってる」と思う曲はありますか？

清野　男色ディーノはよくハマってるんじゃないですかね、布袋寅泰の『スリル』。イントロが鳴ると場内が一気に盛り上がりますからね。

——非常警報が鳴ったみたいな（笑）。

清野　そうそう（笑）。ほかだと真壁なんかもいいと思いますね。『移民の歌』のアレンジバージョンで、真壁のイメージにマッチしてると思いますし。あと、オリジナルですけど中邑の『Subconscious』もいい曲ですよ。

——ただ、いまのファンは中邑の曲って言われても、パッと頭に思い浮かばない人が少なくないと思うんですよ。きっと放送時間の関係で、地上波だと入場シーンがカットされてるからだと思うんですけど。

清野　ホント、そのへんは由々しき問題ですね！（キッパリ）。入場こそレスラーの晴れ舞台って部分はありますから。やっぱり地上波の影響って大きいですし。

入場こそがレスラーの晴れ舞台なんです！

——30分のかぎられた枠の中でも入場のシーンは入れるべきだ、と？

清野　まぁ、それも難しいとは思いますけど、毎週ヘビーローテーションにしないと浸透しないでしょうしね。僕なんかも猪木、長州、タイガーマスクの入場を毎週観てたからテーマ曲にハマったわけですし。でも、深夜のあの時間帯じゃどっちにしても……っていうのも正直ありますけどね（苦笑）。

——最後に清野さんの「テーマ曲はこうあるべきだ！」というこだわりはありますか？

清野　やっぱり曲の頭が勝負ですね！『パワーホール』にしたって最初のドラムロールがあるからいいわけで、天龍の『サンダーストーム』だったら雷音とか。

——つかみが大事ということですね。

清野　はい。あとはさっきも少し話に出ましたけど、安易には曲を変えてほしくないですね。そのあたりは車と一緒だと思うんですよ。「スカイラインのうしろのテールランプは丸でしょ」みたいな。外国の車ってあんまりモデルチェンジをしないんですよね。でも、いま「クラウンとかスカイラインの顔ってどんなの？」って言われても、いまいちピンとこないですから。やっぱりそこはテーマ曲もイメージを定着させるために、レスラーや格闘家にはこだわってほしいなって思いますね。

【10年1月6日／都内・某所にて収録】



きよの・しげき■1973年8月6日、兵庫県出身。広島FMでアナウンサーとして活躍したのち、06年よりフリーに転身。現在はサムライTVにて新日本プロレスや格闘技の実況アナを務めている。「清野茂樹のシゲキ的リング」→http://www.plus-blog.sportsnavi.com/kiyono/

掟ポルシェの萌え萌え女々苑


イラスト◎ゴローちゃん

女子プロの過去と未来を行ったり来たりの自発的タイムボカン連載『萌え萌え女々苑』。今回のゲストは元極悪同盟のコンドル斉藤さん！　新宿2丁目に『C♯（シーシャープ）』なるお店を出されたということで早速、掟ポルシェが突撃ドキュン！

掟　新宿2丁目歴は長いんですか？

コンドル　2丁目はもう20年通ってて、大好きな街なんですよ。

掟　20年ってことは、三禁のあった全女時代からですね（笑）。

コンドル　まあ、そうですね（笑）。三禁っていってもウチらの頃は15～16で入って、酒、タバコはもちろんダメだし、男を作るんだったら練習しろ、いい試合しろって感じで。でも20歳をすぎたら、いいッスよね（笑）。

掟　コンドルさんは引退後、イラストレーターとして活躍されてますけど、レスラー時代より全然長いですよね？

コンドル　私、プロレスは4年しかやってないんですよ。16で入って20歳で辞めてるんで。で、女子プロ時代からなにげに体験漫画とか描かせてもらってて。

掟　もともと絵は得意で、プロレス入り以前には『なかよし』に漫画を投稿して入選したこともあるんですよね。

コンドル　はい。子どもの頃からストーリー漫画ばっかり描いてて、30ページとか平気で描いてたんですよ。中2のときには「もう一歩賞」なんですけど、賞金5000円もらって誌面にも名前が出て。

掟　14歳で長編ストーリー漫画って早熟ですね。

コンドル　ですよね。いまはなんにも考えられないのに。あの頃は頭がよかったのかもしれない（笑）。鉄柱に打ちつけられてるうちにドンドン血管が切れてきちゃったのかなぁ（笑）。

掟　ガハハハハ！　女子プロ入りしてからもダンプさんやブルさんのメイクはコンドルさんが描いてたんですよね？

第43回 コンドル斉藤（元全日本女子プロレス）の巻


こんどる・さいとう■本名＝斉藤真智子。1967年8月11日、大阪府出身。里中満智子や楳図かずおに憧れ、漫画家を目指すも、初代タイガーマスクを観てプロレス入りを決意し全日本女子に入団。84年7月の永堀一恵戦でデビューしたのち、極悪同盟の一員として活躍するもケガなどもあり88年に引退。その後はイラストレーターとして活躍。昨年8月に新宿2丁目に『Chot!Bar C♯』をオープンさせた。コンドル斉藤の似顔絵屋HP→http://www010.upp.so-net.ne.jp/condor/

コンドル　私、メイクはやってないんですよね。基本、顔のメイクは各自です。ダンプさんの身体にドクロや蛇をボディペインティングしたりはしましたけど。

掟　てっきりコンドルさんが全部やってると思ってました！

コンドル　皆さんそう言われるんですけどね。

掟　極悪同盟のメイクは、フラットバッカーのメイクが元になってたり、ヘヴィメタルのバンドっぽくてカッコよかったです。

コンドル　そんな感じでしたよね（笑）。

掟　プロレス入りのきっかけは、初代タイガーマスクなんですよね？

コンドル　そうです！　それまでプロレスなんて一切観たことなくて、兄の影響で新日本でタイガーマスクを観て、それから夢中になって。タイガーの試合だけビデオにちゃんと録ってましたね。それから女子プロも観るようになって、あの頃はヒールでデビル（雅美）さんがカッコよかったんですよ。「私もデビルさんみたいなヒールになりたい」って思って。

掟　最初からヒール志望って、全女の中では珍しくないですか？

コンドル　珍しいですよね、あの頃はね。アジャなんか「ダンプ松本、ブッ殺してやる」って言って、「極悪（同盟）入れ」って言われて凄く嫌がったという（笑）。

掟　アジャ様は長与さんになりたかった人ですもんね（笑）。じゃあ、極悪同盟に行くことに対して抵抗もなかった、と。

コンドル　いや、もううれしかったですよ。だからダンプさんに「金髪にしてこい」って言われたときはうれしくて。

掟　「やった！　ブロンドアウトローズみたい！」って感じで（笑）。

コンドル　新人の頃は率先して悪役のセコンドについてましたもん。

掟　そんな人は数えるほどしかいなかったわけですよね。

コンドル　私、変態だから（笑）。

掟　でもリングネームがコンドルにきまったときはどう思いました？

コンドル　ダンプ、クレーン、ブルと来てね。ずっと建築関係というか（笑）。

掟　一通り建築が終わって、もうビルが建っちゃって（笑）。

コンドル　最初はスコップとかシャベルっていう話もあったんですよ（笑）。

掟　こぢんまりしすぎです（笑）。

コンドル　さすがにそれは嫌だなぁと思って。だから、コンドルでよかったです。亡くなった植田（信治）コミッショナーがつけてくださったんですよ。そのとき髪の毛が金髪で、メッシュでピンクとか緑とかも入れてて。それを見て「オウムみたいだな。じゃあ、おまえコンドルになれ」って言われて（笑）。

掟　植田さんらしい話ですね。ちょっと脳内シナプスのつながり方が特殊というか（笑）。あの、これは毎回聞いてるんですけど、好みのタイプは？

コンドル　デッド・オア・アライブのピート・バーンズです。オカマ好きなんですよ、私（笑）。

掟　当時、来日公演も観に行ったみたいですけど、21世紀に入ってピート・バーンズは全身整形して、まったく違う人になっちゃいましたよね。なぜか清川虹子さんクリソツに（笑）。

コンドル　整形に失敗しちゃって唇がこんなに腫れちゃって。中学生のときカルチャークラブのボーイ・ジョージが好きだったりとか（笑）。もともと、オカマ好きなのかな？　2丁目で店出してるし、「私、何者？」って感じですよね（笑）。

掟　美形好きってことなんですかね。でもコンドルさんは洋楽志向なんですね。あまり全女の中にはいないような気もしますけど。全女の選手はバスの中で尾崎豊とか聴いてるようなイメージで。

コンドル　あ～。あと村下孝蔵とかよく聴いてましたねぇ。寮とかバスの中で。


掟　極悪のバスに鳴り響く『初恋』！

コンドル　あと、私とブルさんは本田美奈子が大好きで。赤バス（ヒール専用バス）でしょっちゅう二人で聴いてましたね。一回、ブルさんがテレビの仕事で、廊下ですれ違ったらしいんですよ。ブルさんは大好きだから「おはようございます！」って言ったら、シカトされたって（笑）。凄いショック受けてましたよ。「こんなに好きなのに！」って（笑）。

掟　金髪で髪の毛半剃りの大きな女の人ににこやかに挨拶されるのが怖かっただけだと思います！


左がコンドルさんと『C♯』を共同経営する元ジャパン女子スタッフのDORAさん。プロレスラーもたくさん来店するらしいので興味のある方はゼヒ！
『Chot! Bar C♯（シーシャープ）』
新宿区新宿2－7－3ヴェラハイツ新宿御苑110号
TEL・03－3358－9783
ブログアドレス→http://ameblo.jp/c-sharp0708/

Okite Porsche◎掟ポルシェと田代まさしのアシッドハウスユニット『マーシー☆ポルシェ』トーク&握手会&CD即売会の全国クラブツアー情報！　2・12（金）深夜@秋田Live Space（090－2940－2619）、2・13（土）深夜@盛岡players cafe（019－626－2176）、2・19（金）深夜@金沢SOCIAL（076－223－0038）、2・20（土）深夜@新潟CLUB JUNK BOX（025－229－1494）。詳細&その他の情報はブログをチェック！［http://blog.excite.co.jp/porsche/］



闘う男なら世界を目指せ！

マサ斎藤
ザ・グレート・カブキ

アメリカを制した二大日本人レスラー
タフな男の生き様を語る!!

これまでアメリカ遠征をした日本人レスラーはたくさんいるが、本場アメリカマットで本当にトップを獲った男といえば、この二人！AWA、WWFでトップを張ったマサさんと、カブキとしてのちの日本人レスラーの"型"を作ったカブキさんだ。78年にはタッグを組んで、フロリダ地区で大暴れした二人に、プロレスラーの生き様を語ってもらった。

聞き手　堀江ガンツ　撮影／菊池茂夫　試合写真／George Nopolitano

カブキ　マサさ～ん、ひさしぶりですね（ガッチリ握手して）。
マサ　ひさしぶりだね（ニッコリ）。
カブキ　2～3年前に『東スポ』のプロレス大賞（授賞式）で会って以来ですよ。
――マサさん覚えてますか？
マサ　覚えてない。
カブキ　ハハハハハ。
――覚えてませんか（笑）。それ以外だとカブキさんが平成維震軍として新日本に参戦していた頃以来ですか？
マサ　そうだね。
――では、今日は日本人レスラーとしてアメリカで最も成功したと言ってもいいお二人に、当時のお話をうかがいたいと思うんですけど。
カブキ　いやあ、自分なんかよりマサさんのほうが凄いですよ。
――でも以前、マサさんにお話をうかがったとき「これまでの最高のパートナーは高千穂（カブキ）だった」って言ってたんですよ。
マサ　そうね。
カブキ　自分もそうですよ。マサさんとのタッグは最高だと思ってるから。たしか78年にフロリダで組んでたんだけど、凄いチームだったよ。11カ月間休みがなかったんだから。
――それぐらい売れっ子だった、と。
マサ　それでひどいときは一日2試合やってるからね。
カブキ　毎日休みなしなのに、ダブルヘッダーまでやってたんだから。そんなチームなかなかないよ。
――フロリダは最初にマサさんがいて、そこにカブキさんが加わった感じなんですか？
マサ　そう。まだカブキじゃなくて、ミスター・サイトーに合わせて「ミスター・サトー」っていうリングネームにしてね。
カブキ　そうでしたね。自分はそれまで全日本にいたんですけど、もう全日本にいてもしょうがないと思って、馬場さんに言ったんですよ。「馬場さん、アメリカ行かせてください」。そしたら（馬場ボイスで）「ばぁかやろう、ダメだよぉ」。
――ダハハハ！　あいかわらず馬場さんのモノマネうまいですね（笑）。
カブキ　それで横にいた（馬場）元子さんも（元子ボイスで）「高千穂さんがアメリカに行ったら、誰が練習教えるんですか」とか言ってね。それ聞いて「なんだ、俺はもうトレーナーかよ」って思って。「1年でいいですから行かせてください」って言ったら（馬場ボイスで）「ばぁかやろう。しょうがねえな、1年だけだぞ」って。
――カブキさんはトップ獲って稼いでやろうっていう野心があったのに、日本でコーチ状態にされていたわけですか。
カブキ　そう。
――それはご自分としては納得いかないでしょうね。
カブキ　いかない。もっといろんなことがやりたかったからね。それで78年にフロリダに行って、マサさんとタッグ組むようになったんですよ。
――お店に飾ってある当時の写真もカッコいいですよね。ベルトを二本持って。
カブキ　最終的には3本持ってたんですよ。総取りでしたから。
――もちろんヒールですよね？
マサ　ヒールよ。タイガー服部がマネージャーでね。
――でも、ヒールとしてそれだけ売れてるってことは、相当ヒート買ってたってことですよね？　危ない目にも遭いましたか？
カブキ　もう危ない危ない。訴えられたこともある。
マサ　あれはオーランドだったよな。
カブキ　そうです。当時は試合に勝つと、日本の海軍旗を伸びてるアメリカ人レスラーの上にかけて、二人で手を合わせて拝むっていうパフォーマンスをやってたんですよ。そのあと花道を戻るんですけど、うしろから負けたジャックとジェリーのブリスコ兄弟がつっかけてきたんですよ。それで、自分とマサさんはブリスコ兄弟と乱闘し始めたら、花道に一人とり残された服部さんが、観客に囲まれてボコボコにされてたんですよ（笑）。


『かぶき』の店内に飾られていた、フロリダ時代の“ミスター・サイトー&ミスター・サトー”とマネージャーのタイガー服部の3ショット。野性的でメチャクチャかっこいい！

――マネージャーだけ取り残されちゃいましたか（笑）。

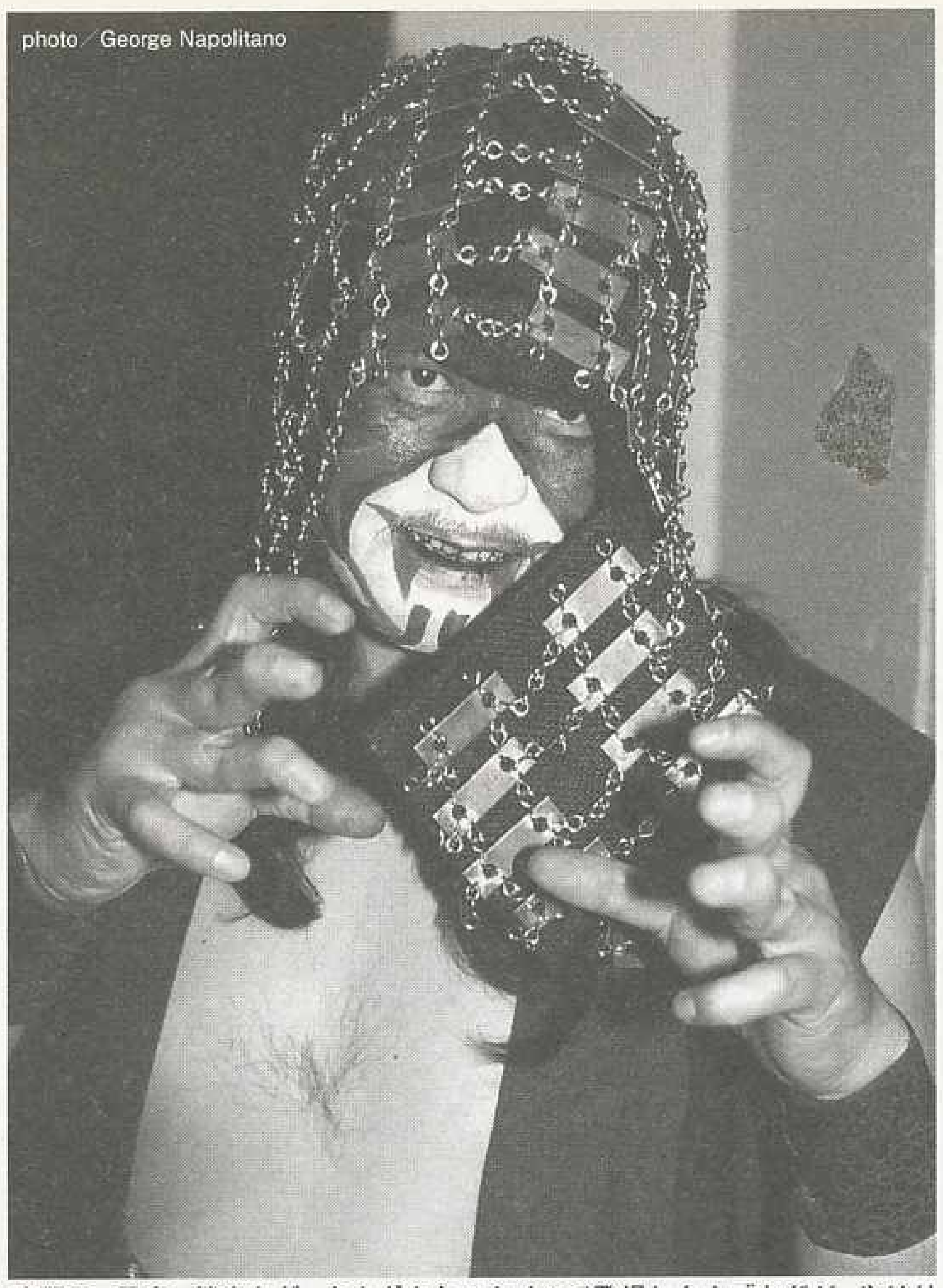
マサさんとのタッグで売れて11カ月間休みがなかった（カブキ）

カブキ　それでマサさんと助けに行って、マサさんが観客何十人を相手にボッコボコに殴って、それで観客に訴えられたんですよ。
マサ　あれはしょうがねえよなあ。
――やらなきゃやられるわけですよね。
カブキ　刺されたりしますからね。でも、お客に訴えられて。
マサ　あんときはプロモーターのエディ（・グラハム）が、チャーター機でオーランドに飛んで、向こうの弁護士と話して、告訴取り下げにしてくれたんだよね。いい弁護士用意してくれたんだよ。
――そういうことが日常茶飯事だったわけですか。
カブキ　そう。向こうの客はナイフとかピストル持ってるからね。
――まさに命懸けですね。
カブキ　だから試合もタッグでコーナーに控えてるとき、試合じゃなくて客席を見てないと危ないの。うしろから客がそっと近づいてきて、ナイフでアキレス腱をバッと切ったりするから。
――うわ～、それこそ犯罪じゃないですか！
カブキ　実際にやられたヤツがいるからね。だから花道なんかも、客席睨みつけながらゆっくり帰らないといけない。走って控室に帰ろうとなんかしたら、パッと足かけられて、転んだところを観客が袋叩きにするから。それで背中にナイフ刺さったまんま控室に戻ったりね。
――じゃあ、常に自分の身体を守らなきゃだめなんですよね。マサさんは車をボコボコにされたんでしたっけ？
マサ　あれはアラバマよ。
――全米各地でそういう目に遭ってましたか（笑）。カブキさんご自身が危ない目にあったことはあるんですか？
カブキ　いっぱいありますよ。控室に銃弾が撃ち込まれたり。
――銃弾！　ヤクザの抗争みたいじゃないですか。
カブキ　シャワー浴びてたら、パンパンパンッ！　って撃ち込まれましたよ。命懸けですよ。
――でも、それぐらい命懸けでヒート買ってるからこそ、また稼げるわけですね。当時はどんなファイトスタイルだったんですか？
マサ　フロリダとかミネアポリスはレスリングが盛んだから。ガッチリとしたレスリングやって。その中に殴ったり蹴ったりというのを入れるのよ。
カブキ　マサさんはそういう闘いが得意だからね。
――マサさんから見てカブキさんはどんなレスラーでしたか？
マサ　うまいよ。技もうまいし。とくにタッグのタイミングがもの凄

くうまいのよ。タッグマッチってい
マサ　「こういう技を使うといい」っ
ドロップを使うけど、あれはマサさ
んですよ。そこがレスラーが集まる
――ダハハハ！　いいですね。



60年代末、渡米した当初のマサさんの勇姿。サンフランシスコ地区でキンジ・シブヤのタッグパートナーに抜擢され、いきなりUSタッグ王者となった。この頃から鍛え抜かれた肉体が素晴らしい。



photo／George Napolitano

連獅子、忍者、鎧兜など、さまざまなスタイルで登場したカブキだが、やはり“正調カブキ”は、この鎖帷子スタイル。指の第一関節を曲げるこのポーズも“空手の達人”カブキのオリジナルだ。

マサ斎藤×ザ・グレート・カブキ

くうまいのよ。タッグマッチっていうのは、タイミングだからね。

――阿吽の呼吸ですか。

マサ　あとは俺が使うスープレックス（元祖ひねりを加えたバックドロップ）っていうのは、彼が作ってくれたの。アイデアくれてね。

――へえ、そうなんですか！

マサ　「こういう技を使うといい」って言って。で、やってみて「こりゃいいや」って使うようになったのよ。

カブキ　マサさんはアマチュアのオリンピック選手だからね。誰にもできないきれいなスープレックスができるんですよ。だから、いまいろんな選手がひねりを入れたバックドロップを使うけど、あれはマサさんが最初だから。

――それがフロリダで、カブキさんとのタッグで生まれた、と。

カブキ　きれいだよ～。あんなきれいなバックドロップができるのマサさんしかいなかったから。

マサ　フロリダはロングドライブの必要がないから、毎日試合が入ってもいろんなことができるのよ。遠いのはマイアミぐらいだけど、それはチャーターフライだしね。

――だからこそ試合後は毎晩飲んで（笑）。

マサ　そうそう（笑）。

――酒飲みで有名なマサさんが「高千穂は飲むよ～」って言ってたから、相当凄いんだろうなって。

カブキ　キラー・カーンがフロリダに来たとき、自分やマサさんと一緒に飲んでぶっ倒れたからね（笑）。

――カーンさんを潰しちゃいましたか（笑）。天龍さんもフロリダに来たんですよね？

マサ　天龍がまだ前座だった頃よ。

カブキ　全然、プロレスができなかったよね。

――天龍さんのそういう駆け出し時代を知ってるって凄いですね。

カブキ　天龍も最初にアメリカで学べたから、いまがあるんですよ。

――試合後は、どういったところで飲んでたんですか？

カブキ　レスラーが行くバーがあるんですよ。

マサ　「インペリアルラウンジ」よ。

カブキ　マサさん、よく覚えてますね～（笑）。そうそう、「インペリアルラウンジ」っていうバーがあったんですよ。そこがレスラーが集まるバーで、店の真ん中にカウンターがあって、カウンターの向こう側にベビーフェイスが集まってて、こっち側には俺たちがいて。最初、女の子たちはベビーフェイスのほうに集まるんだけど、最終的にはみんな俺たちのほうに来て、大騒ぎしてるんですよ（笑）。

――最後はワルの魅力で（笑）。

カブキ　俺たちはメチャクチャ飲むから。女の子もこっちのほうがおもしろいからね。

――マサさんは「フロリダの女は最高だ」って言ってましたよね（笑）。

マサ　グフフフ。最高よ（笑）。

カブキ　よく首投げたっすよね～（笑）。だって30代だもん。一番、元気でエネルギーがあったから。

――さらにパワーもテクニックもある、みたいな（笑）。

カブキ　服部さんも凄かったですよね？

マサ　あいつよく、あれで女房と別れなかったよな（笑）。女房いるのにあれだけ遊んで。

――そんなに凄かった（笑）。

カブキ　一番モテたのはマサさんですよ。

マサ　違う違う（笑）。

カブキ　でもね、俺は細いのが好きで、マサさんはぽっちゃりしたのが好きだったから、取り合いにならなくていいですよ（笑）。

――そういう役割分担もできて、それはチーム仲もよくなりますね。

カブキ　だからマサさんと天龍は合わないんですよ。女の好みがかぶって（笑）。

――ダハハハハ！　いいですね。

カブキ　ホントにね、フロリダはよかった。みんな仕事ができるレスラーばっかりだったし。楽しかったし。最高のメンバーでしたよね。

――周りのレスラーにも恵まれたわけですか。

カブキ　みんなうまかった。ジャックとジェリー、それからマイク・グラハムにスティーブ・カーン。

マサ　もう、それだけで充分よ。

カブキ　そうですよね。ジャック・ブリスコなんて、いいレスラーだったよ。彼もアマチュアの全米王者だったから、マサさんとのレスリングの攻防なんて素晴らしかった。

――それは観てみたいですね。

カブキ　ジャックがレスリングのスピンでバックを取ると、マサさんもその動きについていって、二人で一流の攻防をするわけ。そういうプロレスいまないでしょう。パッと足にタックルいって倒してね。

――お客さんも目が肥えていて、そういう攻防で沸くわけですね。

マサ　だから、こっちもやりがいがあるし。

――マサさんは以前「ジャック・ブリスコはタフだった」って言ってましたよね？

カブキ　タフですよ。あとはハーリー（・レイス）もタフだったね。

――名前を聞くだけで、いかにもタフなレスラーですね（笑）。

マサ　ハーリー・レイスにはビックリしたよ。彼はNWAのチャンピオンだったから、何カ月にいっぺんはビッグショーでフロリダまで来るんだよ。で、一度ひどい風邪をひい

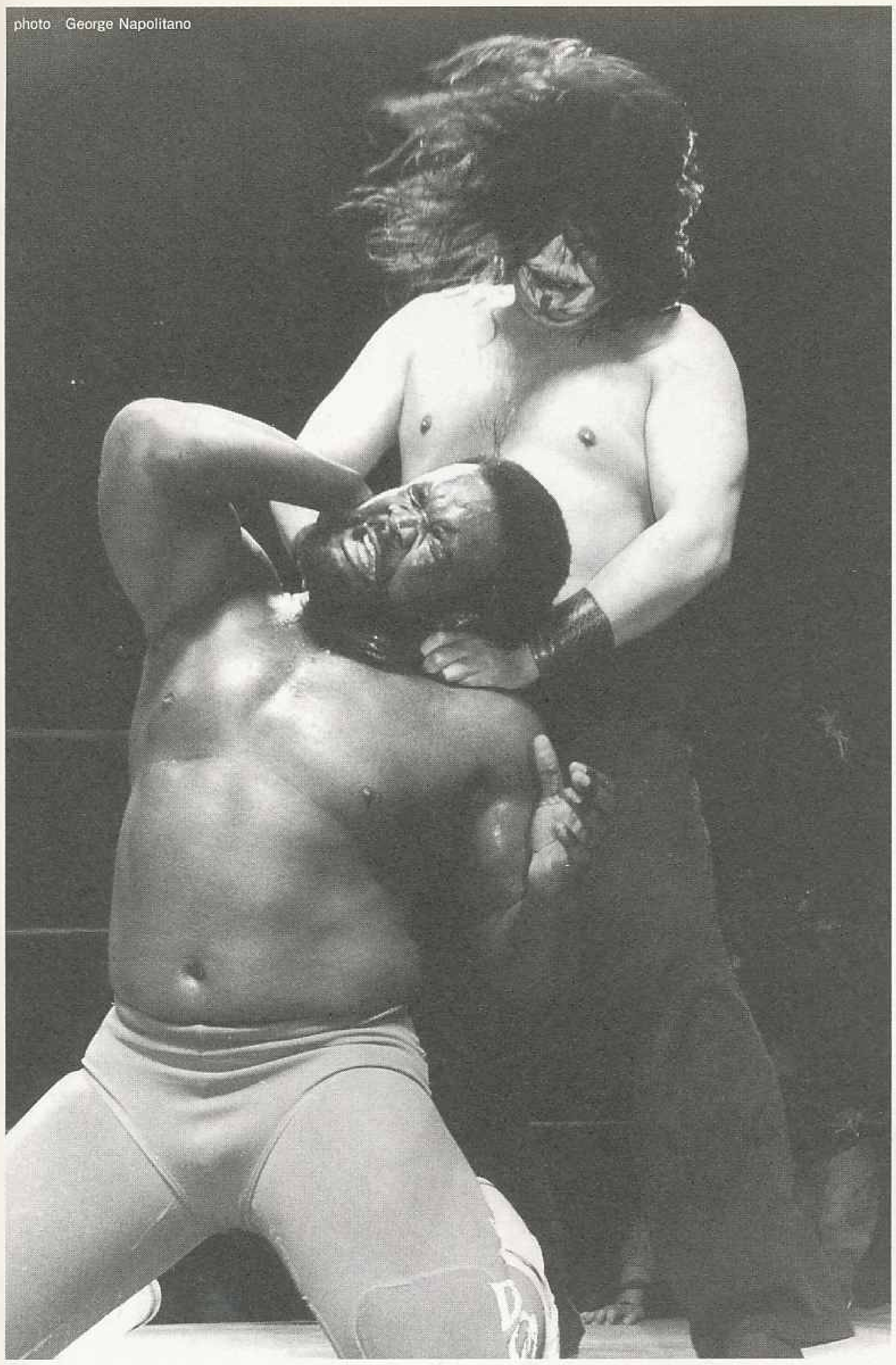


photo George Napolitano

これが80年代初頭、ダラス地区で押しも押されもせぬトップレスラーに君臨したカブキの勇姿。ペイントや毒霧のギミックは、ムタやTAJIRIといった、のちの"日本人メジャーリーガー"たちに受け継がれた。

て、高熱出して、試合前に控室でガタガタ震えてたね。

——最悪のコンディションだったわけですね。

マサ 「試合できんのかな?」と思ってたら、試合直前にウィスキーのボトル一本、一気でラッパ飲みよ。

——ウィスキーのボトルをストレートで一気ですか!(笑)。

マサ 一本全部飲んじゃって、そのまま3本勝負のタイトルマッチで大流血戦やってきちゃうのよ。しかも、試合後に「インペリアルラウンジ」に行ったら、ハーリー・レイスがガンガン飲んでんだよ。

——ダハハハ! 凄い(笑)。

マサ 高熱出して震えてたのに、ビックリしたよ。

——怪物ですね(笑)。

カブキ トップレスラーはみんな、それに近いくらいタフだったよ。

——要は一年中、ほとんど休みなく全米をサーキットしながら試合をして、毎日酒を浴びるように飲むような生活をしてても、大丈夫なくらいタフな男じゃないと勤まらなかったわけですよね。

カブキ そうそう。タフじゃないと仕事ができないから。

——それをやってたお二人も相当タフだったんでしょうね。

カブキ やっぱり若いから、一番元気な頃だからね。

マサ あのとき30歳いってた?

カブキ 31か32歳です。

マサ じゃあ、俺は37歳ぐらいか。

——マサさんも一番バリバリの頃ですか?

マサ 40歳超えたあと「あ、疲れたな」って思うようになったけど、30代の頃は疲れるとか感じたことなかった。

——マサさん、40歳になって初めて「疲れる」っていう感覚を知ったんですか(笑)。

マサ うん。40歳すぎて「俺も疲れたりするんだな」って。

——それまでは、いくら試合しても大丈夫でしたか。

マサ パートナーもよかったし、相手もうまいレスラーばっかりだから、いくら闘っても疲れないのよ。

40歳を超えて初めて「疲れる」って感じるようになったよ(マサ)

——なるほど。ヘタなヤツを相手にすると疲れるわけですか。

マサ そう。うまくいかないから、よけいな体力使うんだけど、うまいヤツとやると、流れるようにできるから、まったく疲れないのよ。

カブキ フロリダのときは、マサさんやブリスコは、お客の心理を読んで試合してたから。お客が「次こうなるだろうな」と思ってることと、逆の動きをするんですよ。だから、お客さんも目が離せなくて、グイグイ試合に引き込まれる。

——常にハラハラするわけですね。

カブキ 「お客さんと勝負する」っていうのは、そういうことだから。

——それは高度なプロレスですね。

カブキ 高度ですよ。そして、それが本来のプロレスなんですよ。いまの子なんて、そういうこと考えないでしょ? 自分のやりたいことをやっちゃって終わり、みたいなさ。そうじゃないもん、お客さんの逆をいくんだもん。そして、大技はお客さんの心理を考えたタイミングで出すから、よけい沸くんですよ。

——なるほど。だからこそ、大技がそんなに必要ないわけですね。

カブキ そういうことですよ。アメリカでは俺とかマサさんが、相手の技をバンバン受けるから、観客が盛り上がる。でも、それは相手に攻めされる前に、自分たちがとことんベビーフェイスを痛めつけて、観客のフラストレーションを溜めるわけ。そして、最後にベビーフェイスが反撃に転じたら、ボンボンボンボン受け身を取る。そうなると、お客さんがもの凄く盛り上がる。でも、それでも負けない日本人っていうのが、もの凄く憎たらしいわけ(笑)。

——そして「次こそはあのジャップどもが負けるところを観てやろう」となるわけですね(笑)。

マサ 対戦相手で一番多かったのが、マイク・グラハム&スティーブ・カーン組。このカードが組まれると、だいたいアリーナはフルハウスよ。

——そして、そのあとマサさんはニューヨーク(WWF=当時)とミネアポリス(AWA)に行って、カブキさんはダラスで人気が爆発するわけですよね。

カブキ 自分が一番売れたのはダラスだけど、それはフロリダでマサさんと組めたおかげだから。

——いまトイレに行ったら、ザ・グレート・カブキの名勝負選が貼られてましたけど、錚々たるメンバーですよね。フリッツ・フォン・エリック、ブルーザー・ブロディ、リック・フレアー……。

カブキ もうほとんど亡くなってるけどね(笑)。

——当時のアメリカのトップレスラーは全部当たった感じですか?

マサ斎藤×ザ・グレート・カブキ

プロレスラーの価値はお客を呼べるかどうかだから（カブキ）

カブキ　そうですね。メインイベンターはほとんどやった。

マサ　あのマネージャーなんていったっけ？

カブキ　ゲーリー・ハート。

マサ　カブキっていうのは彼のアイデアなんだよね？

カブキ　そうです。「ああいう格好できるか？」って聞かれて。最初はマスク被ってくれって言われたんですよ。でも、マスクは嫌だなと思ってたら「じゃあ、メイクしてみろ」って言われてやってみたんですよ。アメリカってハロウィンがあるじゃない？　だから、メイクに対して違和感はないんだよね。でも、歌舞伎の隈取りみたいなメイクはアメリカ人は見たことがないから、インパクトがあってね。あとは毒霧。

マサ　あの霧を吹くのはいいアイデアだったね。

カブキ　でも、マサさんはメイクも毒霧必要ないからいいんですよ。マサさんは肉体がギミックみたいなもんだから（笑）。

——普通にタイツとリングシューズ履いてるだけで、インパクトがある風体ですか（笑）。

カブキ　日本人とは思えない身体してましたからね。

マサ　よくハワイアンに間違えられたよ（笑）。

——カブキさんは、アメリカでそんなに売れてたのに、なんで全日本に戻ったんですか？

カブキ　戻ったっていうより、一回だけ馬場さんに対して義理をはたせばいいと思って、1シリーズだけのつもりで日本に帰ったんですよ。そしたら、そのシリーズがお客入っちゃったの。〝ババ抜き〟だったのに（笑）。

——ババ抜き（笑）。馬場さんが欠場してたシリーズなのに、カブキ人気で満員続きだったんですよね。

カブキ　最終戦の蔵前も完売して。

——リック・フレアーとのNWA世界戦ですよね。

カブキ　そうそう。それで馬場さんがあわててハワイから帰ってきて、話があるっていうから何かと思ったら、（馬場ボイスで）「おまえな、大熊とか小鹿とか先輩がいるからな。あいつらよりギャラ上げてやることできないんだよ」。そんな話かよって！（笑）。

——ダハハハハ！

カブキ　（馬場ボイスで）「だけど次のシリーズも頼むぞ」なんて言うから、ふざけんな！って思ってね。「馬場さん、無理ですよ。もうアメリカでスケジュール組んであるから抜けられないです」って答えたら、馬場さんがフリッツ（フォン・エリック）に電話入れて、日程切るようになったんです。そしたらダラスでのストーリーはズタズタですよ。

——なるほど。定着しないと、抗争もできませんもんね。

カブキ　そう。日本に戻るたびに、ダラスでのストーリーは一から作り直し。そうすると上でも使えなくなっちゃうんですよ。

——では、日本で人気が爆発しすぎたがために、アメリカに残れなくなっちゃったわけですね。

カブキ　そう。自分にとっては逆効果だった。

——ぶっちゃけた話、アメリカのほうがずっと稼げたわけですよね？

カブキ　全然上ですよ。でも、全日本で若いヤツに練習教えてたら、馬場さんが「おまえ、若いヤツに練習教えてるからな、ギャラ（1試合につき）100円上げといたから」って（笑）。

——たった100円！（笑）。

カブキ　「は？　100円ですか？」って言ったら（馬場ボイスで）「おまえ、年間にしたらいくらになると思ってるんだよ」とか言うんだけど、年間ずっとなんていねーよ！って（笑）。そのあと500円上がったんだけどね。

——小刻みで上がりますね（笑）。

カブキ　最初に全日本所属で始まったのがダメだった。その点、客を呼ぶレスラーはそのぶん稼げる当時のアメリカは良かったんですけどね。プロレスラーって、客が呼べなきゃどうしようもないんだから。だって、いくら強いっていったって、オリンピックで金メダル獲れないんだから。じゃあ、プロレスラーの価値ってどこにあるかって言ったら、お客さんが呼べる、個性あるレスラーになることだから。

——そういうことをプロとして刷り込まれるんでしょうね。

マサ　お客が呼べないレスラーは生き残れないよ。いま、プロレスはビジネスがよくないでしょ？　やっぱり金を取れるレスラーがいなきゃダメよ。

カブキ　スターがいないし、そのスターを盛り立てられる選手がいない。いまの選手は「俺が俺が」ばっかりだから。お客さんの目線を肌で感じながら試合を進めることができないわけ。だから、お客さんも乗っていけない。

——ヒールは自分たちがやられることで、観客を盛り上げるわけですからね。

カブキ　でも、やられて盛り上げるためには、そこまで攻めなきゃいけない。お客さんのフラストレーションが最大になったところで、やられるから盛り上がるんですよ。そこの返しが難しいし、マサさんはそれがうまいんですよ。

——なるほど。

カブキ　だから、試合っていうのはヒールが70パーセントを作ってるわけ。これ以上、お客さんをヒートさせたら危ないなっていうところまで攻めて、そこからベビーフェイスに攻めさせるから爆発する。

——でも、なかなか負けないから、アメリカ人からしたら憎たらしくてしょうがないわけですね。

カブキ　リングサイドで女のお客が、俺たちに向かって「フ○ク・ユー」って言ってくるんだけど、それをわざと「アイ・ラブ・ユー」って返したりしてね（笑）。

——観客の心理をもてあそんで（笑）。

マサ　いやあ、なつかしいね。

カブキ　楽しかったですよね。

マサ　でも、俺たちが最後に会ったの新日本で一緒に仕事したときじゃなかったっけ？

カブキ　いや、それ以降にも会いましたよ。『東スポ』のプロレス大賞で。

マサ　そうだっけ？　行ったかな〜。

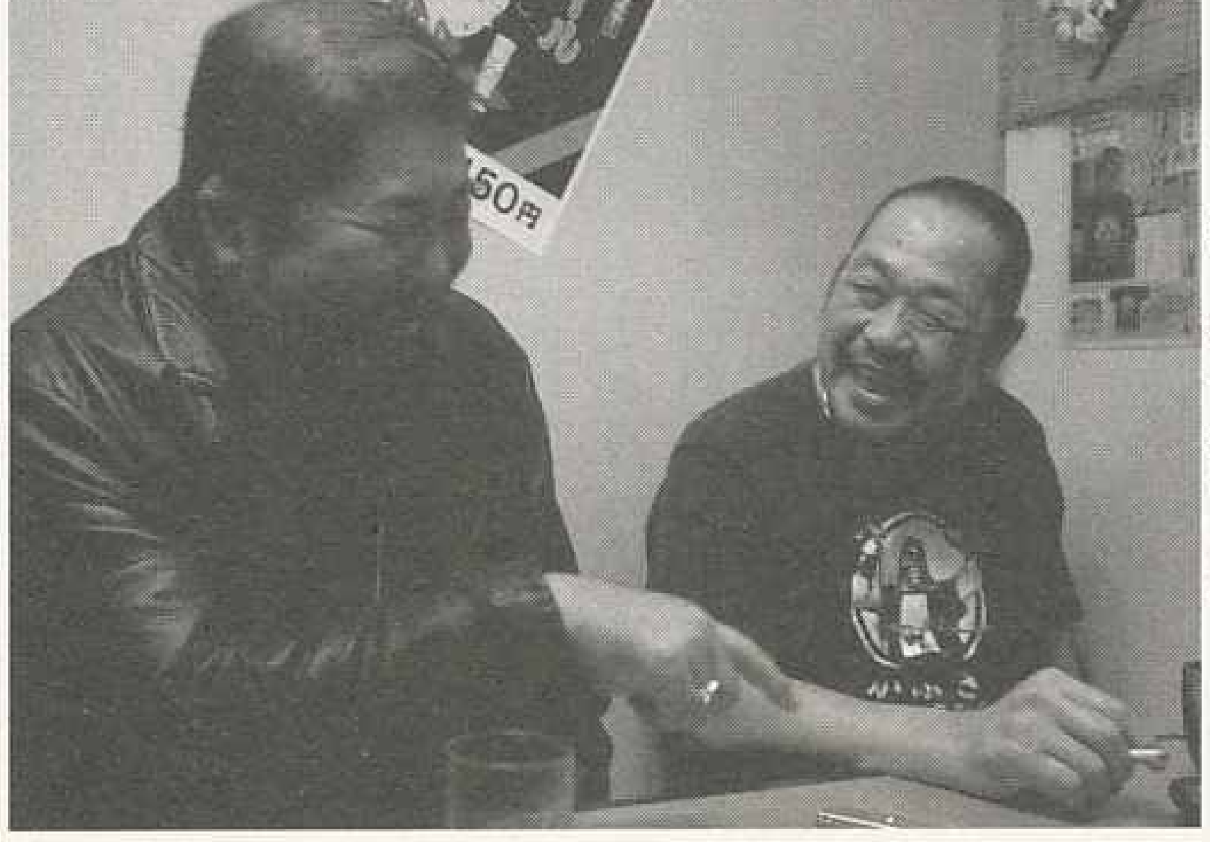
——また振り出しに戻っちゃいました（笑）。

マサ　まあいいや。今度また女房連れて飲みに来るから。

カブキ　ぜひ来てください。マサさんのためにお酒いっぱい用意しておきますから（笑）。

【09年12月14日／都内・『BIG DADDY酒場かぶき・うぃず・ふぁみりぃ』にて収録】

ざ・ぐれーと・かぶき■1948年9月8日、宮崎県出身。本名・米良明久。64年、日本プロレスでデビュー。73年、全日本プロレス入り。アメリカ遠征中の81年にカブキに変身し、ダラス地区で大ブレイク。83年には全日本に凱旋帰国。その後、SWS、WAR、IWAジャパンを経て、98年に現役を引退した。



まさ・さいとう■1942年8月7日、東京都出身。本名・斎藤昌典。64年に東京オリンピック出場。65年に日本プロレスでデビュー。67年からアメリカに渡り、全米各地でトップレスラーとなる。90年にAWA世界王座を奪取。99年に引退し、現在は健介オフィスの選手アドバイザーを務めている。



ULTIMO DRAGON
ウルティモ・ドラゴン

――ライガーさん、今日のテーマはご存知ですか?

ライガー ドラゴン選手のデビュー何周年かを振り返るんでしょ?

ウルティモ 違いますよ(笑)。

――『アメトーーク!』っていうテレビ番組に便乗して、今日は昭和のプロレスファン出身のお二人に、ファンだった頃の話をうかがいたいんですよ。

ライガー ああ、そうだったんだ。全然違ったわ(笑)。

――お二人は子どもの頃からプロレスファンなんですよね?

ライガー 僕は藤波辰巳さんの凱旋帰国(78年)が雑誌の表紙に載ってて、それを見て「カッコいいな、俺もプロレスラーになりたいな」って思ったんですよ。だからファンになるより先に、「プロレスラーになりたい」っていう気持ちから入ったんです。「俺もドラゴンロケットやりてえ」とか。

――へえ、藤波さんみたいなプロレスラーになりたいっていうのが先ですか。

ライガー そうなんですよ。

ウルティモ 僕の場合は最初に観たのは全日本プロレスだったんです。当時、土曜日の8時はドリフ(『8時だヨ! 全員集合』)を観てたんですけど、CMのときたまたまチャンネル変えたらプロレスをやってて、馬場さんが出てたんですけど、正直言って、子どもながらにちょっと心が動かなかったんですよね。

――なかなか馬場さんに憧れる子どもっていないでしょうからね(笑)。

ウルティモ それからしばらくしてから、ある日、友だちがプロレスごっこで、アントニオ猪木のマネをしてたんですよ。それで金曜日にもプロレスをやってるって聞いて、テレビで観てみたらおもしろかったんです。

ライガー 金曜はおもしろかったけど、土曜はおもしろくなかった。そんなこと言っていいのか?(笑)。

――まあ、少年ファンの正直な感想ですからね(笑)。

ウルティモ ただですね、そのあと『ワールドプロレスリング』を観てたら、MSGからの中継で、当時全日本プロレスに上がっていたミル・マスカラスが出てたんですよ。

――海外だから、チャンネルの枠を越えて出てたわけですか。

ウルティモ それで「マスカラスってカッコいいな」って思って、全日本プロレスも見始めたんです。

――それっていつ頃の話ですか?

ウルティモ 小学校3年ぐらいじゃないですかね。1975年ぐらいだったと思います。

ライガー マスカラスがきっかけで全日本を見始めたっていうのは、俺も一緒ですよ。『ゴング』のマスカラス特集読んで興味もって、そのあとアブドーラ・ザ・ブッチャーとテリー・ファンクの抗争にハマるっていう、もうお決まりコースですよ。

――当時のプロレス少年はみんなそんな感じだったんですかね?

ウルティモ 当時のコアなプロレスファンはみんな、日本人は新日本、ガイジンは全日本がいいって思ってましたから。

ライガー ああ、そうかもしんない!

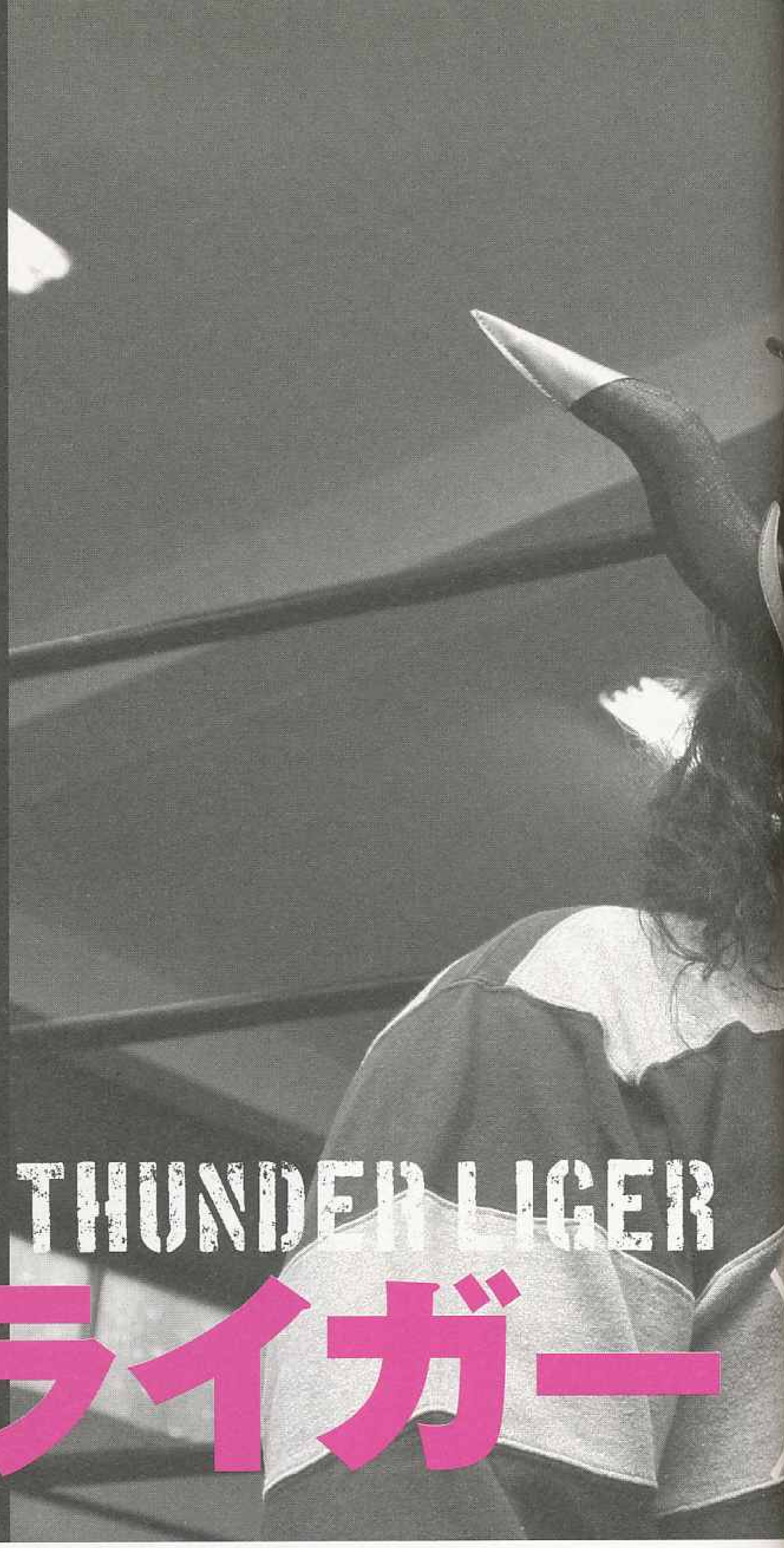
ウルティモ だから『世界最強タッグ』で馬場さんとジャンボ鶴田さんが

「昭和プロレス芸人」を超えた！

プロレスファン出身レスラー頂上対談

昭和プロレスが好きなのは芸人だけじゃない！ “昭和プロレス芸人”ならぬ、プロレスファン出身のプロレスラー、“昭和プロレスファンレスラー”であるライガーとウルティモ・ドラゴンが、ファン時代の秘話をおおいに語る！ プロレスが好きすぎてレスラーになったこの二人のトッププレスラーの青春物語を聞け！

聞き手／堀江ガンツ　撮影／平工幸雄



獣神サンダー・ライガー

JUSHIN THUNDER LIGER

優勝すると、けっこうファンが引いてたんですよ（笑）。

ライガー　おいおい、そういうこと言っていいのかよ（笑）。

ウルティモ　でも、そういう部分ってあったじゃないですか。ザ・ファンクスが馬場＆鶴田組に勝つとみんな喜んで（笑）。

――だから鶴田さんは、ファンクスが嫌いだったらしいですからね、自分より人気がありすぎるって。

ウルティモ　でも、いまになるとわかるんですよね。馬場さんは社長として、人気がある選手をとにかく引っぱり上げようって考えだったっていうのが。もう馬場さんは全日本を旗揚げした時点で全盛期じゃなかったから、自分だけの人気じゃ団体を盛り上げられないってわかってたと思うんですよ。だから、ファンクスの人気が出たら、自分や鶴田さんを脇に回してでもファンクスを軸にシリーズを組んだりして、そのへんはプロレス団体の経営者として、素晴らしいと思いますね。

――いま考えると、馬場さんの経営方針がわかる、と。

ライガー　ドラゴン選手はそんなことまで考えてるんだ。俺なんか、とにかくマスカラス＆ドスカラスの編隊飛行がカッコいい！って感じだったけどな。あのマスクがほしくてね。

――当時のプロレス少年にとって、マスカラスのマスクは憧れのプロレスグッズですよね。

ライガー　マスカラスって試合のたびにオーバーマスクを客席に投げてたじゃん？　あれを取った人がうらやましくてね。日本テレビでやってたマスクプレゼントなんかも、何通ハガキ出したかわかんないよ！　結局、一回も当たんなかったけど。

ウルティモ　僕もマスクプレゼントは、応募しましたね。自分の名前だけじゃなくて、クラスの女の子にも書かせてね（笑）。僕も当たりませんでしたけど。

ライガー　あれは「ホントに当たってた人いるのかなあ？」って思うくらい当たらなかったよ。

ウルティモ　で、しょうがないから紙袋にマスカラスの絵を描いて、それを被ってプロレスごっこやってましたよ（笑）。

ライガー　プロレスごっこはよくやったな〜、砂場とかでね。たぶん女子からは嫌われてただろうな、ドロドロになってやってたからね。

ウルティモ　僕は中学生になると、放課後にトーナメントやってたんですよ。ちゃんとポスター貼って、「なんとかシリーズ」とか書いて。先生に怒られましたね、「そんなの貼るな」って。

ライガー　あたりまえだよ（笑）。

――その頃から、興行プロデュース側に回ってましたか（笑）。

ウルティモ　やってましたね。自分でマッチメイクとか、シリーズの流れを考えて（笑）。

ライガー　へぇ〜っ、すげえ！　さすが闘龍門校長だね、違うわ。

――その後、浅井さんは大のプロレスファンとして、全国にその名を轟かせるわけですよね？

ウルティモ　いや、そこまで大げさじゃなくて、名古屋と東京でちょっと知られてただけですよ。当時はマスカラスやファンクスの追っかけが

いて、その人たちが地元の名古屋に来たとき仲良くなって。逆に僕が東京に行ったときはケアしてもらったりしてたんです。

——追っかけネットワークができあがってたわけですね。

ウルティモ　そう、東京のファンが名古屋に来るとき、「全日本プロレスは今回、○○ホテルに泊まるらしい」とか事前に調べて教えてあげたり。

ライガー　持ちつ持たれつだ、すげえ！　俺は広島だったから、そういうのはなかったな。

ウルティモ　でも、テリー・ファンクの追っかけチアガールっていたじゃないですか？　彼女たちは全国回ってたから、広島なんかも行ってたと思いますよ。

ライガー　ボンボン持って、テリーの応援するんだよな。いたね〜。あの人たち、いまは何やってんだろうね。

——浅井さんはテリー・ファンクの宿舎まで追っかけて、テリーの前でバク宙やったりしてたんですよね？

ウルティモ　やりましたね。

ライガー　なんで！

ウルティモ　「こういうことができるぞ」ってアピールしたくて（笑）。僕は昔、壁に向かって走ってそのまま壁を蹴って宙返りとかできたんですよ。

ライガー　すげえ！　ジャッキー・チェンみたいじゃん！

ウルティモ　学校なんかでもやってたんですけど、友だちに「それ、テリー・ファンクの前でやったらビックリするんじゃない？」って言われて、やってみたんですよね。

ライガー　そりゃいろんな意味でビックリするだろ（笑）。

ウルティモ　で、馬場さんの奥さんに怒られました。

ライガー　ハハハハハハ！　アホや！

ウルティモ　「危ないことするな！」って（笑）。

——で、実際テリーは浅井さんをアメリカに連れていきたいとか言ってたらしいですよね。

ウルティモ　それは直接聞いてないですけど、テリーは僕のことはよく覚えてたみたいですね。このあいだの9月にテリーがメキシコに来たんですけど、「あいつはどこにいるんだ？」って僕のこと探してたらしいですから。

ライガー　それだけ覚えられてるファンってすげえな。

ウルティモ　佐山さんも僕のこと覚えてましたからね。当時一緒に撮った写真を見せたら「えーっ、嘘！　俺、この子よく覚えてるよ」って（笑）。

ライガー　すげえなあ……。高校生の頃から空中殺法ができるっていうのが凄いよ。

ウルティモ　仮面ライダーの着ぐるみショーのバイトしてたから、いろいろできたんですよ。あとはシャリバンの中身とかもやってました。

ライガー　宇宙刑事だ！　懐かしいな〜。俺のほうは高校時代は追っかけとかじゃなくて、プロレスラーになることしか考えてなかったな。

——レスリング部だったんですよね？

ライガー　そう。中学の頃は身長伸ばそうと思って水泳部に入ってたんだけど、伸びないねえ。それで身長が伸びないなら、せめてレスリングの基本ができるように、アマレス部がある高校に進んだんですよ。



ライガーが憧れた、元祖アイドルレスラーにして、ジュニアヘビー級のパイオニアである我らがドラゴン。さわやかな笑顔と鍛え抜かれた肉体が素晴らしい！　うしろには若き日の長州や前田の顔も見える。

——プロレスラーになるために、その高校を選んだんですか（笑）。

ライガー　そう。もうプロレスラーになることしか考えてないから。だから考えにようによっちゃ、ヤバい子でしたよ。高校卒業間近に進路希望のアンケートがあったんですけど「希望職種・プロレスラー」「希望就職

高3のとき「希望就職先・メキシコ」って書いて親が呼び出されたよ

先・メキシコ」って書いたら、親が呼び出しくらいましたもん。

——就職先がメキシコって（笑）。

ライガー　でも、ウチのオカンも危ないから、「いや、本人その気だからいいんじゃないですか？」みたいなこと言って、オカンが先生を説得してくれてね。

——親が言うんじゃしょうがないですよね（笑）。お二人とも、身体の小ささを認識していたからこそ、メキシコを目指そうと思ったわけですよね？

ライガー　当時は入門規定があったんですよ。身長180センチ以上っていうね。で、俺なんて全然足りないじゃん。こりゃダメだな、どうしようって悩んでたときに、「マッハ隼人さんは、身体が小さかったからメキシコに渡ってレスラーになる夢をかなえた」っていうのを雑誌で見て「この方法だ！」って思ってね。

——浅井さんは、そのライガーさんと同じ方法でレスラーになろうと思ったわけですか？

ウルティモ　僕はその前にちゃんと新日本に入門しようと思ったんですよ。でも、履歴書にホントの身長書いたら書類で落とされるだろうなって思って、「身長178センチ」って書いたんですよ。

ライガー　おお、微妙なとこ突くねえ！　やらしいねえ！

——ちょっと足りないけど、まだ伸びるかもしれない（笑）。

ライガー　それで書類OKだった？

ウルティモ　ええ、書類はパスして、入門テストに行ったんですけど、試験官の小鉄さんが、怪訝そうな顔をしながら僕の全身を見てるんですよ（笑）。

ライガー　ハハハハハ！

ウルティモ　「おまえ、178センチないだろ？」って言われて、「……はい」って答えたら「まあ、（テストは）やれ」と。

ライガー　そこが山本さんのいいとこだよね、「180センチないなら帰れ」って言わないもんね。

ウルティモ　でも、身長サバ読むっていうのは、基本ですからね（笑）。

ライガー　でも、俺はドラゴン選手みたいに「178センチ」なんて、微妙なところでごまかす手口は思いつかなかったな〜。だから、入門を断られるのが嫌だから「最初からメキシコ行っちゃえ！」って行っちゃったよ。

ウルティモ　自分は書類さえ通れば、なんとかなるだろうなって思ってました。

——そこまで見越してるのが、浅井さんらしいですよね（笑）。ライガーさんはメキシコ行きに際してコネと

テリーが泊まってる宿舎でバク宙したら元子さんに怒られました（笑）

かはあったんですか？

ライガー　ないよ。向こうにあるメキシコ観光っていう観光会社に、グラン浜田さんの麻雀友だちの方がいらして、その人の家に居候させてもらって。でも、浜田さんには「メキシコなんかでやっていくのは無理だよ。今度、新日本プロレスがメキシコ遠征に来るから、そのとき一応紹介してあげるから」って言われてね。それで、山本さんの許可をもらって、新日本に入ったんだよ。

——浅井さんも小鉄さんの許可をもらって、一時期、新日本道場に入ったんですよね？

ウルティモ　僕は身長が入門基準に満たなかったんですけど、山本さんにお願いして、通いの練習生にさせてもらいましたね。とにかく潜り込むことが大事だと思って。

——そのへんもうまいですよね。正式じゃなくても、入ってしまえばなんとかなるだろうっていう。

ウルティモ　まともにいっても相手してもらえないじゃないですか。だから、とりあえず入って、きっかけを作ろうと思って、「通いでいいですから、練習させてください」ってお願いしたんです。

ライガー　知能犯だよね。情熱があるのはもちろんだけど、考えて行動してるよね。俺はそこまで頭回らなかったもんな。

——浅井さんが練習生になった頃、合宿所のメンバーでは、やっぱりライガーさんが一番目立つ存在でしたか？

ウルティモ　いや、もう一人、船木さんがいて（笑）。

ライガー　ここはドラゴン選手に証人になってもらいたいんだけど、当時っていかにも俺が悪さやってたように言われるけど、一番悪いヤツは船木だからね！

ウルティモ　いや、でもライガーさんが1位だと思いますよ。

ライガー　ウソーッ！　やっぱり俺が一番ってこと？

ウルティモ　ほとんど同率だと思うんですけど、３人悪い人がいたと思うんですよ（笑）。

ライガー　頭文字で言ってやろうか？　Yさん、Fさん、Hさんでしょ。

ウルティモ　そうです（笑）。

ライガー　その３人がみんな悪いのは確かだわ（笑）。でも、風呂に沈めたり、そういう悪さは全部Fさんだからね！

ウルティモ　僕は違うと思います。

——ガハハハハ！

ウルティモ　実行犯はFさんだと思うんですけど、やらせたのはYさんだと思います。

ライガー　ああ、かもしれない……ああ、そうだ。

——それは重罪ですね（笑）。

ウルティモ　で、いつもYさんとFさんが一緒になってて、Hさんは別行動だったんですよ。

ライガー　そう、あいつは我が道をいく悪さをしてたんだよ。要はタッグチームとシングルプレイヤーだよね。

——そのへんはリング上でも反映されてましたね（笑）。Hさんはどんなことをしてたんですか？

ライガー　あいつは人使いが荒いんだよ。よく「渋谷まで買い物行ってこい！」とか、用事を言いつけてね。

ウルティモ　それはYさんも同じだと思います（笑）。

ライガー　あ、そうか。……やりにくいな～（苦笑）。

ウルティモ　Hさんは5つぐらいまとめて頼むんですよ。しかも「これやっとけ」ってメモを渡すんですけど、細かいんですよね。「吉野家の牛丼（六本木交差点店）」とか書いてあって。

ライガー　吉野家の牛丼なんて、どこだって一緒だよ！

ウルティモ　だけどレシートがそこのじゃないと認めないんですよ。あとは、買いに行く場所が、六本木と銀座と吉祥寺とか、絶対に全部は行けない距離なんですよ。

ライガー　こだわりのおもちゃ屋とかあるんだよな。

ウルティモ　そういうときは、練習生がこっそり手分けして行ったり。

ライガー　でも、わけわかんないヤツとかいっぱいいて、おもしろかったよね。

ウルティモ　道場は厳しくてハチャメチャでしたからね。僕が知ってるだけで、20人以上逃げてますからね。

——そういう生活に耐えられないと、プロレスラーにはなれないわけですよね。

ウルティモ　そうですね。あれがあったからよかったんじゃないですか？　当時いた人って、いまだにみんな活躍されてるじゃないですか。普通は辞めるような状況で辞めなかったってことは、それだけプロレスが好きなんだろうし、精神的にもタフなんだと思いますよ。

——浅井さんが通いの練習生をやったあと、メキシコに行くことになったのは、どうしてなんですか？

ウルティモ　小鉄さんに「このまま道場にいてもデビューは難しいだろう」って言われてたんですよ。当時、星野勘太郎さんとか、ライガーさんとか、身体の小さい選手は２～３人いたんですけど、逆に言えば、そういう選手はこれ以上いらないわけじゃないですか。だから「難しいだろう」って言われてたんで、自分から「メキシコに行きたい」って言ったんです。

——なるほど。

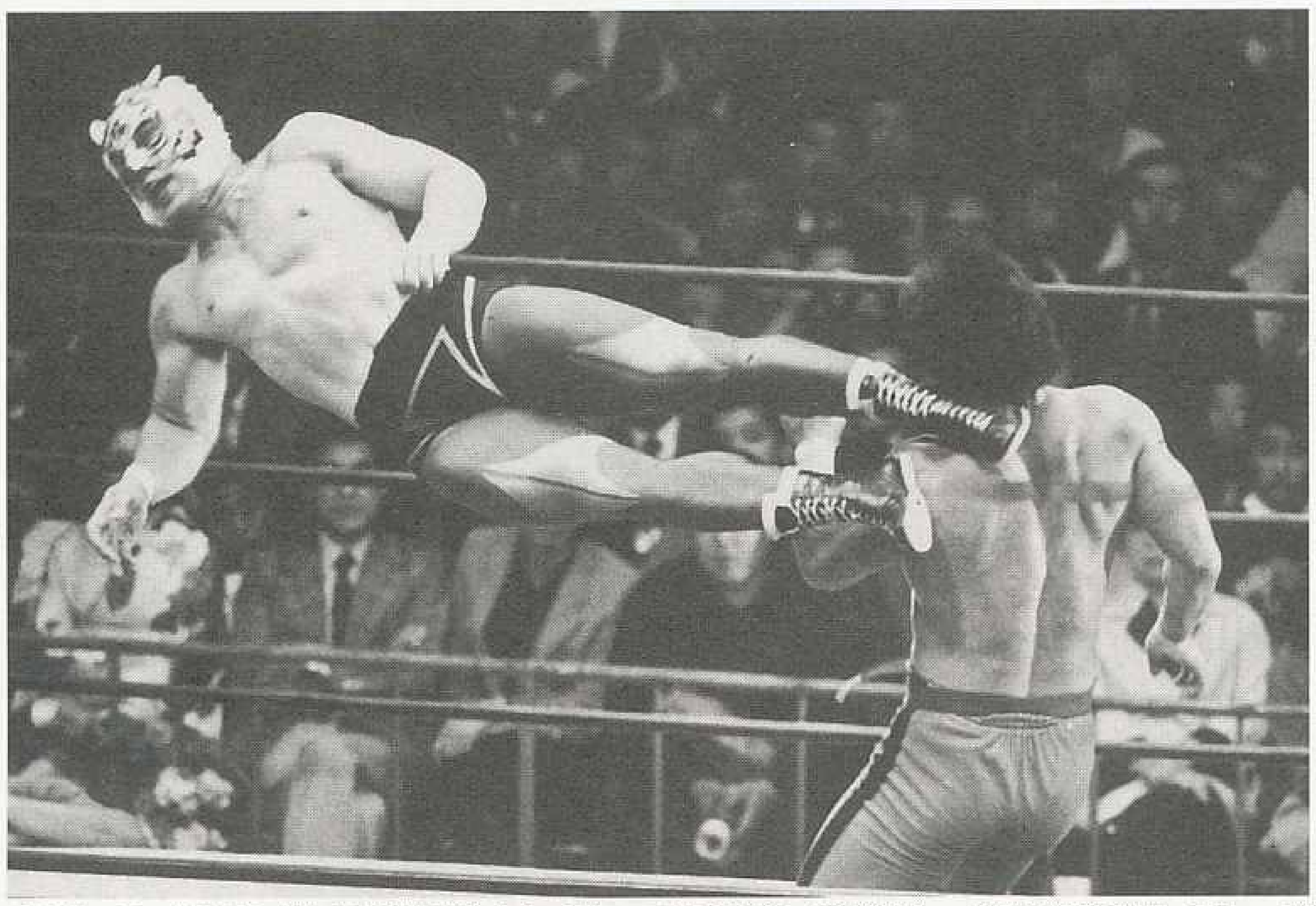
ウルティモ　ちょうど当時、ジャパン女子プロレスが旗揚げされるときで、それに合わせて（UWA代表の）カルロス・マイネスさんが来日するっていう記事を雑誌で読んだんですよ。それで「これしかないだろう」と思って、小鉄さんにお願いして「じゃあ、紹介してやる」ってことで、UWAに行けることになったんです。

ライガー　ちょうど佐野（巧真）さんと畑（浩和＝引退）もメキシコに行くときだったんだよね。

ウルティモ　たしか僕の２カ月ぐらい前にお二人がメキシコに行かれてるんですよ。だから運がよかったんですよね。一人で行ってたら厳しかったと思います。

ライガー　メキシコは6人タッグが多いから、トリオが組めるのは大きいよね。

ウルティモ　だから毎日試合があったんですよ。それで試合を通じてプ



ウルティモ・ドラゴンが少年時代に憧れたタイガーマスクの勇姿。30代後半～40代前半のプロレスラー、総合格闘家のほとんどが、初代タイガーに憧れたと言っても過言ではないだろう。

JUSHIN THUNDER LIGER × ULTIMO DRAGON

ロレスを教えてもらえたし、それがよかったんですよね。

ライガー　でも、3人の中でドラゴン選手は一番人気があったよね。

ウルティモ　やっぱり、それはプッシュしてもらえたからですよ。それで、あとになってマイネスさんに「なんで僕をプッシュしてくれたんですか？」って聞いたら、「あの二人はいずれは日本に帰る人。でも、おまえはずっとメキシコにいる選手だから、プロモーターとしたら残るおまえをプッシュした」って言ってました。あとマイネスさんは、小鉄さんに恩があるってことで、その借りを返したかったとも言ってましたね。

ライガー　試合に穴が開いたとき、引退してるのに小鉄さんが急きょ試合してくれたんだよね。その話は聞いたことある。義理堅いよね。

――その後、お二人は世界のトップレスラーとなるわけですけど、いまでもプロレスファンの気持ちがよみがえることってありますか？

ウルティモ　ありますよ。アメリカのインディーとかたまに出ると、いわゆる昔のビッグネームとか出てたりするじゃないですか。あとはレジェンドのサイン会とか、僕も呼ばれて行ったりするんですけど、そういうとき「うわっ！　マスクド・スーパースターがいるよ！　マスクくれないかな」とか思ったりしますよね。

ライガー　俺なんか、いまでもマスク集めてるからね。あと、このあいだメキシコに行ったらテリー・ファンクが来てて、一緒に写真撮ってファンと一緒に「テリー！　テリー！」ってテリーコールしちゃったからね。

――コールまでしてますか（笑）。

ライガー　もう、子どもの頃の記憶がよみがえるじゃん。握手してもらったら、もう舞い上がっちゃって、恥ずかしいくらい。あとティニブラスがいて「うわっ、ティニブラスでかい！」って思ったり。カネックJr.がいたから「親父いねえかな？」って探したりね。もう完全にファンよ。

ウルティモ　僕も最初にメキシコに行ったときは、雑誌で見た人がいっぱいいて興奮しましたね。アニバルの素顔を見てビックリしたり（笑）。

ライガー　あれはビックリだよ。凄い顔してんだもん。

ウルティモ　メキシコのいかりや長介みたいな顔なんですよね（笑）。

ライガー　フィッシュマンなんてボコボコの顔してるんだよ。マスクあってよかったね、みたいな。

ウルティモ　でも、うれしかったですよ。控室からマスカラスが出てきたり、（イホ・デル・）サントが出てきたり。憧れの選手だらけですから。

ライガー　僕が新日本入ったときは〝金曜8時の人〟が周りにいるじゃないですか、坂口（征二）さんとか藤波さんとか。「すげえ！」とか思って、興奮しましたよね。あと夜になると小林（邦昭）さんとか長州さんが、道場に練習に来るんですよ。それ見て「維新軍だ！」とか思ったり。たまに山崎（一夫）さんが佐山さんの付き人でマスクなんか干したりしてると、「マスクだ！　被りてえ！」って思って。でも見つかったらぶっ殺されるから被らなかったけど。

ウルティモ　僕は昔、コブラのマスクは被りましたよ。乾燥機の中にあったんで（笑）。

――いまやお二人とも完全に逆の立場ですよね？

ライガー　海外に行くと、若いレスラーから「マスク売ってくれ」とか言われるけどね。

ウルティモ　海外はマニアがたくさんいますからね。でも、一番困るのは「あの試合で、こういう技を使っただろ」とか言われることなんですよ。

ライガー　覚えてないっつーの！

ウルティモ　「あの試合では、こういう色のマスク被ってた」とか、「何言ってんだ、こいつ。覚えてるわけないじゃん」って思うんですけど、じつは僕も佐山さんに同じようなこと聞いてるんですよね（笑）。

ライガー　そうなんだよね！

ウルティモ　あとで反省するんですけど、そのときはね、「なんだこいつ？　そんなことわかるわけねえだろ！」って思っちゃうんですよ。

ライガー　「なんでこういうマスクだったんですか？」とか、知らないって。ファンの人は思い入れをもって覚えていてくれてるんだろうけど、俺らにとってマスクやコスチュームって、ある意味消耗品じゃないですか。だから「なぜマスクを変えたのか」って聞かれても、「ボロボロになったからじゃないの？」としか言えないよ（笑）。あのときのマスクの角の角度がどうだったとか、知るかい！

――でも、浅井さんなんかは、タイガーマスクが誰と闘ったときにはどのバージョンのマスクだったとか、全部わかるんじゃないですか？

ウルティモ　もちろん、わかりますよ。自分のマスクはいつどんなの被ってたのかまったく覚えてませんけど（笑）。

ライガー　そんなもんなんだよ（笑）。でも、そういう熱いファンがいてくれるのはありがたいよね。

――では最後に、お二人がプロレスファンとして、一番印象に残ってる試合を教えてもらいたいんですが。

ライガー　そうだなあ……。俺は寝屋川でやった藤波辰巳vsチャボ・ゲレロ戦かな。藤波さんがドラゴンロケットをかわされて、大流血したんですよ。それで血がドボドボーッて落ちるのをテレビで観て、子ども心にショックでね。「藤波死ぬんじゃないか」って心配になったのを、いまでも覚えてますよ。

――大流血しながらコブラツイストを極めたやつですよね？

ライガー　そうそう！　コブラツイストしながら、藤波さんの血がチャボの身体にドボドボーッて流れ落ちるんですよ。あれが一番ですね。

――浅井さんは？

ウルティモ　1試合だけですか？

――絞りきれなければ2～3試合どうぞ。

ウルティモ　まずは、やっぱりアントニオ猪木vsタイガー・ジェット・シン戦じゃないですか？

――いつの猪木vsシンですか？

ウルティモ　アントニオ猪木がブレーンバスターで負けた試合があるんですよ（75年3月13日、広島県体育館）。あのとき「猪木が負けた！」っていうことにビックリしたんですね。あと、シンのアルゼンチンバックブリーカーでギブアップしたこともあって、そのときも驚きました。その2試合ですね。

――意外な結末だからこそ、覚えてるってことですね。

ウルティモ　あとはタイガーマスクの試合ですね。

――これは誰とタイガーの試合っていうのはありますか？

ウルティモ　タイガーの試合はすべてですよ。ザ・タイガー、スーパー・タイガーも含めてすべて素晴らしいと思います。あとはザ・ファンクスvsブッチャー＆シークの「オープンタッグ選手権」とか。たくさんあって1試合は選べませんね。あのときの瞬



馬場&鶴田がトップに君臨した70年代の全日本プロレスのヒトコマ。右が百田光雄とともに"6時半の男"だったミスター林。髪の毛があるケンドー・ナガサキの姿も見える。

間瞬間全部が凄かったと思うんで。

でもいいような試合が45分一本勝負

全日本を観に行って第1試合に百田

問瞬間全部が凄かったと思うんで。
――「あの時代」すべてって感じなんですかね。
ライガー あの時代そのものだよね。
ウルティモ あとべつに感動したわけじゃないのに、妙に覚えてる試合が坂口征二vsジョニー・パワーズ戦。ジョニー・パワーズがNWF北米ヘビーかなんかのベルトをどっかから持ってきて、「坂口がこのベルト獲ることはねえだろうな」って、子ども心に予想してたら、坂口征二が勝っちゃったんですよ。
ライガー 「嘘ぉっ！」って？
ウルティモ 今日は坂口征二負けるだろうなと思ってたら勝って(笑)。あれは妙に覚えてますね。
――「そんなわけのわからないベルトを獲るわけない」と思ってたわけですね。
ライガー 北米なんとかのベルトとか、どこだよっていうね。
――ジョニー・パワーズが新日本に持ってきたNWFヘビーのベルトが重宝されてたから、「こっちのベルトもどうですか？」って感じだったんですかね(笑)。
ウルティモ あと、あんまり大きい声じゃ言えないんですけど、昔、名古屋に新日本プロレスが来ると、ビッグマッチ以外のメインイベントは、だいたい猪木さん絡みの6人タッグだったんですよ。
ライガー 地方興行はだいたいそうだったんだよね。
ウルティモ で、セミファイナルって坂口征二vsクルト・フォン・ヘスとか、坂口征二vsキラー・カール・クラップとか、言葉は悪いですけど、どうでもいいような試合が45分一本勝負で組まれてるんですよね(笑)。で、必ずアトミックドロップと、ジャンピングニーアタックやって、最後は逆エビかなんかで勝つんですよ。
――腰が高い逆エビですよね(笑)。
ウルティモ そうそうそう。僕らはそういう試合を、子どもの頃に何回も観てるんで、だいたいションベンタイムになるんですよ(笑)。
ライガー ションベンタイムってあったよね(笑)。
ウルティモ 会場に入ってまずパンフレットで本日の対戦カードを見て、「じゃあ、今日はここがションベンタイム」って確認したりしてね(笑)。これが全日本プロレスになると、やっぱりメインは馬場さんの6人タッグで、第1試合は必ず百田光雄vsミスター林だったんですよ。
ライガー いっつもそうなんだよ！
ウルティモ でも、同じ時期の新日本プロレスの第1試合は、平田淳二vs前田明とかが組まれてるんですよ。
ライガー ジョージ高野とか、活きのいい若手同士の激しい試合だよね。
ウルティモ でも、全日本は第1試合からいきなり急所つかんだりとか。で、最後は必ず逆さ押さえ込みなんですよ。それがしばらくすると、百田光雄vs越中詩郎になるんですけど、試合内容はたいして変わらない、みたいな(笑)。
――来る日も来る日も逆さ押さえ込みで(笑)。
ウルティモ だから前座は断然、新日本プロレスのほうがおもしろかったんですよね。
ライガー ウチのカミさんなんか昔、全日本を観に行って第1試合に百田光雄さん、第2試合にお兄さんの百田光浩さんが出てたんだって。そしたら2試合連続で百田だから、デカい声で「また百田ぁ？」って言ったんだって。そしたらリング上から百田さんが「ごめんね」って言ったらしい(笑)。
ウルティモ すいません、これはすべてファンとして言ってるだけなんで。
ライガー そうだよ！ 批判してるわけじゃなくて、子どもの頃はこうだったって話だから。
ウルティモ いまは「ションベンタイムだ」とか思ってませんよ。それを最後に一言入れておかないと(笑)。
――でも、少年ファン時代のそういう細かいことって、やたら覚えてたりしますよね。
ウルティモ 覚えてますね。パンフレット見て、勝敗予想したり(笑)。
ライガー それやった！
ウルティモ 地方興行の試合なんて、何度も観てると9割5分ぐらいの確率で当たるんですよ。
ライガー ほとんどわかっちゃうんだよね。で、たまに外れると「嘘ぉ！」って驚いて。
ウルティモ そのたまに外れて覚えてるのが、坂口征二vsジョニー・パワーズ戦なんですよ(笑)。
ライガー ハハハハハ！ これファンの頃の話だよ、いまじゃないよ。
ウルティモ いまは違います！
――ま、そういう経験がのちのマッチメイクに活きてるってことなんでしょうね(笑)。
【09年12月21日／都内・新日本プロレス道場にて収録】

子どもの頃はセミの坂口さんの試合がションベンタイムでしたね(笑)

俺はいまでもマスク集めてるからねもう完全にファンみたいなもんよ



じゅうしん・さんだー・らいがー■1989年4月24日、永井豪宅出身(公式プロフィールより)。新日本の若手有望株だった山田恵一がリバプールの風になったあと、89年に東京ドームでデビュー。翌年IWGPジュニアヘビー級王座を奪取後、幾度となく同王座に君臨。ジュニアの祭典「スーパーJカップ」を開催するなど、プロデューサーとしても活躍。170cm、95kg。

JUSHIN THUNDER LIGER × ULTIMO DRAGON

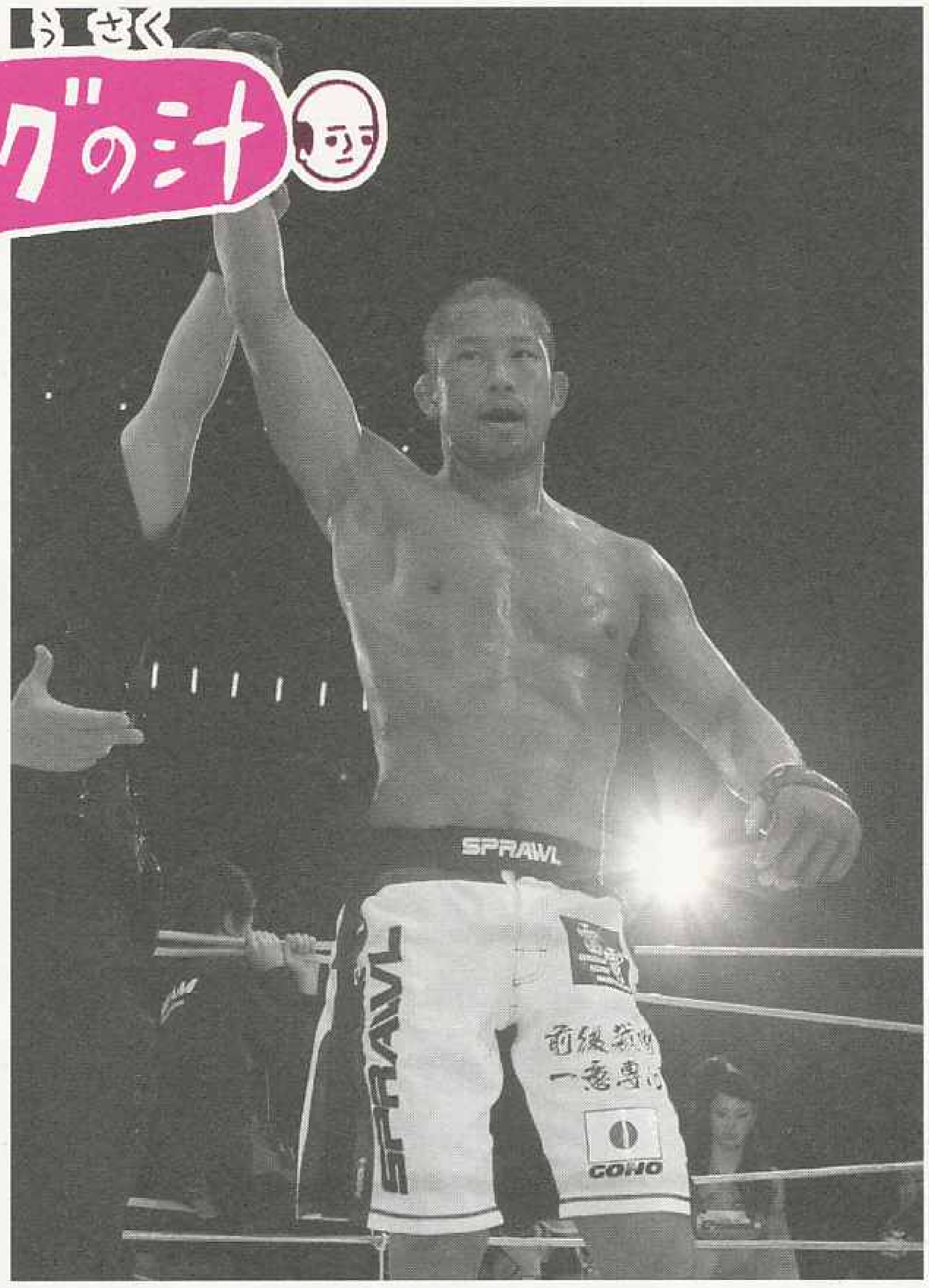
うるてぃも・どらごん■1966年12月12日、愛知県出身。本名・浅井嘉浩。87年メキシコでデビュー。91年にウルティモ・ドラゴンに変身。メキシコCMLL、アメリカWCW、日本ではWARと世界を股にかけて活躍。97年にプロレスラー養成所「闘龍門」をメキシコに設立。数多くのレスラーを輩出した名伯楽でもある。172cm、85kg。

第50回

五味UFC参戦がうれしい

花くまゆうさく

豆リングの汁



正月UFCを観たら、ひさしぶりにダスティン・ヘイズレットが出てうれしくなるも、寝技見せる前にKO負けされて残念。次回はデミアン・マイアが楽しみ。

五味UFC参戦もうれしいニュース！ 厳しいだろうけど、いまのUFCに上がる姿を想像するとワクワクする。

青木も行けばいいのにね。「青木は好きじゃないけど試合はおもしろいから、寝技強い人とやったらどうなるか、UFCとか行ったらどうなるか、そういうのは観たいし興味ある」って人がほとんどじゃないのかな。

マッハが日本人に極められタップは、インパクトあるし寂しくもあるが、郷野サイドから見ると感動的。フジテレビの・PRIDE撤退で地上波登場が流れてから数年、こうして大晦日ゴールデンタイムに氣志團と入場してマッハから一本勝ちなんて感動的じゃないですか。

昔、後楽園ホールで一番初めに「俺だけの郷野」とつぶやくように叫んだあの人は、どんな想いだったでしょうか。



Hanakuma Yusaku
◎こないだのDEEPの帯谷も凄かったね

金ちゃんのどこまでやるの？

●第42回● "金ちゃん"違いの巻

『kamipro』読者の皆さん、あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

昨年はなんとか大晦日の『Dynamite!!』に出て、田村（潔司）さんと闘いたかったんだけど、夢かなわず、またしてもテレビ観戦になってしまった金原です（笑）。

まあ、これで田村潔司vs菊田早苗戦なんかが組まれてたりしたら、俺もイライラしてしょうがなかったんだろうけど、結局、田村さんも菊田も『Dynamite!!』には出なかったから、まあ、仕方ないかって思ってるけどね。DREAM vs『戦極』の対抗戦の中じゃ試合も組みづらいだろうし。

それより年末は〝人違い〟の連続で大変だったよ。

DREAM vs『戦極』の対抗戦で、ZSTの金原正徳くんがKIDと闘ったじゃん？ あのカードが発表されて以降、いろんな人から「大晦日、KIDと闘うんですね。頑張ってください」って言われたんだよ（苦笑）。

KIDと闘うのは、金原は金原でも金原弘光じゃないって！

格闘技に詳しい人だったら、俺とKIDじゃ階級だって全然違うし、別の「金原」だってすぐわかるんだろうけど、そんなに詳しくない人は階級の違いなんてわからないだろうからね。

だからさ、しまいには親とか弟からも「KIDとやるの？」って聞かれてさ。息子の名前くらい覚えとけよ！ って思うんだけどね（笑）。

それで大晦日の前は「KIDとやるんですか？」って聞かれて、年が明けたあとはさ、いろんな知り合いとかに「新聞のラテ欄に『KID vs金原』って書いてあるから、おまえが出ると思ってテレビ観てたのに、出なかったじゃん」とか言われたんだよ。もう、俺のせいじゃないのに返答に困ったよ〜。

その金原正徳くんとはさ、1年前ぐらいにDEEPの道場で会っててね。「君が〝ZSTの金ちゃん〟か。頑張ってね」なんて激励したりしてたんだよ。それが、『戦極』でチャンピオンになって、大晦日にはKIDにも勝って、あれよあれよという間に、俺より有名になっちゃったからね。

今度は俺のほうが〝元リングスの金ちゃん〟とか、〝元Uインターの金ちゃん〟とか呼ばれるようになっちゃうよ。だからこれからはリングネームを「元祖・金原」に変えようかな（笑）。同じ金原としてあやかりたいよ。

でも、大晦日のKID戦はいい試合だったと思うよ。打撃を効かせて、KIDからタックルも取ってるしね。俺も彼に負けないように、元祖・金原として頑張りたいね。

だから、今年の目標は大晦日の『Dynamite!!』に出場して勝つこと。毎年のことだけど、これを実現させたいね。で、もし出られなかったら、裏番組の『ガキの使い』に出てみたいね。俺はあの番組が大好きなんだよ。だから去年の大晦日は、『Dynamite!!』観ながら、『ガキの使い』を観て、しかも『紅白』に俺が大ファンの永ちゃん（矢沢永吉）が出るっていうから、それも観てって感じで大変だったよ。

そして『ガキの使い』の罰ゲームの中でも、俺は蝶野さんのビンタが一番好きなんだよね。だから、今度は俺も蝶野さんみたいに、罰ゲーム役として出てみたいな。ちょうど〝タイキック〟っていうのがいるじゃん？ あの役で出てみたいよ。そんな仕事もお待ちしてま〜す（笑）。

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中！
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

kamipro books

驚ガク! 衝ゲキ!! kamipro booksシリーズ!
死闘インタビューの歴史的目撃者になれ!!

魔王 秋山成勲 二つの祖国を持つ男



**秋山成勲なのか
チユ・ソンフンなのか——。**

2006年12月31日大晦日『Dynamite!!』秋山成勲vs桜庭和志戦で発生したクリーム塗布事件。この一件以降、秋山は日本では悪質な反則選手、片や韓国では悲劇の元・在日韓国人と、評価が真っ二つに分かれた。本書籍は秋山成勲が、柔道界での挫折ののち、総合格闘技家としてデビューして"魔王"と呼ばれる怪物に至るまでを検証するノンフィクションである。

B6変型判 264ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

PRIDE機密ファイル 封印された30の計画



**ついにその秘密のベールを解禁!!
PRIDE幻の超極秘プロジェクト!!**

★高田vsヒクソンの前座に前田日明登場!?★長州力、橋本真也、船木誠勝の参戦計画★ホイスvsケアー消滅の計画★PRIDEが小錦獲得に動いた!?★"皇帝"ヒョードルを二度破った男 ほか

その消滅から早2年——世界最高峰のリングに封印された30の計画を発掘! さらに青木真也、三崎和雄ら6大インタビューも同時収録!

B6変型判 292ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

新日本プロレス学習帳



**"業界の盟主"の魅力を
凝縮したインタビュー12連発!**

★鈴木みのる&獣神サンダー・ライガー★小林邦昭★平田淳嗣★金本浩二★山本小鉄★新倉史祐★田中秀和★中西学★天山広吉&金原弘光★マサ斎藤★永田裕志★中邑真輔

『kamipro』に掲載された新日育ちのレスラー&関係者のインタビューが一冊に! これを読めば老舗団体の過去・現在・未来がまるわかり!

B6変型判 320ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

八百長★野郎



**ミスター高橋本から7年……
"呪いなき"時代のプロレス再入門書!!**

★マッスル坂井★大槻ケンヂ★菊地成孔★森達也★杉作J太郎★ミスター高橋★菊池孝★高木三四郎★ハチミツ二郎★鶴見亜門★プロレス業界初"台本"全文掲載!

カミングアウト当事者から元ファンの知識人まで総動員してプロレスを再考! "プロレスの向こう側、『マッスル』"の世界に迫る!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

生前追悼 ターザン山本!



**え、ターザンが死んだ!?
90年代プロレスを徹底検証!**

★浅草キッド★いしかわじゅん★堀辺正史★更級四郎★松本晴夫★杉山頴男★谷川貞治★山口日昇★金沢克彦★市瀬英俊★小島和宏★菊地成孔★Oka-Chang★原タコヤキ君★椎名基樹 ほか

『週刊プロレス』編集長として辣腕を振るった山本さんの人生を通して、90年代プロレスブーム、はたまたプロレスという生き様を振り返る!

B6変型判 304ページ
定価=1,470円(本体1,400円+税)

プロレス狂の詩 夕焼地獄流離篇



**プロレス狂がシビれる
凄玉たちのインタビュー集!**

★ジェラルド・ゴルドー★後藤達俊★小畑千代★ザ・グレート・サスケ×韮澤潤一郎★中島らも★大槻ケンヂ★シーザー武志★ダニー・ホッジ★高山善廣×金原弘光★真樹日佐夫×三池崇史

メインストリームからはみ出さずにはいられなかったファイターや、リング内外の裏表を凝視してきた関係者へのインタビューがテンコ盛り!

B6変型判 304ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

U.W.F.変態新書



**ダメな大人たちへ捧げる
"変態"とUWFの晩餐!**

★UWF★前田日明★船木誠勝★高田延彦★桜庭和志★ターザン山本!★キン肉マン★PRIDE★プロレス★変態とは何か?(菊地成孔スペシャルインタビュー)★変態解説

プロレス界の一大潮流となったUWF。そのUWFに人生を学び、人生を狂わされた変態的プロレスファンたちが、UWF神話を語り倒す!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

吉田豪のセメント!! スーパースター列伝 パート1



**吉田豪インタビュー11連発!!
インタビュー本の最濃傑作!**

★ストロング小林★阿修羅原★康芳夫★倉持隆夫★サムソン・クツワダ★猪木快守★イーデス・ハンソン★田中健一★小川宏★鶴見五郎★田代まさし

プロインタビュアーの吉田豪が、『紙のプロレスRADICAL』誌上で聞き手を務めたロングインタビューの一部を完全徹底再録!!

B6変型判 344ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

底なし沼 活字プロレスの哲人 井上義啓 一周忌追善本



**井上義啓とは底が丸見えの
底なし沼である——!!**

★『週刊ファイト』&『SRS・DX』激筆再録★『猪木は死ぬか』、『不在証明あるいは猪木へのレクイエム』★新間寿★夢枕獏★ターザン山本&吉田豪★『kamipro』ラスト喫茶店トーク ほか

"活字プロレスの父"井上義啓氏の一周忌追悼本!! 氏を偲ぶインタビューや、人生最後の旅模様を振り返るエピソードも収録!

B6変型判 312ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

紙の破壊王 ぼくらが愛した橋本真也 爆勝証言集



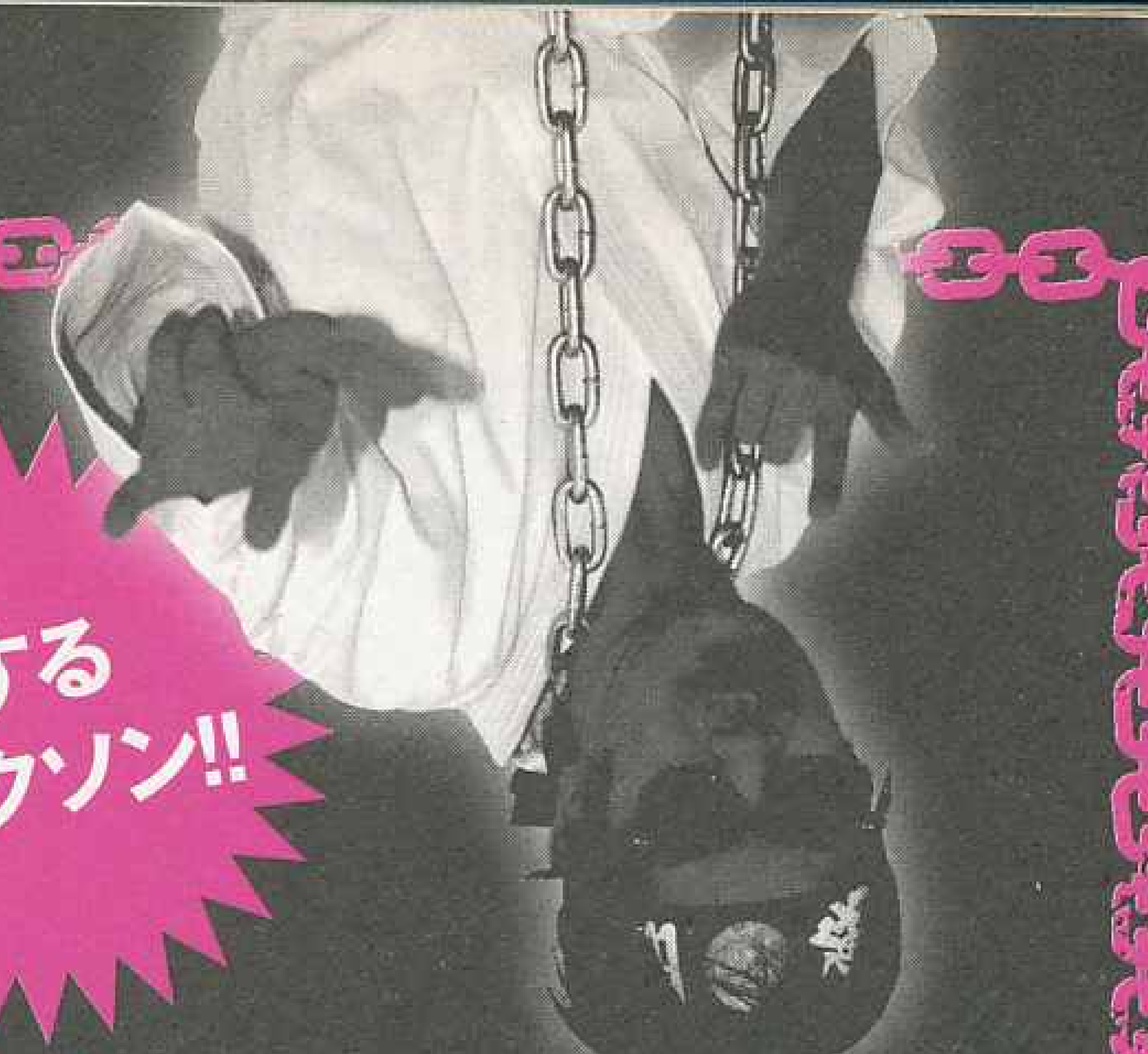
**破壊王の三回忌追善本!!
泣けて笑えるエピソード満載!!**

★破壊王ファミリー★天山広吉★西村修★山田千景(獣神サンダー・ライガー夫人)★馳浩★藤波辰爾★田中秀和★ケビン・ランデルマン★三浦大輔(横浜ベイスターズ投手)★折鶴兄弟 ほか

破壊王の原点である新日関係者が語ったエピソードが盛りだくさん! みのもけんじ書き下ろし『紙のプロレス・スターウォーズ』も収録!

B6変型判 304ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

enterbrain 発行/株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売/株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/



どうするジャクソン!!

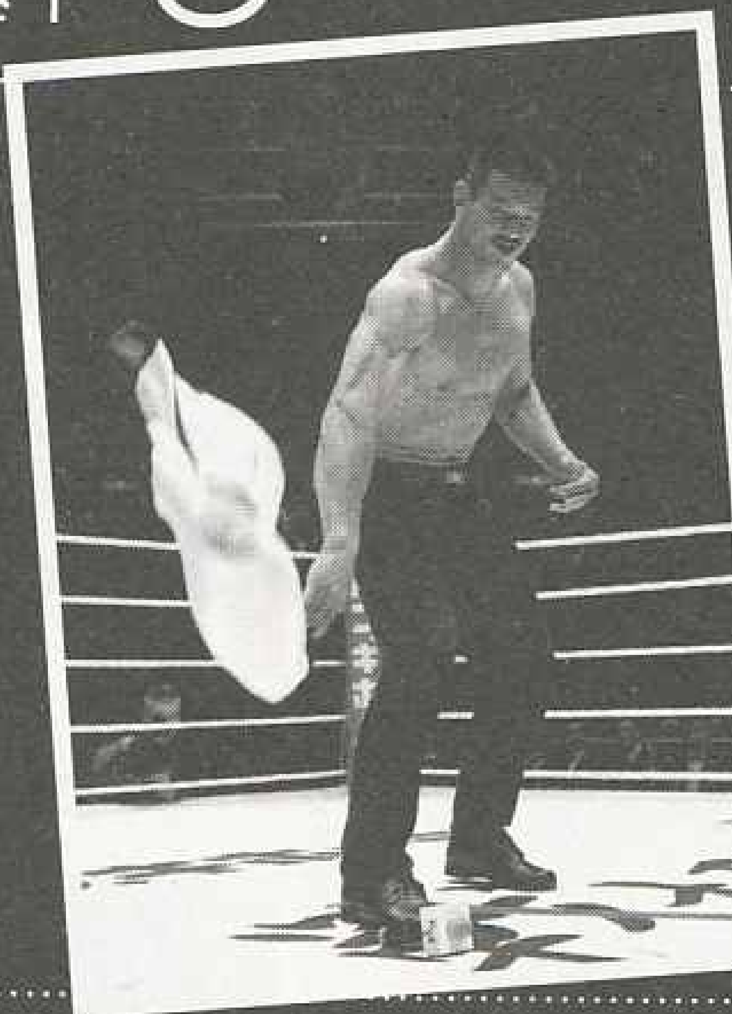
142号へのお便り紹介

証言・吉田秀彦の長南亮インタビューがおもしろかった。同世代の髙阪さん、髙橋さんと練習し、弱音を吐かず追い込んでいる、と。長南選手から見ると、気持ちも入っているというのでなかなか試合が決まらない仲間と団結できなかったのは苦しかったんだろうと思わされました。
【福島県・紺野春樹さん・会社員・30歳】

リュウ・トクリ（以下R） そんなことより、オレがスーパーハルク決勝でミノワマンとソクジュに花束を渡したことは知っているよな？ 本当はこの吉田と石井に渡したかったんだ！ どうだい？ そっちのほうがよかったって思うよな？

『アメトーーク！』特集ページがよかった。大好きな番組ですし、プロレス芸人のコーナーは一番好きな企画なので。
【青森県・菅原豪浩さん・フリーター・歳23】

R 『アメトーーク！』なんて番組は中国では放送されてないから、よくわからないな。それよりオレの鍛え上げたこのマッスルを見てくれよ！（シャツを破り捨てて）。



菊地成孔インタビューがよかった。褉、バブルなど、なるほどなと思った。キーワード満載で読み応えありました。
【東京都・中郡守夫さん・会社員・29歳】

R キーワードといえば「ニーハオ・ジャパン」だ。え？ 似たようなフレーズで首を絞められた米国人がいたって？ オレはそんな油断はしないから安心してくれ。

遅ればせながら「新年おめでとうございます」。それはそうと、「重大発表」のほうが気になります。『週刊ゴング』という悪い前例があるので「よもや……」と思ってしまいました。何はともあれ、今年も『kamipro』楽しみにしております。
【栃木県・稲葉修さん・会社員・36歳】

R フッフッフッ。このページを見てもらえばわかるとおり、「重大発表」というのはこのリュウ・トクリ様の読者ページ占拠のことに決まってるじゃないか。いったい、オレがなんのために日本に上陸したと思ってるんだ？

永田さんと金原さん対談がおもしろかった。まさかこんな対談が実現するとは……。昔からは考えられない。当時二人は舌戦をしていたはず。14年の歳月が二人を丸くしたかと思う。
【山口県・松江巧さん・自衛官・31歳】

R 詳しいことはよくわからないが、この二人は喧嘩していたけどいまではいい友だちということだな。つまり、オレと『戦極』みたいな信頼関係があるってことだな。

石井慧のインタビュー記事がよかった。石井選手はおもしろい格闘家だし、読んで笑えることとか書いてあっておもしろかったから。
【福井県・大平一さん・無職・32歳】

R 驚いたことに、石井の復帰戦をこのリュウ・トクリ様が闘うんじゃないかと噂されているそうじゃないか。なるほどな。確かにそれは名案だ。オレはいつでも準備万端だ！（マッスルポーズで）。

小佐野景浩さんのインタビューに出てくるWAR武井社長の話がなつかしかったです。あの頃はフロントの争いも熱かったのですね。
【兵庫県・春名義行さん・会社員・43歳】

R フロントの争いといえば、オレが自慢の筋肉を見せるか見せないかで大晦日興行のフロント陣が揉めたというのはオレの夢かい？ まぁ、オレの筋肉はいつだって準備できているから、いつでもゴーサインを出してくれよ！

『新日本vsUインターの真実』がおもしろかった。14年前の緊張がよみがえってきました。試合後、「俺はUインターの選手たちに何もしてあげられないよ……」と半泣きで、友だちに言ったのを思い出しました(笑)。
【大阪府・磯部彰さん・会社員・38歳】

R オレは戦極軍になんでもしてあげられたのに、お呼びがかからなかったのが残念でしょうがないよ。次はミノワマンでもサップでも、カンセコでもOKだ。得意のタックルで倒してやるから期待してくれよ！

『スマッシュ』酒井代表のインタビューを読むと、『ハッスル』の山口社長がいかに非常識な人かよくわかりました。ただ、「古木を魔裟斗にしたい」「シウバと闘わせたい」とか、酒井代表も充分非常識だと思います。あと、頑張れKG♥
【福島県・毒柴さん・笑師・38歳】

R スマッシュだかハッスルだか、日本って国はよくわからないことばかりやってるな。どちらにせよ、オレの筋肉美が必要になったらいつでもオファーしてくれ。

石岡沙織×杉山しずかがおもしろかった。ビジュアルが優れていて、それなりに強いので。この二人の試合は地上波で流すべき!!
【香川県・佐々木輝さん・自営業・41歳】

R 石岡と杉山という美女二人はオレもチェックしたぜ。どちらかというと美女は中国のほうが多いと思っていたが、この二人は確かに美しい。ただ、オレが何度も来日するからって、二人との仲を疑ったりしないでくれよ(照)。



142号 おもしろかった記事 RANKING

NO.1 吉田秀彦特集

NO.2 永田裕志×金原弘光

NO.3 女子プロ変態座談会

NO.4 俺たちの対抗戦座談会

NO.5 『アメトーーク!』特集

『kamipro』のランキングと言われても、オレにはさっぱりわからない。でも、オレのことはこれを機会によーく覚えてくれよ! あらためて自己紹介しよう。中国出身の身長208センチ、体重125キロ、鍛え上げた肉体が自慢の29歳だ。レスリングの北京オリンピック代表というのももちろん重要だ。

衝撃ショット!

サーフィン取材に大満足!? 坂田亘のご機嫌ショット



リュウ　オレはよく知らないが、この写真はどうやら『kamipro』と仲良しのセンパイという人が送ってくれたらしいぞ。筋肉ひとすじのオレからすれば、サーフィンなんてよくわからないが、嬉しかったならいいじゃないか。なんならオレが花束贈呈してやろうかい？

目撃情報が止まらない!

★年末の『Dynamite!!』を見に行ったのですが、席に座っていると、なんと大巨人が目の前に立っているではありませんか。よく見ると『kamipro』でクローズアップされていたリュウ・トクリだったのでビックリ! さらにそのリュウ・トクリが数時間後にリングに上がっていったのでこれまた驚きました。ボク的にはリュウ・トクリのファンなので嬉しかったのですが、あの花束贈呈は非常に謎でした。
【東京都・埼玉ダイナマイトさん】

リュウ　なんだよ、オレを見かけたんなら声をかけてくれればいいじゃないか。日本語だからわからないんじゃないかって？ でも、オレに好意を持ってくれてることぐらいわかるぜ。服を脱ぎ捨てるパフォーマンスで君を大満足させてやるからな!

新春初夢企画

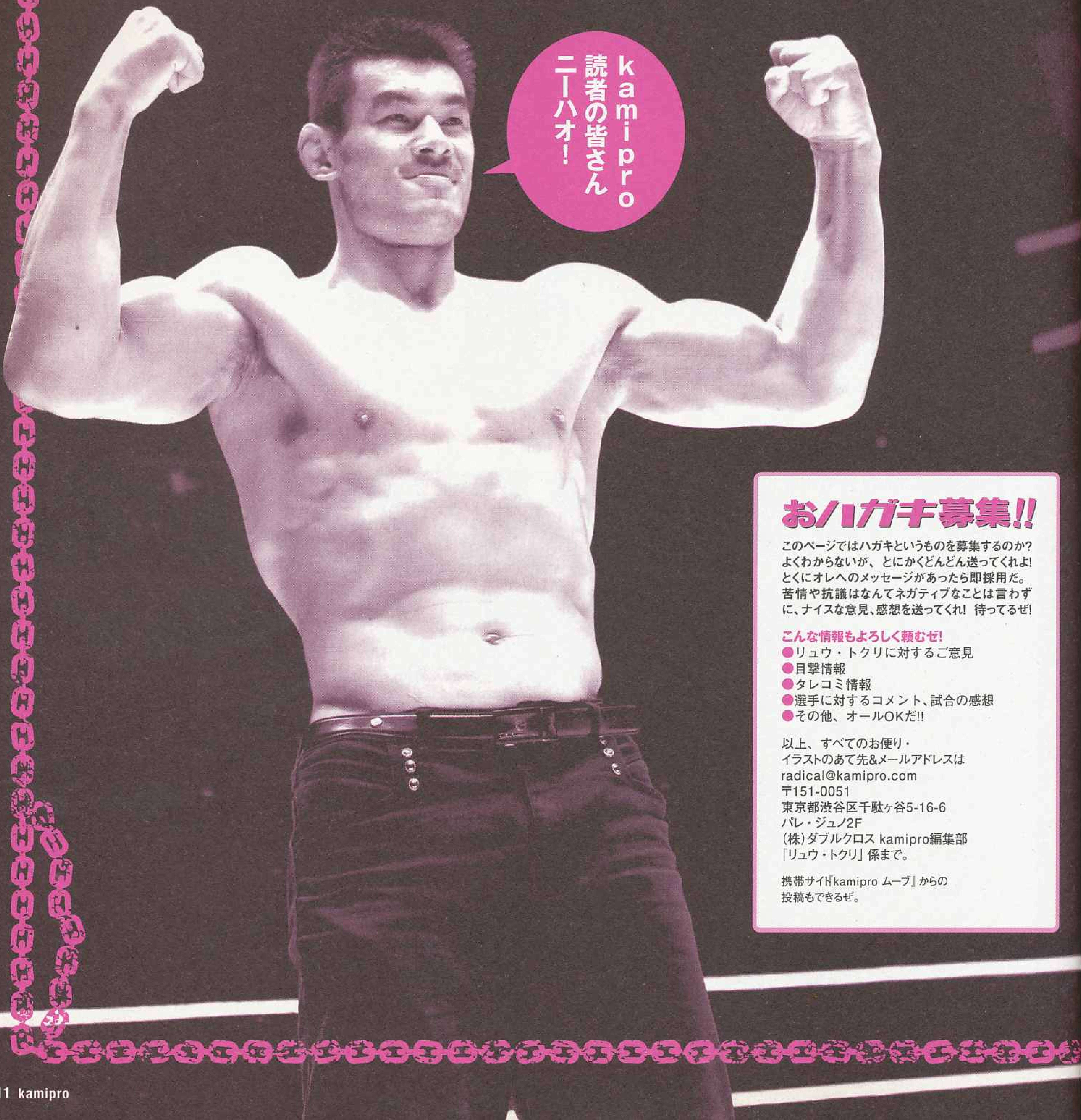
kamiproの重大発表はコレだった!?

もしも

リュウ・トクリが読者ペイジを占拠したら!?

※あくまでも妄想のページです

ニーハオ! オレの名前はリュウ・トクリ。『kamipro Special 2010 FEBRUARY』ではオレは阿修羅チョロというヤツの夢の中にいたが、今回も誰かの夢の中なのかい!? しかし、そんなことはおかまいなしだ。今日はスーパーハルク決勝戦の花束贈呈ではなく、『kamipro』の読者ページを占拠しに来たぜ。オレの筋肉美とともに楽しんでいってくれよ! (マッスルポーズで)。



おハガキ募集!!

このページではハガキというものを募集するのか? よくわからないが、とにかくどんどん送ってくれよ! とくにオレへのメッセージがあったら即採用だ。苦情や抗議はなんてネガティブなことは言わずに、ナイスな意見、感想を送ってくれ! 待ってるぜ!

こんな情報もよろしく頼むぜ!

- リュウ・トクリに対するご意見
- 目撃情報
- タレコミ情報
- 選手に対するコメント、試合の感想
- その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・
イラストのあて先&メールアドレスは
radical@kamipro.com
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6
パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス kamipro編集部
「リュウ・トクリ」係まで。

携帯サイト『kamipro ムーブ』からの
投稿もできるぜ。

椎名基樹のサムライ二味

第45回

『I LOVE 泉浩』

『まぐろ、まぐろ、うるせーよ！』

いや〜好きだわ、泉浩。大晦日の少し前に、サムライTVで、遅ればせながら、『戦極』での彼のデビュー戦を観たのだが、そのときから、すでにこのナイス・ルッキンなファイターに惹かれる自分がいたのだった。

花輪和一先生の漫画『刑務所の中』に、物語の主役である先生が（一応、書きますが、この作品は先生の服役の体験を漫画化したものです）ある受刑者に対して心の中で「相変わらず、暗いなあ。この刑務所で一番好きだな」と呟くシーンがある。筆者も泉浩が醸し出す暗〜い雰囲気、50年前の人のようなネイティブ・ジャパニーズなルックス、プロ格闘家転向にあたり母親が口もきいてくれないというエピソードなど、アンチヒーローな要素にぐいぐい心を奪われてしまった。

このキャラは作ろうとして作れるものではない。明るさ、華麗さ、顔の良さ、スタイルの良さなど、一般的にスター性の要素とされるものを、脱ぎたての靴下のごとく、すべて裏返しにしたような泉浩。しかしそれは、スター性がないのではなく、スターの要素をすべて逆さまに兼ね備えているのだ。要するに類い稀なキャラクターである。

これで強くなれば、スーパースターになる可能性充分だ。しかし、ただ強くなるだけでは、難しいかもしれないし、プロとして失格というもの（↑エラソー）。

そこで提案したいのだが、入場テーマ曲を中島みゆきの『ファイト！』にしたらどーだろう？

閉塞した田舎を捨てて東京に出てくる、この曲の主人公は、親に裏切り者扱いにされ「負けたら即漁師」を迫られている、泉浩の境遇にピッタリだし、なんと言っても「ヨイトマケの歌」と並んで、悪戯な物語が歌われていると思いつつも、泣けてしまう名曲だ。観客の心をぐっとつかむこと間違いなしである。

そして、ここからがポイントなのだが『ファイト！』前奏のドラムオンリーのパートで、ゲーリー・グッドリッジがクイーンの『ウィ・ウィル・ロック・ユー』に乗ってそうするように、リズムに合わせて、胸を叩いて腕を突き上げるパフォーマンスで入場したらどーだろう。泉浩の『ウィ・ウィル・ロック・ユー』ならぬ、『アイ・ウィル・マグロック・ユー（おまえをマグロにしてやろーか!?）』なパフォーマンスが、観客の心を鷲づかみにする光景が目に浮かぶ！

勝つか負けるか
それはわからない
それでもとにかく闘いの
出場通知を抱きしめて
泉は海になりました〜

やっぱいいわ〜。ほかの歌詞も、聴けば聴くほど泉のことを歌っているように聴こえてならない！（泉は中卒でもないし、力ずくで男の思うままになる女でもないが）。泉さん、ご一考お願いします。

と、泉LOVEをアピールしたところで、世の格闘技ファンの問題は我らがバカサバイバーの、腕折り＆アイ・ウィル・フ○ック・ユーである。新年の迎えようという、めでたいときに、お祝いムードをブチ壊す、あんな狂気のシーンをお茶の間に届けるなんて、もう最高！　KYな冗談って大好き！

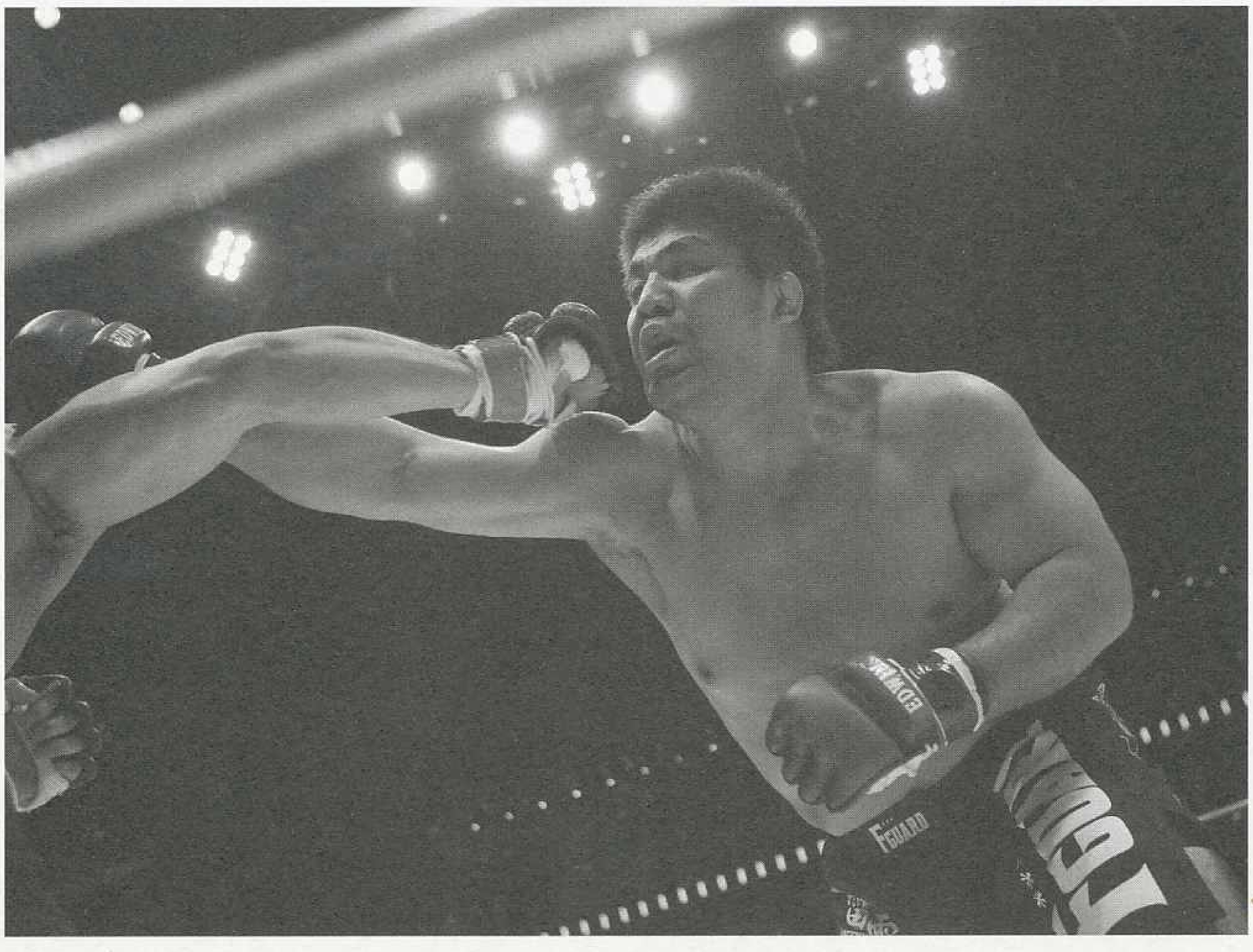
きっと、一緒にすごす恋人も友だちもおらず、故郷にも帰れずに、東京の一人暮らしの部屋で、寂しくあのシーンを観ていた者は、万歳して喜んだに違いない！　そして、来年は是非、クリスマスにも、人の腕を折って、フ○ック・ユーするところが見たい！　と、TBSにお礼＆リクエストの電話をしたはずだ！　間違いない！

それにしても、リング上からのフ○ックサインといえば、ほかに思い当たるのは、青木の盟友、足関十段・今成がリトアニアでセコンドに向けてやったヤツだ。あのとき会場にいた観客の怒りったらなかった。まったく非常識なソウルメイトの二人である。どちらも「あっぱれ！」。世間的には「喝！」らしいが。

最後に文句。筆者はPPV観戦であったが、なんすか、あの試合中ずっと画面に出ている、CG＆選手写真は！　馬鹿なんですか？　カネ返せ、ですよ。

あと、三崎vsマヌーフ、止めるの早いよ。「選手の安全が……」なんて言うのだろうけど、MMAのストップのタイミングってのは、もう確立されていて、筆者たちのような重度のファンは、見事なストップには「ビューティフル・タイミング」なんて言って喜んでいるレベルなのだよ。「グラウンドで数発殴られてもポジションを変える動作ができなかったらストップ」に決まってるでしょ。

武田幸三の引退試合で止めるのが遅いと批判されたと思ったら、やることが極端というのか、一貫性がないというのか。そういう姿勢こそが、選手の安全を脅かすのだ。大晦日らしいコンテンツとして、止めるのを早くしたと言うのかもしれないが、腕は折れちゃってるわけだし。そんなにファミリー用のコンテンツにしたいなら、格闘技なんてやめちまえー！



『Dynamite!!〜勇気のチカラ2009〜』では『戦極』vsDREAMの対抗戦として柴田勝頼と対戦した泉。会場には泉を漁師にさせたいナイス・ルッキンな泉パパも登場し、試合中には何度もビジョンにその姿が映し出された。MMA2戦目にして“負けたら即漁師”的な一戦に挑んだ泉は判定ながらも柴田に勝利し、嬉しい初勝利！



プロレス界新春スペシャル

船木誠勝 ザ・グレート・サスケ "超常"対談

2012年まで、また生きるぞ!?

09年はプロレス界に復帰し、全日本マットで大活躍した船木誠勝。
同じく09年はミッキー・ローク主演の『レスラー』に影響を受けまくり、
コスチュームから必殺技までランディ化が止まらなかったザ・グレート・サスケ。
『kamipro』でもおなじみの二人のトップレスラーが2010年ならぬ
"2012年"問題をはじめ、超常現象について語りまくり! あ、UFO!!

聞き手／阿修羅チョロ 撮影／梅木麗子

ザ・グレート・サスケ

UFO、宇宙人とかネッシーは全部いてほしいと思っています

——今回は新春一発目ということで、船木さんとサスケさんのビッグ対談を組ませていただきました！

船木 サスケ選手って、まだ議員なんですか？

サスケ いえ、もう辞めました（笑）。あっ、そうだ！ 議員で思い出しました。じつは昨日（12月28日）、前田日明さんにお会いしたんですよ。

船木 あ、そうですか。前田さん、議員になるんですよね？

サスケ あ、よくご存知で！

船木 いや、今日のヤフーのニュースで出てました。

——サスケさんは昨日はモッツ出版の忘年会に出席されてたとか？

サスケ そうなんです。前田さんもいらしてたんですけど、その場で出馬を宣言したんですよ。新聞からマスコミからいっぱいいる中で宣言して「この話はまだ内緒にしてください」っておっしゃっていて、そんなの無理だろうと思ってたんですけど、案の定、漏れましたね（笑）。

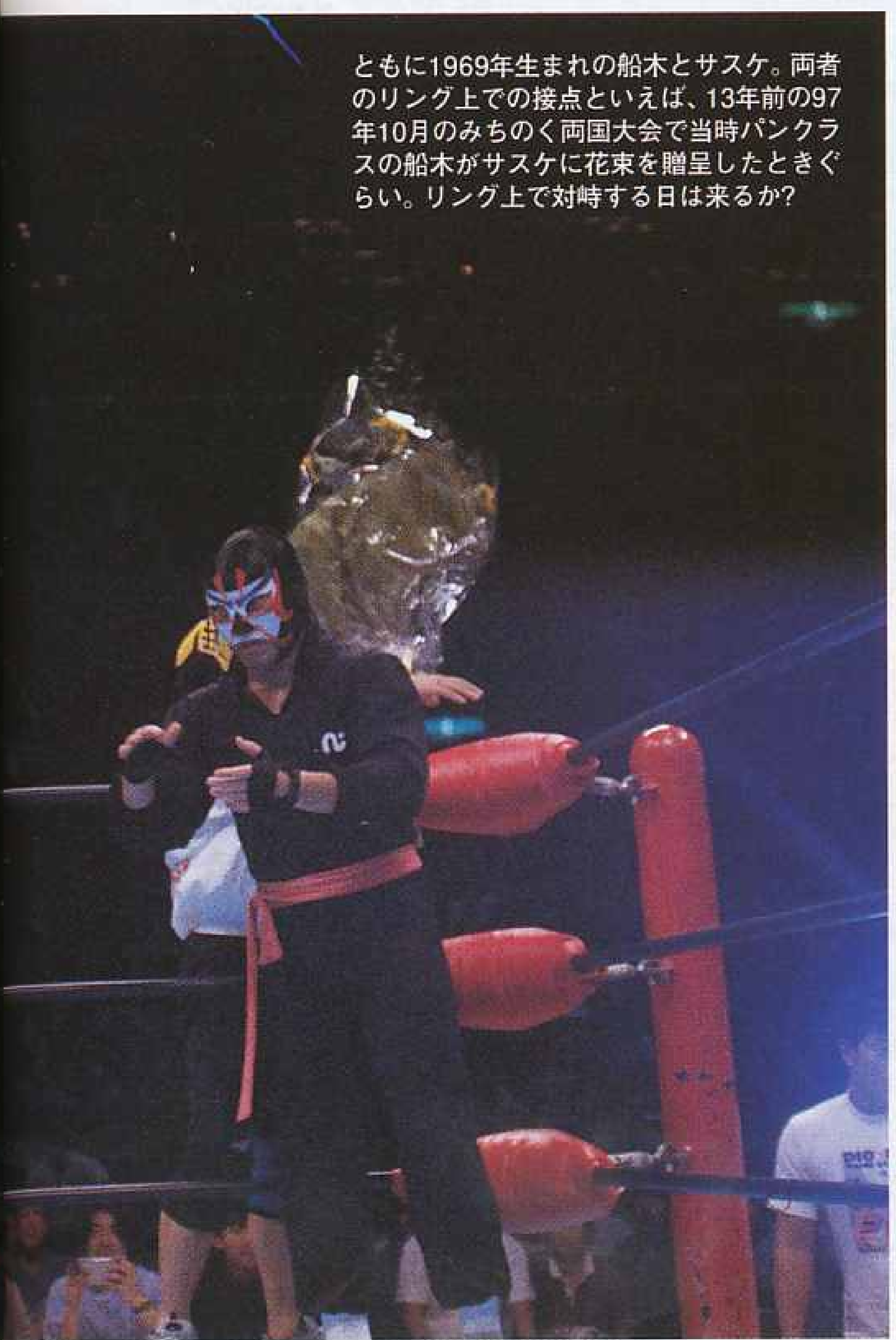
船木 漏れてましたね（笑）。でも、似合ってんじゃないですか。

サスケ ええ。最後の落ちつきどころを見つけられたみたいな感じがしますよね。……前田さん話はこれぐらいにして、まずはどんな話題からいきましょうか？

——まずはお二人の接点から話していただければ、と。異色の顔合わせではあると思いますので。

船木 意外と接点はあるんですよ。二人とも東北出身で1969年生まれ、あとはサスケ選手は新日本プロレス学校出身なんですよね。

サスケ はい。



ともに1969年生まれの船木とサスケ。両者のリング上での接点といえば、13年前の97年10月のみちのく両国大会で当時パンクラスの船木がサスケに花束を贈呈したときぐらい。リング上で対峙する日は来るか？

船木 浅井（嘉浩）とはどういう関係になるんですか？

サスケ 浅井さんは新日本を辞められてメキシコに行かれたんですけど、帰国されて、ユニバーサルレスリング連盟というところが旗揚げしたときに初めて出会いまして。

船木 そうなんですか。でも、いまプロレス界で浅井の弟子がけっこういるなぁと思ってビックリしてて。TARU選手や近藤（修司）選手なんかもそうなんですよね。いろんなところに種まいてんだなぁって。

サスケ いまの日本のプロレス界は浅井イズム満開ですからね。船木さんは浅井さんのことは新日本時代から知ってるんですよね？

船木 凄くよく知ってます。自分がデビューして1～2年ぐらいのときに、仮の練習生というか、通いで練習に来てたんですよ。だから、毎日会ってましたね。たしか、浅井はプロレス学校のインストラクターかなんかもやってたと思うんですよ。

サスケ それはちょっと違うんですよ。インストラクターをやっていたのは（中島）半蔵というレスラーですね。浅井さんがもういなくなってからプロレス学校ができたという、そういう流れですね。

船木 そうなんですね。浅井は急にいなくなったら突然メキシコでデビューして。有名になりましたよね。

サスケ そうですよねぇ。いまやメキシコで国民的英雄ですからね。知らない人はいないですから。

船木 えっ、ウルティモ・ドラゴンってそんなに有名なんですか。

サスケ そうなんですよ。あのキャラクターが大当たりしちゃって。ミル・マスカラスよりもウルティモ・ドラゴンのほうが有名ですから。

船木 え～、マスカラスよりも有名なんですか⁉

サスケ そうなんですよ。日本ではマスカラスのほうが有名だと思われがちなんですけど、じつはメキシコではマスカラスっていうのはちょっと落ちるんです。エル・サント親子がトップで、ウルティモ・ドラゴンはオクタゴンと並ぶ感じで2番目のスーパースターですね。

船木 それは知りませんでした。そう考えるとよかったですよね、新日本でデビューしなくて（笑）。

——新日本でデビューした船木さんも2009年はプロレス界に復帰されて、いろいろと印象深い一年だったんじゃないですか。

船木 そうですね。自分にとって転機の年になりましたね。

サスケ 私にとっても2009年というのは転機の年でしたね。

船木 何かあったんですか？

——09年に公開されたミッキー・ローク主演の『レスラー』に必要以上に感化されてしまったというか（笑）。

サスケ されましたねぇ。もうコスチュームもまったく同じにしまして、得意技の「ラムジャム」も拝借させてもらって、「私がミッキー・ロークだ」っていうぐらいの勢いで（笑）。

船木 じゃあリングネームもミッキー・ロークに変えたんですか？（笑）。

サスケ いやいや、さすがにそこまではできませんので、リングネームはそのままなんですけど（笑）。

船木 ミッキー・ロークにしちゃ怒られますからね（笑）。でも、あの映画はおもしろかったですね。

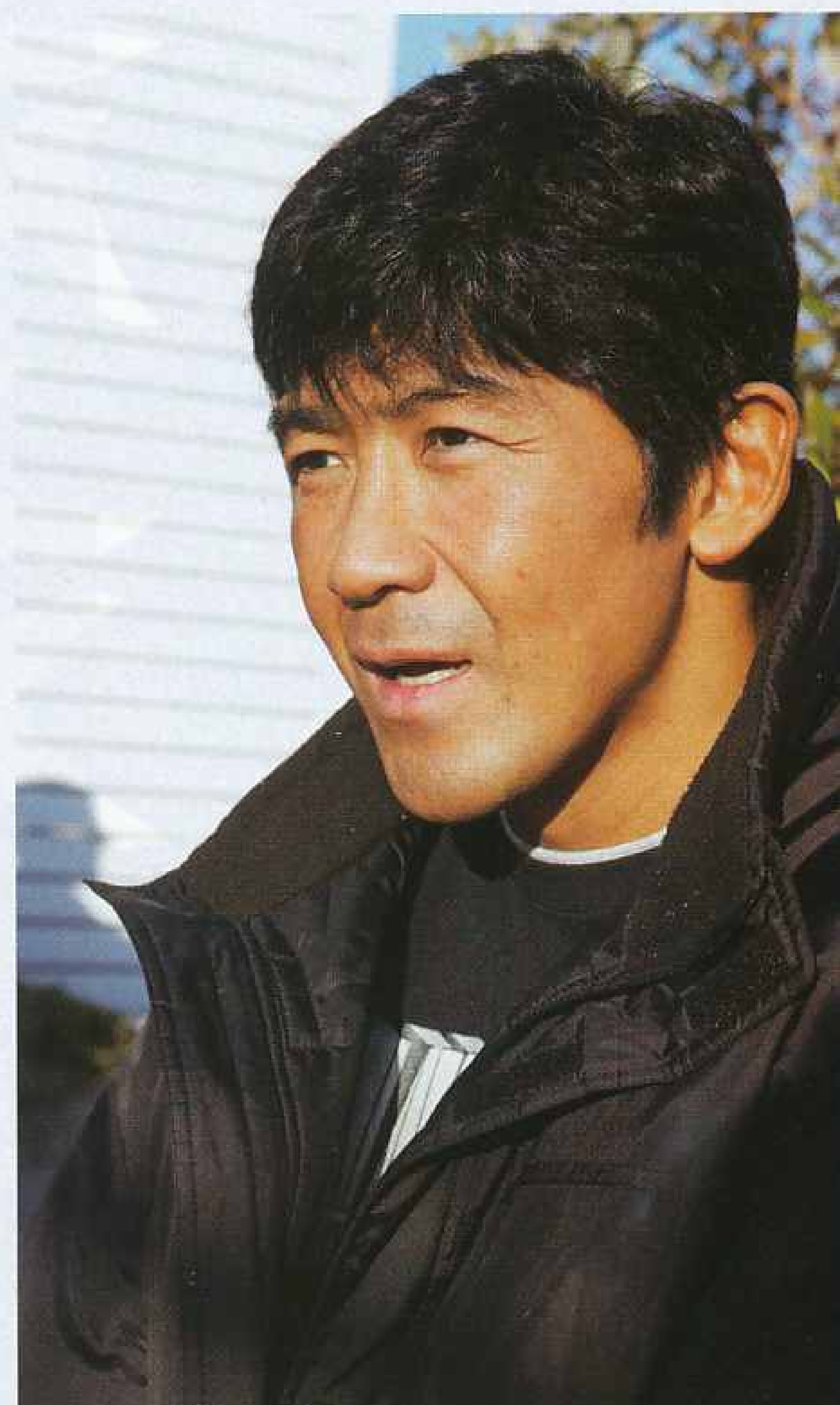
サスケ おもしろかったですねぇ！ 映画としてもよくできてますし、またそのディテールの細かさというのも、プロレス業界人が観たら「あ～、あるある！」っていう連続で。

船木 そうですよね。あの息づかいとかプロレスラーですよね。ガイジンでああいうヤツいますからね（笑）。

サスケ いますよね。あの映画でミッキー・ロークがお総菜屋で働いてたじゃないですか？

船木 サスケ選手もお総菜屋で働いてたんですか？（笑）。

サスケ いえ、私はマクドナルドで働いていたことがありまして。その当時、MASAみちのくというリン



グネームで素顔でやってまして、やっぱりバイト中にファンの方に気づ

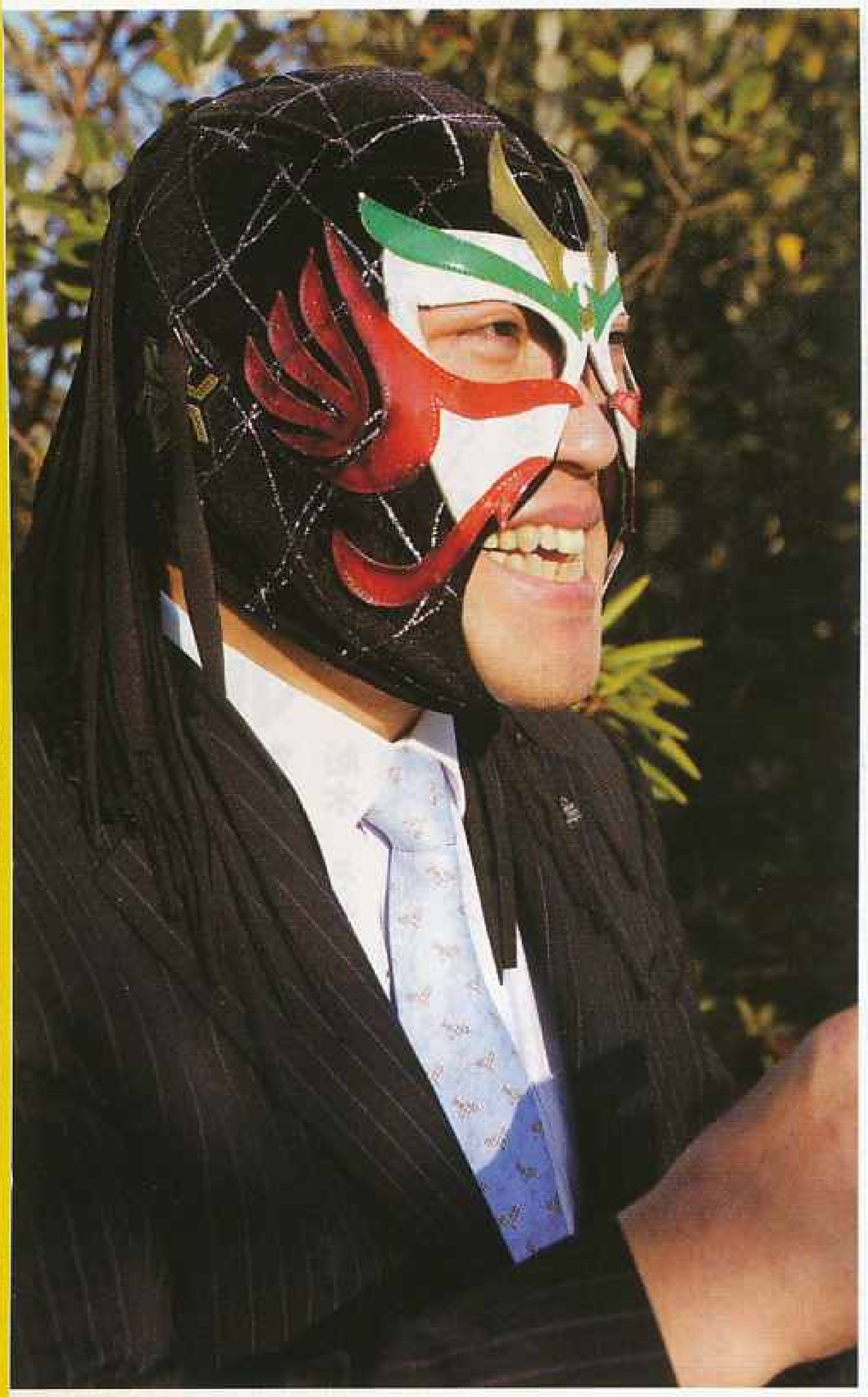


船木 あ、そうですか（笑）。あの映画はそれこそ99年よりも前にひらめ

そういった話題も興味はあります？

船木 大好きですね！（キッパリ）。

素晴らしい！ 私もUFO関連はいろいろと研究してるんですよ



グネームで素顔でやってまして、やっぱりバイト中にファンの方に気づかれて、「うるせえ、こっち来んな！」みたいにブチ切れたことがあって。

船木　『レスラー』と一緒ですね（笑）。でも、内容的にいまだから出せるような感じの映画ですよね。

サスケ　そうかもしれませんね。でも、プロレスには確かにああいう方法論もあるとは思うんですけど、日本のプロレスのように、また違う方法論もあるんだよということは言いたいんですよね。

船木　じゃあ、日本版の『レスラー』を作ったらどうなんですかね？

サスケ　いいですねぇ。それはぜひ、船木さんが監督で！

船木　なんでですか。サスケ選手がやってくださいよ（笑）。

サスケ　いやいやいや、わたくしは船木さんが撮られた『プロフェシー』という映画を『ｋａｍｉｐｒｏ』のイベントで観させてもらって、それから船木監督の大ファンですから！

船木　あ、観られたんですか（微笑）。でも、いまはプロレスに集中してるんで無理ですね、映画は。

サスケ　それはちょっと残念ですね。

船木　それに映画に関しては、撮りたいと思う題材がないと撮っちゃいけないと思いますね。あと、それを仕事にするとなると、どうしても自分で作りたくない映画も作らなきゃいけなくなっちゃいますから。

サスケ　なるほど！

船木　そうなっちゃうと、だんだんボケてくるような気がして。最初に「映画を撮ってみたい」っていう気持ちからだいぶズレてくると思うんで。なので、やるんだったら芸術のままいきたいですね。……撮るようなことがあったらですけど（笑）。

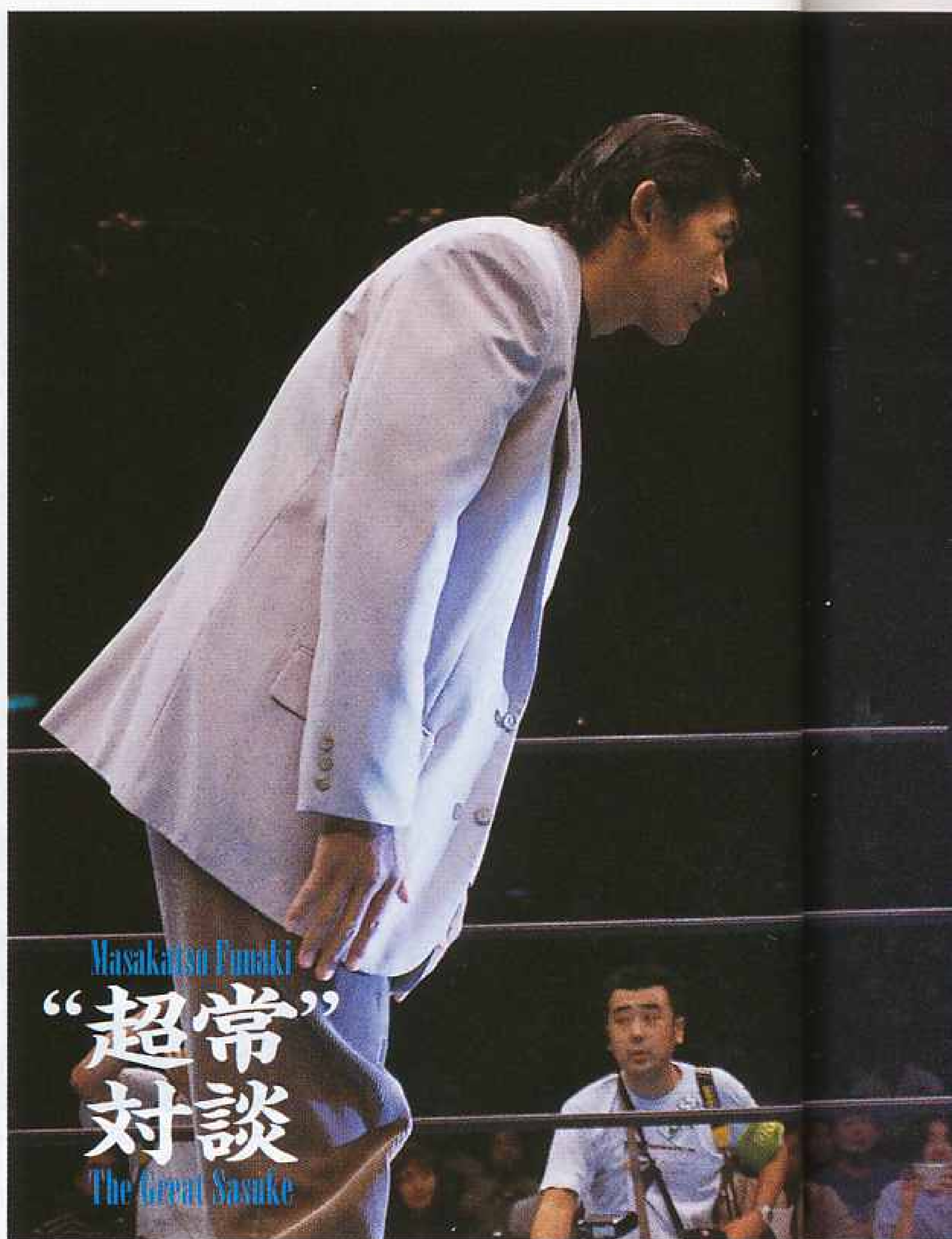
サスケ　でも、過去に何本も撮られてるんですよね？

船木　まあ、それもひらめきだけですよ（笑）。

サスケ　脚本ができあがってる作品も何本かあるみたいで。

船木　何本かありますね。ただそれは「撮ってみませんか？」っていう話があったんで作っちゃっただけで。自分としては脚本ができた時点で自分の頭の中で画ができちゃうんで、「もういいかな」って、そこで完結してしまうというか。

サスケ　なるほど（笑）。でも『プロフェシー』はホントに衝撃でしたね。



船木誠勝×ザグ

船木　あ、そうですか（笑）。あの映画はそれこそ99年よりも前にひらめいて書いたんですけど、撮ったのが2002年とか全然あとなんですよ。

サスケ　あ、そうなんですか。

船木　なので、そんなに衝撃もないと思うんですけど。99年よりも前に公開してたら、おもしろかったんじゃないですかね。

サスケ　99年のノストラダムスの大予言がテーマになってますからね。

船木　そうなんですよ。もう2〜3時間ぐらいで書いちゃった作品で。

サスケ　まあでも、1999年は何も起こりませんでしたけど、今度は2012年問題というのが世間を騒がしてまして。

船木　ええ、ありますよね。

サスケ　ノストラダムスの大予言の1999年というのは、じつは2012年のことなんじゃないかと都合よく解釈する研究家もいるんですよ。

船木　でも、ノストラダムスの大予言のときは凄くイヤでしたね。

サスケ　と言いますと？

船木　「あと何年」とかなったときに、「なんで、こんなに追い詰めるようなことを書くのかな」って思ったんですけども。結局、何もなくてよかったなっていう話ですよね。

サスケ　結果的には何もなかったんですけど、2012年は何かありそうな気もしてるんですよ。

船木　そんな予感がするんですか。

サスケ　ビンビン感じてますね。ほかにも好きで私はいろいろと研究したりもしてるんですよ。

――サスケさんはUFO研究家という肩書きもありますが、船木さんもそういった話題も興味はあります？

船木　大好きですね！（キッパリ）。

サスケ　素晴らしい！

船木　UFO、宇宙人とかネッシーや幽霊とか、ああいうのは全部いてほしいと思ってますね。いてほしいんですけど全然遭遇しないんで（笑）。

サスケ　そうなんですか。私はUFOは2回見てるんですよ。

船木　どのへんで見たんですか？

サスケ　盛岡で一回、もう一回は一関です。どちらも岩手県内ですね。

船木　へぇ〜。でも、そろそろちゃんと出てきてほしいですよね。

サスケ　じつはですね、09年の11月27日にアメリカのオバマ大統領が、宇宙人・UFO問題に関して、アメリカがいま隠し持ってるすべての情報を公開しますということを事前にうたってたんですよ。

船木　え、そうなんですか？

サスケ　ところがというか、さすがにというか、アメリカ政府の側近から阻止されまして。ただ、どうしてもいまの世の中インターネットで出ちゃうもんですから。もう世界中から「なんで公開しないんだ？」って大騒ぎになっちゃいまして。それで、月が明けて12月1日ぐらいですかね。

船木　つい最近じゃないですか？

サスケ　最近です。イギリスの政府がですね、それまでイギリスにはUFO調査部門というセクションがあったんですけど、そのセクションを閉鎖します、予算も削りますという発表をしたんですね。で、「UFOはやはり実在しないものでした」というような発表をしたんですね。

船木　へぇ〜、それはどういう意味

があるんですか?

サスケ　UFO情報っていうのは、いつもまずい情報が出るとマイナス情報を被せちゃうんですね。で、おもしろいのはイギリスとアメリカっていうのは表裏一体なんで、そういうことができるんですけど、フランスというのはまた独自の視点に立ってますんで、フランス政府はマイペースであいかわらずUFOを法的に予算を作って、研究してるんですね。

船木　国によって違うんですね。前にブッシュ大統領のうしろで宇宙人が映ってたとかありましたよね?

サスケ　有名な映像がありますね。

船木　あれって凄いですよね? たしか窓に映ってるんですよ。窓に映ってるっていうことは前にいるのか、窓の奥にいるのか。よくわかんないですけど、確かにいるんですよ。デカい目の宇宙人みたいなのが(笑)。

サスケ　そうなんですよね。

船木　見たいですね、宇宙人。願望としては絶対いてほしいし、それこそ2012年ですか?

サスケ　いろんな説があるんですが、2012年が一番有力ですね。

船木　2012年に出てきてもらって、その支配下で人間が生活をしてもいいと思ってるんですよ。

サスケ　おぉ、いいですねぇ、いいですねぇ!(うれしそうに)。

船木　それこそ地球の温暖化どうのこうのあるじゃないですか? 全部ああいうのも、じつはちゃんと操作されてるんじゃないかって思ったりもしますし。べつに宇宙人の下で生きてもいいかなって思いますね。

サスケ　さすが、船木さんですねぇ。

船木　アハハハハ! でも、UFOって音がしないじゃないですか?

サスケ　はい! そうなんです!

船木　それも凄いなって思うんですよ。普通に飛行機だったら何千メーター上空を飛んでても凄い音がするじゃないですか? それなのにUFOは全然音をさせないで、急に消えたりとかっていうのはモノ凄い乗り物だと思うんですよね。

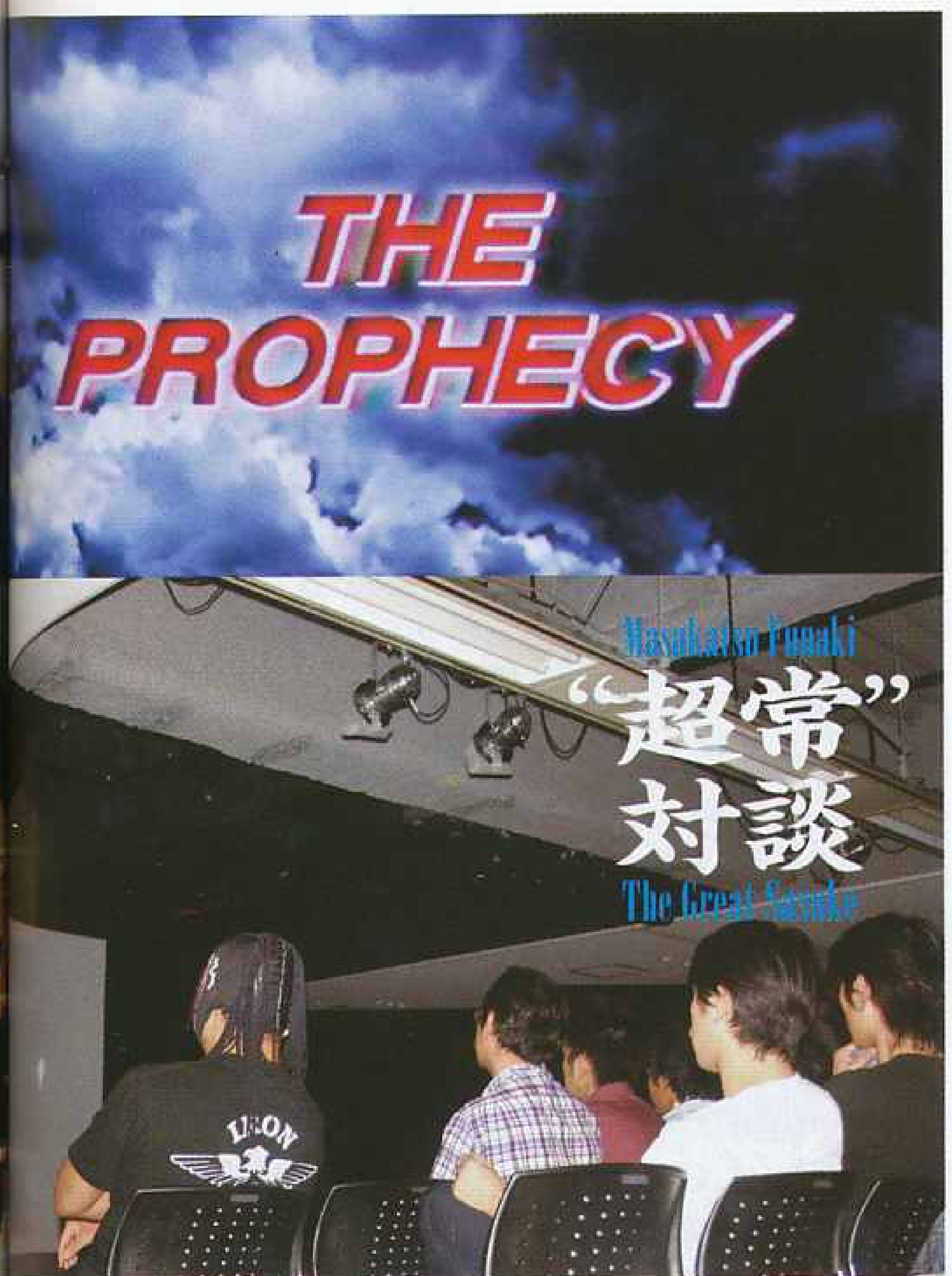
サスケ　確かにそうですよね。

船木　それこそタイムマシンみたいなモノももしかしたらできちゃうかもしれないですよね。

サスケ　タイムマシンはですね、10年ぐらい前だったでしょうか? ヤフーオークションかなんかで「私はタイムマシンで来ました」っていうのがありまして(笑)。

船木　へぇ〜!

サスケ　IBM5100という古いパソコンを探してるっていうことで「未来から来たんですけど」っていう書き込みがヤフオクであって凄い話題になったんですよ(笑)。



09年に『kamipro』でもおなじみの菊地成孔氏の紹介で日の目を見ることとなった船木監督作品『THE PROPHECY』。同年6月の『kamipro』イベントで公開されたこの作品を観て大興奮していたサスケ。すでに脚本が完成済みの作品も数本あるらしいが……、公開させてよ!?

船木　信憑性は高かったんですか?

サスケ　どうやらまんざら嘘でもなさそうだぞ、みたいなことになってましたね(笑)。ありそうですよ、タイムマシンは。未来人もいるんじゃないかという説もありますし。

船木　いてもおかしくないですよね。よく恐竜が一回滅んだとか言いますけど、なんでそれをいまの人間がわかるんですかね?

サスケ　あ〜、そうですよね。

船木　原始時代がこうだったとか図鑑なんかに書いてますけど、あんなの見たことがないじゃないですか?

サスケ　そうですよね!

船木　ということは俺たち人間も最初はちっちゃい細胞からできあがったのか? 全然そんな感覚はないんですけどね。突然できたような気もするんで。

サスケ　船木さんがおっしゃったように、人間というのはじつは操作されてできたんじゃないか、と。遺伝子操作という説が有力なんですよね。

船木　かもしれないですよね。

ザ・グレート・サスケ

宇宙人の支配下で人間が生活してもいいと思ってます(船木)

サスケ　それこそ地球外の生命体が地球でいろいろと遺伝子操作をして、突然、人間のかたちになったという説もありますし。

船木　どう考えたって、猿ではないと思うんですよ。

サスケ　そうですよね? 猿が進化して人間になったというのもおかしいといえばおかしいですよね。

船木　猿は猿でまだいるじゃないですか? だから、類人猿じゃないような気はしますね。そう考えると、最初から人間はいるんですよ。

サスケ　私もそう思いますね。人類の祖先というのは宇宙から来たものなんじゃないかなというのが、むしろ自然な考えかもしれないですね。

船木　宇宙人はもしかしたらいるのかなっていう。人間のかたちをして、近くにいてもおかしくないですよね。

サスケ　おかしくないと思います。

船木　ちょっと話が脱線してますかね?(笑)。

――いや、全然問題ないです!(笑)。

サスケ　私は『プロフェシー』を観させてもらって、二つ印象に残ってる場面があって。一つは社長室かなんかで銃で撃たれて死ぬシーンがあるじゃないですか。

船木　ええ。ピザ屋の店員が撃たれるんですよね(笑)。

サスケ　そうです。あのシーンはなかなかショッキングなものがあって。あれはよかったですねぇ。

船木　突然そういうことをしないと、誰も信じないっていうのがあって。やっぱり、人一人犠牲にならないと誰も信じないですよ。コイツが本気なのかどうかとか、その銃が本物かどうかっていうのも撃ってみなきゃわかんないんで(笑)。

サスケ　な、なるほど!

船木　やっぱり、犠牲者は作んないとまずいですよね。

サスケ　わ、わかります。あともう一つは、みんなが集まってるシーンがあって、プロレスラー役を謙吾さんが演じてるんですけど、けっこうプロレスに対して毒を吐くんですよね(笑)。それがまたおもしろくて。

船木　プロレスはもうわかりきったみたいな感じで(笑)。

――船木さんが脚本を書いていると思って観るとよけいに興味深くて。

サスケ　そうそう(笑)。あとは銀行強盗のシーンもよかったです。あれはクリエイター側からすると「どうやって撮ったんだろう?」という。ちゃんと銀行の中に入ってるし。

船木　あれは本物の銀行ですね。あれはもう、あのシーンに映ってるだけしか撮ってないですから。

サスケ　ほぉ! ゲリラ撮影ですね。

船木　完全にゲリラです。自分でカメラを持って回してますから。

サスケ　凄いですねぇ。私、こないだジム・ジャームッシュ監督の『リミッツ・オブ・コントロール』というアメリカ映画を観たんですよ。『パーマネント・バケーション』とか『ダウン・バ

近い将来、シュワルツェネッガーが大統領になりますから（サスケ）

イ・ロー』とか撮った監督なんですけど、アメリカ人監督なのに、もうハリウッドから一番遠いところにいるような感じの人で。

船木　自由に撮ってる人なんですね。

サスケ　そうですね。どちらかというとフランス映画っぽいテイストで撮る監督さんで。そのジャームッシュ監督の『リミッツ・オブ・コントロール』を観たときに船木さんの作品を思い出したんですよ。

船木　アハハハハハ！

サスケ　あ〜、同じセンスだな、と。同じような芸術性を感じましたね。

船木　いいのか悪いのか（笑）。たぶん、商業とはまったくかけ離れたところにいると思うんですよ。だから、ハリウッド映画なんかはだいたいパターンがわかるじゃないですか。ちょっと変えようとしてるのはクリント・イーストウッドの映画かなっていう感じですよね。ちょっと挑戦してるかなっていう。

サスケ　してますね。やっぱり、船木さんの作品には哲学があるんですよね。その哲学に私は惹かれました。

船木　そうですか（苦笑）。でも、たまに凄い疲れてるときとかは普通のコテコテのハリウッド映画を劇場に観に行きたくなりますね。

サスケ　わかります、わかります！

船木　今年だったら『ターミネーター4』は1800円払った価値はありましたね。CGもふんだんに使って。音も凄いんですよ。だから、ちょっと気持ちよかったです。

サスケ　たまにはそういった王道も観てみたくなりますよね。

——『ターミネーター』といえば、サスケさんは『U-SPIRITS』という雑誌で、アーノルド・シュワルツェネッガーが近い将来、大統領になるんじゃないかという話をされてましたね。

サスケ　そうなんですよ、じつは。いまは州知事ですけど、彼は大統領になりますから（キッパリ）。これは書いちゃってもいいです。

——書かせてもらいます（笑）。

サスケ　彼は移民なんでホントはなれないんですけど、法改正して近い将来、大統領になりますから。3年後ぐらいにこの対談を見直してください。「サスケの言ったとおりだ」ってことになってますから。

船木　なるほど。

サスケ　ただ、そうなると、凄いことが起きるんですよ！

船木　どうなるんですか⁉

サスケ　世界を制覇しちゃう、と。

船木　シュワルツェネッガーが？

サスケ　そうです！　イコール、アメリカが世界制覇するってことになるんですけども。アメリカが中東戦争を解決しちゃいますね。

船木　凄いことになりそうですね。

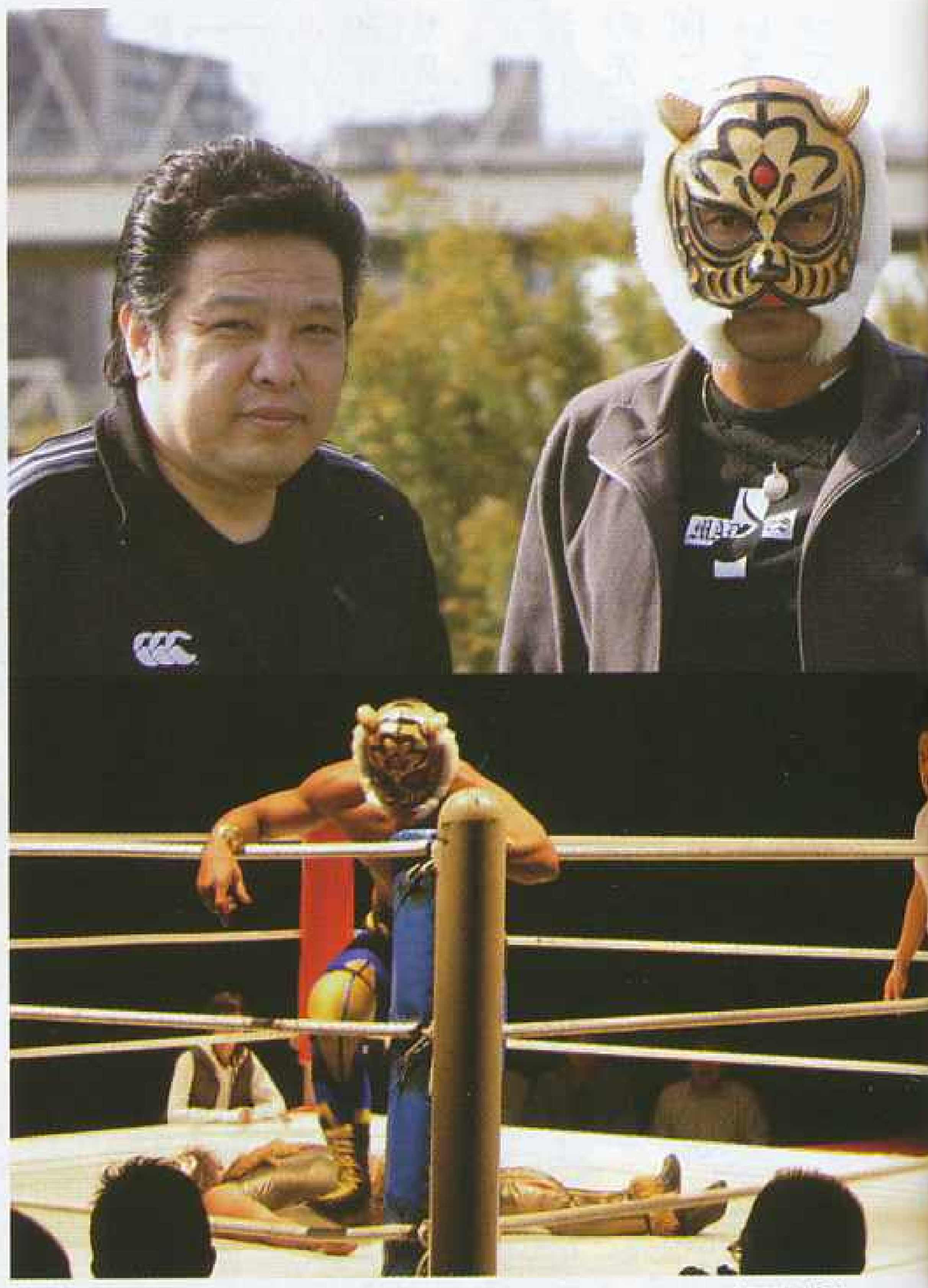
サスケ　それは悪い方向にいくってことですけどね。つまり、イスラエルイコールアメリカ、イコール西側諸国が完全に聖地を制圧しちゃうということですよね。

船木　いま思い出しましたけど、もう一つ自分が考えた脚本があって、アメリカと北朝鮮が戦争しちゃうっていうのもあるんですよ。それで、そこに中国が絡んできて、最終的に全部持ってっちゃうっていう。

サスケ　それはおもしろそうですね。

船木　しかも、なんで持っていくかっていったら超能力なんですよ。

サスケ　お〜〜、キタ〜〜〜〜ッ‼



俳優時代の船木が真樹日佐夫先生に頼んで実現したのが、映画『真説タイガーマスク』のタイガーマスク役。佐山サトルの指導でタイガー役を演じた船木だったが「やってみてプロレス復帰は無理だなと思ったんですけど、まさか数年後、復帰するとは。不思議です」と苦笑い。

船木誠勝×ザグ

船木　なんでそういう脚本を書いたかというと、中国の国宝で超能力を使う人がいるんですよ。

サスケ　ほぉ〜！

船木　その人は核の場所とか全部地図で当てちゃうらしいんです。

サスケ　はいはいはい、リモートビューイングっていうヤツですね。

船木　そういうことをする人がいるんで、あまり中国には手出しできないっていう話があって。で、その人と一回会ったんですよ。迎賓館で。

サスケ　どんな方なんですか？

船木　子どもみたいな人で、チャンさんっていうんですけど、モノとかを消しちゃうんですよ。

サスケ　へぇ〜、それは目の前で？

船木　はい。「いまから消しますよ」とか何も言わないでやっちゃうんで、そのときは「こういうもんなんだな」って思うしかなかったですね。

サスケ　貴重な経験をされてますね。

船木　実際にやられちゃうと、あまりにも見事なんで、信じるとか信じないとかの世界じゃないなっていう。そういうことができる人の中では、それが日常みたいな感じで。

——サスケさんの周りにも超能力者とかいそうな気がしますけど（笑）。

サスケ　いや〜、なかなか超能力者はいないですね。マジシャンはいっぱいいるんですけどね（笑）。でもユリ・ゲラーも凄かったですよね。

船木　いましたねぇ（笑）。

サスケ　昔、テレビでユリ・ゲラーが「壊れた時計を用意してください。それとスプーンをテレビの上に置いてください」って言って、私は言われたとおりに用意したんですね。

船木　どうでした？

サスケ　「3、2、1、はい！」って言ったらテレビの上に置いてたスプーンがピョ〜ンとジャンプして床に落ちたんですね。「うわっ、ユリ・ゲラー、スゲー！」って思って。壊れた腕時計も動いてたんですよ。

船木　それは凄いですね。

サスケ　二つ同時にリアルタイムで！　凄いですよ、ユリ・ゲラーは。私も超能力はあると思いますよ。

船木　あるんですよね。みんな使えるはずなんですけど、難しいと思うんですよ。簡単に使うっていうのは。

サスケ　人間の脳って、ほんの一部しか使ってないっていいますからね。

船木　ホントそう思いますね。それこそ格闘技で試合してるときなんかも相当いつもとは違う能力を発揮してるような気はしますよね。

サスケ　わかります、わかります。

船木　たまに、なんか攻撃が凄く見えるときがあるんですよ。

サスケ　プロレスでもありますね。もう起き上がれないぐらいのダメージがあっても、場外カウント20近くになると不思議と動けちゃったり。

船木　あとはお客さんの力というのもありますよね。

サスケ　観客の声援がパワーになったりしますからね。痛みも忘れちゃったりしますし。

船木　だから、試合が終わってから突然痛くなるときとかありますからね。そういう意味ではアドレナリンって相当麻薬ですよね。

サスケ　そう思いますね。それこそ、映画『レスラー』の中の有刺鉄線デスマッチのあとで、ミッキー・ロークが

Masakatsu Funaki

“超常”対談

The Great Sasuke

ゲロ吐いて心臓発作になるっていう、あそこなんですよね。

船木 そうですね。ミッキー・ロークは最後どうなったと思いますか?

サスケ 私はやっぱり、死んだんじゃないかと思いますね。

船木 俺もそう思いました(キッパリ)。死ぬときってあんな感じだと思うんですよ。ホントに「バーン!」って感じで真っ暗になって終わるような気がしますね。

サスケ まさに、死んでこそ、あれは美しい物語だと思いますし。

船木 最近はよくなったんですけども、小学校4年ぐらいのときに寝るのが怖くなったことがあって。寝てる瞬間って何も考えられないじゃないですか? だから、もしかしたら死んでるときもこんな感じなのかなあって。そうなると「死ぬのって怖いな」って思ったんですよ。

サスケ じゃあ、あまり夢とかも見なかったですか?

船木 夢も見るときと見ないときってあるじゃないですか? だから、信用できないんですよ(笑)。

サスケ あ〜、わかる気がします。

船木 見ようと思って自由自在に見れたら楽しいと思うんですけど、でも見るときと見ないときがあるっていうことは、もしかしたら死んだあとって、そういうことさえもなくなっちゃうんじゃないかなって思うと、やたら怖くなりましたよね。

サスケ 船木さんは臨死体験とかはされたことはないですか?

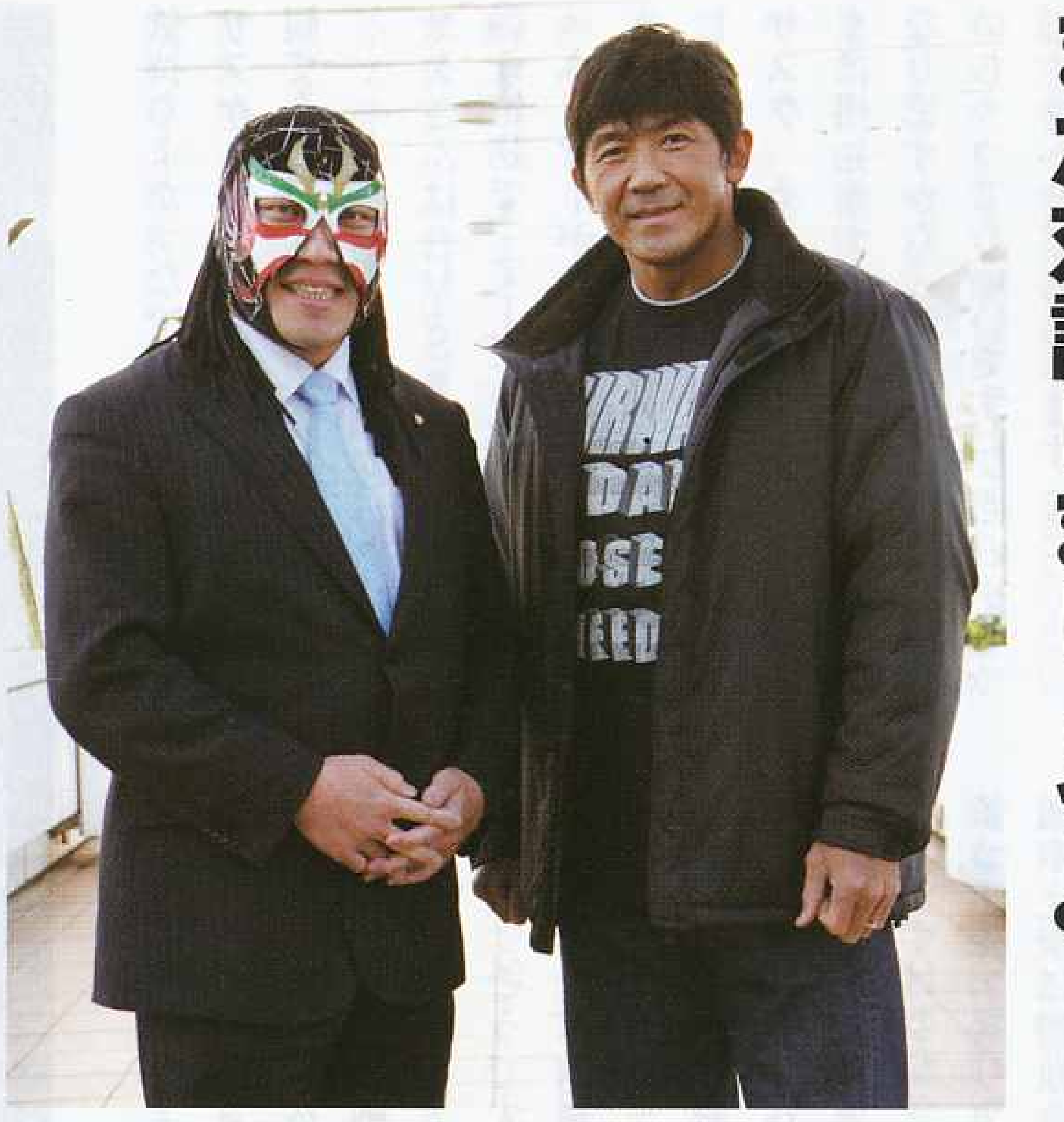
船木 臨死はないですね。一瞬の脳震とうとかはありますけど、何時間も意識がないとかっていうのはないですね。

サスケ 私は強烈なのが一度あって、エプロンからパワーボムで持ち上げられて場外のコンクリートの床に後頭部から落とされたんですね。それで臨死体験しちゃいましたね。

船木 どんな感じでした?

サスケ よく言いますけど、ホントにお花畑が見えたんですよ。で、空を泳いでいると三途の川があって、その先に赤い小さな橋があって、橋の向こう側に着物を着た白髪頭のおじいさんが「おいで」って手招きしてるっていう。

2012年に『kamipro』でまた対談しましょうよ



ふなき・まさかつ■1969年3月13日、青森県出身。15歳で新日本プロレスに入門し、85年3月の後藤達俊戦でデビュー。00年『コロシアム2000』でのヒクソン・グレイシー戦で引退するも、07年『Dnamite!!』で復帰。09年からは全日本プロレスで活躍中。2010年の目標は「自分の十八番をしっかり作ったうえで三冠ベルトに挑戦したい」とのこと。182cm、84kg。

ざ・ぐれーと・さすけ■1969年7月18日、岩手県出身。新日本プロレス学校を経て90年3月、ユニバーサル・プロレスリングでのモンキーマジック・ワキタ(現=スペル・デルフィン)戦でデビュー。その後、93年3月にみちのくプロレスを旗揚げ。2010年の秋には都内会場にて因縁の相手ドス・カラスとマスク剥ぎマッチが内定している。180cm、88kg。

いいですねぇ。じゃあ、それまで「また生きるぞ!」ってことで

船木 そのときは実際は寝ちゃってるんですか?

サスケ そうですね。3カウントを聞いて控室に担架で運ばれるまでの5分ぐらいの出来事だったんですけど、あれは凄かったですねぇ。

船木 たまに脳震とうとかはありますけど、そういうときって身体と魂って別なのかなって思いますよね。

サスケ 肉体と魂は別ものだ、と。つまり、魂は永遠に不滅だという。

船木 そうですね。まあ、戻ればですけど(笑)。

サスケ そういう意味では、魂は永遠不滅がゆえに私は生まれ変わりがあると思うんですね。肉体は仮の宿りで自分の魂は永遠なんじゃないかなと。もう何度も生まれ変わるんじゃないかなって思うんですね。

船木 でも、生まれ変わるって、その前の記憶がなくなるっていうのがつらいですよね。

サスケ そうですね。でも、もしかしたら意識はないかもしれないですけど、持ってるのかもしれないですよね。前世の記憶って。

船木 だけど、本当に死ぬ人と戻る人と二種類いるじゃないですか? あれも不思議ですよね。そのまま亡くなっちゃう人もいるし、臨死体験をして戻ってくる人もいますし。

サスケ 不思議ですよねぇ。

船木 でも、適当に生きれなくなりますね。死ぬっていうことを感じてしまうと。それに、とりあえず一回しかないじゃないですか? そこが人生で一番スリリングというか(笑)。

サスケ いや〜、船木さんといえば名言がありますけど「一度しかない人生」ということでプロレス入りを決めたわけですよね。

船木 そうですね。全部それで生きてますから。

サスケ 私は逆に生まれ変わりっていうものをなんとなく信じちゃってるんで。いろんな人生を楽しみたいなとも思いますけどね。

船木 (唐突に)地球の中がどうなってるのかも知りたくて。よく溶岩とかマグマとかいいますけど、誰が見たんだって話じゃないですか?

サスケ さすが、目のつけどころが素晴らしい! じつはいま一番熱い説がありまして、地球空洞説という。

船木 あ〜、聞いたことあります。

船木誠勝×ザ・グレート・サスケ

サスケ その説でも溶岩ではなくて、別世界があるんじゃないかと。

船木 なるほど! だって、誰も掘ってないじゃないですか。溶岩の下に何があるのか。地球も生き物なんであれば、内臓の部分に当たるものとかあると思うんですよね。

サスケ 何かあるでしょうね。

船木 あと、宇宙とかの話でも月に行って帰ってきたとか、あれも信じられないですよね。だって、月に行くって相当、度胸いりますよ!

サスケ そうですよね。ちょっと話は逸れますけど、じつは北極に巨大な穴があるんですよ。

船木 北極ですか?

サスケ ええ。その穴は誰も入ったことがなかったんですけど、アメリカが2010年に探検隊を送り込むんですよ。その穴のギリギリまで船で行って、そこからヘリコプターで地中に入るという。いよいよ、そこで地球空洞説が明かされるんじゃないかって期待されてるんですけど。

船木 それは興味深いですねぇ。

……でも、こんな話ばっかりして、『kamipro』の読者から「この人たち、頭おかしいんじゃないかな?」とか思われないですかね?(笑)。

――いや、そんなことはないと思います(笑)。

船木 じゃあ、2012年にまた『kamipro』で対談しましょうよ。どうなってるか答え合わせの意味も含めて(笑)。

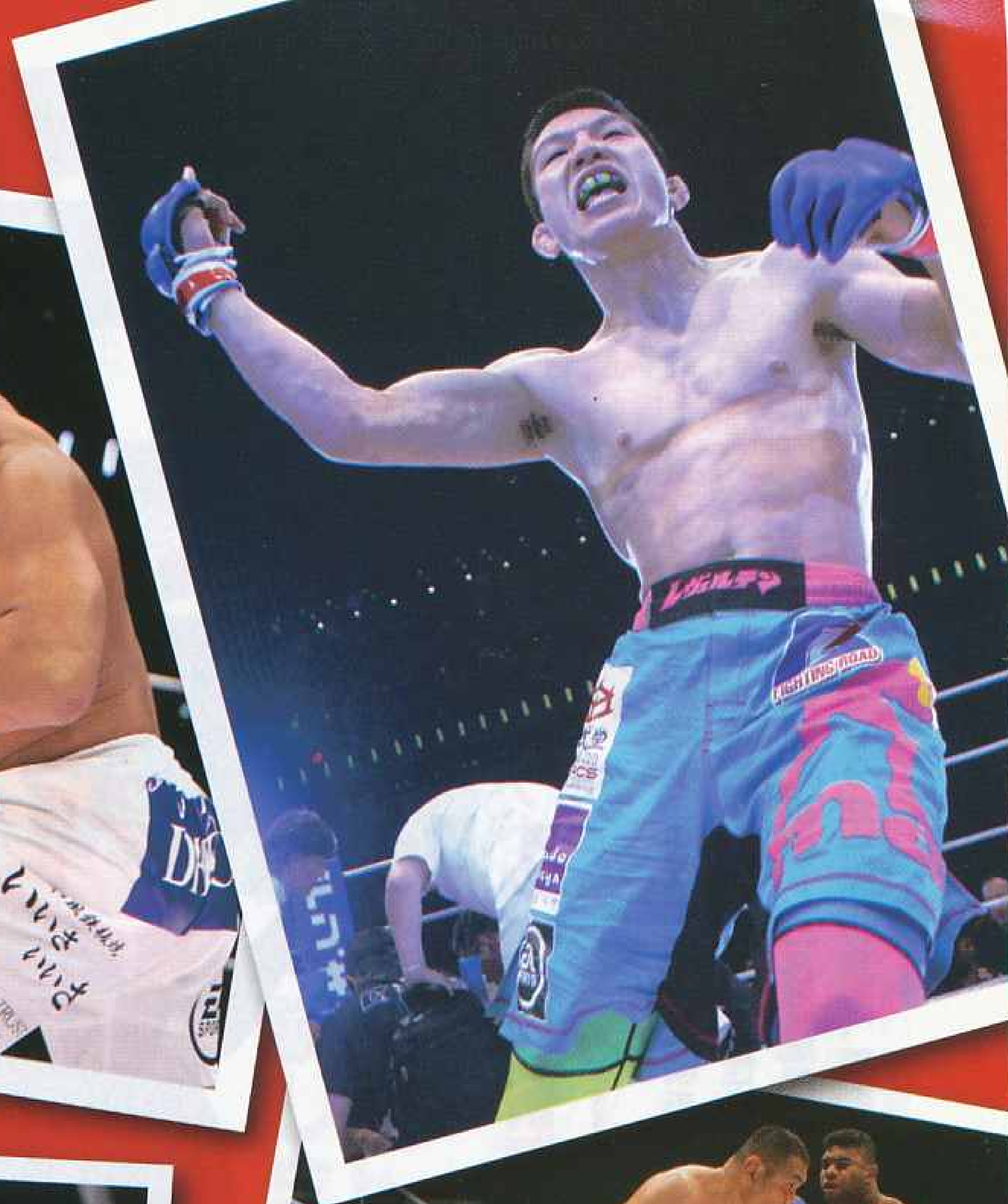
サスケ いいですねぇ。じゃあ、それまで「また生きるぞ!」ってことで、よろしくお願いします!(笑)。

【09年12月29日/都内・某所にて収録】


15周年
サラブレ
サラブレ
特別付録
ウオッカ、JC制覇記念
特大ポスター
松岡騎手、師匠キネーン騎手を語る
日本、世界で活躍する女性騎手の今
2歳戦を総まとめ&3歳戦展望
2009年禁断の裏話、厩舎関係者座談会
絶賛発売中!!
競走馬、
覚醒のメカニズム
なぜ、近年は高齢馬や
晩成馬が活躍しているのか ——?
2
2010
February
月号
特別定価 740円
お待たせしました!
ついに単行本化!!
絶賛発売中!!
A5版　定価1260円（税込）
荒川耕
うままんが日記
登場頭数36頭
全50話完全カラー掲載!!
【おもな収録馬】　アグネスタキオン、アグネスワールド、アドマイヤグルーヴ、アブクマポーロ、エアグルーヴ、エアメサイア、エリモエクセル、エルコンドルパサー、キングカメハメハ、グラスワンダー、クロフネ、ゴーカイ、サイレンススズカ、シーザリオ、ジャングルポケット、スイープトウショウ、ステイゴールド、スティルインラブ、スペシャルウィーク、セイウンスカイ、ゼンノロブロイ、タイキシャトル、ダイワスカーレット、ダンスインザムード、デアリングハート、ディープインパクト、テイエムオペラオー、トールポピー、ネオユニヴァース、ハーツクライ、ビリーヴ、ブルーメンブラット、ホッカイルソー、ミスタートウジン、ラインクラフト　など
うままんが日記
UMAMANGA NIKKI
荒川耕
名馬たちの活躍が
漫画で甦る!!
登場頭数36頭
全50話
完全カラー掲載!!
競馬月刊誌「サラブレ」で連載中の
人気漫画がついに待望の単行本化!
enterbrain
発行元：株式会社エンターブレイン
電話 0570-060-555（代表）
URL http://www.enterbrain.co.jp/
発売元：角川グループパブリッシング













浅草キッドの玉ちゃんと年末年始を語りまくる!!

俺たちのマット界変態新年会2010

すっかりおなじみになった、浅草キッドの玉ちゃんを交えての変態座談会。今回は新年一発目ということで、いつもの開催場所、『加賀屋』中野坂上店で、"変態新年会"として開催! 年末年始のマット界をおとそ気分で語りまくります!

構成／堀江ガンツ　試合写真／乾晋也、FEG Inc



PRIDEは昭和プロレスを格闘技としてリメイクしてくれたんだよ

玉袋　（神妙な顔で）ガンツ、長いあいだお疲れさん！
ガンツ　えっ⁉　どうしたんですか？
玉袋　俺もよ、『ｋａｍｉｐｒｏ』さんには長いこと楽しませてもらって、ありがてえなって思ってるから。お疲れさん！
ガンツ　お疲れさんって……もしかして、〝重大発表〟のことですか？
玉袋　あえてガンツの口から言わなくてもいいよ。俺も噂ではチラッと耳にしていたしな。で、ここ来る前に『ＭＭＡ ＩＲＯＮＭＡＮ』ってブログ見たら、「2月に格闘技雑誌休刊」って出てたから、「やっぱりな……」って思ってよ。編集部のみんなにも、よろしく言っといてくれよ。
ガンツ　あの……その「格闘技雑誌休刊」って、ウチじゃないんですけど。
玉袋　へ？
ガンツ　某誌が休刊する噂は流れていますけど、ウチは２０１０年も元気に続きます（笑）。
玉袋　おいおい、ホントかよ⁉　俺は今日、最後のつもりで来たんだよ。この変態座談会も「今日が最後か……」ってしんみりしてたんだよ！
ガンツ　それはご心配おかけしました（笑）。ま、今後何が起こるかはわかりませんけどね。
玉袋　ホッとしたよ。俺はこの座談会が、第二次ＵＷＦにおける〝正月の前田邸〟みてえな感じかと思ってたから。
椎名　「これで解散や！」みたいな（笑）。
玉袋　そうだよ。なんだ続くんだ。まだおとそ気分でいいんだな。じゃあ、とりあえず乾杯しちゃおう！
ガンツ　というわけで、新年一発目の変態座談会は、変態新年会として、例によって変態の聖地・加賀屋で飲みながら行ないたいと思います（笑）。
玉袋　新年会をのんきに誌面に載せてるんだから、まだまだ続きそうだな（笑）。
ガンツ　では、年末年始のマット界についていろいろと語っていきたいと思うんですけど。正月の『アメトーーク！』特番で、「昭和プロレス芸人」特集をやってましたよね？



『アメトーーク!』の特番で「昭和プロレス芸人」が組まれたり、NHKでプロレステーマ曲特集が組まれたりと、なんだか突然、昭和プロレス回帰ばやりの昨今。ここに何かしらマット界復興の鍵はあるのか?

椎名　やってたね。
ガンツ　でも、目の前にいる〝昭和プロレス芸人〟がなぜか出てませんでしたが……（笑）。
玉袋　出てなかったな～。でも、俺の場合はよ、〝昭和・活字プロレス芸人〟だから。
椎名　映像でモノマネやったりするほうじゃない（笑）。
玉袋　スタジオの雰囲気が嵐山公園、Ｉ編集長イズムじゃねえから。ちょっと俺の出番じゃねえっていうかさ。ま、あれはあれで素晴らしい番組だけどね。
ガンツ　でも、玉ちゃんはＮＨＫのラジオでやってた「プロレステーマ曲大特集」には出てましたよね？
玉袋　そうなんだよ！　ＮＨＫ－ＦＭで８時間やった番組。
椎名　８時間もやったの⁉
玉袋　しかも、ついにＮＨＫから「玉袋筋太郎」名義で発注が来たってところが凄い！
ガンツ　これまでＮＨＫでは「玉袋筋太郎」の名は放送禁止で、「知恵袋賢太郎」に改名させられてたんですよね（笑）。
玉袋　民放だってゴールデンでは「玉ちゃん」名義なのに、ＮＨＫが「玉袋筋太郎」をＯＫって仕掛けてきたんだよ！
椎名　まさに〝玉〟音放送（笑）。
玉袋　そうだよ！　しかもプロレスのテーマ曲だけで８時間だからね。これまで耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍んできた俺からするとよ、楽屋に挨拶に来たプロデューサーとディレクターに「こんなことやっちゃっていいんですか？」って聞いたからね。
ガンツ　「やっちゃっていいんですか、星野さん！」みたいな（笑）。
玉袋　そしたら「いいんです。ウチはプロレスキ○○イだらけなんで」だって（笑）。
一同　ダハハハハ！
玉袋　ＮＨＫ職員の口から「キ○○イ」発言が出るんだから、こっちはうれしくなっちゃってさ。やっぱり、どこにでもプロレスファンっているんだよな。
椎名　テレビの業界でも、裏方にプロレスファンがいると、いろいろ助かったりしますよね。
玉袋　それにしても、プロレステーマ曲で８時間っていうのはたいしたもんだよ。しかもさ、マニアックな曲までＮＨＫは全部音源持ってるんだよ！　たまにテーマ曲が流れても拍子抜けするときあるじゃない、このバージョンじゃねえんだよって。
ガンツ　天龍源一郎のテーマがバージョンによって全然違うんですよね、高中正義のオリジナルとカバーのと。
玉袋　そうなんだよ。サービスエリアで妙に安い五木ひろしのカセットテープ買ったら、歌ってるヤツが全然違ったりするみたいな（笑）。
椎名　いや～、その番組聴きたかったな～。バンバン、リクエストとかしたかったのに。

座談会出席者

玉袋筋太郎
１９６７年、東京都出身の42歳。ご存知、浅草キッドの片割れ。子どもの頃から蔵前国技館に通った変態プロレスエリート。１月29日（金）にお台場で『スナック玉ちゃん』大新年会を開催する。

椎名基樹
１９６８年、静岡県出身の41歳。本誌の好評長寿コラム『サムライ三昧』でもおなじみのフリーライター、放送作家、構成作家。真剣勝負にあくなきこだわりを持ち、格闘技番組のチェックは欠かさないインドア系変態。

堀江ガンツ
１９７３年、栃木県出身の36歳。本誌変態座談会主宰者。子どもの頃から変態的プロレスファン、ＵＷＦ信者として鳴らし、ＵＷＦ研究家を自称。昨年末、京都の鞍馬寺であの〝小太刀〟を購入。



玉袋　でもよ、テレビで昔のプロレスの映像が流れたり、ラジオでテーマ曲が流れたり、いまはそういう〝原風景〟が求められる時代なのかね。俺なんかも最近、テレビで『小さな旅』とか、『新日本紀行ふたたび』とか観ちゃってるんだけど、それに近いものがあるのかな。

ガンツ　プロレス黄金期を知ってるファンは、そういう郷愁の想いっていうのはあるでしょうね。

玉袋　だからPRIDEっていうのは、昭和のプロレスを格闘技としてうまくリメイクしてくれてたんだよ！　『椿三十郎』を織田裕二でやるみたいなガッカリするリメイクじゃなくて、名作をかたちを変えて、うまく提供してくれてたんだよ。

ガンツ　PRIDEは〝金曜8時〟の興奮をよみがえらせてくれましたよね。

玉袋　よみがえったんだよ。だから、昨年の大晦日なんかも、俺たちはどうしてもあの興奮を期待しちゃうから「あれ？」ってなる部分があったんだけど、それは新しいものがもう始まってるってことなんだけどね。椎名先生は大晦日、会場に行った？

椎名　行ってないんです。「長そうだな」って思ったんで今回はPPVで。

玉袋　長かったよ。終わったの午後10時すぎだぜ。こっちは客席で2時半から飲んじゃってたんだけど。

ガンツ　早い（笑）。

玉袋　それで待ちに待って、最後から二番目の青木vs廣田戦で腕折り＆中指が出ちゃったわけだよな。

椎名　あれは会場よりテレビで観たほうが興奮したかも。「こんなことがテレビで流されていいのだろうか！」って（笑）。

玉袋　ヘタすりゃ放送事故だもんな。

椎名　やっちゃいけないことだからこそ、興奮しましたよ。玉ちゃんはどうでした？

玉袋　俺はね、じつはそれどころじゃなかった。

椎名　どうしてですか？

玉袋　あの日は、セガレや友だちと観てたわけよ。そしたら、俺の隣にもの凄く貫禄ある人が座ってきたの！　俺も怖くなっちゃって、で、隣にはセガレはいるし、友だちもいるし、こっちが失礼あって怒られたらマズいなぁと思って、もう試合も凄いんだけど、隣席の緊張感も凄くてさ。

ガンツ　リング上より隣のほうがよっぽど危険（笑）。

玉袋　あとの（中指立てて）こんな行為よりよっぽど危険地帯なわけだから。で、その貫禄ある人、どっかで見たことあるな、と思ったら○○の○○○なの！

椎名　それは凄い！（笑）。



平和な大晦日のお茶の間に、不協和音を持ち込んだ青木真也。賛否両論というか、非難轟々であるが、とんでもないインパクトを与えたことは確かだ。

青木は警官辞めて本当に良かったよ 逮捕術にしてはやりすぎだろってね

玉袋　で、俺の近くで、青木vs廣田戦を観て「青木、腕折って中指立ててたぞ。あれはいけねえな」って嘆くの！

椎名　アハハハ！「あんたのほうがよっぽどいけないよ！」って（笑）。

玉袋　まいったよ！　でも青木のフィニッシュに違和感あったから、出た言葉だろうねぇ。あのフィニッシュ！

椎名　腕が折れたのは会場でもわかったんですか？

ガンツ　みんなビジョン観てるんで、それはわかりましたね。

玉袋　俺もコーナーがジャマになる場所だったからビジョン観てたんだけど。でも、ビジョン観ようとして横向くと、○○○○が目線に入っちゃう。それで俺が横向くたびに「ん？」って目があって、どっち見たらいいか。キョロキョロで、俺の目線のほうが挙動不審だったよ！

ガンツ　おちおちビジョンも観ていられない（笑）。

椎名　でも、腕が折れたり脱臼したりするのって、桜庭vsヘンゾ戦みたいな突発的なものはあるけど、ああやって意思をもって折ったのは初めて観たよ。

ガンツ　椎名さんは、あれ観てどう思いました？

椎名　俺は見込み一本が大嫌いなんで、廣田には申し訳ないけど「やったーっ！」って思っちゃった（笑）。

ガンツ　喜んじゃいましたか（笑）。

椎名　折ったのがうれしいんじゃないんだけど、見込み一本じゃないのがいいから。でも、その前の川尻vs横田戦で、川尻が腕十字極めてたときも、テレビの前で「折ーれ！　折ーれ！」って〝折れコール〟してたんだけどね（笑）。

玉袋　こりゃダメだ（笑）。

椎名　だけど、折ったという事実より、折ろうとして折ったというところが凄いと思う。『YouTube』で青木の試合後のインタビュー観たんだけど、「折ろうと思って折った」って言ってたからね。

玉袋　観てるねえ！　奇しくも『kamipro』速報号での座談会で「少年犯罪みたいな感じがした」って書いてあったけど、青木はサイコだよな。

椎名　サイコキラーですよ！

玉袋　警官辞めてホント良かったよ。逮捕術にしてはやりすぎだろっていうね。

椎名　みんな折ったことばかり言うけど、あれは技術的に凄いよね！　だってパスガードする前から腕極めてて、そのまま乗っかってマウント取って、一気にキムラロックで折っちゃうんだから、どうしてそんなことができちゃうの？　って。

玉袋　ホントに相手の光を消したよな。椎名は「フ○○ク・ユー」はどう思った？

椎名　あれはいけないでしょ。でも、いけないことだからこそ、もし俺が格闘家だったら、一度でいいから相手をKOしたあと、フ○○クサインしたかった！

一同　ダハハハ！

椎名　だって、普通のテンションじゃないわけじゃん。「どっちが強いかわかったか！」「ざまあみろ！」ってなるよね。

玉袋　「ざまぁみろ！」「見たか！」ってい

ガンツ　もしかしたら、あのグローブで殴

ちが入っちゃったから。

玉袋　「ざまあみろ！」「見たか！」っていうのはあんだろうな。ウチの師匠が国際的な映画賞を獲って、凄く格式ばった授賞式に鞍馬天狗の格好で行くみてえなところが。

椎名　やっちゃいけないことだけど、普通は「やっていい」って言われてもできないでしょ。あんな大舞台で完勝して、腕まで折って、フ○○クサインするなんて。

玉袋　とにかく○○○○が「やりすぎだ」って言うぐらいのことだからな、すげえことはすげえよ。

ガンツ　だから、『Dynamite!!』はあんなにたくさん試合があったのに、年が明けたらみんな青木の話ばっかりですからね。魔裟斗の話なんて全然出てこなくて、あとは「石井、弱かったね」ぐらいじゃないですか。

椎名　『ニッカン』の一面は驚いたな、「石井、弱かった」（笑）。

ガンツ　あれも青木ばりにやりすぎですよね（笑）。

玉袋　だけどよ、俺は石井のことより、吉田が良かったって言いてえな。グレート草津vsルー・テーズ戦的なね。グレート草津を勝たそうとしたらルー・テーズが強かったっていう。

ガンツ　国際プロレスのスター候補生が潰された、みたいな（笑）。

玉袋　前回は吉田を「はぐれ国際プロレス軍団」って言ってたのにな！

椎名　俺は吉田を観て「ジョージ・フォアマンみたいだ」って思ったの。ベタ足でズカズカ歩いてきて、ドカンッと殴る、みたいな（笑）。

ガンツ　40半ばすぎのフォアマンって、あんな感じでしたよね。

玉袋　フォアマンって考えると、見事な再起だね。「引退」なんて言ってほしくないね。

椎名　でも、石井はボクシングができるかどうかに注目してたけど、ダメだったな。いずれうまくなるのかもしれないけど、あの試合では、パンチがおっかないんじゃないかって見えるもんね。解説の亀田（興毅）が「右のパンチが見えてない」って言ってたけど、目をつぶっちゃってたから。

ベタ足でズカズカ歩いて殴る吉田は ジョージ・フォアマンみたいだった！



石井慧の"主役"であるはずのデビュー戦ながら、吉田秀彦のこれまで見えなかった魅力が存分に発揮された吉田vs石井戦。今年、吉田はホントに引退してしまうのか?

俺たちのマット界 変態新年会2010

ガンツ　もしかしたら、あのグローブで殴り合ったの初めてなんじゃないですかね。

椎名　そのへん考えちゃうよね。あの性格だから、練習環境さえしっかりしたら、もの凄い練習しそうじゃん。

ガンツ　ハマったら、小見川道大みたいに大化けしそうですけどね。

椎名　小見川も強くなったもんね。でも、小見川もデビューして4～5年だっけ？　柔道家が打撃を身につけるのって、それぐらいかかるってことなんだろうね。

玉袋　そう考えると、〝魔王〟はヌルヌルしてるけど、すげえ才能はあるんだろうな。

椎名　才能あるのにズルしちゃう（笑）。

玉袋　もったいねえよな。でも、石井に初日が出なかったのは残念だけど、吉田の意地も見れたし、石井もこれからが気になるし、いいドラマにはなってるよ。

ガンツ　やっぱり、そういう負の要素があると逆に引き込まれますよね。

玉袋　そうなんだよな。魔裟斗の引退試合っていうのもさ、引退なんだから〝散り際〟という負の部分を垣間みたかったんだけど、やっぱり〝送り出し〟になっちゃったところが、変態としては少しもの足りねえんだよ。「ありがとう！　いってらっしゃい！」みたいなさ。

椎名　魔裟斗は凄いことしてるんだけど、俺個人的には目標を持って頑張って、それを達成してくようなヤツは性に合わないんですよ（笑）。

ガンツ　ガハハハハ！　中指立てる人には共感して、努力して目標達成する人は性に合いませんか（笑）。

玉袋　ロクデナシだけど、椎名目線もわかるよな。

椎名　俺個人的には、魔裟斗の引退より、アンディ・サワーのスパッツのほうに気持ちが入っちゃったから。

玉袋　俺もそうなんだよ！　ルール説明のとき「アンディ・サワー選手のスパッツが認められます」って発表されたとき、俺は「よっしゃー！」って立ち上がったんだけど、周りはシーンとしてんの。それでガンツに「変態、いねえ」ってメール打っちゃったんだけど。

椎名　でもね、魔裟斗が「スパッツがOKなら俺も着けます」って短いスパッツ穿いてたの。あれが気に食わない！

ガンツ　あれは嫌ですねえ。

椎名　「何それ!?」って感じ。サワーだってローキックの痛みを軽減するために穿いてるわけじゃねえじゃん！

ガンツ　ロングスパッツはシュートボクシングの精神であり、正装ですよね！

玉袋　そうなんだよな。サワーからスパッツを奪うなんて、江頭（2：50）からロングタイツを奪うようなもんだろ！

椎名　魔裟斗がエガちゃんみたいな黒のロングタイツで入場してきたら大拍手だけどね（笑）。

ガンツ　入場テーマ曲は『スリル』で（笑）。

玉袋　でもよ、俺たちはスパッツ一つでこんだけ語れるわけだろ？　それなのに会場は全然沸かなかったっていうのは、いかにあの会場には変態が少なかったかっていうことなんだろうな。

ガンツ　だから、会場の一体感がイマイチ不足してましたよね。

玉袋　やっぱりさ、これはないものねだりになっちゃうんだけどさ、大晦日はふんどし暴れ太鼓がなきゃダメなんじゃねえかな。今回のサクちゃんもよかったけど、やっぱり高田本部長っていうのは、〝前説〟がうまかったんだよ。オープニングで観客が一つにまとまってたらさ、そのあとも熱

があったんじゃねえかなって思うよ。

椎名　PRIDEに比べるとオープニングの演出がやっぱりダサイもの。『翼をください』じゃねえだろ、腕折ってんのに。

ガンツ　チキンウイングでヘシ折ってますからね（笑）。

玉袋　〝前説〟っていうのは、煽りVと同様に大事だと思ったよ。やっぱり本部長が空気をあっためて、そこに選手が乗っかってくのがよかったよな。

ガンツ　確かに本部長が「魔裟斗、出てこいや――ッ！」って言ったら、俺たちみんな魔裟斗コールですよね（笑）。

玉袋　大変だぜ、絶対。爆発してるよ。

ガンツ　なぜか男たちからの熱狂的な魔裟斗コール（笑）。

玉袋　なんで魔裟斗がふんどしで送り出されなきゃならねえんだって話だけど、このバカバカしさがいいんだよ！

ガンツ　やっぱり象徴というか、元締めみたいな人がいて、一本筋が通ってると〝祭り〟に軸ができるんですけどね。残念ながら今回の『Dynamite!!』は、試合は良かったのに、雰囲気が寄せ集めのフェスみたいな感じでしたからね。

玉袋　そうなんだよな。なんとかステージに分かれててな。べつに『ロック・イン・ジャパン』を否定するわけじゃねえけどよ。

椎名　「金儲け主義に走った『ロック・イン・ジャパン』」とか言うわけじゃない（笑）。

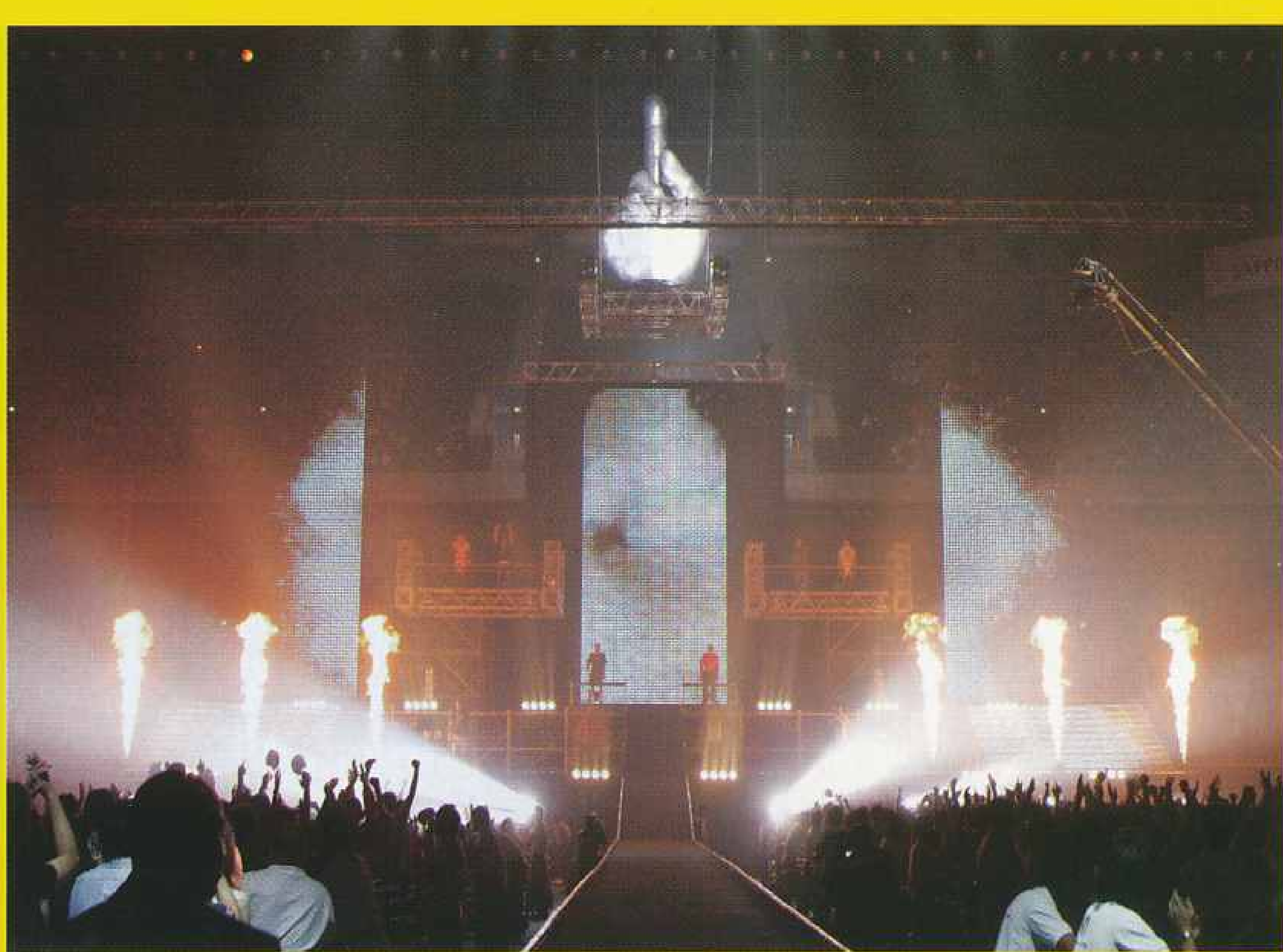
玉袋　俺もさ、数年前にセガレがアジアン・カンフー・ジェネレーションを観たいって言うから、ひたちなかまで『ロック・イン・ジャパン』に行ったわけだよ。で、「ロック・フェス」って聞いたからよ、俺の中のロック・フェスっていうのは、内田裕也さんの『ニューイヤー・ロック・フェス』なんだよ！

椎名　危険なロック・フェス（笑）。

玉袋　だからさ、なんかあっちゃいけねえと思って、気合入れて行ったらよ。あのひたちなかの太陽の下、みんな健全でさ。「ゴミは捨てない」とか「ツバは吐かない」とかやってんだよ。

ガンツ　エコですね（笑）。

玉袋　もうケツが痒くなってきてさ、「なんだこれ!?」って。だってかつての『ニューイヤー・ロック・フェス』なんかさ、たけしさんが歌ってるとき、付き人として楽屋番してたら、（内田）裕也さんと力也さん、あと桑名（正博）さんが入ってきて、酒盛り始まっちゃってんだもん。俺はずっと立ったままだよ。あの恐怖感ね。



PRIDEのシンボルでもあった、「ナンバーワン」を意味する一本指のオブジェ。人差し指だからいいものの、これが中指になったら、途端に大変なことになるだろう。

俺たちのマット界変態新年会2010

DREAMはもう開き直って中指のオブジェを作るしかねえだろ

ガンツ　まるで昭和の格闘技イベントですね（笑）。

玉袋　バックステージのカメラ回してるのが崔洋一だからね。それで出番が終わったバンドに「しゃべれコラ！　もっとケンカしろ！」とか言ってるの。俺はロック・フェスっていうと、そのイメージがあったからさ、格闘技の会場にはある程度そのイメージを持って行くわけなんだけど、やっぱりちょっと健全になってるような部分はあるよね。

椎名　じゃあ、青木は『ロック・イン・ジャパン』に『ニューイヤー・ロック・フェス』のつもりで行っちゃったんだ（笑）。

玉袋　そうそう。中指立てるなんて、『ニューイヤー・ロック・フェス』じゃあ、あたりまえの光景だからね。ジョー山中さんとか、もっと凄いことやってたと思うよ。

椎名　あっちのジョーは（笑）。

玉袋　魔裟斗の送り出し方は、なんか『ロック・イン・ジャパン』的な健全さは感じたな。もちろん、いいことなんだけどね。

椎名　でも、腕折って、中指立てて、その雰囲気をブチ破るところを観ると興奮しちゃうよね。

玉袋　そうなんだよな。あれで青木が普通に勝ってて、『kamipro』の速報号が「魔裟斗、ありがとう！」みたいな感じだったら、手に取るのかって感じだから。

椎名　全然、ドキドキしないよね。俺たちが観たいものって、結局ブラッドスポーツだもん。

玉袋　何度も言うけど、魔裟斗は凄いんだよ！　でも、俺たち変態が求めてるものと、ちょっと違うってことなんだよな。

椎名　「魔裟斗、ありがとう！」のほうが一般的で、俺たちがおかしいだけなんだろうけどね（笑）。

玉袋　まあ、いろいろ言ったけど、こうやって語れるんだから、『Dynamite!!』っていうのは成功だったと思うよ。

ガンツ　あとは青木と廣田がこうやって〝事件〟になったからには、いい方向に転がしていってほしいですよね。へんに裏でガチな抗争になるんじゃなくて。

玉袋　もうDREAMは開き直って、『PRIDE・GP』の〝人差し指〟オブジェみたいに、〝中指〟のオブジェ作ったりしたほうがいいんじゃねえか？

一同　ダハハハハ！

ガンツ　巨大な中指が回転しちゃって（笑）。そういう不謹慎なこと言ってると、日本格闘競技連盟から意見書が来ますよ！

椎名　『戦極（SRC）』はこれからどうなるの？

ガンツ　3月7日に両国国技館大会をやるみたいですよ。ただ、どういうかたちになるか、わからないですけどね。吉田道場勢は出ないし、廣田はケガしてるし、DREAMとの関係がどうなるかもわからない。

椎名　対抗戦って続かないの？

ガンツ　けっこう難しいみたいですよ。リング上がガチで対抗してるのはいいんですけど、いまはリング外も本当にガチになっちゃってる感じですからね。

玉袋　だからよ、先月語った新日本とUW

Fインターの対抗戦じゃねえけど、やっぱりバチバチでやり合っても、テーブルの下では手を握っててくれねえとな。
ガンツ 熱くなるのは選手同士だけでいいんですよね。
玉袋 そうなんだよ。選手は選手でガッチリ闘ってもらって、フロントは「こちらは一緒に飲みましょうや」ってやってるほうがいいんだよな。せっかく話題になったんだから、いい意味でそれを転がしていってほしいよな。
ガンツ では、大晦日の話題はこれぐらいなんですけど、年が明けてから、ついに五味隆典のUFC参戦が発表されましたね。
玉袋 ついに決まったか。頑張ってほしいねえ、燃えてほしいよ！
椎名 誰とやるの？
ガンツ まだ正式発表ではないですけど、噂ではケニー・フロリアンです。
椎名 どういうタイプの選手だっけ？
ガンツ オールラウンダーですね。ボクシングもうまいし、グラップリングもうまいし、レスリング能力も高い。夏にBJペンと闘ったときは負けてしまったんですけど、このあいだクレイ・グイダっていう、これまたいい選手と闘ってチョークで一本勝ちしたんですよ。メチャクチャ強いです。
玉袋 だから、五味がUFCで闘ってくれるのはうれしいんだけど、燃えてくるより、心配のほうが先に立っちゃうんだよな。江夏（豊）がテスト生として大リーグに行ったときみたいな感じなんだよ。

サワーからロングスパッツを奪うのは江頭からタイツを奪うようなもんだよ



©FEG Inc

最後の最後までカッコよく終わった魔裟斗。変態とは縁遠い存在であったが、その功績は非常に大きいものがあるのは、言うまでもない。お疲れさまでした！

ガンツ もっと若いウチに行ってほしかった、というか（笑）。
玉袋 江夏もよ、日本で行くところがなくなって、大リーグに行こうとしたようなところがあったから。なんか、五味もそんな感じがしねえでもないんだよ。とにかく、ピンク・レディーの海外進出みたいにならないことを祈るよ。まあ、PUFFYだって最初はずっこけたけど、ああやって向こうでアニメ化されたりする例もあるし、プリンセス・テンコーだって成功してるしな。となると、プリンセス・テンコーなのかな、五味って。
ガンツ どんな結論だ（笑）。
玉袋 いや、俺は五味のことが好きなんだよ。だけど言葉が出てこないっていうのは、どういうことなんだろうなって。それは残酷な結末が見えちゃってるってことなのかな？ って思ったりするんだよ。
椎名 俺もちょっと、いまは勝てそうな気がしないんですよね。
玉袋 それを覆して勝つのが"俺たちの五味"なんだけどね。
椎名 どれぐらいモチベーションがあるんだろう？ って思いますよね。これが昔の練習環境で、PRIDEのときぐらいのモチベーションがあれば「いける！」って思えるんだけど。
玉袋 となると、木口会長がオクタゴンサイドにいるかどうかってところも気になるよ。アメリカまで観に来るのかどうか。
ガンツ やっぱり変態はセコンドまで気になりますよね（笑）。
玉袋 とにかく燃えてくれ！ それだけだな。あとはよ、もう一つ触れるの忘れてた話題があったよ。前田（日明）の参院選。
ガンツ これは2010年、真夏の大一番ですね（笑）。
玉袋 ある意味、真夏の『Dynamite!!』だよ。前田日明立候補って、いつ爆発するんだろうってな。
椎名 史上最大最恐の国会議員が誕生するかもしれない（笑）。
玉袋 選挙活動が始まったら、ガンツが密着しないとな。
ガンツ なんだか大スキャンダルになりそうですけど……。
玉袋 ガンツが密着レポートしたら最高だよ。その光景を俺が密着したいくらい。
椎名 『ニューイヤー・ロック・フェス』の潜入レポートみたいな感じで（笑）。
ガンツ ま、2010年も何が起こるかわからないってことで、とりあえず変態新年会もお開きにしましょうか。
玉袋 どうなるかわからねえけど、俺は『kamipro』が残ったっていうだけでいいよ。だって俺、ガンツとお別れだと思って、俺の新しい本を5冊、自前でプレゼント持ってきたんだから。偉いよ、俺。
ガンツ ありがとうございます！ その本は読者プレゼントにさせていただきますので。というわけで、今年もよろしくお願いします！

【10年1月12日／都内・『加賀屋』中野坂上店にて収録】

玉袋筋太郎編『声に出して言えない日本語』5名の変態様にプレゼント！

人前で「声に出して言う」のはちょっとはばかれるストレートな表現の言葉を、なにげに笑える言葉に言い換えた、大人の言い換え辞典！　会議や飲み会でウケること間違いなしのこの一冊を玉ちゃんのご好意により、読者5名の変態様にプレゼント！　応募は143ページ参照





これが重大発表!?
識者・関係者が独断と偏見で選ぶ

マット界にとって激動の10年となった2000年代（00年から09年まで）。
ちょうど区切りがいいってことで、
今回は2000年代のMVPを識者&関係者の方々におうかがいした。
振り返れば、あんな人も活躍したし、こんな人も凄かったぞ。
10年のマット界を思い出しながら、どうぞ!

構成／松下ミワ

【アンケート項目】

①あなたにとって2000年代のMVPは誰ですか?
②あなたにとって2000年代のベストバウトはどの試合ですか?
③あなたにとって2000年代のマット界最重大事件はなんでしたか?
④あなたにとって2000年代のワーストMVPは誰ですか?



石井史彦

米国カリフォルニア州サンノゼ在住、MMAジャーナリスト。AKA（アメリカンキックボクシングアカデミー）では日本担当として選手を多数招聘している。デイビッド・カマリロ（ゲリラ柔術主謀）に師事、2009年パンナム・オヤジクラスチャンプ。

①BJペン
②ジョルジュ・サンピエールvsジョン・フィッチ
（08・8・9『UFC87』米国ミネソタ州ミネアポリス、ターゲットセンター）
③日本格闘界におけるレフェリングの問題
④09年『Dynamite!!』で〝中指立て&舌出し〟を放映したTBS

▼①06年にGSP、マット・ヒューズと敗戦が続いた際、とくに疑問視されたのがスタミナの問題。その風説を見事に吹き飛ばすだけでなく、率いるタイトル挑戦者をサブミッションおよびTKOで完勝。トップクラスのUFCライト級ファイターが全員2軍に見えてしまうほどの実力の差を嫌という程見せつけてくれた。まさにコンプリートのパウンド・フォー・パウンド世界最強MMAファイター。②GSPが1ラウンドからダウンを奪い、優勢に試合を進めてるはずなのに、フィッチは常に立ち上がり最終の5ラウンドでは逆にGSPを攻め込んでいた。仮に6ラウンド目があったら……。GSP相手に再戦を期待させる数少ない存在。③本誌のみでなく専門誌各紙で数回にわたり取り上げた問題である。選手を守る意味でも、また今後の格闘業界の成長のためにも改善されることを切に祈っている。00年代の締めとなった09年『Dynamite!!』でも疑問の残るレフェリング（のちに正式抗議）が見られたことが後味の悪い2010年を迎える結果となってしまった。④日本ではジョークで済むのかもしれないが、『HDNet』で放映されていたアメリカ国内では殺し合いにまで発展するほどの行為。TBSでは録画放映ということから編集する機会があったのにそれを怠ってしまった。魔裟斗の清々しい引退試合とあまりにもコントラストが激しすぎた。この行為をお茶の間で観た一般のファン層がMMAから離れなければいいが……。

乾 晋也

思い返すといろいろあった2000年代、この先10年後の格闘技界ってどうなちゃうの！ 不安ばかりがよぎる、スポーツカメラマン。

①桜庭和志
②桜庭和志 vsホイス・グレイシー
（00・5・1『PRIDE GP 2000決勝戦』東京ドーム）
③2003年大晦日、格闘技テレビ戦争の始まり
④秋山成勲

▼①それまで絶対王者であったグレイシー一族を2000年に入り完膚なきまでに叩き潰した功績は大きい。②とくにホイス・グレイシーとの闘いは、日本格闘技界の伝説となりうる名勝負と思われる。③言うまでもなく、世の中異常なまでの盛り上がりを見せた年末テレビ格闘技戦争。このあと、分裂、消滅を繰り返した末にいまの格闘技界があるとすれば2003年がターニングポイントであり序章であり大事件であったんだと思う。④日本格闘技界の伝説となりうる名勝負をした選手から、ヌルヌルで勝とうなんて！ 2000年代のワーストMVPはほかにいないでしょう、彼以外。

井上崇宏

ペールワンズ総帥。本誌人気企画「変態座談会」のレギュラーメンバー。山本小鉄のモノマネは絶品であり、あまりにも似すぎていることから一部では「井上小鉄」と呼ばれることもある。

①桜庭和志
②ユン・ドンシクvsメルヴィン・マヌーフ
（07・6・2『Dynamite!! USA』米国カリフォルニア州、ロサンゼルス・メモリアル・コロシアム）
③破壊王死去
④とくになし

▼MVPを「とくになし」にしちゃうと「スカしてんな～」と思われそうなのがイヤなので妥当な線で決めて、ベストバウトは在米韓国人が嬉しすぎて狂喜してるのを目の当たりにしたのも込みで、最重大事件は自分でも意味がわからないくらい落ち込んだアレで、ワーストMVPはとても一人に絞りきれませんでした！ いまのマット界はいろんなことが「思うてたんと違う!!」（笑い飯・西田）です。

大川義之

元『kamipro』編集部員にして、『kamipro ドットコム』の韓国格闘技コラム「韓流MMAニュース」を連載中。7年間住んでいた韓国の格闘技情報を集めるのが趣味。

①エメリヤーエンコ・ヒョードル
②桜庭和志 vsホイス・グレイシー
（00・5・1『PRIDE GP 2000決勝戦』東京ドーム）
③三沢光晴さんのリング死
④ダナ・ホワイト

▼①このコンセプトならMVPは00年にデビューしたヒョードルで決まり。最初の2年間を除き、ピラミッドの頂点に〝皇帝〟が揺るぎなく君臨したことで、MMA界においてじつにわかりやすい力関係を作り上げた。次なる10年紀に向けては、近々デビューが噂されるエメリヤーエンコ三兄弟の三男、イワンの存在が楽しみ。②5分3R（および5R）ルールが定着した現在のMMA界では、これに比肩する極上の名勝負は二度と作り出せない。③マット界はこの事件を次の10年に活かすべきである。④理由はどうあれ、期待させた格闘技版スーパーボウルを実現させられず、世界最高峰の試合を日本で観られなくさせた象徴的存在として、ドメスティックな理由で選出。

掟ポルシェ

ロマンポルシェ。のボーカルとか路上でちんぽ出したりとかなんかいろいろしたりする人。

①モーニング娘。
②ハロプロコンサート
（01・9・8、山梨県清里高原ふれあい広場）
③プロレスというものにさほど興味が持てなくなったこと
④不景気

▼①プロレスよりハロプロだった10年。②やっぱ清里でしょ。③&④あきらかに間違って呼んじゃった海外のショッパイレスラーが好きなんですが、景気が悪くなったのでもう海外からわざわざリー・ガクスーと親父とか来ないと思うと寂しいです。

小佐野景浩

『週刊ゴング』編集長を経て、現在はフリーとして『Gスピリッツ』やサムライTV『S-ARENA』などで活躍する熱血プロレスティーチャー。

①小橋建太
②桜庭和志 vsホイス・グレイシー
（00・5・1『PRIDE GP 2000決勝戦』東京ドーム）
③三沢光晴の悲しい事故
④なし

▼私はプロレス業界の人間なのでMVPはいかにプロレス界を盛り上げてくれたかが基準。そうなると格闘技ブームの中で、総合とは違うプロレスの強さをアピールした小橋かな、と。また腎臓がんを克服しての復帰は世間一般の人にも勇気を与えたことも大きなポイント。人々に活力を与えるのがプロレスラーだ！ ベストバウトは桜庭がグレイシー一族を撃破した一戦。彼がプロレス界に経済効果をもたらしてくれればMVPだったが……。重大事件は昨年6月の三沢さんの事故。悲しい出来事だったが、あれによってプロレスは命を落とすこともある厳しいスポーツ・エンターテインメントであり、レスラーは命を懸けて取り組んでいることが認識されたと思う。

金沢克彦

元『週刊ゴング』編集長。通称＝GK。1961年12月生まれの〝アラフィフ〟で、記者キャリアは約25年。現在の肩書きはスポーツライターだが、プロレス解説者としても有名。

①武藤敬司
②小島聡 vs天山広吉
（05・2・20 新日本プロレス IWGPヘビー級&三冠ヘビー級ダブル選手権 両国国技館）
③『週刊ゴング』廃刊
④小川直也

▼①WCW遠征から目標が定まらないなか帰国したが、倒壊寸前の全日本プロレスの救世主となり、ついには全日本の社長へ。神であるアントニオ猪木と180度違う世界観を作り上げた。47歳のいまなお現役バリバリで、その肉体美を維持する努力も称賛に値する。②誰もが60分時間切れドローを予測するなか、天山が脱水症状で戦闘不能に陥り、59分45秒でガチンコ決着。IWGPベルトを放り投げた小島のパフォーマンスも秀逸。③『ゴング』廃刊によって活字プロレスは終焉を迎え、業界衰退に拍車をかける結果を招いた。④何をやっても中途半端で、プロレスラーなのか、格闘家なのか、柔道家なのか、いまもってサッパリわからん。強いて識別するならタレントというほかはない？

菊池茂夫

パンクを中心になんでも撮影しまくる刺青カメラマン。刺青写真集『ROCKER'S TATOO』絶賛発売中。

①桜庭和志
②桜庭和志 vsホイス・グレイシー
（00・5・1『PRIDE GP 2000決勝戦』東京ドーム）
③PRIDE崩壊
④ボブ・サップ

▼①桜庭なしで総合ブームはありえなかったでしょう。最近は試合前から祈るような気持ちで応援している。ボコボコに殴られて負ける試合はもう観たくないが、弁慶戦は泣くほど感動した。②歴史的な意味合いも込みで、この試合以外考えられない。③昔、UWFが解散したとき以来落ち込んだ。PRIDEも遠い昔の話になってしまったなあ。④ノゲイラと戦ったときは感動したんだけどなあ。その後の、びびり顔、秒殺負け、ドタキャン、すべて見苦しい。昔、Tシャツ買ってしまった(笑)。

菊池 孝

1956年立教大学卒業後、新聞社社会部記者、野球雑誌記者を経て、60年3月よりプロレスを担



当。今年でプロレスライター歴50年になる。力道山の全盛期、馬場、猪木のデビュー戦を取材し、いまなお会場をウロチョロしている生涯一現場記者。

①ノアの小橋建太
②カート・アングル vs 永田裕志
（09・1・4 新日本プロレス 東京ドーム）
③三沢光晴の死
④アントニオ猪木

▼①小橋は鉄人王者としてノアを業界のトップにのし上げ、腎臓ガンで倒れたが、奇跡の復活を遂げた一戦では日本武道館に超満員の観客を集めた。いま、一人で武道館を満パイにできるのは小橋しかいない。②プロレスの大技でも地味なレスリングでもドームの大観衆を沸かせ、それぞれ得意技も出しつくした。タイミングに寸分のズレもなくこの二人でなければできないパーフェクトな名勝負だった。③トップ団体のエース社長の死、それも試合中というのは大きなショックだった。大黒柱を失なったノアに今後もまだ後遺症が出るかもしれない。それが心配だ。④現役を引退し、新日本プロレスとも縁を切りながら、いまだにマット界にちょっかいを出してくる猪木。IGFなどは嫌がらせとしか思えない。マット界にとっては邪魔な存在である。

菊地成孔

音楽家、文筆家。ジャズミュージシャン活動の一方、音楽、料理、ファッションなどの著作多数。格闘技批評に『サイコロジカル・ボディ・ブルース解凍』（白夜ライブラリー）がある。

①エメリヤーエンコ・ヒョードル
②エメリヤーエンコ・ヒョードル vs ミルコ・クロコップ
（05・8・28『PRIDE GP 2005決勝戦』さいたまスーパーアリーナ）
③DSEの盛衰
④多少気の毒だけれども、とくに後半はヒクソン

▼いろいろあるけれども、結局00年代はPRIDEだった。ということでいいんじゃないかと思います。ディケイドってのは往々にして5年ずつの前半後半に割れますが、前半のヒクソンは神、後半は堕ちた神ということで、ワタシの見立てでは、とっくに神なき時代なのではなく、いまから神なき時代です。

佐伯 繁

富山県出身の名古屋育ち。現在はDEEP代表のほか、DREAM広報やジュエルスのスーパーバイザーなども務める格闘技界のキーマン。糖尿病で担当医師からは食事には気をつけるようキツく言われているが、油断すると暴飲暴食三昧の40歳。

①佐伯繁
②エル・カネック vs 大刀光
（01・12・23 DEEP ディファ有明）
③2001年のDEEP旗揚げ
④アンソニー・マクデビット

▼①00年代のMVPっていったら、2001年1月にDEEPを旗揚げして、奇跡的にいまも続けてる俺しかいないでしょ。誰も選んでくれないだろうから自分に一票入れとくわ。ウシシシシ。②DEEPにはルチャの選手も何人か上がったけど、メキシコで〝ルチャの帝王〟と言われてる大物のカネックと、プロレスラーにして相撲取りの大刀光の試合っていうのは、我ながらいいカードだと思ってる。まだ、いまみたいに「MMA」って言葉が浸透していない時代の、まさにリアル異種格闘技戦だわな。カネックはルールもよく理解してなくてチョークをかけられて「反則だ」とアピールしながらも最後はパウンドで勝つっていうのも凄かったよなぁ……。③これも俺が選んだらこうなっちゃうわな。中でも一番印象深いのは02年9月の田村 vs 美濃輪がメインの有明コロシアム大会。DEEPにとって最大の大勝負だったんだけど、ウチが大会を発表したあと、『Dynamite!!』の国立競技場大会とかLEGENDの東京ドーム大会が発表になって、結果的にコケちゃったという（苦笑）。まあ、それも含めてDEEPの運命かなとも思ったけど、我ながら、よく10年持ちこたえたよな。④ワーストはコイツしかいないよ。07年8月のDEEP後楽園で横田（一則）と闘うはずだったんだけど、来日した時点で体重が8キロオーバー。前日計量も3・5キロオーバーで、当日まで可能なかぎり落とすよう監視させてたんだけど、その目をかいくぐって大会当日に成田エキスプレスに乗って帰っちゃったんだから（笑）。そのときの罰金ももらってないけど、あんなヤツ初めて見たよ！

坂本 靖

1966年12月14日、青森県出身。パンクラスには93年の旗揚げから参加。現在はパンクラス代表ながら、マッチメイクや交渉事以外の仕事もこなし大忙し。

①近藤有己選手
②近藤有己 vs 郷野聡寛
（01・12・1 パンクラス 横浜文化体育館）
③北岡悟選手
④マイク・カイル（05・10・2 パンクラス 横浜文化体育館 vs 髙阪剛）と、マルセロ・タイガー（01・9・30 パンクラス 横浜文化体育館 vs 髙橋義生）

▼①パンクラスを背負い、リングに上がり続けたから。②燃えたから。③予想外の躍進だから！④この質問をあげる悪乗り感が『kamipro』らしいなあ。二人います。サミング王だから。最低。

笹原圭一

DREAMイベントプロデューサー。旗揚げ当時から広報としてPRIDEに携わり、『ハッスル』では赤いジャケットがムダに似合う初代GMとして活躍していた。

①桜庭和志とヴァンダレイ・シウバ
②桜庭和志 vs ホイス・グレイシー
（00・5・1『PRIDE GP 2000決勝戦』東京ドーム）
③PRIDEが休止したこと
④言えません

▼①前半は文句なしで桜庭和志。後半はヴァンダレイ。そして二人の闘いがPRIDEの世界観を創ったから、二人の闘いがMVPです。次点はヒョードル。②説明するまでもないかと。試合に至るまでの経緯、試合内容、試合結果すべてが文句なしの完全結晶のような試合。PRIDEがある意味、二度目の産声を上げたのがこの試合だから。③マット界にとっても、自分の人生にとっても大事件でした。で、2000年代ベスト興行があれば、『やれんのか！』です。

椎名基樹

ライター&変態。1968年生まれ。本誌にてコラム「サムライ三昧」連載中。総合格闘技が一番だが、ボクシングも相撲もキックも、結局プロ格闘技は全部好きな、脳内格闘家。

①桜庭和志
②桜井〝マッハ〟速人 vs フランク・トリッグ
（00・12・17 修斗 東京ベイNKホール）
③PRIDE消滅
④PRIDEを潰した人、誰？

▼①一番熱くさせられた選手だから。②一つには決められない。マッハが好きだから。ほか、マッハ vs 五味、ノゲイラ vs サップ、ノゲイラ vs ミルコ、ヴァンダレイ vs クイントン、桜庭 vs ホイス、桜庭 vs ビクトー、三崎 vs 秋山など同列。桜庭 vs ホイラー、ルミナ vs ボテーリョも同じだが2000年代ではないらしい（時が経つのは早いなあ）。③日本人はコスくて、女々しくて、バカだなあ。必ずこうなる。④日本の総合格闘技をダメにしたのは、間違いなく大晦日興行。となると、キッカケはアントン？ さすが！ でも、一番の馬鹿野郎は絶対いるはずなんだけどなあ——。

高崎計三

有限会社ソリタリオ代表。本誌携帯サイト『kamipro ムーブ』では「kamipro事件簿」を執筆中で、今日もマット界で何かの事件を追っている。

①魔裟斗
②船木誠勝 vs ヒクソン・グレイシー
（00・5・26『コロシアム2000』東京ドーム）
③PRIDEがあんなことに
④ロレンゾ・フェティータ

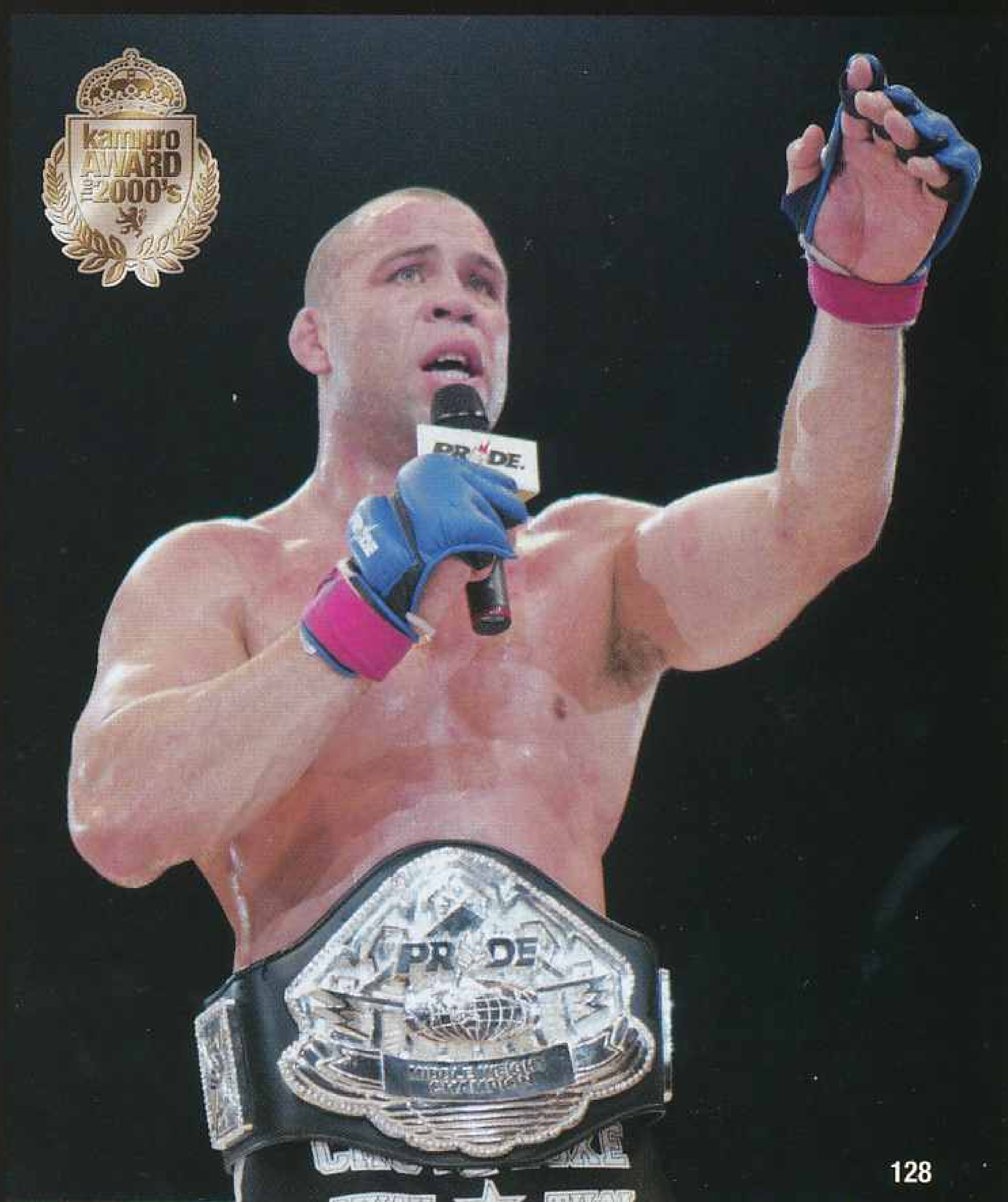
▼①まあ引退試合を観た直後でもあるし（笑）、あらためて一ジャンルを築き、引っぱり続けたということを評価。ホント、こんなファイターなかなか出てこないでしょう。②当時の自分の状況（新卒から働いた会社を辞める直前）とかも含めて、感慨深い一戦。そういやこれも事実上、ヒクソンの引退試合になるのか。船木の「負けたから引退する」はある意味、格闘家のあるべき姿とも思うし（その後、復帰したけど）。③まさかあんなことにまでなったPRIDEが急転直下あんなことになるなんてねえ。まあ、その前にあんなことにもなってたわけだけど。そんなモロモロひっくるめて。④オレがヤツの親だったら叱ってるね。「大金出して買ったオモチャだったら、しっかり遊びつくしなさい！ ホコリかぶってるよ！」。あ、「ホコリ」と「PRIDE（誇り）」がうまくかかってるな（笑）。つーことで。

高橋ターヤン

『kamipro』『映画秘宝』などに執筆しているフリーライター。『kamiproムーブ』では海外情報をお届けするコラム「This Week MMA」を担当。

①ダナ・ホワイト
②エメリヤーエンコ・ヒョードル vs ミルコ・クロコップ
（05・8・28『PRIDE GP 2005決勝戦』さいたまスーパーアリーナ）
③UFCの巨大化
④日本の格闘技ファン

▼①ダナに対してはいろいろ文句もあるし、含むところがある人は多いと思うが、MMAを「金の成る木」にした功績は計り知れない。よってMVPは





ダナに決定。もちろん2010年代にはワーストMVPになっている可能性も高い人物でもある。②は躊躇なくヒョードルvsミルコを選択。もっと凄い試合や、意味深い試合というのはあったかもしれないが、ぼくの中ではこれ以外ありえない。③は①とほぼ同じ理由。ファイトマネーだけで食える選手の裾野が広がったのは本当に素晴らしいことだと思う。④ファンが試合を見せてもらう対価としてお金を払うという習慣ができないかぎり、日本の格闘技界の復活は絶対にありえない。ネットをうろつく動画厨とか本当にみすぼらしいので死んでいただきたい。僅差のワーストMVP候補は、格闘技に対する愛も思い入れもないTBS。

ターザン山本!

なし。そんなもん必要ない。

①ミスター高橋
②小川直也vs橋本真也
(00・4・7 新日本プロレス 東京ドーム)
③『週刊ファイト』、『週刊ゴング』の廃刊。
④フジテレビ

▼①これしかないでしょう。②プロレスの虚実皮膜論を展開した最もプロレス的なものだった。③プロレスはマスコミあってのものだから。④PRIDEを斬ったフジテレビはマット界を潰した。この罪はでかい。

田中太陽

フリーライター。本業は日本プロ麻雀協会所属の麻雀プロと言い張るが定かではない。昨年は著書『魔王 秋山成勲 二つの祖国を持つ男』を上梓。

①エメリヤーエンコ・ヒョードル
②秋山成勲vs三崎和雄戦
(07・12・31『やれんのか! 大晦日! 2007』さいたまスーパーアリーナ)
③三沢光晴死去
④藤波辰爾

▼①2000年代をほぼ通じてMMAの〝最強〟であり続けた実績は大きすぎる。②ある意味でチャンピオンシップよりもファンを熱狂させ、世間をも巻き込んだMMA史に残る重要な試合。③有名プロレスラーの訃報が相次いだ2000年代ではあったが、やはり「業界のトップ的存在が試合中の事故により死亡」という大事件のインパクトは薄れることがない。④MMAよりもプロレスを選んだファンに対し、藤波の2000年代はまったく申し開きのできないものであったと思われる。新日本プロレス社長として、また往年の名選手として、プロレス界の衰退に一役買ってしまったと批判されても仕方がないであろう。

谷川貞治

※もしかしたら2009年MVPと間違ってるかも……悪しからず!

FEG代表。K-1イベントプロデューサー。これまでは自身のプロデュースを〝黒魔術〟などと呼ばれることが多かったが、最近はツイッターでファンとの交流を積極的に行ない、急速に株を上げている。

①魔裟斗
②魔裟斗vs川尻達也
(09・7・13 K-1MAX 日本武道館)
③DREAM&戦極合体!
④秋山成勲

▼①~③はボクのやったことで、④は大事な時期にボクから去っていったからです。

中川画伯

1977年生まれ。フリーのイラストレーター。犬&姪っ子に夢中! 1月4日に甥っ子も産まれたよ。新日本プロレス会場パンフレットにて『中川画伯のイラストロングスタイル』連載中。

①桜庭和志
②辻結花vsアンナ・ミッシェル・タバレス
(07・9・6 SMACK GIRL 後楽園ホール)
③第一次リングス活動停止
④榊原信行

▼①桜庭の前に桜庭なく、桜庭のあとに桜庭なし! ②とにかく最高! ゾクゾクしてワクワクして大興奮! 試合後、足がシビれて歩けなくなっちゃったぐらい。③寂しかった。試合後、横浜文化体育館から終電に間に合わなくてトボトボ歩いた夜道がスゴく寒くてスゴく寂しかったです。このあいだの『Dynamite!!』のアリスターvs藤田は「もしもリングスが続いてたら?」っちゅう「もしもシリーズ」として観ました。④詳しいことはよく知らないんだけどなんか悪いイメージ。「やり逃げ」って感じ。

橋本宗洋

フリーライター。『kami-pro』携帯サイトの連載コラムをまとめた単行本『PRIDEはもう忘れろ! 新時代格闘技のミカタ』がエンターブレインより発売中! 最近、ツイッターを始めてみました。

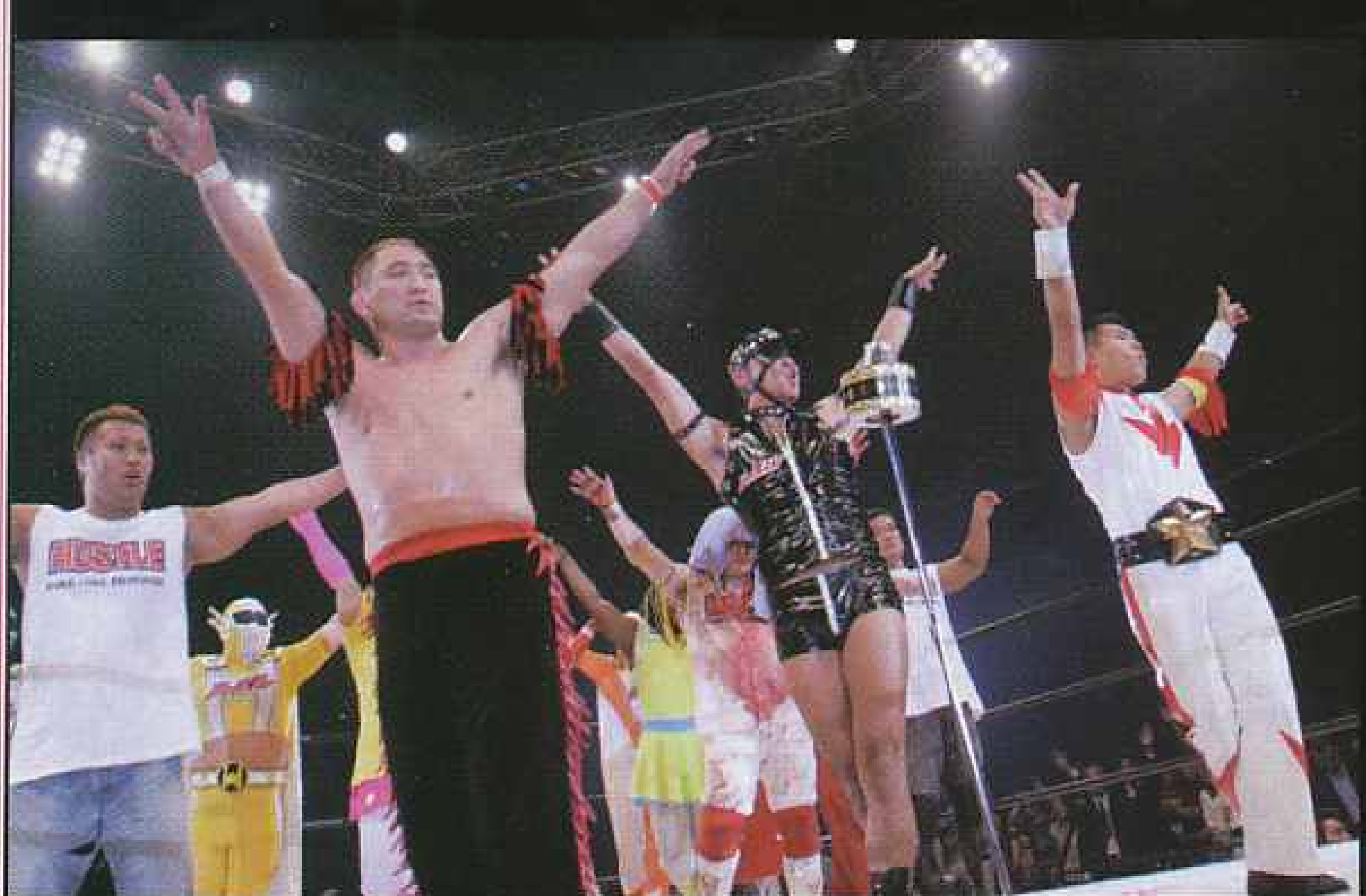
①小林聡
②小林聡vsオスマン・イギン
(01・11・30 全日本キック 後楽園ホール)
③K-1MAX旗揚げ
④小比類巻貴之(太信)

▼MVPは桜庭とかヒョードルとか魔裟斗とか考えたが、個人的にはやっぱり〝野良犬〟こと小林聡。凄まじく興奮させられたし、おそろしく落胆させられもした。これだけ感情を揺さぶられた選手はほかにいない。ベストバウトも、小林が無名の外国人相手に二度のダウンを喫し、そこからワンパンチで逆転KOした一戦。話題性のない試合が名勝負に化けてしまうところが小林らしさ。重大事件はPRIDEもあるが、これも個人的にMAX旗揚げ。日の当らないところにいたキックボクサーたちが〝世に出る〟瞬間の感動とダイナミズム。2010年は軽量級でそれが再現されてほしい。ワーストMVPはコヒ。単に嫌いとかじゃなく、本当に期待してたんだよ、小比類巻には。本っ当に期待してたんだ! なのにねぇ……。

原タコヤキ君

『kami-proドットコム』の人気ポッドキャスト「mi-pro」のカリスマ司会者。ギターと自転車と加圧トレーニングをこよなく愛する39歳。

①桜庭和志
②『PRIDE GP 2000』のvsホイスほか、一連のサクvsグレイシー
③『ハッスル』ができて、『ハッスル』がなくなったこと
④とくになし



▼2000年代!?　またタームが長いなあ。でも思い返すと、サクには本当に熱くなった。当時は大阪在住だったけど、いそいそ東京に観に行ったもんな。『ハッスル』にもビックリした！　なんといっても、一応師匠にあたる山口日昇さんが社長になって、記者会見とかやってるんやもん。ワーストとは全然違いますが、ボク的には井上義啓さんが亡くなられたことは、とても悲しい出来事でした。あと、マット界には関係ないですが、昨年、忌野清志郎がGODになったことも忘れられない事件でした。

花くまゆうさく

マンガ家。『kamipro』にて「豆リングの汁」を連載中。柔術は黒帯の凄腕。

①エメリヤーエンコ・ヒョードル
②思い出せない
③思い出せない
④TBS（亀田込みで）

▼アンケートって去年のだとずっと思ってたけど、2000年代だったのね。それは無理だわ、思い出せない。ヒョードルMVPしか即答できない。ちなみに去年のMVPは小見川、ベストバウトはマッハvs青木かしら。

平工幸雄

プロレスを撮り始めて20年以上の超ベテランカメラマン。今日もリングサイドで撮影するナイスミドル。

①武藤敬司
②三沢光晴&力皇vs小川直也&村上一成（01・4・18 ZERO-ONE 日本武道館）
③『ハッスル』の誕生と崩壊
④橋本真也と三沢光晴の死

▼①新日本を離れて全日本に行った武藤は、その後もプロレス界の中で常に話題を生み出し、盛り上げようとした。その功績が素晴しい。②とにかく緊張感。このときの緊張感はアントニオ猪木の異種格闘技戦に匹敵するものだった。それ以上に三沢光晴の存在感、〝キラー三沢〟が出現した感じが素晴しかった。殺気漂う小川直也に対して、夢幻のように消えた『ハッスル』。プロレス界に新しい波を起こそうとして、うねりとまではならなかったのが残念だったが、『ハッスル』的手法を取り入れた団体は多く存在する。③彗星のごとく誕生して、し、プロレス界に確実に一石を投じた。④けっして悪い意味ではなく、早くエスケープしすぎた。現在のプロレス界に二人がいないのは寂しい。

堀辺正史

日本武道傳骨法創始師範。本誌をはじめとした、武道・格闘技評論の第一人者。近著に小林よりのり氏との共著『武士ズム』がある。

①エメリヤーエンコ・ヒョードル
②魔裟斗vsアンディ・サワー（09・12・31『Dynamite!!』さいたまスーパーアリーナ）
③船木誠勝のプロレス復帰
④谷川貞治&テレビ局

▼①00年代を象徴する最強の存在といえば、ヒョードル以外にいないと思います。彼という存在は、90年代の高田vsヒクソン以上の存在感があったと思います。②私は魔裟斗こそ〝ミスター・ストイック〟と言える存在だと思います。彼の努力、そしてその努力をもとにした有言実行の象徴として、引退試合の勝利があったのではないでしょうか。魔裟斗の業績の象徴としてのベストですね　③私にとって船木という選手は、彼が若いときに深く関わっていたことがあり、常に気にかけていた存在でした。90年代にプロレスを捨て、真剣勝負の信念を貫いてきた彼が、00年代末にプロレスに回帰したというのは、個人的に大きな事件でした。④総合格闘技の反映はテレビとともにあったわけですが、ここ数年の谷川氏とテレビ局は、その格闘技をゆがめて大衆に伝えてしまったとしか思えません。格闘技をわかりやすくしようとしていることが、逆に格闘技本来のおもしろさを伝わりにくくしている。大晦日のテレビ中継で、魔裟斗vsサワーの以前行なった試合を、あたかもいまやっているように何度も流しているのはその一つの例でしょう。視聴率を稼ごうとする小細工が、どんどん逆効果になっていると思います。

マッスル坂井

1977年11月5日、新潟県出身。早稲田大学第二文学部在学時にDDTに映像スタッフとして参加。プロレス以外にもお笑いへの進出、短編映画作品の監督など、多彩な才能が注目を浴びている。

①高木三四郎
②男色ディーノvs透明人間（03・5・25 DDT 春日部インディーズアリーナ）、小川直也vs吉田秀彦（05・12・31『PRIDE男祭り』さいたまスーパーアリーナ）
③『ハッスル』と『マッスル』の誕生と……
④慢性的な不景気

▼DDTや『ハッスル』などエンターテインメントプロレスが生まれ、なんとなく終わった10年だったと思う。その過程で高木三四郎や『ハッスル』はいったいどれだけの数の、プロレスのリングに上がる予定ではなかった人たちにそれを与えてしまったのだろうか。いまはよくわからない時期になってるけれど、僕も含めてみんな感謝してるはずですよ！

松林 貴

本誌・編集次長。うまいものとおもしろいイベントがある場所には必ず現われる。今年は2月に行なわれる初のUFCオーストラリア大会に行こうかどうか迷い中。ちなみに2010年のテーマは「絶対的複勝王」！

①ダナ・ホワイト
②ヴァンダレイ・シウバvsクイントン・〝ランペイジ〟・ジャクソン（04・10・31『PRIDE・28』さいたまスーパーアリーナ）
③PRIDE FCワールドワイド日本事務所閉鎖（07・10・4）
④カルビン・エアー

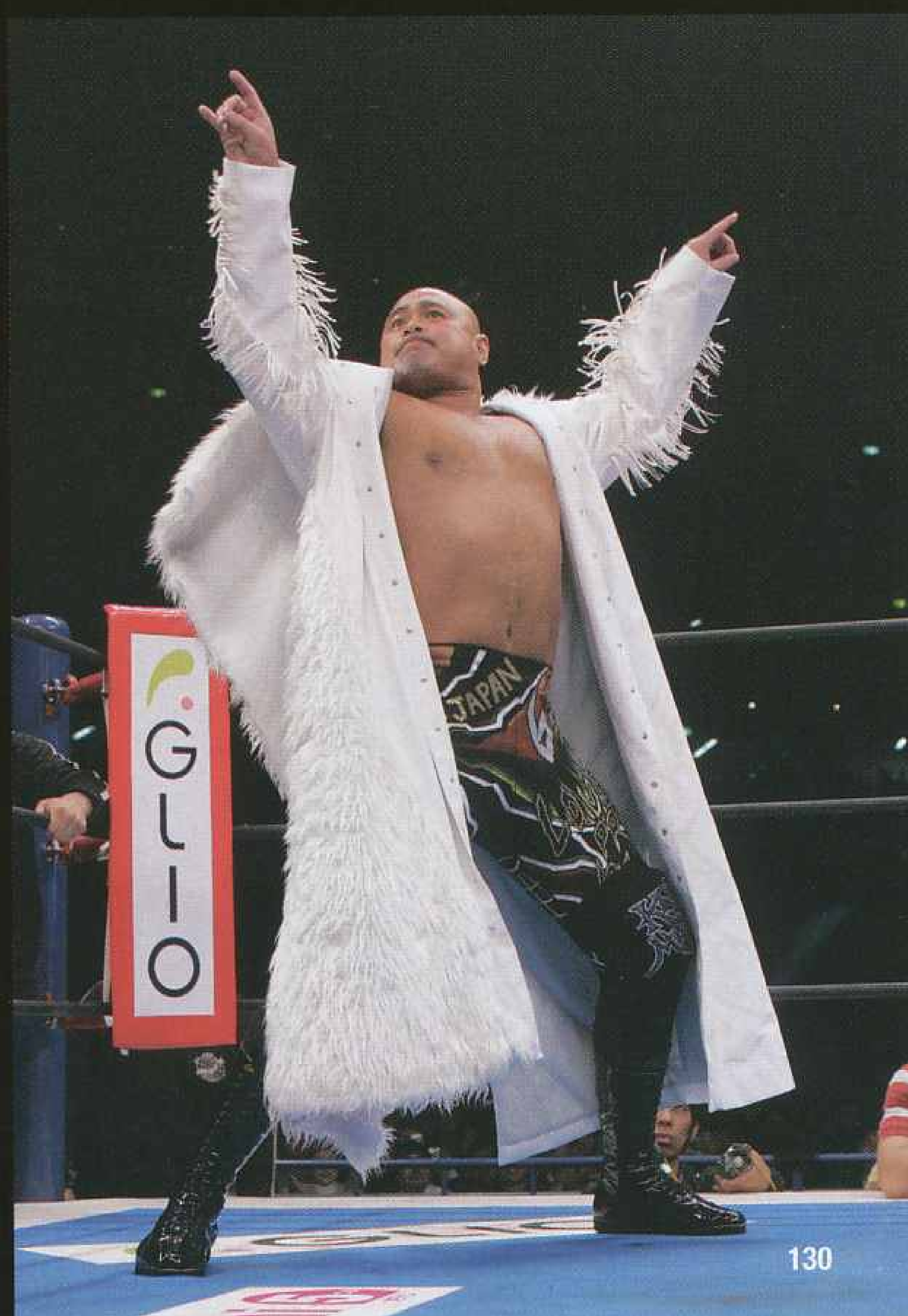
▼①「2009年末の時点で最も勝ち組な人」ということで、MVPはダントツでデイナ代表。その行動や発言などのすべてが成功に裏打ちされていて、まさに一人勝ちというか格闘技界の天下人となった。②この10年間で最も衝撃的な画として目に焼きついている「良い子は見るな！　世界最悪タイトルマッチ」な、この試合。『UFC92』（08・12・27）での3度目の対戦も込みで超々ベストバウト。③事件というか、「PRIDE、これにて終了っ！」な日として鮮烈な印象を受けた。この日を境にUFCはますます隆盛に、日本の格闘技は急激に沈降していった象徴的なジャッジメント・デイ。④格闘技ファンにさんざん期待だけさせておいて、ダナ・ホワイトが一言で喝破したとおり単に「ジョーク」だったこの御仁。

八木賢太郎

フリーライター。ちっちゃい頃の『紙のプロレス』時代からの居候編集者。現在も永久非番中。〝ハッスル事情通〟として知られる。

①髙田総統
②坂田亘vsザ・エスペランサー（07・11・25『ハッスル・マニア2007』横浜アリーナ）
③『ハッスル』誕生→繁栄→消滅
④山口日昇ハッスル社長

▼〝ハッスル事情通〟としては、やはり『ハッスル』関連が2000年代最大の事件。良くも悪くもおもしろい団体だったなぁ、と。つくづく惜しい団体を亡くしました……あれ？　まだなくなってない？　とにかく、『ハッスル』があそこまで大きくなったのは、やはり座長・髙田総統のおかげ。全盛期のキレキレっぷりはサイコーでした。ベストバウトに挙げた『マニア』のときは読売新聞のテレビ欄にまで取り上げられたりもしました。逆にワーストは、やはり山口社長。放漫経営で潰しちゃったもん。でも、旗揚げ当時からの苦労も知ってるので、裏MVPをあげたいです。どうか、今後は草葉の陰からプロレス界を応援してください。合掌……あれ？　まだ死んでないっけ？



柳澤 健

現在「日本レスリングの物語」を『Fight&Life』で、「1993年の女子プロレス」を『kamipro』で連載中。聞けば聞くほど全女こそ世界最狂団体と実感。「ルー・テーズの自伝『Hooker』を30分で読めるようになりたい」と思って英語を少しずつ勉強中。

①青木真也
②青木真也vs廣田瑞人（09・12・31『Dynamite!!』さいたまスーパーアリーナ）
③PRIDEの消滅
④TBS

▼①②昨年大晦日の廣田戦は私にとって衝撃的であった。明治時代、海外でボクサーと闘った柔術家は、必ずやあのように闘ったはずだからだ。青木は全盛期の山本〝KID〟徳郁や五味隆典よりも魅力的なファイターである。レスリングの技術で倒し、パウンドで倒す。そんなことはUFCの選手が皆やっていることだ。青木には独特のスタイルがあり、海外で特別の評価を受けるのもまったく当然である。シャオリン戦も、私にとってはじつに魅力的な試合であった。③格闘技が地上波テレビ局にとって魅力的なコンテンツであることなど、私にとってはどうでもいいことである。格闘技プロモーションは、テレビ局からどのようにして自立するかを必死に考えなくてはならない。④TBSはスポーツ中継に関しては最低のテレビ局である。国際プロレスの昔から、亀田兄弟に至るまでまったく変わっていない。日本代表の岡田監督を激怒させたのも、たしかTBSであった。スポーツにリスペクトのまったくないテレビ局が、格闘技最大のイベントを中継していることが悲しい。

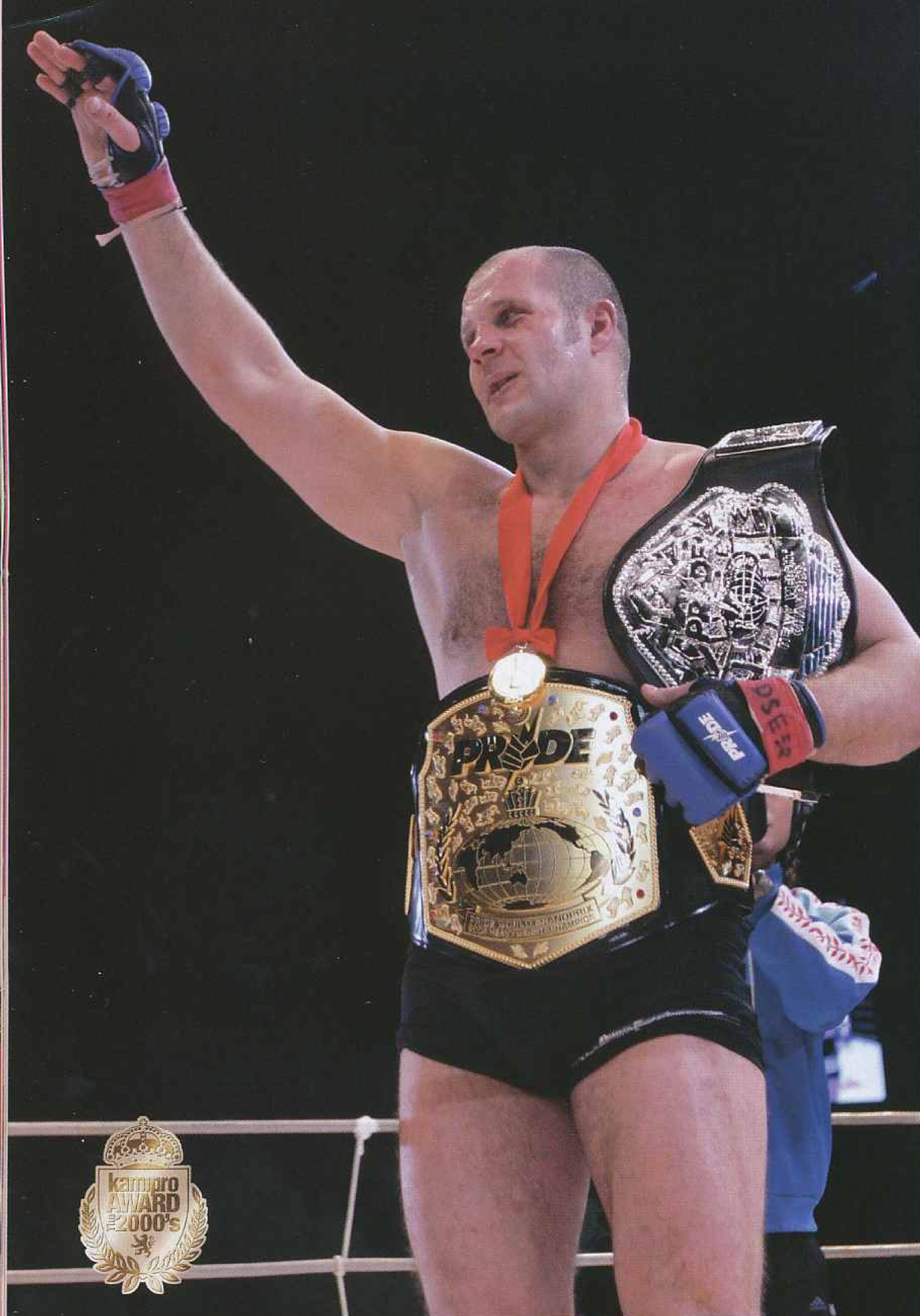
ジャン斉藤

本誌編集長。〝雀鬼〟こと桜井章一の内弟子を経て『kamipro』編集部へ。永久電機などアントン事業の調査や破綻系興行観戦をライフワークとする34歳だが、自分の会社がハッスルしすぎて破綻寸前(!?)。

①ミルコ・クロコップ
②03年大晦日『猪木祭り』百八つビンタ暴動

③PRIDEの消滅
④「視聴率＝おもしろさ」だと勘違いしているバカ関係者

▼00年代初頭のプロレスと格闘技のクロスオーバー期、そしてPRIDE絶頂期の立役者であり、ついにはUFC帝国にも乗り込んだ。常に競技と文化の最前線で闘い続けたミルコ・クロコップの活躍なくして、いまのMMAシーンの隆盛はありえないと思う（もっと言えば、90年代のK-1全盛時も体験している。こんなファイターはほかに見当たらない）。②試合じゃないけど、見返した回数がいちばん多かったから。桜庭和志vs秋山成勲、青木真也vs廣田瑞人と、大晦日は何かが狂う一日だ。③これしかない。④あと何かと「大衆」「お茶の間」を口にするバカ。「おもしろいか、おもしろくないか」を自分の目で判断できなくなってしまっている現状は凄く危険だが、自分の会社はもっと危険だ（!?）。



坂井ノブ

『kamiproドットコム』と『kamiproムーブ』をおもに担当。ポッドキャスト番組「mi-mi-pro」では番頭さんを担当。

①エメリヤーエンコ・ヒョードル
②橋本真也vs金村キンタロー
（03・5・5 冬木弘道引退興行 川崎球場）
③PRIDEと『ハッスル』の消滅
④ボブ・サップ

▼MVPに関しては桜庭和志、髙田総統、小川直也なども考えましたが、リングスでデビューしてから全米地上波生放送にたどり着くという成り上がりを〝強さ〟で実現させたヒョードルに。ベストバウトは仕事で行った現場で泣いてしまったのは00年代を通じてこの試合だけだったので。重大事件は、良くも悪くも大きな影響を業界内外にもたらした両団体の消滅（一つはまだ存続中か？）。K-1モンスター路線はいまでも大好きですが、あの勢いを継続できなかったのはこの男のせいかな、と。

堀江ガンツ

本誌編集部。ちっちゃな頃から変態的プロレスファン＆UWF信者であり、人気企画・変態座談会の主宰者も務めている。

①エメリヤーエンコ・ヒョードル
②エメリヤーエンコ・ヒョードルvsミルコ・クロコップ
（05・8・28『PRIDE GP 2005決勝戦』さいたまスーパーアリーナ）
③パコージンさん＆I編集長死去
④『INOKI BOM-BA-YE 2003』を開催した人

▼①おそらくヒョードルは2000年代、一度も「年間MVP」に選ばれていないと思う。2000年なら桜庭だし、01～06年ぐらいはミルコが強烈な光を放っていた。しかしこの10年間、一度もその光を弱まらせることなく輝き続けたのはヒョードルただ一人。このMMAが〝人類60億分の1最強〟というロマンを抱けるのは、ひとえにヒョードルが世界最強の男であり続けてくれているからだと思う。②両者の実力、ファンの期待度、モチベーションなど、すべてのタイミングが合致した、文字どおりのMMA頂上対決。ヘビー級とは思えぬスピードと、緊張感あふれる攻防は、映画『DRAGONBALL Evolution』なんかより、よっぽど実写版『ドラゴンボール』の世界だった。2000年代のPRIDE、2000年代のMMAというのは、この試合のためにあったのだと思う。③リングス〝ソ連〟の時代から、20年近くにわたりロシアの強豪選手を日本に送り込み、総合格闘技に幻想とロマンを運んでくれたパコージンさん。個人的にもたいへんお世話になったが、パコージンさんがいなければ、カレリンが前田日明と闘うことも、そしてヒョードルがデビューすることもなかっただろう。また、I編集長について語るまでもないだろう。井上さんがいなければ、活字プロレスもそして『kamipro』も存在しなかっただろう。合掌。④いまの日本格闘技界が苦戦している遠因は、すべてここにあるのではないだろうか。

阿修羅チョロ

長州力最初の引退試合が行なわれた98年1・4新日本ドーム大会当日からダブルクロスに勤務し、いろいろ気がついたら00年代は終わっていました。

①星野育蒔（マァ☆ティン）
②藪下めぐみvsグンダレンコ・スベトラーナ
（00・12・5『ReMix』日本武道館）
③05年7月の破壊王の死
④WJプロレス

▼00年代を振り返ってみましたが、自分にとって星野育蒔以上のインパクトを残した選手はいませんでした。マァ☆ティン最強！②男子も含め、無差別級マッチはいろいろと行なわれましたが、内容＆結果ともにこの試合が一番印象深いです。藪下最強！③いままで40年近く生きてきて一番泣いた出来事でした。破壊王最強！④ワーストに選んでしまいましたが、はたから見てこれほど愉快なプロレス団体はありませんでした。ある意味、ベストと言えるかもしれません。永島のオヤジ、力、カテエ！

松下ミワ

本誌編集部。元・読者ページ担当。一部ではいまも〝読者ペイジ〟ジャクソンを陰で操っているともっぱらの噂。しかし、今号はなぜかリュウ・トクリが占拠!?

①桜庭和志
②エメリヤーエンコ・ヒョードルvsチェ・ホンマン
（07・12・31『やれんのか！ 大晦日！ 2007』さいたまスーパーアリーナ）
③『やれんのか！ 大晦日！ 2007』開催
④『週刊現代』

▼①この10年、誰が気になっていたかを考えると、やっぱりこの人。いつ何時でも誌面を賑わせてきたファイターだし、ついでに個人的な理由としては、この業界に入ろうと思ったきっかけになったファイターでもあるからです。ありがとうございます！　……と言っていいのかなあ。②大興奮しました！　一緒に遊園地に行ったことも含めて忘れられません！③PRIDEの歴史すべてが煽りであり、いまの日本マット界が続いてるのは『やれんのか！』が開催されたからじゃないかと思います。④考えうるワーストMVPは、そうは言ってもなんらかの利益目的だったりすると思います。コレ以外は……。

鈴木佑

本誌編集部。この業界に入って最初にかかわった紙媒体が、黄昏の雑誌『KAKUTOGI GRAPHIC UPPER』ということはかたくなに否定。

①長州力
②五味隆典vs川尻達也
（05・9・25『PRIDE武士道 -其の九-』有明コロシアム）
③『ハッスル』崩壊劇
④ターザン山本！

▼①00年にアッサリ現役復帰。その後、WJ崩壊で地獄のど真ん中へ。しかし、長州小力によって再ブレイク。いまも御年58歳ながらリーゼン党入りしたり、ミュージシャンのPVで片桐はいりとコミカルな夫婦役を演じたりとアグレッシブに活動中。その姿はどんな逆境になっても、負けないこと投げ出さないこと逃げ……（以下略）を教えてくれた。②この10年間で一番繰り返し観た試合だから。③「山口（日昇）社長が電話に出てくれないんです」というKGを慰めてたのに、気づいたら自分がKGに「元気出して頑張りましょうよ」と慰められてたのは苦い思い出。④この10年でここまで凋落したマット界の住人もいない。ワースト次点は同率で歌さんと夢香姫。

これが噂のプロレス&格闘技携帯サイト!!

kamipro Move カミプロムーブ

2.7 パンクラス有明大会の見どころ紹介



誰が喜ぶかはわかりませんが……

パンクラス坂本代表vs KEI山宮
因縁トークバトルを動画で配信中!!



[毎日ブログ] 今成正和が濃厚な日々を綴る



渦中にある青木真也のコラムが読める!!

シー・シェパードの体当たりよりもデンジャラスな日替わりメニュー

月	郷野聡寛の『MONDAY NIGHT FEVER』	"文系格闘家" 郷野聡寛が本音で送る! 試合や入場パフォーマンス同様に文章でもマルチな才能を発揮してます!
火	ニュース特選『kamiの一週間』	ここ一週間の出来事をヨタ話で振り返るいろんな意味で反響が大きい爆弾企画。これを読まずにマット界は語れない!
水	橋本宗洋の『格闘裏グルメ』	昨年、激痩せした元・重量級ライター(現在はヘビー級?) 橋本宗洋が格闘技界の見どころをズバリ解説!
木	高橋ターヤンの『This Week MMA』	最先端と言われる北米のMMAを中心に日本の目線で読み解きます。海の向こうの気になる話題を掘り下げろ!!
金	柳澤健の『1993年の女子プロレス外伝』	『kamipro』本誌と連動する柳澤健の女子プロレス連続インタビュー企画で、誌面には掲載されなかった話をお蔵出し!!
土	マット界の事件を徹底追求『kamipro事件簿』	マット界には日々、さまざまな事件が起こる。そんな迷宮入りの事件をピックアップして真相を解明する大反響連載!
不定期	青木真也の『週刊!? ワオ木真也』	"バカサバイバー" 青木真也が最低でも週一回、勝手気ままに書きまくる不定期更新コラムを配信中!!

主要3キャリア全端末対応(※端末により一部非対応コンテンツあり)

アクセス方法				
iモード	iメニュー	メニューリスト	スポーツ	格闘技/大相撲
EZweb	EZトップメニュー	スポーツ・レジャー	格闘技	
Yahoo!ケータイ	メニューリスト	スポーツ	格闘技	

サービス利用料 月額315円(税込)

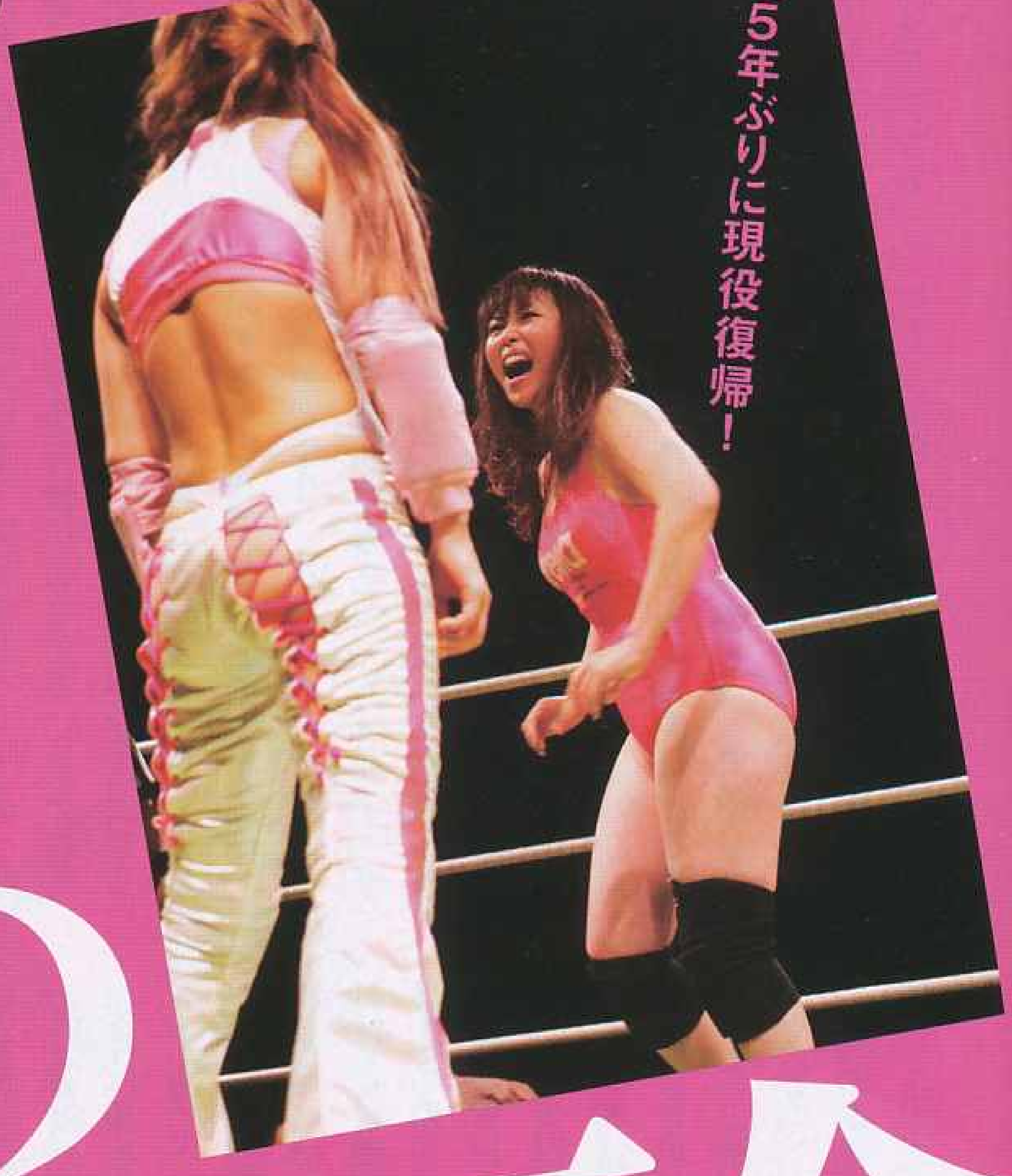
柳澤健が"最愛のレスラー"を大興奮直撃!



1993年の女子プロレス

新春特大スペシャル

広田さくら的本音と打算のプロレス論



約5年ぶりに現役復帰！

好きなプロレスラーは「猪木、北斗、そして広田」と以前から語っていたのが
『1993年の女子プロレス』で聞き手を務める柳澤健氏だ。
その中でも自ら「最愛のプロレスラー」とアピールするのが今回登場の広田さくらである。
アントン、北斗、広田といずれもすでに引退しているが、なんと、その広田が約5年ぶりに現役復帰。
「これは話を聞くしかないでしょう。とにかくページがたくさんほしい」との柳澤氏の要望もあり、大々的にお届け！　コマネチ!!

聞き手／柳澤健　構成／阿修羅チョロ　撮影／滝忠之　写真協力／広田さくら

天才は、好むと好まざるとにかかわらず、自分が属する世界の本質をあきらかにしてしまいます。

青木真也やアントニオ猪木は天才だからこそ、MMAあるいはプロレスに興味と関心を持つ人間を強く惹きつけたのです。

さて、女子プロレスというジャンルにも天才がいました。

プロレスが観客の心理を操る魔術であることをあきらかにしたのは長与千種でした。

プロレスが身体だけでなく、言葉も必要とすることをあきらかにしたのは北斗晶でした。

そして、プロレスが自由な、素晴らしいエンターテインメントであることをあきらかにしたのは広田さくらである、と筆者は考えています。

96年8月のデビュー。愛らしい顔をしているものの、小柄で、身体能力にも恵まれない広田は、当然のように落ちこぼれでした。

ひたむきな美少女路線から外れた広田は、まもなく独自の道を歩み始めます。

それはひとことで言えば、批評者、観察者としての道でした。

あるときは〝おまえなんか目じゃない、ユー・アー・ノット・アイ（YOU ARE NOT EYE）〟とあきらかに間違っている英語で相手をののしり、あるときは新崎人生よろしくロープの拝み渡りを行なう途中、滑ってロープに股間を打ちつけ、女子であるにもかかわらず悶絶します。

「なんだ、お笑い路線か」とバカにするのは簡単ですが、広田さくらの根本にはプロレスへの懐疑と鋭い批評性が含まれていました。

長与千種のような天性のスター性も、北斗晶のような特異な言語感覚もない広田さくらは、一つ一つの試合に異常な手間をかけて準備をすることで、前人未到の道を切り開いていくことになります。

世界各国にこれまでどれだけ多くのレスラーが存在したかは寡聞にして知りませんが、裁縫と工作をプロレスに持ち込んだのは、広田さくらただ一人であったに違いありません。

広田は、得意の裁縫技術とミシンを駆使して、さまざまなコスチュームを自作しました。

広げると10メートルにもおよぶ小林幸子コスプレで登場した際には、スプレーで塗った金粉が観客席に飛び散り、後楽園ホール関係者は激怒。選手たちは総出で掃除をしたというエピソードが残されています。

『千と千尋の神隠し』に登場する黒柳徹子似の怪物「湯婆婆」のコスプレはまさに完璧で、長与千種に向かって「千種、おまえは今日から千だよ」と言ったときには、文字どおり会場中が爆笑したものでした。

潤沢な予算があるはずもなく、コスプレの出来の良し悪しにバラつきはあったものの、試合毎にアイデアを出し、デザインを考えて型紙を作り、アルミホイルだのビニールテープだの浮き輪だの、考えうるすべての（安い）材料を駆使して観客の鑑賞に堪えるコスチュームを製作する広田さくらのクリエイティビティには脱帽のほかありません。

その結果、広田の試合は、入場曲がかかる瞬間から「今度は何をやってくれるんだろう」という期待に満ちあふれることになりました。

チャンピオンベルトを自作したのも広田さくらが最初でしょう。

広田はダンボールで「HHH（トリプルエイチ＝広田・へなちょこ・ハンドメイドの意）」というチャンピオンベルトを作り、団体の思惑とは無関係なところで、好き勝手に防衛戦を繰り広げました。

腰に巻くか、肩にかけた瞬間に、誰でも王者に認定されるというルールを持つHHH王座のダンボール製ベルトは、時に破壊されつつも何度も復活しました。レスラーはもちろん、レフェリーのトミー蘭、果ては広田の母親や道場で飼われていた犬までもがHHH王座に輝きました。

納見佳容との試合前、リング上の広田が「私は大切なHHHのベルトを、どんな汚い手を使ってでも、納見の腰に巻いてみせる」と言ったときには大笑いしました。

セコいチャンピオンベルトを、嫌がる相手の腰に巻かせることを目的とする試合。そんな試合が成立するのが、プロレスというエンターテインメントの素晴らしさなのです。

2002年、広田はガイアの大将である長与千種とタッグチーム「チーム・エキセントリック」を結成しました。広田と長与がラス・カチョーラス・オリエンタレスと対戦した試合は忘れられません。

広田が身長の高い三田英津子と高い位置で手四つを組もうとしても、身長が足りません。結局、広田は長与を四つん這いにさせ、その背中の上に立って得意満面で三田を見下ろしたのです。そのとき後楽園ホールに大きなどよめきが起こりました。「あの長与千種がここまでするなんて」と驚いたのです。

広田さくらには無数のオリジナル技を生み出す豊富なアイデアと、巧みな話術があります。さらに危険な受け身を取る覚悟まで持っていたのです。

21世紀初頭、女子プロレスの熱い季節はすでにすぎ去っていました。時間とは残酷なものです。全女の象徴とも言える豊田真奈美の体重は、加齢とトレーニング不足によって増大し、その結果、ドロップキックの高さと威力は失なわれ、長年ハードな受け身を取り続けたために、トップロープに飛び乗ることはできなくなっていました。

豊田真奈美に代表される優れたアスリートたちが、自分のプライドを賭けて凄まじい試合を毎日のように繰り広げた時代は、永遠に失なわれてしまったのです。

女子プロレスに冬の寂しさが漂う中、広田さくらは一人恐るべき熱量を持って闘っていました。

だからこそ、広田さくらの試合には、寒空の下、レスラーも観客も、みんなで焚き火にあたるような温かさが存在していたのです。

ガイアジャパン解散と同時に引退した広田さくらは、昨年12月に現役復帰して、素晴らしい試合を見せてくれました。

天才レスラーが新境地を開拓してくれることを願っています。

（柳澤健）



満面の笑みを浮かべ“最愛”の広田と記念撮影に収まる柳澤氏。こちらの写真はいまから約7年前、柳澤氏が『Number』在籍時代に広田を取材したときのもの。今回ひさびさの取材ということで柳澤氏はちゃっかりサインをゲッツ!

——私は猪木さんも好きだし、北斗

ットライトを浴びてリングの上で歌

ぇ。私の知らなかった時代……って

猪木さんも北斗晶も好きですけど

1993年の女子プロレス

新春特大スペシャル

広田さくら

猪木さんも北斗晶も好きですけど最愛は広田さくらなんです（柳澤）

――私は猪木さんも好きだし、北斗晶も大好きですけど、最愛のプロレスラーは広田さくらなんです（笑）。

広田　アハハハハハ。

――話はいきなり本題に入るんですけど、女子プロレスというものは、ブル、アジャの時代に男子以上のハードで恐ろしいプロレスになってしまいましたよね。このあいだブル様にインタビューしたら、ベビーフェイスとヒールという古典的関係のプロレスを続けていたら、女子プロはとうの昔に現在のような小さい規模のものになってしまっていたと言っていて、なるほどと思ったんですよ。

広田　はい。

――クラッシュギャルズの時代には3000人もの人がオーディションにやってきた。ひと言で言えば、スポットライトを浴びてリングの上で歌い、キャーキャー言われたかった人が、それだけの数、存在したということです。クラッシュの時代、女子プロレスラーはアイドルだったけれど、ブル、アジャの時代にはとんでもなく危ないものになってしまうわけです。天才・長与千種が去ったことで女子プロレスは低迷し、それを救ったのはブルとアジャの危険なプロレスであった、と。彼女たちの革命が女子プロレスを変え、延命させた。でも、そのことで女子プロレスラーになりたいと思う人間の数は極端に少なくなってしまった。結局、魅力ある選手が少なくなって、女子プロレスは衰退した、と僕は考えているんですけど、広田さんはどう思いますか？

広田　う〜〜ん、どうなんですかねぇ。私の知らなかった時代……って言ってしまえば、それまでで終わってしまうんですけど。

――この連載は「1993年の女子プロレス」っていうんですけど、広田さくらという女子レスラーは、それから2年後の95年に入ってきて、デビュー戦が長与千種と組んでアジャ・コング&田村欣子でしょ。しかも会場は日本武道館。これって凄いことだと思うんですよ。

広田　我ながら凄いと思います（笑）。

――デビュー戦でいきなりアジャ様の裏拳を受けて、記憶がブッ飛んだと聞きました。

広田　そうですね（笑）。

――正直、こんな痛いのはやってられないと思わなかった？

広田　それは思わなかったですね（笑）。裏拳よりも、押し潰される系のほうが私は怖くて。最後は裏拳でやられて終わりだったんですけど、その試合の中で私が寝てるところにアジャ選手が2段目からワーッて降ってくるベチャっていう技があって。

――ベチャって呼んでるんだ（笑）。

広田　はい（笑）。私的にはアジャ選手のベチャのほうが嫌でしたね。

――広田さんのプロフィールには「なぜプロレスラーになりたかったか」という項目に「パワーボムを受けてみたかった」って書いてあるんですけど、それはホントですか!?

広田　ホントです。

――なんで、あんな技を受けたいんですか？

広田　正確に言えば、スプラッシュマウンテンを受けているキューティー鈴木を見て「いいなぁ。うらやましいなぁ」って思ったんですよ。

――ダイナマイト関西のスプラッシュマウンテンを受けるキューティーに憧れたんだ？（笑）。

広田　そうそう（恥ずかしそうに）。

――危ないとは思わなかった？

広田　いや、そのときはアトラクションの延長上みたいな感じの見方だったので。

――広田さくらにとっては最初からプロレスというものは演劇だった？

広田　そう……ですね。演劇というか、エンターテインメントのパフォーマンスというか。

――最初からわかっていたんですね。

広田　わかっていたというか、感じてたっていうんですかね。

――なるほどね。プロレスを観て「私も強くなりたい」っていうんじゃなくて、お客の前であのスプラッシュマウンテンを受けて、お客に「うわ〜っ！」って言われたいと。

広田　そうですね。やられてみたいと思いました。

――でも、武道館でデビューして、しかも長与千種と組んで、アジャ&田村欣子という破格のカード。しかも、この大会は「ディスカバー・ニューヒロイン・タッグトーナメント」ってタイトルがつけられてたんだけど、どう考えたってディスカバー・ニューヒロインってあなたのことでしょ？

広田　そうですね（笑）。私が一番それに見合ってますよね。

――そうだよね。この破格な扱いというのは、長与千種という人が広田さくらを超おもしろがった、期待していたってことですよね。

広田　どうなんですかね。そのへんの話は全然聞いてないですね。でもきっと、おもしろがってくれたから、やってくれたんだと思います。

――長与千種という人は、エンターテインメントとしてのプロレスをデビュー当初から深く考えている方で、観客の心を動かす天才であり、偉大なレスラーだと思うんですね。北斗選手も非常にそういうところがあるんですけど、長与さんの時代のお客は女子中高生の女の子であるのに対して、北斗選手は男のプロレスファンに届くだけの言葉を持っていた、という違いがあると思います。女子プロレスには赤いベルト（WWWA世界シングル王座）の系列がある一方で、長与、北斗、広田という流れもあるな、と私は思ってるわけです。

広田　アハハハハハ。

――この連載では、女子プロレスはなぜあれほど凄いことになって、なぜいま衰退したのかということを深く考えようとしてるんですね。

広田　はい。

――そのことを考えるために、いろんな方に話を聞いてるんですけど、93年頃、すなわち団体対抗戦の時代

広田復帰の舞台はユニオン新木場大会

チェリーに敗れるもさくら満開!?





05年のガイア解散とともに現役を引退していた広田だったが09年12月16日のユニオンプロレス新木場大会でのチェリー戦で約5年ぶりに現役復帰。デビュー戦と同じコスチュームで登場した広田はチェリー相手にコーナーでの三点倒立（犬神家）やロープ渡りなど得意のムーブを連発するも、敗戦。試合中は野次を飛ばしながら楽しげに見守っていた柳澤氏でしたが、試合後は感慨深そうに広田のコメントをしっかりとメモしてました。

には、長与千種の引退試合でさえ埋められなかった横浜アリーナが超満員になり、さらに東京ドームまでたどり着き、その後、衰退の一途をたどり、現在のミニマムなものになってしまっている。

広田　なってますよね。

——それはなぜかと考え続けてるわけです。さっきの話に戻れば、女子プロレスには、アスリートはいるけれども、お客の心を動かす力がある人っていうのは非常に少ない。

広田　そうかもしれないですね。

——ところが、プロレスの究極の目的は、観客の心を動かして、次の試合にも足を運んでもらうことにあります。アクロバットを演じることではなく、観客の心理を直接動かすためにはどうすればいいか、ということを非常に深く考えたのが、長与さんであり北斗さんであり広田さんではないかと私は思ってるわけです。

広田　あ、ありがとうございます。

——ある時期から広田さんは、長与さんの助けももちろんあったと思うんですけど、観客の心を鷲づかみにしていくわけですよね。

広田　アハハハハハ！

——僕なんか鷲づかみにされた側で（笑）、だからこそ、こうやってインタビューしてるんですけど。広田さくらは演劇センスがあったからと言ってしまえば、ひと言で済むのかもしれないですけど、なぜ広田さくらはそういうことができたのでしょうか？　長与さん、北斗さん、そしてご自身を含めた3人について、どう思っているかを聞かせてください。

広田　その中に私が入ってるというのが自分ではしっくりこないので、長与選手と北斗選手について言いますけど、北斗選手はホントに頭がいい人ですよね。

——まったくそのとおりですね。

広田　そう思うのと、同じレスラーとしてリング上でも闘い、バックステージも見て、普段の練習や巡業とかの移動のバスでも見てきて、試合で脚光を浴びている以外での関わりのほうが長いわけじゃないですか。

——そうでしょうね。

広田　そういう意味では、ライターさんのほうが深い話は聞いているかもしれないですけど、私たちは日々の北斗選手や長与選手に接して、深い話はしたことはないですけど、そういう中で感じるのは、そのまま上がってるんですよね、リングに。

——宇野久子と北斗晶は別人ではないと？

広田　私は全然別人じゃないと思いました。リングに上がればカリスマって言われますし、もちろんそうなんですけど、へんな誤解があると……、いっか、べつに誤解されても（笑）。

——大丈夫ですか（笑）。

広田　カリスマ性もあって、リング上で輝いているんですけど、リングを下りたらストイックとか、そういうところがないんですよね。北斗選手も長与選手も、自然にリングに上がっているっていうのが私の見方なんですけど。バックステージで待機している北斗選手、長与選手には、ホントに声をかけられないような緊張感というものがあって、そこでスイッチが入ったりすることもあるかもしれませんけど、でも普段の発想だったり、会話の切り返しだったりとか、話を持っていく強引さだったりとか、あらゆる面がリング上の北斗晶であり、長与千種なんですよ。

——二人とも素のままでリングに上がっている？

広田　私は凄くそう思います。本人的には「ふざけんなよ！」って言われるかもしれないし、「変えてるよ」って思うかもしれないですけど（笑）。でも、そうじゃないと、マイクアピールも咄嗟には出てこないし、いまでこそプロレスはコンビネーションをいろいろと決めてとか、そういうのがあったとしても、瞬時に出てくるものっていうのは常に自分というものを、そのままリングに乗っけないと出ないものだと思うんですよね。

——ああ、そうでしょうね。

広田　これは全部のことに関係してくると思うんですけど、普段つまんない人っていうのは、何をやってもパッとしなかったりとかするじゃないですか。プロレスにはその人の人間性がけっこう顕著に表われてしまうんです。そういう意味で、北斗選手と長与選手は普段のまんまリングに上がってる人だなって思います。

プロレスって、その人の人間性が凄く出るものだと思います（広田）

——なるほど。そうじゃない人、普段の自分とリング上の自分は別人格というレスラーもいるの？　それともプロレスラーはほぼ全員が素のままでリングに上がってるんですか？

広田　基本的には私はプロレスっていうのはモノ凄い人間性が出るものだと思っているので、（リングの上と下で）変わらないと思ってます。

——基本的には変わらないと？

広田　変えようとしている人は確実にいますけどね。それは自分の中のストイックさがどれだけあるかっていう部分で。それはプロとして凄く必要なことだと思うし。だけど、いくらストイックにリングに上がるぞって思いを込めて緊張して上がったとしても、それもその人だし、いくらスイッチを入れると言ったとしても、人柄というのは、ふとしたときに絶対出てしまうものなんです。

——そうですよね。

広田　だから、普段から自分のことを楽しんでいないと、楽しいことも表現できないし。プロレスっていうのは生モノだから、プロレスラーもホントに生のモノなんですよ。

——役者にとっても舞台の上は生モノだけど、脚本や演出があるから、プロレスほどは好き勝手にはできないもんね。

広田　そうなんですよ。

——なるほどねぇ。じゃあ、広田さんご自身は基本的にはリングの上と下で変わらない人？

広田　私は変わらないですね。意識して変えなくしてます。

——意識っていうのは？

広田　私はストイックなところが嫌いで、たぶん自分の中にもあると思うんですけど、なんかちょっと「プッ」とか笑っちゃうんですよね（笑）。先

ざっくりと振り返る
プロレスラー広田さくら年表



- 95年、ガイアジャパンに入門
- 96年8月12日、全日本女子プロレス日本武道館大会でのアジャ・コング&田村欣子戦でデビュー（パートナーは長与千種）
- 97年2月23日、地元・愛知大会で勢力拡大を呼びかける尾崎魔弓に呼応し、OZ入りを志願
- 97年10月10日、後楽園大会から、デビュー以来、思うような結果を残せず、へなちょこ扱いされていた広田の"へなちょこ返上ロード"と題した試練のタッグ連戦がスタート。10月17日の雫石大会では一日3試合に出場し、すべてフォール負けの珍記録を達成
- 97年11月18日、後楽園大会のメインで長与と組んで、この日、ガイア初参戦となったラス・カチョーラス・オリエンタレス（下田美馬&三田英津子）と対戦
- 98年後半から、試合のたびに手作りのコスプレ姿で登場し、コスプレファイターとして大活躍。女子プロ界屈指のマイクパフォーマーとしても注目を集める
- 99年4月以降は段ボール製のマイベルトHHH王座を創設し、勝手に防衛戦を敢行したり、広田悪良（あくら）とリングネームを変えてヒールに転向したりと女子プロレス界で独自のポジションを確立
- 02年3月に班長・広田さくら、日直・長与千種という、既存の主従関係を逆転させたコミックユニット、「チーム・エキセントリック」を結成（結成時のメンバーはほかにシュガー佐藤、カルロス天野）。シュガー、天野は試合前後のダンス要員として活動。ダイナマイト関西は一夜だけ給食係としてチーム入り。02年5月にはライオネス飛鳥も飼育係として加入。長与のシリアスファイトと広田の脱力ファイトの緩急差を武器に連勝街道を突き進み、タッグ王座にあと一歩まで迫るなどブレイクするも、クラッシュギャルズ再結成に伴ない、02年8月に無期限活動休止
- 03年4月6日の横浜大会でチーム・エキセントリックを復活させ尾崎魔弓&KAORUらのユニットD-FIXと髪切りマッチで激突し勝利
- 03年11月30日の後楽園大会でカルロス天野とのタッグでAAAWタッグ王者の永島千佳世&里村明衣子組に挑戦するも惜敗
- 04年～05年はコスプレ路線を邁進し、ジャガー横田やダンプ松本ら大物レスラーと対戦
- 05年4月10日、ガイアジャパン最終興行となった後楽園大会での尾崎魔弓戦後にプロレス卒業を表明
- 09年12月16日、ユニオンプロレス新木場大会でのチェリー戦で現役復帰
- 10年は女優や紙芝居師として活動しながら、フリーとしてさまざまなリングで活躍……予定



95年に三期生としてガイアジャパンに入門した広田のデビュー戦は96年8月12日、全日本女子プロレス日本武道館大会で開催された「ディスカバー・ニューヒロイン・タッグトーナメント」(若手とベテランのタッグトーナメント)。広田は師匠の長与千種とタッグを結成し、アジャ・コング&田村欣子組と対戦。女子プロ初の武道館デビューということで話題を呼んだ広田だったが、アジャの裏拳の前に敗退。

1993年の女子プロレス
新春特大スペシャル

広田さくら

輩が試合前とか「よしっ！」とかみたいな感じで気合入れてると「なんだ、それ！」みたいな（笑）。

―からかってやりたくなる？

広田 ちょっと「だせぇ」みたいな。で、それをネタにしようって言って、あえてそこをデフォルメして、「モノ凄くナルシストな○○選手」みたいなことをやるとウケるんですよ。だから、お客さんも「あ、この選手はバックステージでこんなふうにしてるんだろうな」っていうのがたぶん想像できるから、あえて見えてない部分をリング上でやると「あ、（その選手っ）ぽい、ぽい。（いかにもそんなこと）やってそう」とか、伝わると思うんですよ。

―なるほど。

広田 そういうところで、私は観察して表現するほうで、無色っていうか、私自身がそういうふうにリング上に上がっていったりするのはあまり好きじゃないんです。

―あ〜、それはわかる気がする。

広田 これは舞台でもそうなんですけど、袖ギリギリまで、「へへへ」とかやってるとか、そういうのが好きというか、やっちゃうんですよね。

―なるほどね。自分に入り込んでいる姿を見られるのはイヤだと？

広田 そうですね。凄い恥ずかしいし、笑っちゃうんですよね。

―そうなんだ（笑）。そんな広田さんから見て、長与さんと北斗さんは同じタイプの人間ですか？

広田 あ〜、違いますねぇ。長与選手は……親なんですよね。やっぱり。

―ガイアの選手にとっては？

広田 そう。そこにはきっと、たぶん無償の愛みたいなのが絶対あった気がするんですよね。

―へぇ〜〜〜！

広田 後輩のためにとか。で、北斗選手は実際にお母さんですけど、長与選手よりも北斗選手のほうがフリーでやっていたぶんギラギラしてるっていうか、一回でもポシャッたら、もう使ってもらえなくなるという危機感がある感じがします。長与選手はホントにカリスマっていうか、事務所で言ったらジャニーズというか。語弊があるかもしれないですけど、生まれたときからスターの人。

―なるほど。

広田 北斗選手は自分でのし上がった人。長与選手ももちろん苦労もあったと思うんですけど、北斗選手のほうが一試合一試合に懸ける思いというか、自分を表現するっていう、飢えた部分とかハングリー精神が凄くありましたね。

―そうでしょうね。

広田 長与選手のほうが、そのへんはお母さん、団体の親。

―包容力がある？

広田 まずはおまえらが一番おいしい思いをしろ、と。一方で、北斗選手は自分に凄いハングリーでしたね。生きていくっていうか、これで食っていくっていう覚悟ですよね。

―ある時期から、全女の一時代を築いた選手が次々とガイアに上がってきましたよね。全女の経営が極度に悪化したこともあるだろうし、アルシオンがうまくいかなかったこと

もあるだろうし。本来、長与千種は、全女とはまったく違う価値観で自分の理想の団体であるガイアを作ろうとしていたはずですが、全女の凄いレスラーたちがガイアに上がることで、生え抜きの若い選手の存在価値は相対的に落ちたと思うんですよ。

広田　ふんふん。

――要するに、やっぱり全女のレスラーはデカいし、キャリアも積んでるし、モノ凄い競争の中で揉まれてきてるし、フィジカルも強い。里村（明衣子）さんとかはそれにスピードで対抗しようとしていましたけど、私には長与千種が作り上げようとしていたガイア的な価値観が、全女的な価値観に侵略されたという気がしていたんですが、中にいる広田さんはそういう空気を感じました？

広田　そうでもないですね。侵略というよりも、むしろ興行的な意味で、元全（女）というかたちですけど、全女に頼らざるをえないっていうところのほうが大きかったですね。

――ガイアの若いコにはそれだけの力がなかった、と。

広田　うん、そうですね。

――団体対抗戦の時代を知っている人間にとっては、広田さんといわゆる元全の人たちがやる試合っていうのは、モノ凄く楽しいわけですよ。ジャガー（横田）さんとの試合も凄くおもしろかったし、アジャ様との試合もおもしろかった。やっぱり全女の選手たちは、ガイアとは吸ってきた空気が違うなって気はしましたか？

広田　それは凄く感じましたね。私はデビュー戦も全女のマットということもあったし、試合がおもしろいってことで、評価を高くしてもらえたっていう対戦相手は絶対に全女の選手だったので。

――確かにそれは言えますよね。

広田　イコール、ネームバリューがある人が全女ばっかりということもあったんですけど。なので、私は常に全女の恩恵を被っていたという感覚なんですよ。

――全女のレスラーとやって、むしろ上げてもらった、みたいな？

広田　そうなんですよ。全女様々なんですけど、私は（笑）。

――なるほど！

広田　だから、いくらガイアの若い世代とか全女の空気を知らない人たちが頑張ったとしても、敵わないに決まってるだろうなっていう。同じところで勝負しなくてもいいのになって思うぐらい、なんか圧倒的なものを感じました。

――そうなんだ。

広田　全部が無駄な努力じゃないですけど、たぶん何やってもダメだろうなっていうことは、自分はひそかに思ってましたね（笑）。

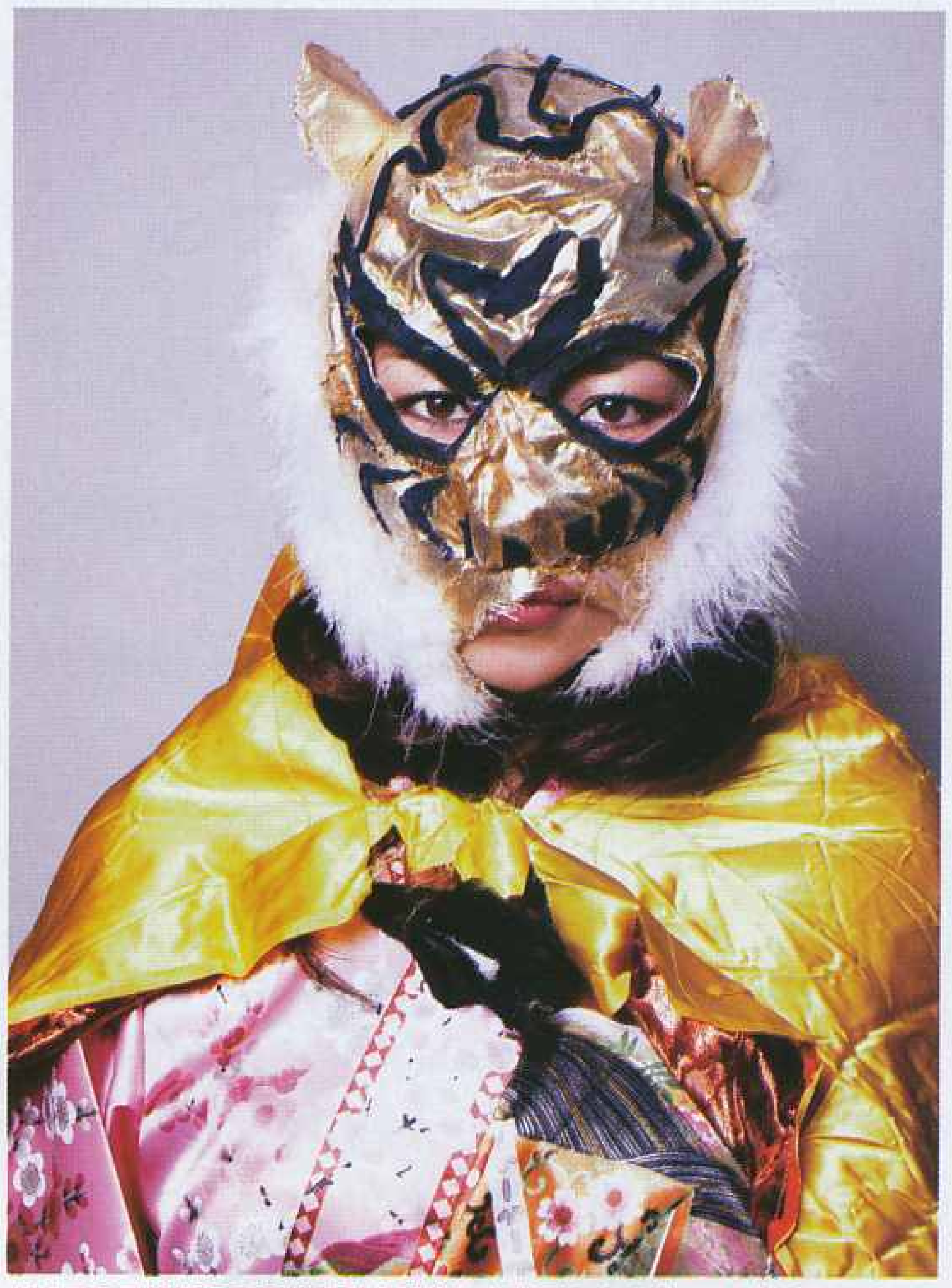
――やっぱり。当時から、全女に対抗しようとする一期生には否定的だったもんね。

広田　私はその頃から、その中に混じって「よし、全女を潰すぞ！」とか、そんなんではないところでコツコツ積み上げていたので（笑）。

――確かに（笑）。

広田　「絶対無理だと思うんだけど、ホントにやろうとしてんの？」という感じで見てましたね。「もう敵わない」っていうのを認めてからやったほうが、違うものが絶対生まれるような気がしたんですよね。私にとって、全女っていうのはそれぐらいのものなんで、だから、べつに侵略っていうのは全然思わなかった。

――おもしろいですね。結局ガイア



ガイアの最終興行で尾崎魔弓と対戦した広田はタイガーマスクのコスプレで登場し「一度やってみたかったんだよ。最後に好きなことやって何が悪い!」と逆ギレ。寅年なので、そのときの手作りマスクをひさびさに被ってもらいました。

「全女には敵わない」って認めたほうが違うものが生まれる気がした（広田）

広田さくら

では一期生として里村たちがデビューしたわけですが、一期生以降、要するに里村以降、広田さくらという唯一の例外を除いて一人のスターも作ることができなかった。その最大の理由はどこにあったんでしょう？

広田　う～ん、おとなしかったんじゃないですかね。

――おとなしかった？　なぜ？

広田　みんなが一緒になっちゃってたからじゃないですかねぇ。なんでなんだろうなぁ。逆に聞きたいんですよ！　聞きたいんですよというか、聞きたかったときがあって。一期生の方がいらっしゃって、何をするにも一緒っていうふうに見られちゃうじゃないですか？

――一期生というくくりで？

広田　そこにいるかぎり、どんだけトーナメントをやって、やれ優勝しましたって言っても、結局は一緒なわけですよ。自分たちで判断をしていかないと、おもしろくないじゃないですか。何がおもしろいのかなって思って。

――要するに「一期生」というくくりの中で、仲良しでやってちゃいかんだろうということですか？

広田　そう……ですね。なんか、長与選手を蹴落としてまで上がるとかっていうのを全然見たことがなかったから。一期生の人たちのうしろにつかせてもらって、背中を見ているかぎりでは……。それが凄い課題だったと思うんですよね。一期生の方々、それぞれにとって。

――さっき言ってましたけど、母親に逆らえない娘みたいな感じで？

広田　そういうのもあるんですかねぇ。なんか、もっとトンパチがいてもいいんじゃないかって……、一番怒られてた私が言うのもなんですけど（笑）、もっと問題児がいてもよかったんじゃないかなって思うんですよね。

――一期生から怒られてたの？

広田　メッチャクチャ怒られてました。いつも、台風の目でしたよ、私。

――あ、そうなんだ！　どういうふうなことで怒られるの？

広田　怒られたらすぐ言い訳をする。反省しない。同じことを繰り返す。

――アハハハハ！

広田　ちょっと先輩を小馬鹿にしている。だいたい、この四つですかね。怒られる理由は。

――小馬鹿にしている（笑）。

広田　そういう意味では、最低な後輩だったと思うんですけど。いまでこそ、こんな偉そうなこと言ってますけど、ガイアの人だから言えるんだと思いますし。

――全女だったら無理？

広田　まず無理ですね。

――でも、いろいろと全女の怖い話も聞くでしょ。イジメとか、先輩に襲われるとか。

広田　あ～、聞きますねぇ。

――あなたにとって全女はとんでもないもの？

広田　まず、さっきも話したリング

上とあまり差がないという話につながってくるんですけど、普段から豪快なんですよ。全女の人って。

──アハハハハ！　どう豪快なの？

広田　なんか、控室でのしゃべり方とか、ボディランゲージとか。まあ、それはキャリアが上っていうのもあるかもしれないですけど、とにかく大きいんですよ。声がデカい。

──声がデカい！

広田　で、まあ、ここだけの話、ちょっと態度もでっかいというか（笑）。

──はいはい、そうでしょう（笑）。

広田　あとは、控室に入ってくる勢いが違うんですよ。こうブア～ッてくるものが、もう違うんですよね。

──それは偉い人たちだけじゃなくて？　納見佳容でもそうなの？

広田　私が感じるだけなのかわかんないですけど、やっぱ、ありますね。空気を探り探り「あ、お疲れさまです」みたいな感じじゃなくて、「全女の誰々です！」みたいな感じで入ってくるイメージがあって（笑）。あとは、昔やってた自分たちのツラい練習だったりとかを、モノ凄く大きい声で笑いながら話すっていうのが、全女の人たちに見る控室の風景だなって思うんですけど（笑）。

──へぇ～～！　じゃあ、全女の人が控室に入ってくると、みんな持っていっちゃう感じなの？

広田　まさにそうです。たぶんそういう押しの強さがリング上に出てるんですよね。そりゃ敵わないですよ。

──はあ、なるほどねぇ。

広田　いくら「はい、スイッチ入りました！」ってなって、プロレスラーの顔になって「やります！」って言っても、やっぱり、どこまでいっても新人になってしまうんですよ。

──だけど、デビル（雅美）さんは「広田とやるとおいしいとこを全部広田が持ってくからイヤだ」って言ってましたよ。それは光栄なこと？　それとも困ったなぁと思います？

広田　それは光栄ですよ（笑）。

──光栄でしょう。アジャ様はあなたのことを「つけ上がるからイヤだけど」って前置きしつつも「天才だ」って言ってましたよ。

広田　そっちのほうが苦手ですよ（笑）。そう言われるほうが。

──そうなんだ（笑）。いままで飛鳥さんとか、長与さんとか、いろんな人にあなたのことを聞いたけど、大人の人はだいたいほめてましたよ。

広田　（恐縮して）あ、ありがとうございます。でも、どうなんだろう？　ほめていただけるのは素直にうれしかったり、感謝したりとかっていうのはあるんですけど、やっぱり、下のコのことをほめるとか認めるっていうのは、そこには絶対的な先輩としての余裕っていうのがあるから、そういうふうに言うじゃないですか？

──余裕っていうのもあるでしょうけど、自分を脅かす存在と認識してるからこそほめるんじゃない？

広田　それもあるとは思いますけど。あとは、そういうふうに言ったほうが自分もおいしい、みたいな（笑）。

──確かに（笑）。でも、デビルさんじゃないですけど、鍛え抜かれた全女の人たちとやっても、図々しくおいしいとこ全部持っていくっていうのはホントに凄いと思いますよ！

広田　そう言われるとありがたいですけど（笑）。私って、したたかなんですかね？

──もちろん、したたかだと思いますよ。あとは、なんだかんだいって凄い負けず嫌いでしょ？

広田　そうかもしれない。絶対イヤでしたもん。控室とかでも絶対負けたくなかったんで。

──控室でも負けたくない!?

広田　私なんて下っ端ですから、廊下で着替えたりとかするんですけど、何かしらかまってもらえるようなオーラを漂わせつつ着替えたりとか（笑）。

──そうなんだ（笑）。あなたは一期生にはあんまり好かれてなかっただろうけど、元全の人たちには愛されてたでしょう？

広田　いやでも、それは試合で楽しんでもらえるっていう意味での思いっていうのはあるかもしれないですけど、そんなでもないですよ。一期生の方も私のことを凄くかまってくれましたし（笑）。

──そうなの？（疑いの目で）。

広田　ホントに、ホントに！

──じゃあ、一期生の話は置いときますけど、ウチの奥さんなんかは「全女のおばさんたちはみんな、広田さくらのことを孫娘を見るような目で見ている」って言うの（笑）。

広田　アハハハハ！　だから、へんな話、リンクすることがないから、余裕を持って接することができると思うんですよ。コイツがどんだけ頑張ったとしても、べつにプロレスじゃないっていうか、自分のスタイルが脅かされることがない。実力も、お客さんの見方も、たとえ試合で私が全女の選手に勝ったとしても、「まあべつに広田だから」って空気がある。だけど、それが一期生の方とかだったら、勝った負けたっていうことに違う意味合いが出てくるわけですよ。

──それはあるでしょうね。

広田　先輩後輩の関係だと、やっぱり勝敗がレスラーの格差っていうか、そういうものに直結するから、よけいに敏感だったり。でも全女の人たちは「なんでも付き合ってやるよ。私はプロレスラーだから」って感じで。

広田さくらのコスプレ ワールドプロレスリング





これまでプロレスのリングには“偽造王”一宮章一をはじめ、さまざまなコスプレファイターが登場しているが、チープながらもそのクオリティの高さは柳澤氏も「間違いなく広田が一番だね。まあ、あんまり比べる人もいないんだけど（笑）」と太鼓判（?）。そのネタは上のダンプ松本のように非常にわかりやすいものから、一見、元ネタがわからないものまで多数。これらのコスプレはコスチュームはもちろん、小道具なども広田のお手製。細かすぎても観客に伝わるのが広田が天才と言われるゆえんか?



『全部広田。』
柳澤氏も「広田の試合を観たことがない『kamipro』読者も一度観てほしい。この人は天才です」と大絶賛。広田ワールドが余すとこなく収録されたDVDは現在も入手可能ですので、各自調査のうえ、ご確認いただければと思います。



この写真はサッカーのワールドカップで盛り上がった2002年、当時、柳澤氏が在籍していた『Number』で広田を取材したときのもの。取材場所のガイア道場には、お手製のサッカーコスプレ姿の“ラモス”広田が仁王立ち!

広田さくら

にしおかすみこさんがやってる犬神家は私が元祖なんです！（広田）

――なるほど。私が広田さくらっていうレスラーがホントに凄いなって思うのは、HHHっていう段ボール製のベルトを作って勝手に防衛戦をやったでしょ。あれは、団体の意向はまったく関係なく、相手と話して勝手にやってたわけでしょ。

広田　まあ、そうですね。

――ガイアの中島リングアナが言ってたけど「全女の赤いベルトというのはすべての女子レスラーがほしいベルト」なんですって。でも僕は広田さくらは例外だと思ってるんです。

広田　どういうことですか？

――全日と新日、つまり馬場さんと猪木さんという二つの核がある男子とは違って、女子プロレスには全女という絶対的な存在があり、赤いベルトという頂点がある。そういった上下関係、ヒエラルキーがリング上から控室から隅々まで行き渡っている。普通のプロレスラーは全存在を懸けて上を目指すわけですけど、広田さくらだけは全然外れたところに存在している。だから、僕はあなたのことを天才だって言うんです。

広田　ほかに比べるものがないですからね（笑）。

――ほかに比べるものがないからこそ天才なんです。だって、長与千種のフォロアーはいっぱいいても、誰にも比べられないじゃない？　北斗晶もそうでしょ？

広田　あ～、そうですね、確かに。

――赤いベルトを頂点とする女子プロレスの世界で、それとは関係なく、真にオリジナルな世界を確立したのがその3人。HHHのベルトっていうのはホントに凄いベルトで、ダンボール製のベルトを勝手に作って、団体の意向とは関係なく、好き放題に防衛戦を繰り広げたレスラーなんて、広田さくら以前は一人もいなかった。それが凄いよ！

広田　ありがとうございます。

――でも、腰に巻いたらその瞬間に王者というバカバカしいルールを作ったのは広田さん？

広田　そうですね。なんかしら、法則というか規則っていうか、そういうものを作ったほうがおもしろいんじゃないかっていうので、「腰に巻いたらチャンピオンになる」っていうルールを作って（笑）。

――そこが非凡ですよね。

広田　適当に中島リングアナとかと雑談をしながら決まったこととかもいろいろありますからね。

――なるほどねぇ。あれはね、本当に偉大なベルトです！　プロレス史上に残るベルトだと思いますよ。

広田　ありがとうございます（笑）。まあ、いまでこそ紙のベルトとか、誰でもどこでも巻けるっていうくくりのベルトとかって、いろんなところであるんですけど。

――あ、そうなんだ？

広田　あるんですよ。DDTさんとかもそういうのをやっていて。

――ベルトに「©広田さくら」と入れろと言いたいよね（笑）。

広田　アハハハ。いま思うと、いまのプロレスの中で、いろいろとやっていることは、ガイア時代に私がやってたことが凄く多いんです。これはもうホントに声を大にして言いたいことがいっぱいあるんですよね！

――ゼヒ『kamipro』誌上で大々的にアピールしてください。大見出しにしますから！

広田　ありがとうございます（笑）。

――まず、じゃあ、ユニオンの上部団体のDDTの高木三四郎社長に言ってやりたいことがあると？

広田　DDTさんではアイアンマン・ヘビーメタル選手権っていう「どこでも誰でも巻ける」っていうベルトがあるんですけど、あのシステムを作ったのはHHHが先だと。

――高木社長には、声を大にして読んでいただきましょう（笑）。

広田　あとはスローモーションのプロレス。『マッスル』とかWAVEさんとか、いまはいろいろなところでやってますけど、私と尾崎選手の試合が一番先だと（笑）。

――まったくそのとおりですね。

広田　あと、引退されちゃったんですけど、元全日本の荒谷（望誉）選手。あのスタイルも絶対私が先だと。

――そうなんだ。荒谷選手ってどんなプロレスをやってたの？　観ていないので教えてください。

広田　あの～、カンチョーをやったりとか（笑）。

――なるほど！　あれは私のパクリだと声を大にして言いたい、と。

広田　そう。カンチョーだけじゃなく、試合中のたたずまいというか。GAORAつながりだし、私のこと研究してただろっていう（笑）。

――おまえ、ちょっと菓子折持ってこい、と（笑）。まだありますか？

広田　これが一番言いたいんですが、お笑い芸人のにしおかすみこさんがやっている犬神家は、私が元祖なんです。しかもコーナーポスト上でやるので、絶対私のほうがふさわしいですから（笑）。あとはちょいちょいありますけど、まあ、確かにそういうふうにやり始めたのは私かもしれないけど、かたちを変え、品を変え、それがいまのプロレスで定着しているし、おもしろいってなってる。だから、これからの私は「はじめまして」って気持ちで、そこにどういうふうに乗っかっていこうかなって思っています。

――過去のことは許してやるから、元祖である私をなんとかして売り出せと？（笑）。

広田　ダメダメ、そういうこと言っちゃぁ。もうフリーなんで、かぎりなく低姿勢ですよ。

――なるほど（笑）。じゃあ、「いろんな団体の皆さま、よろしくお願いします」って感じで？

広田　そういう感じです。DDTさんにもユニオンさんにもお世話になったので。足向けて寝れませんよ。

――今後も、いろんなところにお世話になります、と。最後に一つ。プロレスはおもしろいですか？

広田　おもしろいです。

――ひさしぶりにやって、あらためてそう思った？

広田　ホントおもしろいですね。「これ、これ！」って思いましたもん。

――私もひさしぶりに広田さんの試合を観ることができてうれしかったです。これからもますますのご活躍を。陰ながら応援させていただきます！

【09年12月22日／都内・某所にて収録】



ひろた・さくら■本名=広田紗久良。1978年4月12日、愛知県出身。NHK『中学生日記』で準主役を務めた後、95年10月にガイアジャパンに入門。翌96年8月の全日本女子プロレス日本武道館大会でデビュー。その後、コスプレをはじめバラエティ路線で活躍するも05年4月のガイア解散と同時に一度、現役を引退。09年12月に現役復帰。158cm、56kg。ブログアドレス→http://spora.jp/sakurahirota/

豪華すぎて心から猛省する読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①〜⑧の質問の答えをご明記のうえ、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2010年2月25日(木)頃発送予定です)。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦あなたが青木真也に望むことは?⑧あなたがkamiproに望むことは?

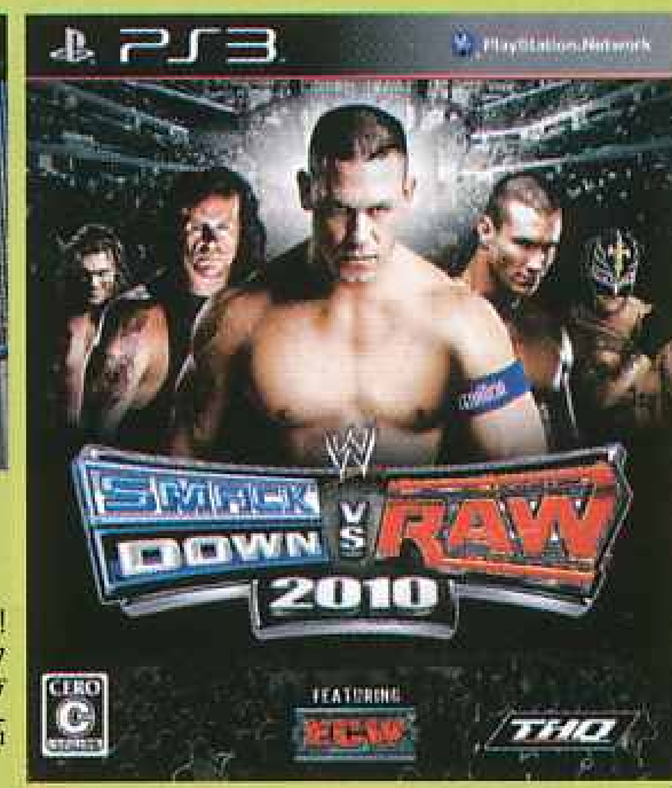
【宛先】〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス『kamipro』編集部
「無法者集団係」係まで

※応募締切は2010年2月15日(月)当日消印有効

PRESENT*01

2名様





WWEアクションゲーム PS3版『WWE 2010 SmackDown vs. Raw』

[制作:THQジャパン、販売:コーエーネット/通常版¥7,140(税込)]

すでに会うことさえかなわない伝説のスーパースターと、現在の王者の夢の対決がこのゲームで実現する!! 70名のWWEスーパースターのほか、自分オリジナルのキャラやストーリーを作ることも可能! 作ったキャラクターはオンラインでアップロードも可能なので、さまざまなキャラクターとの対戦が可能。新会場、トレーニングファシリティを用いてのプレイアブルチュートリアルも追加されたので、さまざまな技を獲得して最強かつ最高のキャラクターを目指せ! 今回はPS3版をプレゼント。Xbox360版も1月28日に同時発売。

公式サイト■http://www.smackdownvsraw2010.jp

PRESENT*02



1名様

藤波辰爾&ユリオカ超特Qサイン色紙

[非売品]

今号で実現したドラゴン対談!! ドラゴンとユリオカさんの笑顔が、この対談の雰囲気を物語っているでしょう。そんな幸せを詰め込んだサイン色紙です。

ドラディション■http://www.muga-world.jp/

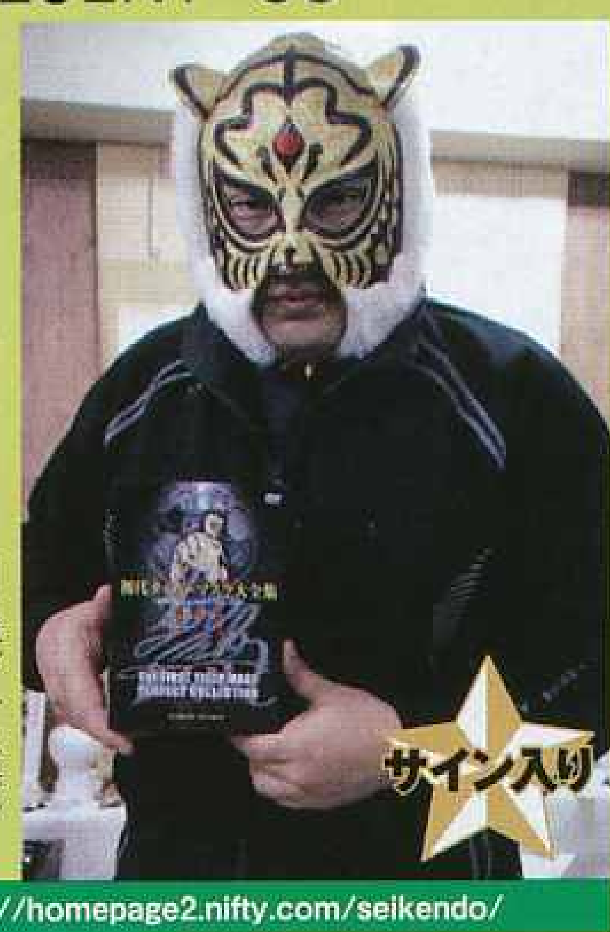
PRESENT*03

1名様

初代タイガーマスクサイン入りDVD BOX

[ポニーキャニオン/¥20,160(税込)]

初代タイガーマスクの永遠のクラシックとなる名勝負が詰め込まれた『初代タイガーマスク大全集〜奇跡の四次元プロレス1981-1983〜完全保存盤 DVD-BOX』にサインを入れてプレゼント!!



掣圏真陰流■http://homepage2.nifty.com/seikendo/

PRESENT*04

1名様



ウルトラセブン試合用マスク

[闘道館]

「こんなものが!?」と思わず声が出る!? どんなマニアのニーズにも対応してしまう、素晴らしいお宝グッズが満載の闘道館。新商品も続々入荷中!!

闘道館■http://www.toudoukan.com/

PRESENT*05

1名様



KGあらため朱里Tシャツ

[アートジャンキー/¥3,990(税込)]

スマッシュへ移籍、女子総合格闘技団体ジュエルスでも活躍する期待のホープ・KGあらため朱里のTシャツが登場!! サイズは150です。

アートジャンキー■http://www.artjunkie.jp/

PRESENT*06

1名様



ブルテリアTシャツ プレミアム2009黒

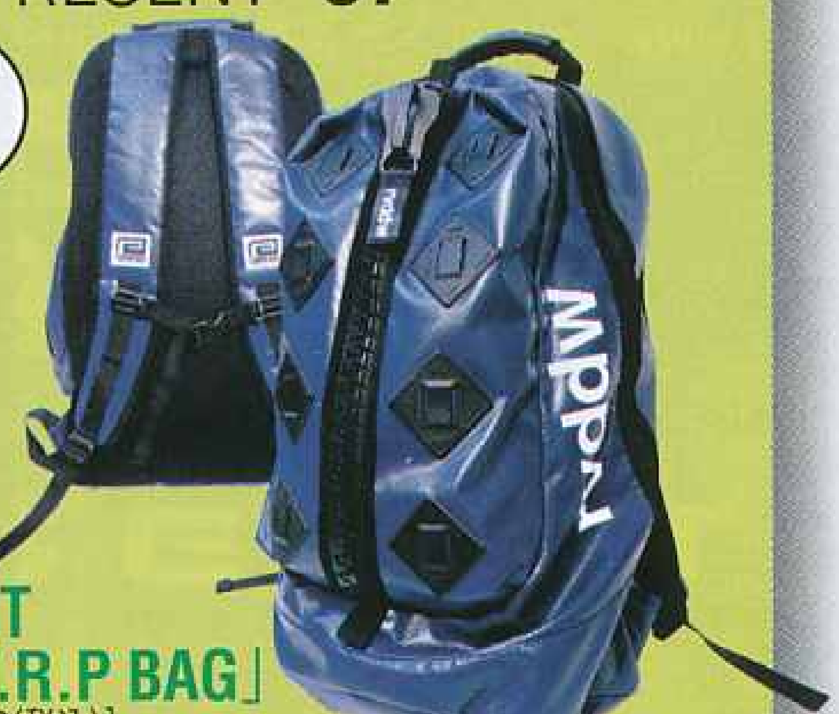
[ブルテリア/¥3,500(税込)]

ブラジリアン柔術やMMAのウェアがガッツリ揃うブルテリアの新作Tシャツ、2009プレミアムモデルです。サイズはL。

ブルテリア■http://www.b-j-j.com/

PRESENT*07

1名様



リバーサル「NEW GIANT FASTNER T.R.P BAG」

[リバーサル/¥13,650(税込)]

リバーサルの大ヒット商品ジャイアントファスナーバッグの進化系!! こちらカラーはネイビーですが、ブラックも発売中。防水撥水性のあるターポリン生地、強化したショルダーストラップを使用してます。

リバーサル■http://www.rvddw.com/

PRESENT*08



10名様

©TBS

『風雲! たけし城』オリジナル水鉄砲

[メディアファクトリー/非売品]

ビートたけし&たけし軍団、谷隼人の勇姿がよみがえる!! 2月26日発売のDVD『風雲! たけし城 其ノ弐』のノベルティ水鉄砲を10名様にプレゼント!!

メディアファクトリー■http://www.mediafactory.co.jp/

PRESENT*09

1名様

パンクラスフィギュア

[パンクラス]

パンクラスの倉庫から発掘された貴重なフィギュアをお蔵出し!! 船木、鈴木、美濃輪(現・ミノワマン)らが同じブリスターパックに入ったいまとなっては貴重な逸品!!



パンクラス■http://www.pancrase.co.jp/

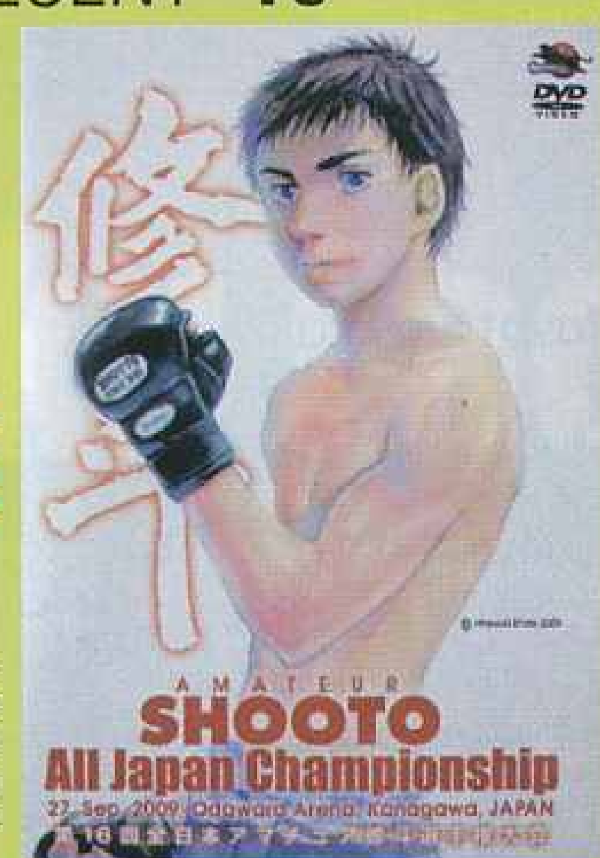
PRESENT*10

1名様

DVD『第16回全日本アマチュア修斗選手権大会』

[修斗/¥4,000(税込)]

09年9月27日に小田原アリーナで開催された同大会を2枚組182分にわたって収録!! 消費税、送料込みで4,000円で発売中。購入方法は下記URLを参照。



SHOOT NEWS内購入案内■http://blog.livedoor.jp/shooto_news/archives/51602204.html

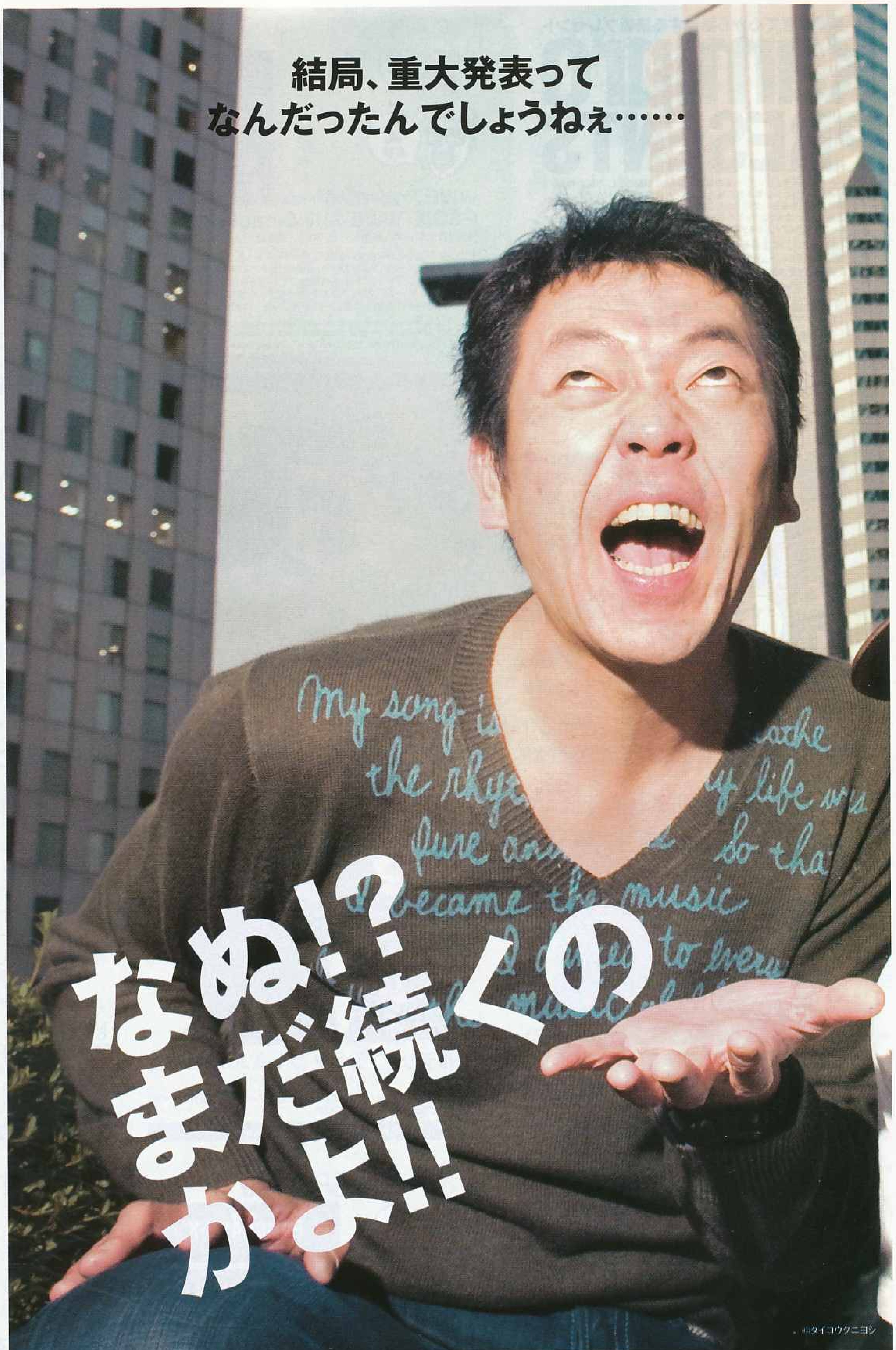
kamipro143 応募券
お手盛りの言葉

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/

kamipro 紙のプロレス
No.143
2010年2月6日 発行

発行人
浜村弘一
編集人
斉藤慎一
青柳昌行
編集統括本部長
ジャン斉藤
編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎（初節句準備のため非番）
終身名誉バイザー
吉田 豪
助っ人
ジャイ子
編集次長2010
松林 貴
デザインGM
出田さん（TwoThree）
デザイン班長
金井ヒサくん（TwoThree）
デザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鐵田やっちゃん
白木みのる（以上、TwoThree）
カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
吉場正和
山口比佐夫
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
金山フヒト
丸山剛史
渞忠之
勘定
工藤ちゃん
ナイフの切れ味
入江ドラゴン（TwoThree）
雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠
業務部
樽本"PAGE 2010"義之
編集庶務
原 正典
山内ユリコ
終身名誉編集庶務
高木由美子
編集チアガール
金川"ナツコ"奈津子
白倉"クララ"明子
ゴールデンマダム
廣橋久美子
発行所
株式会社エンタープレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）
発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177東京都千代田区富士見2-13-3
印刷
図書印刷株式会社
協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport



©タイコウクニヨシ

NEXT ISSUE

3月のDREAM、『戦極』あらため『SRC』は
どうなるんだ!? 直前情報満載!!

No.144は2月23日（火）発売予定!

※地域によっては多少発売が遅れることもありますが、休刊ではねえですから!



ka
No.143
2010年2月6日
発行人
浜村弘一
編集人
斉藤慎一
青柳昌行
編集統括本部
ジャン斉藤
編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎
終身名誉バイサ
吉田 豪
助っ人
ジャイ子
編集次長2010
松林 貴
デザインGM
出田さん(T
デザイン班長
金井ヒサく
デザイン
松坂マツく
廣田ブンち
野口ノグッ
鐺田やっち
白木みのる
カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
吉場正和
山口比佐夫
戸成嘉則
タイコウクニ
梅木麗子
金山フヒト
丸山剛史
渞 忠之
お勘定
工藤ちゃん
ナイフの切れ味
入江ドラゴン
雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠
業務部
樽本"PAG
編集庶務
原 正典
山内ユリコ
終身名誉編集
高木由美子
編集チアガール
金川"ナツコ
白倉"クララ
ゴールデンマダ
廣橋久美子
発行所
株式会社エ
〒102-84
☎0570-0
発売元
株式会社角
〒102-81
印刷
図書印刷株
協力
BUSHIDO
FightSpor
■広告掲載の
株式会社エ
スポーツ企画

[カスタマーサ
☎0570-0
(受付時間／
メールアドレス

kamipro 2010 143 遺恨、トラブル、スキャンダル! リング上で決着をつけろ!! 黄金の昭和プロレスに学ぶガオ!!

2010年2月6日
発行人/浜村弘一　編集人/斉藤慎一、青柳昌行
発行所/株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
発売元/株式会社角川グループパブリッシング　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

9784047262553

特別定価：本体895円＋税

雑誌 61971-38 Ⓗ2010.05

Printed in Japan 図書印刷株式会社

ISBN978-4-04-726255-3
C9476 ¥895E

1929476008954

enterbrain

氣！ 戦慄の青木問題を激語り!!

今年は寅年、タイガーマスクの登場です！

LING MAG



ャンダル！

けろ!!

プロレスに
ガオ!!

ュレス

特Q

隆夫

・カブキ

×

マット界騒然の大騒動！

激論！キラー青木とは何か？

アントニオ猪木
船木誠勝
廣田瑞人／谷川貞治
國保尊弘／夢枕獏
菊地成孔

kamipro 2010 143

遺恨、トラブル、スキャンダル！ リング上で決着をつけろ!!

黄金の昭和プロレスに学ぶガオ!!

「いったい何があったんでしょうね」（國保尊弘）

2010年2月6日
発行人／浜村弘一　編集人／斉藤倫一、青柳昌行
発行所／株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)

enterbrain

特別定価：本体895円＋税
雑誌 61971-38 Ⓗ2010.05
Printed in Japan 図書印刷株式会社